



吉氏

く、現在家事を長男芳介氏に譲り活花、佛教等に悠々自適の生活を樂しむ盡すところ傍ら千代田生命代理店の業務を引き受けてゐる。

芳介氏は明治二十六年の出生で、久留米商業卒業後直ちに家業に従ひ、萬六氏を扶けて書籍專業と小賣部の現金主義に邁進し、只管内容の充實を圖ると共に着々卸部の大擴張を行つた爲め、逐年目醒しき躍進を遂げ、西日本に牢固たる地盤を築くに至つた。

然るに大正十四年頃古賀銀行の取付けは同店に尠なからざる打撃を與へ、一時苦境に陥つたが、不拔の信念で見事危機を切抜け、却つて版元の信用を得たので、この勢に乗じて昭和二年本、支店を分離せしめ、卸の方面では九州一圓、中國、四國或は遠く朝鮮、臺灣、滿洲に進出し、取引店數三百餘、

九州クリーニング

福岡市荒戸町九番地西公園下に安河内保氏の經營になる九州クリーニングは福博洗濯業界の異彩である。同店は福岡市内外は勿論、奈多、久留米、飯塚方面にまで手を擴げて居る。安河内氏の過去五十年の人生は、只専心洗濯技術研究の爲めに費されてゐると云ふ丈でも、他の同業者とその軌を異にする事が窺はれる。同氏が現在の場所で獨立營業に従事したのは昭和五年三月で、爾來獨特の方針の下に年々發展を續け、現在年約一萬圓の水揚げを爲すといふ盛大振りである。同氏の經歷を省みる時には只研究と努力のかたまりであり、今日の大成は又當然と感ぜられるものがある。

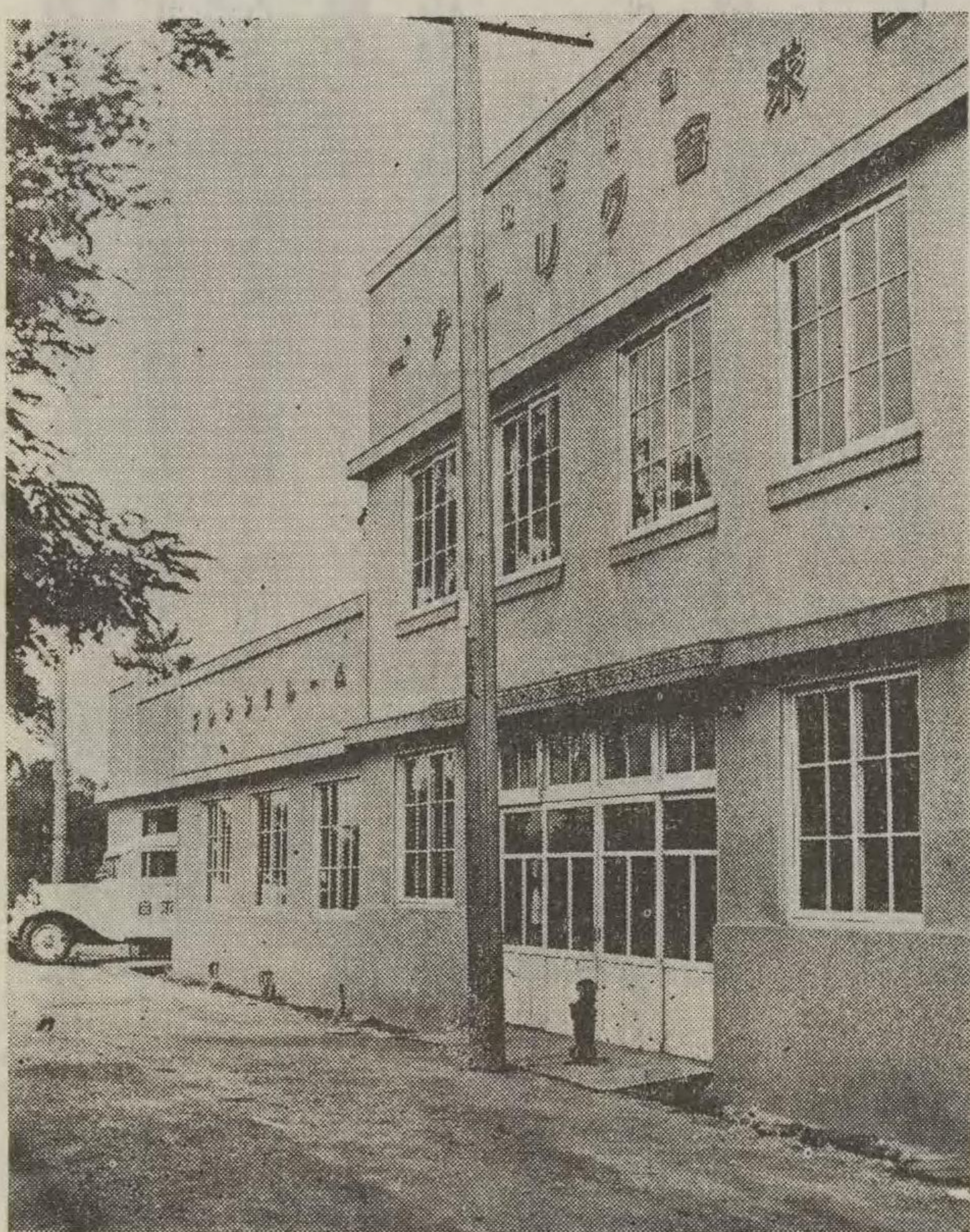
氏は博多川端に生を得て、十七歳の時に大阪に赴き、山下洗濯店に年期を入れたのを振り出しに、東京池原本店、横濱異人墓下、清水洗濯店等に於いて各店各種の技術を修得し、修業せし足跡は東京、大阪、京都、神戸、名古屋、横濱等に及び、その間約二十數年間研究又研究の生活を續け、大正十四年博多に歸り、衛生社の代表役員として營業を一任され、營業成績の増大を圖り、後退いて獨立し、今日に至つたものであるが、その間店の代表者として經營をなし、創業以來日淺きにも拘らず、今日の如き店の繁榮を來たしてゐることは如何に同氏が努力家であるかと云ふことはその業績を見れば明らかである。

尙ほその間、大阪時代には洗濯業職人の口入方をなし、後職人約五百名を一團として組合を組織し、洗濯職工組合を設立せる事もあり、又福博洗濯業組合創立に際しては中心人物として組合創設に奔走し、ベンジン工場建設に

關しては數十年の經驗の下に指導する等、その洗濯業界に盡せし功績たるや顯著なるものがある。

自求舎クリナーズ

合資會社自求舎クリナーズは、大正十一年十月福岡市大濠公園前に資本



金五萬圓を以つて創立、クリナーズ界に於いて斷然關西第一と稱せられ、工場の設備は完備し、クリナーズ用材は同舎獨特のものを用ひてゐると共に優秀なる男女工の技術な

ど凡て能率増進に向つてゐる。

仕上品は皺と塵を完全に防ぐ爲め、ウインド式自動車に依つて運搬をなし、最も近代的設備を同舎の誇りとしてゐる。即ち營業方針は顧客に對して敏速に用達し、丁寧慎重に註文品の取扱ひをなし、價格に於いても低廉なるをモットーとしてゐるのも舎主津崎佐源氏の人格の現れである。

同舎の發展は目覚ましいものがあつて、斯界にあつても實に驚歎してゐる位で取扱品の業績も漸次向上してゐる。

食料品及製菓界

明治屋福岡支店

株式會社明治屋の福岡縣下における販賣戰線の進出は、特に近來目まじしい。同社は明治十九年十月先代店主磯野計氏が資本金五百萬圓を以つて創業當初はキリンビールの一手販賣及び和洋食料品、食器、洋酒、和酒等の販賣を行つたのであるが、古き歴史と傳統に依つて漸次發展を遂げ、明治四十三年組織を變更して株式會社とし、昭和二年に至り、キリンビールの一手販賣權をビール會社に返還した。その後清酒月桂冠、北海道バター等の食料品販賣のみを行ひ、賣上高に於いては五十萬圓に及び、販路は内地は勿論、朝鮮、臺灣、滿洲、支那等の至る所に擴張され、益々發展向上して來たのである。現在支店を横濱、東京丸ノ内、大阪、京都、神戸、門司、京城、名古屋、金澤、新潟、福岡に置きその他の主なる都市には出張所を置いてゐる。福岡支店は、大正六年十月福岡市博多下西町に設立されたのであるが、現

支店主事は加藤文平氏で、明治屋の福岡縣下における業績の増大は同氏の手腕によるものであると一般の定評である。

三好屋商店

合資會社三好屋商店は明治三十一年二月三好甚吉氏の個人經營として創業麵麩製造に當り優秀なる品質は、直ちに好評を博するに至り、近來は年産額も十二、三萬圓に達する有様で福岡市の諸官衙、各學校、會社、大商店等は殆んど同店によつて供給されてゐる。

昭和二年には製造方法の近代化を圖つて電熱機二臺を設備し、優良品製造に馬力を懸けた。この衛生的近代的設備は市内同業者間では嚆矢とされて居ることは、即ち同店がパン製造に早くより眼覺めて改善研究してゐることを證明するものである。昭和三年には個人經營より組織を變更して合資會社三好商店と改名し、益々繁昌の道を辿つたのである。現在本店は福岡市下祇園町二七に有し、支店を同天神町九鐵マーケット内と東町電車停留所に設置してゐる。本店の製造工場では年々設備の改善を行ひ、現在男女工三十餘名が従事してゐる。

代表者たる三好甚吉氏は町總代、菓子商業組合の役員其の他の重職にあり信望を厚くしてゐる。

奥田屋



山手督太氏

福岡市下名島町の煎餅製造業奥田屋は山手督太氏の經營にかゝり「博多小女郎せんべい」「山笠煎餅」「おもちゃ自慢」の本舗でお國自慢の一つである。

年産額に於いても他を凌ぐものがある。煎餅は何れも其の名を博多に因縁多い博多小女郎や山笠から取つて意匠を凝らしたものでばかりで、郷土の情緒を多分に表はして土産物として好評を博してゐる。又品質の點に於いて優良品で、縣外にまで販路を有してゐる。

屋號の奥田屋は博多小女郎に因んで、柳町奥田屋をそのままに取り入れたものと謂はれてゐる。山手氏は品質改良と同時に多量生産にも力を注ぎ、大



中してゐたネオン補助足袋廣告塔下の約二坪許りの部屋を利用して、簡単な食堂を開いたのが始まりで、今日の如き盛大を見るに至つたことは、此種の營業の中には珍らしいことである。

この甘辛堂と云ふ屋號には面白い因縁がある。それは大正五年陽春福岡に於いて全國新聞記者大會が開催された時に、故田中氏が色本と記者團の世話を見てや店つた。之に對し全國から集つた記者達は非常に感謝し何か記念になるものを贈ら

明治屋福岡支店

株式會社明治屋の福岡縣下における販賣戰線の進出は、特に近來目覚ましい。同社は明治十九年十月先代店主磯野計氏が資本金五百萬圓を以つて創業當初はキリンビールの一手販賣及び和洋食料品、食器、洋酒、和酒等の販賣を行つたのであるが、古き歴史と傳統に依つて漸次發展を遂げ、明治四十三年組織を變更して株式會社とし、昭和二年に至り、キリンビールの一手販賣權をビール會社に返還した。その後清酒月桂冠、北海道バタ等の食料品販賣のみを行ひ、賣上高に於いては五十萬圓に及び、販路は内地は勿論、朝鮮、臺灣、滿洲、支那等の至る所に擴張され、益々發展向上して來たのである。現在支店を横濱、東京丸ノ内、大阪、京都、神戸、門司、京城、名古屋、金澤、新潟、福岡に置きその他の主なる都市には出張所を置いてゐる。

福岡支店は、大正六年十月福岡市博多下西町に設立されたのであるが、現

殆んど同店によつて供給されてゐる。

昭和二年には製造方法の近代化を圖つて電熱機二臺を設備し、優良品製造に馬力を懸けた。この衛生的近代設備は市内同業者間では嚆矢とされて居ることは、即ち同店がパン製造に早くより眼覺めて改善研究してゐることを證明するものである。昭和三年には個人經營より組織を變更して合資會社三好商店と改名し、益々繁昌の道を辿つたのである。現在本店は福岡市下祇園町二七に有し、支店を同天神町九鐵マーケット内と東町電車停留所前に設置してゐる。本店の製造工場では年々設備の改善を行ひ、現在男女工三十餘名が従事してゐる。

代表者たる三好甚吉氏は町總代、菓子商業組合の役員其の他の重職にあり信望を厚くしてゐる。

中してゐたネオン福助足袋廣告塔下の約二坪許りの部屋を利用して、簡單な食堂を開いたのが始まりで、今日の如き盛大を見るに至つたことは、此種の營業の中には珍らしいことである。

この甘辛堂と云ふ屋號には面白い因縁がある。それは大正五年陽春福岡に於いて全國新聞記者大會が開催された時に、故田中氏が色本と記者團の世話を見てや店つた。之に對し全國から集つた記者達は非常に感謝し何か記念になるものを贈らうと云ふことになり、甘辛(かんしん)と云ふ屋號を贈

奥田屋



山手督太氏

福岡市下名島町の煎餅製造業奥田屋は山手督太氏の經營にかゝり「博多小女郎せんべい」「山笠煎餅」「おもちゃ自慢」の本舗でお國自慢の一つである。

年産額に於いても他を凌ぐものがある。煎餅は何れも其の名を博多に因縁多い博多小女郎や山笠から取つて意匠を凝らしたものでばかりで、郷土の情緒を多分に表はして土産物として好評を博してゐる。又品質の點に於いて優良品で、縣外にまで販路を有してゐる。

屋號の奥田屋は博多小女郎に因んで、柳町奥田屋をそのままに取り入れたものと謂はれてゐる。山手氏は品質改良と同時に多量生産にも力を注ぎ、大正八年には郷里福岡縣浮羽郡山春村荒瀬に於いて工場を建設し、數臺の機械を備へてゐる。

山手氏は常に博多の土産品の考案に研究苦心をなして、時代と郷土に適應した新考案をなし、福博の製菓界に於いて目覺しい盛業振を示してゐる。

甘辛堂本店

福岡の甘辛堂本店と云へば福博では誰知らぬ者なき程の有名なる暖簾食堂である。この創設者は故田中尾和理氏で、最初は那珂川の畔に行人の眼を集



つた。それ以來甘辛と名付けたものと言はれてゐるが、この事を以つてしても氏の人がなりが窺はれよう。豪膽磊落而も信望厚く、所謂商傑肌の人であつたが昭和元年十二月二十六日逝去した。

昭和二年福岡の繁華地天神町に移轉して堂々たる店舗を張り益々發展を遂げてゐる。移轉してより其の後を受けて現店主村上文一氏が經營してゐるが先代の遺志を繼いで能く經營し、益々人氣を呼ぶ有様で、昭和六年二月には因幡町の福岡市公設市場内に喫茶部を併設して好成績を上げてゐるが、更

に洋菓子製造部とブラジル、アラビア、グワテマラ、サルバドルからコーヒ
ーの直接輸入を行ひ、市内外の商店、デパートに供給をなしてゐる。昭和十
一年四月には甘辛堂の店舗を改築し、近代的明朗なる建物の完成を見愈々躍
進に入り、名島町の自宅には撞球部を設置して同好者に提供してゐる。

甘辛堂支店

甘辛堂本店主村上文一氏の令弟村上安一氏は昭和七年本店より分家して博
多驛前の九軌デパート内に甘辛堂支店として開業した。特に同店の「おでん」
「茶飯」「しるこ」等は同店獨特の味覺があり、非常な好評を得、本店に劣ら
展振りを示してゐる。同九年十二月には九軌デパートの東角に新築移轉し、更
ぬ發に一層の努力に依り繁昌に繁昌を重ねて居る有様である。

梅月堂



福岡市古門戸町に製菓工場を有し、掛町壽通
三野の繁華街に販賣店を開いてゐる合資會社梅月
堂は「味噌煎餅」の本舗として廣く知られてゐ
る。

現在の代表者三野正二氏は大正七年父の遺業

端町時代よりも更に躍進を遂げるに至つたのである。

波多江製菓製品は西日本の製菓業者の間に伍して寸分の遜色をも認めず、
製菓技術の優秀なること、工場の設備は他の同業者の追隨し能はず、堂々隆
盛なる盛業振りである。昭和九年には個人經營から現在の如き合資會社に組
織を變更し、店主信次郎氏が社長となり、重役に波多江喜吉、高橋義明、波
多江須平の諸氏が就き業績は逐年向上しつゝある。

現在同製菓の製品は大膳餅、黒田おこしの外、甘納豆各種、チャイナマー
ブル、金平糖、和洋掛菓子一式、高級焼菓子各種、近代的セロハン袋入菓子
百貨店向高級和洋生菓子等各種に亘り、年産四十萬圓に達し、九州一圓は勿
論、關西、中國、西日本のデパート並に菓子店に販路を占めて居る。

同製菓工場の設備は最新式衛生的にして最も能率を上げ得る設備である。

即ち釜七臺、金平糖製造機三臺を有し、特に甘納豆製造に至つては一日製造

高百貫の多量生産をなしてゐる。佐賀市片田江通りに出張所を設け、従業員

を繼いで孜々營々、其の業務に勵み今日の如き繁昌を見たもので、煎餅製造
の改良に努めた結果、從來の紙袋入り煎餅を罐詰にすることの考案をなして
從來の欠點を補ひ、運搬携帶に利便を與へ、些も破損せず、頗る好評を博し
て一路梅月堂の「味噌煎餅」の名を高からしめた。

昭和十年に至り、個人經營より組織を變更して現在の如き合名會社梅月堂
と改稱した。爾來更に煎餅の焼き方を工夫し、常に現代人の味覺、趣味を捉
へた。近來は味噌煎餅と並んで「みどり煎餅」を製造して絶讚を博したもので
あるが、年々販路は擴大され、縣外に至る迄進出するやうになり、今年年産
額五萬圓を突破して眼ざましい躍進ぶりである。

更に昭和十一年三月には博多築港記念大博覽會を記念し、並せて福博の名
勝舊蹟を紹介する意味に於いて「名所煎餅」を創製して福博の製菓界の尖端
を走つてゐる。

波多江製菓合資會社

合資會社波多江製菓は明治三十年、波多江信次郎氏に依つて創業になり、
爾來各種の菓子製造に没頭したのであるが、特に福岡黒田藩主に因んだ黒田
おこし、大膳餅は同製菓の最も優良品として又福岡の土産品として誇るに足
るものである。然るに昭和十年五月不幸にして火災に遭ひ、店舗を焼失した
のであるが、不撓不屈遂に現在の場所福岡市堅粕元新川町に新店舗の建築を
見、更に一層の宏大なる製菓工場を建設して更生の途についた。かくして川

喜七氏は東雲堂饅頭を賣つてゐたのである。土産物としては饅頭ではいけな
い、長持として博多を諷刺した土産物は何が一番適してゐるかを考へた揚句
考案したのが「仁〇煎餅」で、早速釜二つを据ゑて焼き出し、翌年開かれた
九州、沖繩八縣聯合共進會で賣り出した所、非常な好評を博し飛ぶ様に賣れ
た。それに勇氣を得て氏は益々陣容を整へ販路擴張、對外的宣傳に乗り出し



仁〇煎餅

甘辛堂本店主村上文一氏の令弟村上安一氏は昭和七年本店より分家して博多驛前の九軌デパート内に甘辛堂支店として開業した。特に同店の「おでん」「茶飯」「しるこ」等は同店獨特の味覺があり、非常な好評を得、本店に劣らぬ振りを示してゐる。同九年十二月には九軌デパートの東角に新築移轉し、更

梅月堂



三野正二氏

福岡市古門戸町に製菓工場を有し、掛町壽通三野の繁華街に販賣店を開いてゐる合資會社梅月堂は「味噌煎餅」の本舗として廣く知られてゐる。現在の代表者三野正二氏は大正七年父の遺業

更に昭和十一年三月には博多築港記念大博覽會を記念し、並せて福博の名勝舊蹟を紹介する意味に於いて「名所煎餅」を創製して福博の製菓界の尖端を走つてゐる。

波多江製菓合資會社

合資會社波多江製菓は明治三十年、波多江信次郎氏に依つて創業になり、爾來各種の菓子製造に没頭したのであるが、特に福岡黒田藩主に因んだ黒田おこし、大膳餅は同製菓の最も優良品として又福岡の土産品として誇るに足るものである。然るに昭和十年五月不幸にして火災に遭ひ、店舗を焼失したのであるが、不撓不屈遂に現在の場所福岡市堅粕元新川町に新店舗の建築を見、更に一層の宏大なる製菓工場を建設して更生の途についた。かくして川

端町時代よりも更に躍進を遂げるに至つたのである。

波多江製菓製品は西日本の製菓業者の間に伍して寸分の遜色をも認めず、製菓技術の優秀なること、工場の設備は他の同業者の追隨し能はず、堂々隆盛なる盛業振りである。昭和九年には個人經營から現在の如き合資會社に組織を變更し、店主信次郎氏が社長となり、重役に波多江喜吉、高橋義明、波多江須平の諸氏が就き業績は逐年向上しつゝある。

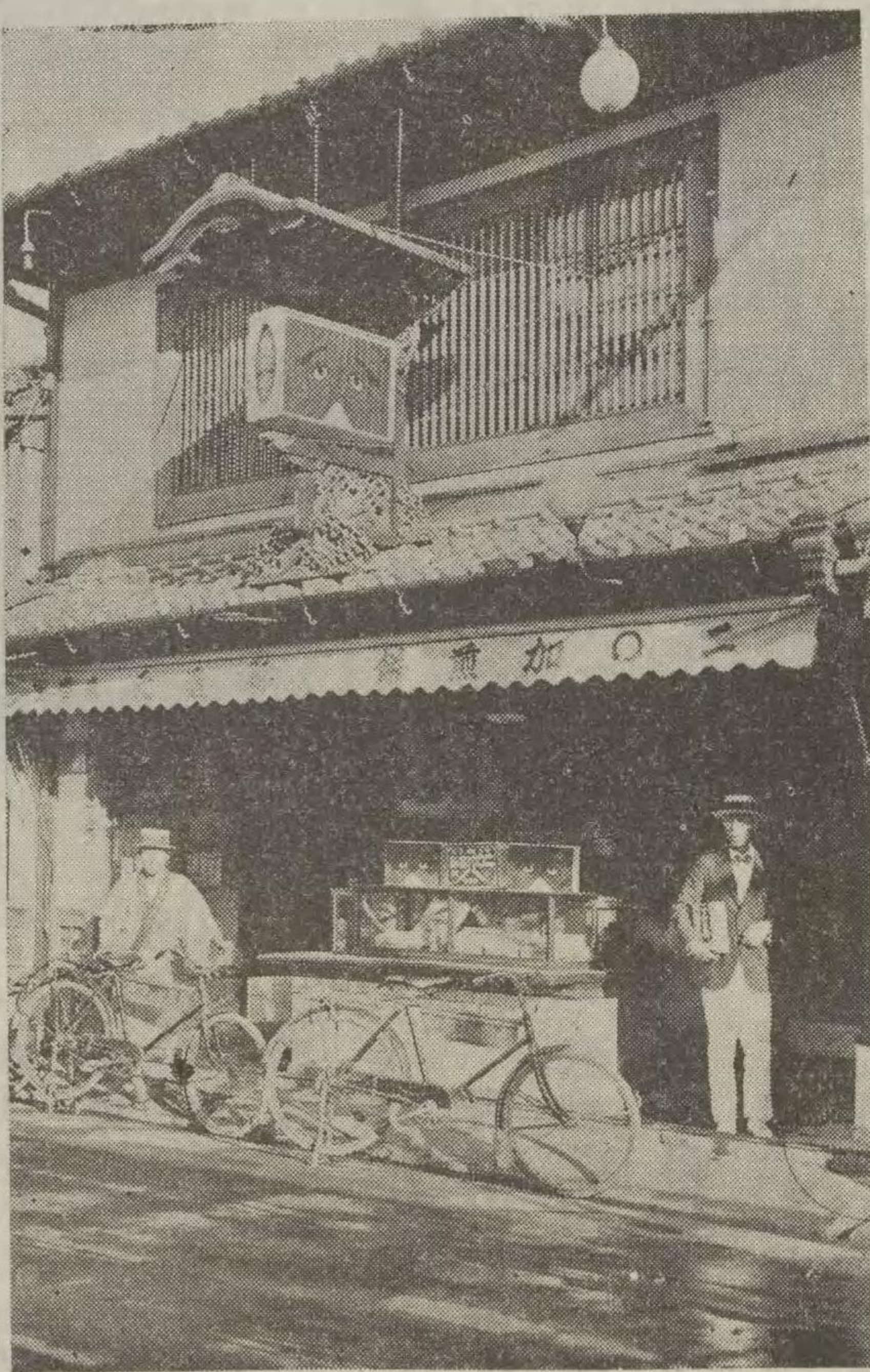
現在同製菓の製品は大膳餅、黒田おこしの外、甘納豆各種、チャイナマーブル、金平糖、和洋掛菓子一式、高級焼菓子各種、近代的セロハン袋入菓子百貨店向高級和洋生菓子等各種に亘り、年産四十萬圓に達し、九州一圓は勿論、關西、中國、西日本のデパート並に菓子店に販路を占めて居る。同製菓工場の設備は最新式衛生的にして最も能率を上げ得る設備である。即ち釜七臺、金平糖製造機三臺を有し、特に甘納豆製造に至つては一日製造高百貫の多量生産をなしてゐる。佐賀市片田江通りに出張所を設け、従業員も男工三十九名女工三十名の多數を使用してゐる。

仁○加煎餅

博多の半面を率直に意匠した「仁○加煎餅」は代表的な博多土産として餘りにも有名である。ローカルカラー豊かにして然も安價で、土産物としての聲價を高からしめてゐるが、この博多情調豊かな仁○加煎餅を發案したのは丁度博多から久留米まで鐵道が通じた明治二十年頃の事で、當時發案者高木

福岡縣産業の巻

喜七氏は東雲堂饅頭を賣つてゐたのである。土産物としては饅頭ではいけない、長持として博多を諷刺した土産物は何が一番適してゐるかを考へた揚句考案したのが「仁○加煎餅」で、早速釜二つを据ゑて焼き出し、翌年開かれた九州、沖繩八縣聯合共進會で賣り出した所、非常な好評を博し飛ぶ様に賣れた。それに勇氣を得て氏は益々陣容を整へ販路擴張、對外的宣傳に乗り出し



仁○加煎餅

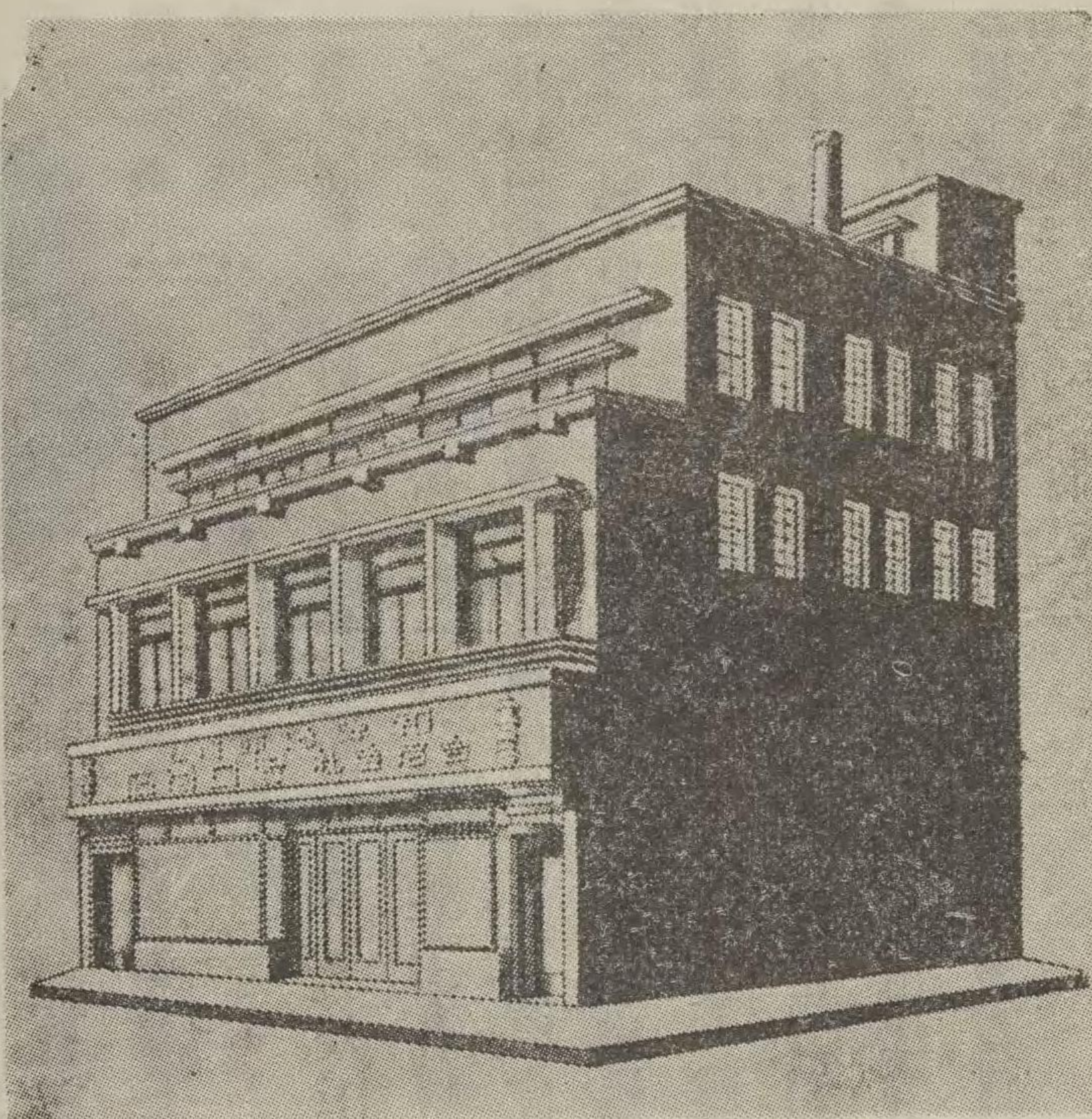
たのである。大正十一年には現在の博多下祇園町に工場を設置、機械三臺、手焼六臺を据ゑ付けて多量生産に力を注いだ。愈々基礎固り爾來順調なる發展を遂げてゐる。

現當主は高木孝太郎氏で、福岡市中心主義をとり近郊の卸小賣を主としてをり、各地の共進會に出品しては常に金銀銅賞を授與せられ、又昭和十年の全國菓子品評會では、名譽大賞牌を受けてゐる等優秀な土産品として推賞され、その聲價を高めつゝあることは周知の事實である。

野口商店

合名會社野口商店は我國の好況時代、即ち大正六年五月野口昌吉氏に依つて福岡市上新川端町五十三番地に創業したもので、和洋食料品一般の販賣をなし、福岡縣一圓に亘つて販路を有してゐる。

同店は最初野口氏の個人經營になつたものであるが、昭和四年四月に組織を變更して合名會社となし、氏が代表社員となつて活躍し、爾來益々發展を遂げて來た。昭和九年十月店舗の新築を



合名會社野口商店

なし、店内の新鮮と明朗を圖つた。その店舗は階下を食料品販賣に當て、階上を川端ビルと名稱の下に貸事務室にしてゐる。取扱の食料品は同氏の郷里佐賀縣小城町に於いて醸造してゐる銘酒「菊の杯」

と「白鶴」、「ヤマサ醤油」等、其の他一般食料品を廣範圍に亘つて取扱つてゐるが、賣上高は二十萬圓に上り、福岡市内に於ける食料品店としては屈指の商店である。

立石食料品店

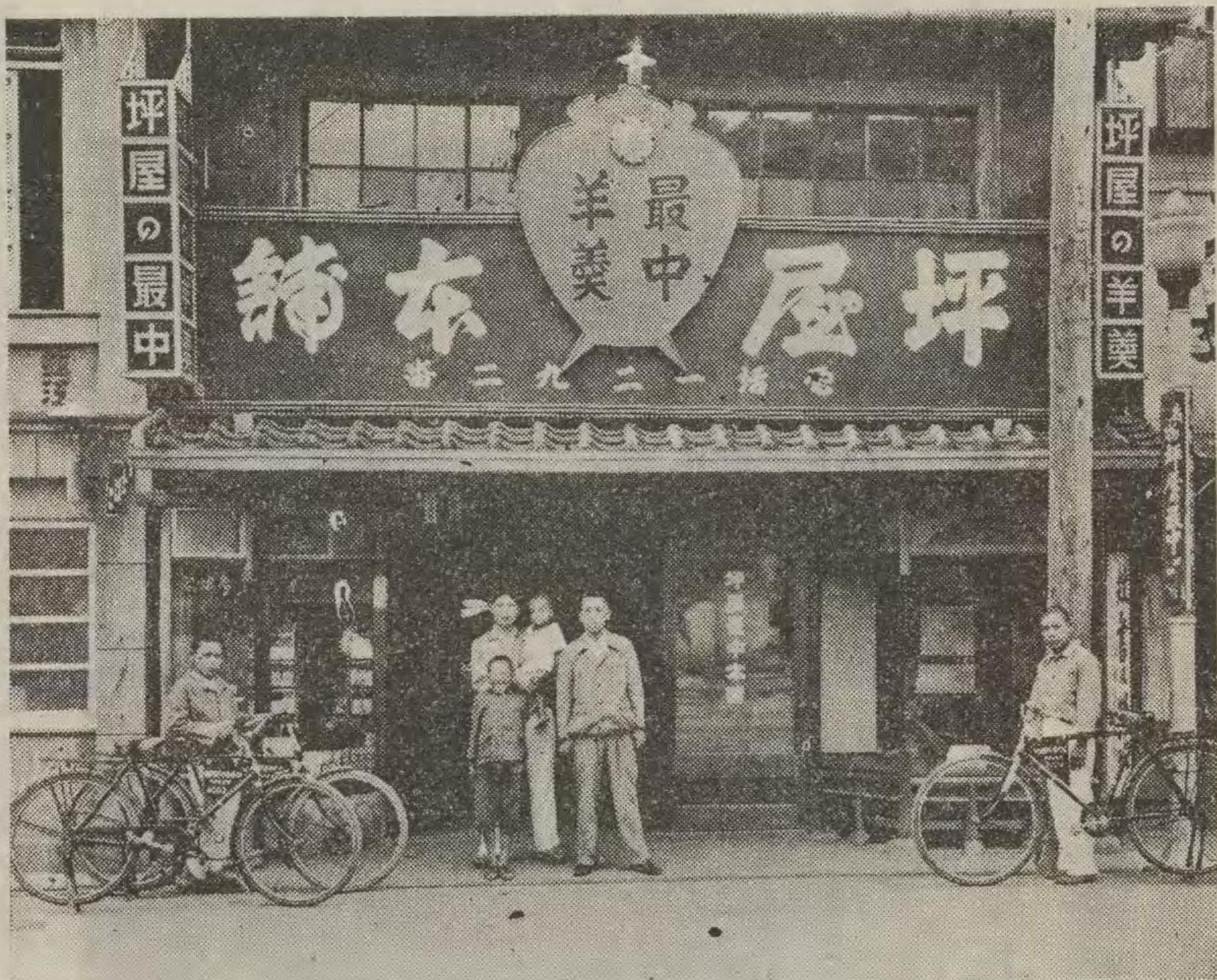
立石食料品店は福岡市中對馬小路に本店、同市下新川端町に支店をおいてゐるが、福岡地方には稀に見る乾物、海産物、食料品店にして、廣くその偉名は一般に認められてゐる。



立石食料品店

坪屋最中舖

福岡市博多吳服町に本店を有し、同天神町九鐵マーケット西門前に直營販賣部、同市新柳町に分店を設置してゐる坪屋最中舖は、明治三十一年山口敏



坪屋最中舖

雄氏が福岡市東町に創業、爾來「最中」「洋羹」の製造販賣に没頭し、製法は純日本式を以つて風味淡泊にして菓子界では最も愛好されてゐる。又頗る保存性に富み、三週間は絶対に腐敗せず對抗力に富んでゐる。

店主山口敏雄氏は開業以來その特色と權威を落さぬやう自ら製館をなし、決して店員には任さず、製館に獨特の技術を振つてゐる。最も熟練した優秀なる技術

は他の同業者間に於いて真似ることの出来ない程である。

同店は小賣専門にして年賣上高四萬圓を突破してゐる盛業振りである。製品の優秀なることは遠く海外まで名聲を博し、滿洲、朝鮮、臺灣、北海道より大量注文が殺到する有様で博多の坪屋最中は菓子界に燦然と光つてゐる。

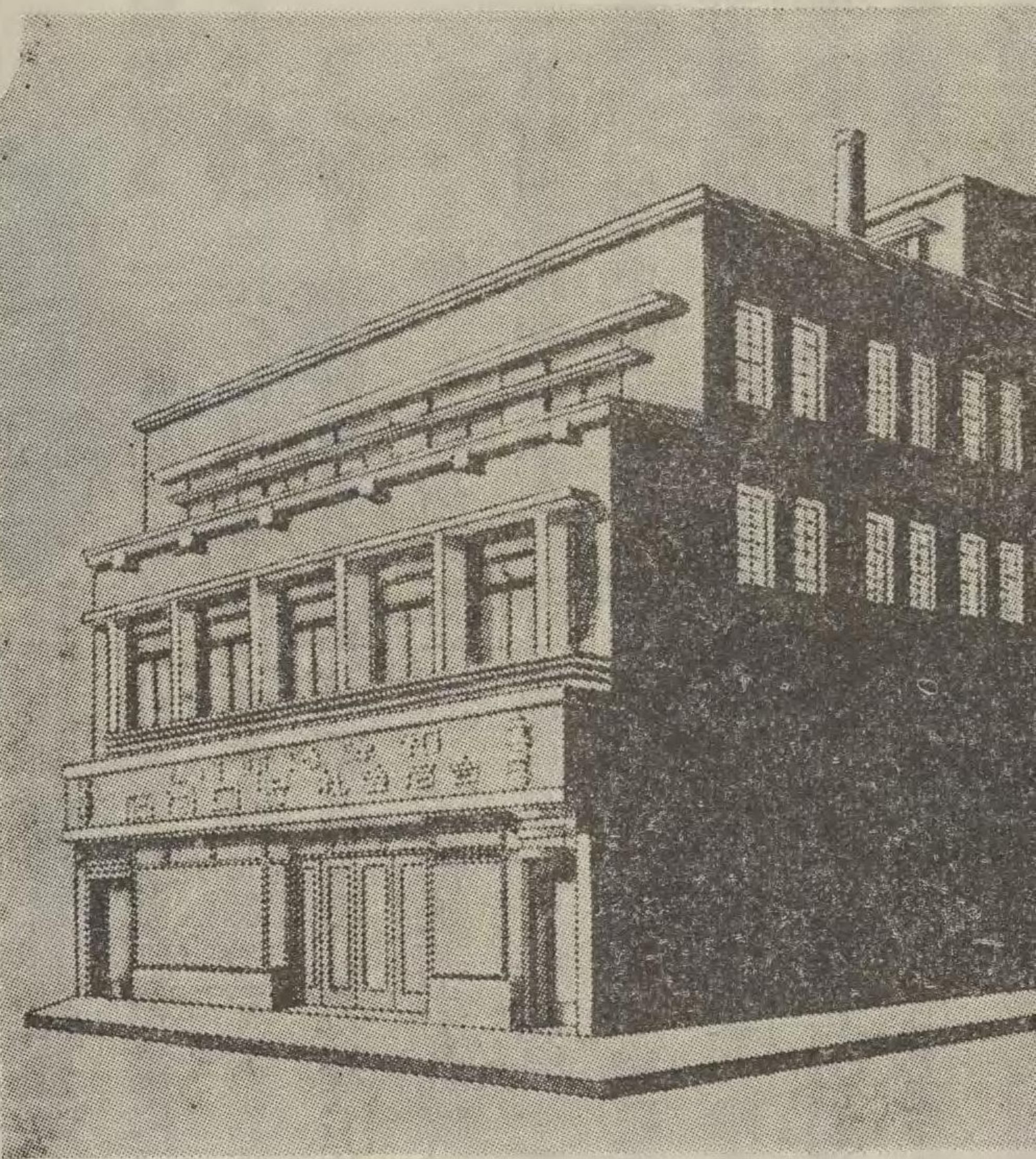
支店の統轄の下に天神町、唐人町の二ヶ所に出張所を設けてをり、現在同店の賣上高は年七十萬圓を突破してゐる有様である。

昭和十年には支店の改築をなして店舗は刷新を加へ、新鮮な感じと買ひよい店として顧客より好評を博してゐる。販路は全福岡市内は勿論、全九州に及び遠地からの注文が殺到する盛業を示し、食料品店としては福博隨一の優秀店である。

支店に於いては階下の食料品の發展に拍車をかけると同時に、顧客の慰安休息所として階上に喫茶部を設けてゐる等商店經營の尖端を走つてゐる。

粕屋牛乳株式會社

粕屋牛乳株式會社は福岡縣粕屋郡一圓の牛乳營業者が營業上の統制を圖る爲め、打つて一丸となり、大正八年福岡市外箱崎町に資本金十五萬圓を投じ



合名社野口商店

と「白鶴」、「ヤマサ醤油」等、其の他一般食料品を廣範圍に亘つて取扱つてゐるが、賣上高は二十萬圓に上り、福岡市内に於ける食料品店としては屈指の商店である。

年十月店舗の新築をなし、店内の新鮮と明朗を圖つた。その店舗は階下を食料品販賣に當て、階上を川端ビルの名稱の下に貸事務室にしてゐる。取扱の食料品は同氏の郷里佐賀縣小城町に於いて醸造してゐる銘酒「菊の杯」



坪屋最中舖

て菓子界では最も愛されてゐる。又頗る保存性に富み、三週間は絶対に腐敗せず對抗力に富んでゐる。店主山口敏雄氏は開業以來その特色と權威を落さぬやう自ら製法をなし、決して店員には任さず、製法に獨特の技術を振つてゐる。最も熟練した優秀なる技術

は他の同業者間に於いて眞似ることの出来ない程である。同店は小賣専門にして年賣上高四萬圓を突破してゐる盛業振りである。製品の優秀なることは遠く海外まで名聲を博し、滿洲、朝鮮、臺灣、北海道より大量注文が殺到する有様で博多の坪屋最中は菓子界に燦然と光つてゐる。

立石食料品店

立石食料品店は福岡市中對馬小路に本店、同市下新川端町に支店をおいてゐるが、福岡地方には稀に見る乾物、海産物、食料品店にして、廣くその偉名は一般に認められてゐる。



立石食料品店

同店は明治九年頃開業し、海産物の卸問屋として業務は年々盛んになり、創業當初より他に類例を見ざる成績を示し、隆盛に向ふ一方であつた。

昭和六年には組織を變更して合資會社立石食料品店と改稱し、立石善平氏が代表社員となつて業務の統轄をなした。同店の食料品は廣範圍に亘つて備はり、本店に於いては卸を本位とし、大部分北海道海産物を取扱ひ、支店では凡ゆる海産物、食料品の小賣販賣を行つてゐるが、本支店とも盛業に向つてゐる。

支店の統轄の下に天神町、唐人町の二ヶ所に出張所を設けてをり、現在同店の賣上高は年七十萬圓を突破してゐる有様である。

昭和十年には支店の改築をなして店舗は刷新を加へ、新鮮な感じと買ひよい店として顧客より好評を博してゐる。販路は全福岡市内は勿論、全九州に及び遠地からの注文が殺到する盛業を示し、食料品店としては福博隨一の優秀店である。

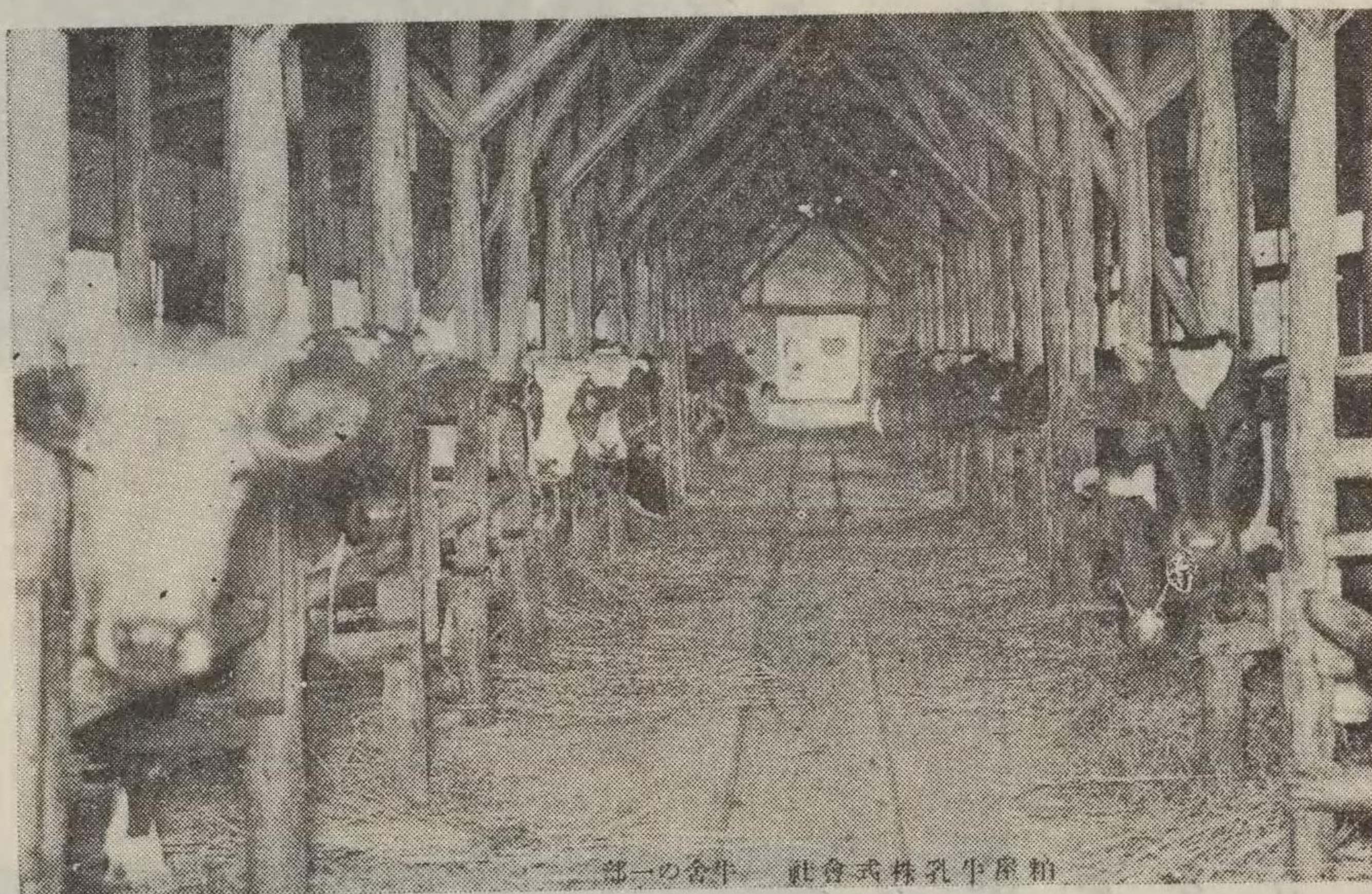
支店に於いては階下の食料品の發展に拍車をかけると同時に、顧客の慰安休息所として階上に喫茶部を設けてゐる等商店經營の尖端を走つてゐる。

粕屋牛乳株式會社

粕屋牛乳株式會社は福岡縣粕屋郡一圓の牛乳營業者が營業上の統制を圖る爲め、打つて一丸となり、大正八年福岡市外箱崎町に資本金十五萬圓を投じて株式會社を組織し、安部英造氏が初代社長に就任して、營業上の統轄をなした。同社の搾乳所は最も好適地たる都座を離れた多々良川の邊りに位置し、牧場も搾乳所に隣接して居り、五十頭の牛より搾取した牛乳は直ちにミルクプラントに移し、最も近代的な完備せる設備を以つて低温殺菌を行ひ、衛生的且品質優良なる牛乳並に乳製品を家庭或ひは食堂、喫茶店に供給して頗る好評を博してゐる。健全なる五十頭の牧牛より搾乳される牛乳は年産二千石を越え、年々その數を増して福岡市内は勿論郡部一圓に亘つて供給してゐるが、品質優良なる點から言つて、最も安心して飲める牛乳として定評がありその躍進振りは眼見ましいものがある。



粕屋牛乳株式会社 全 景



粕屋牛乳株式会社 牛舎

創立当初は業績思ふやうにならず、販路は微々たるものであつたが、現在ではその眞價が廣く知られ、次第に販路も擴張されて隆盛の域に達し、他の追隨を許さぬ有様となつた。

現在の社長藤洋太氏になつて社運は益々發展向上し、福岡地方牛乳界の第一位と云はれるに至つた。即ち同社の他牛乳搾乳所と異り特色としてゐる點は、牧場とミルクプラントが同一場所であり、搾乳した牛乳は直ちに完備せるミルクプラントに移すことが出来、運搬にも便利であると同時に、牛乳の腐敗する虞れが絶対ないのである。最も衛生的にして能率的な搾乳所として斯界に其の偉名を謳はれてをり、同社が躍進を重ねるのも當然と云はねばならぬ。



南條 吳服店

福岡市博多下店屋町五番地株式会社南條吳服店は南條和藏氏に依つて資本金十萬圓を投じ、大正十年五月月賦販賣業を創めたのが始りて年々業績は上

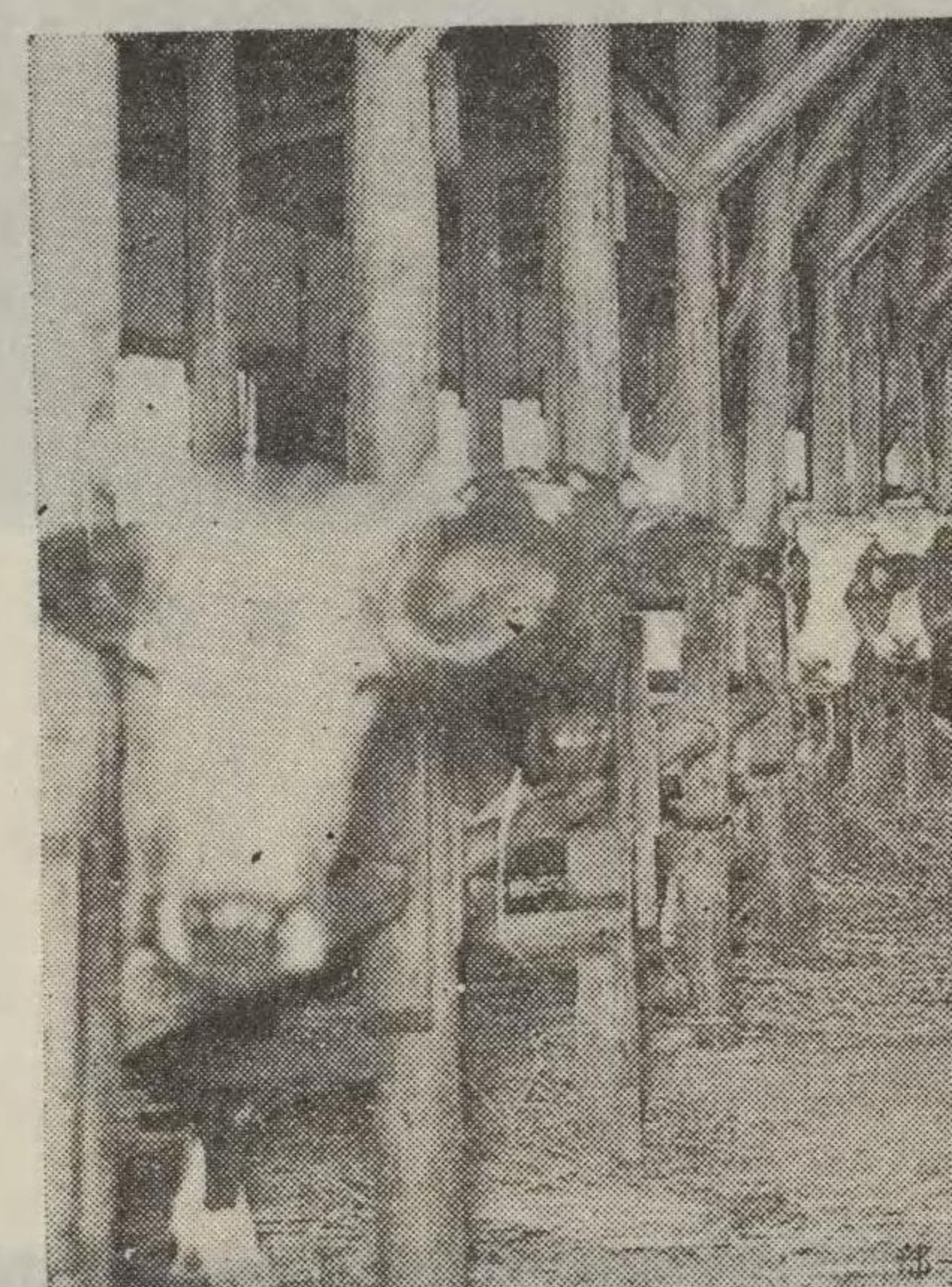
村上 榮吉氏

の爲めに盡し、その功勞によつて紺綬章を授つてゐる。

福岡の吳服商界を眺める時、その中に一異彩として村上榮吉氏がゐる。氏は愛媛縣櫻井町の生れで、僅か十九歳にして燃ゆるが如き希望を抱きつゝ九



社 會



牛 舍

創立當初は業績思ふやうにならず、販路は微々たるものであつたが、現在ではその眞價が廣く知られ、次第に販路も擴張されて隆盛の域に達し、他の追随を許さぬ有様となつた。



南條 吳 服 店

福岡市博多下店屋町五番地株式會社南條吳服店は南條和藏氏に依つて資本金十萬圓を投じ、大正十年五月月賦販賣業を創めたのが始まりで年々業績は上り、現在の如き盛業を見るに及んだのである。大正十年十二月には三十萬圓を投じて現在の如き株式會社南條吳服店と改稱し、自ら社長となつて敏腕を振うて社業の統制をなし、販路も漸次に擴大され、關西、四國、中國、九州全體に及び、躍進の意氣を以つて社業の充實を圖つてゐる。

南條氏は附近に同業を營んでゐる村上氏と同郷の愛媛縣櫻井町の出身にして、兩氏はよく性格経歴も相似て、所謂商傑肌の持主である。氏は幼少の頃より行商に出で、刻苦勉勵した揚句、遂に二十歳の時には佐賀で漆器業を營んでゐるが、大正十年吳服月賦販賣業に變更した、其の後基礎は愈々固まり只發展する一方であつた。又郷里の母校の爲めには多額の寄附をなして郷里

福岡縣 産 業 の 卷

の爲めに盡し、その功勞によつて紺綬章を授つてゐる。

村 上 榮 吉 氏

福岡の吳服商界を眺める時、その中に一異彩として村上榮吉氏がゐる。氏は愛媛縣櫻井町の生れで、僅か十九歳にして燃ゆるが如き希望を抱きつゝ九州長崎に下り、外國商館に務め、數年にして再び故郷に歸り、我國漆器界の王座たる田坂漆器店に入つた、其の後氏は西日本の商業的中心地は博多なりと信じ、同店の博多進出を主張し、店主を説伏して明治三十七年に福岡市博



村上榮吉氏

多支店を設置し、半獨立の形式に依つて月賦販賣を開業した。これが我九州に於ける月賦販賣の嚆矢であると云はれてゐる。

よく時代をつかんだ便利重寶なる販賣法として、需要者に最も歡迎されたものである。トン

六三七

を獨立開業し、以前同様、月賦販賣法を以つてし、福博の地は勿論、全九州一圓に亘つて勇躍した。

氏は實に眞摯謹嚴の人格者で、所謂商傑肌である。常に五十有餘の店員を訓育指導し、統制ある商店經營をなし、又遠大なる思慮と豪膽果斷の人である。又氏は郷里櫻井町の母校に一萬數千圓の金を投出し、郷土民の負擔を軽減し、その篤行によつて昭和三年御大典の盛儀には紺綬褒賞を授けらる等、幾多の逸話がある。

岡田專助本店

福岡市東中洲町四丁目岡田專助本店は染手拭タオル、浴衣地の製造に従事し、創業は明治十年にして當初より漂白、水洗、染色に便利なる地を選び、那珂川の邊りに工場を設置して開業したもにして、創業以來漂白、水洗、染色には優秀なる技術を以てし、年々發展向上し、將來あるタオル商店として推賞されてゐる。同店では更に事業を擴張して、大正四年には那珂川の上流住吉に第二工場を建設し、半纏の製造に當つたのであるが、年産額も莫大なるものに及び、非常な勢ひで繁昌した。大正十五年には更に本店の北側角に支店を設置し、ガーゼ、タオル及び寝巻其の他の製品の販賣を行つて好評を博してゐる。

元來水洗ひは那珂川の清流を利用して行つてゐるが、年々發展に伴れて、仕事は繁敷になり、遂に水洗機を發明して水洗業に刷新を加へた。同時に乾



本店又田本

に赴いてゐる。店主は本田又次郎氏で福岡縣朝倉郡安川村の出身、若くして博多に行き商店の店員として十五年間誠實に勤務し、大正十年獨立し今日に至つたものである。

現在同氏は福岡洋服既製品組合副會長として福博洋服界に盡す所尠からざると同時に、小田組合長と共に常に組合の發展向上を圖つてゐる。

燥機應用の工場を設置して業務の擴大を圖つた。創業以來年々擴張に擴張を來した同店は、漸次その名聲は社會的に認められると同時に、昭和七年には染機械を發明して全く工場を機械化し、風雨の別なく製造能力を發揮してゐる。九州、山口は勿論、臺灣、滿鮮に至るまで販賣の手は行き届き、岡田のタオルは専ら需要者に定評あるものである。同店のタオル染抜きは博多情緒を豊に表し「博多にわか」の表情を面白く染め抜いてあるだけ、博多土産として廣く知られ、旅行者は必ず土産として買ひ求めてゐる。尙ほ同店は三羽鶴タオルの特約店であるが、同業者間にも驚嘆してゐるほど工場の完備、販賣網の擴充等將來益々發展を囑目されてゐる。

本田又商店

合名會社本田又商店は、大正十年十一月本田又次郎氏によつて福岡市上山町に創業し、現在では關西、九州屈指の洋服問屋として數へられてゐる。

同店は既製洋服を主として販賣し、その他羅紗、洋服生地をも取扱ひ、九州一圓、朝鮮、滿洲方面に至るまで販路を廣め「本田又商店」の名は廣く知られてゐる有様である。賣上高に於いても實に年三十萬圓を突破し、京阪地方の間屋に比べて決して遜色を見ず、斷然洋服卸問屋界の王座を占めて居る。

確固たる基礎の下に益々躍進發展を續けた同店は、昭和十年三月には店屋町に約六萬圓を投じて、現在見るが如き宏壯、明朗なる店舗の新築を行ひ、竣工と同時に移轉營業したが、外觀、内容の充實に依り、更に業務は隆昌繁榮

して生れ、幼少にして両親を失ひ、當然先祖の家業を繼ぐべき筈であつたが、叔母に伴れられて長崎に行き、時恰も洋服流行時代の初期にして、最も將來發展性を持つてゐた洋服業に明治三十四年に弟子入りし、其の後孜々營々として撓ゆまざる努力を續け、大正五年一月現在の場所に移轉して獨立開業したのである。當時福岡縣立高等女學校の制服制度が研究され、氏は同校よりの依囑に依つて制服の裁斷考案に没頭したのであるが、當時は物價騰貴し、學校制服としての柄の選定に非常な苦心を要し、約二ヶ年に亘つて制服の研究に日夜精進を續け、漸く今日の如き女學校制服の裁斷に成功し、全國の女學校から注文を受けてゐる有様である。現在ではその關係上、福岡縣大部分の中等學校制服の裁斷は同店が引きうけてゐる状態で、徒弟三十名、大量生産を目標して前進してゐる。

岡田專助本店

福岡市東中洲町四丁目岡田專助本店は染手拭タオル、浴衣地の製造に従事し、創業は明治十年にして當初より漂白、水洗、染色に便利なる地を選び、那珂川の邊りに工場を設置して開業したもにして、創業以來漂白、水洗、染色には優秀なる技術を以てし、年々發展向上し、將來あるタオル商店として推賞されてゐる。同店では更に事業を擴張して、大正四年には那珂川の上流住吉に第二工場を建設し、半纏の製造に當つたのであるが、年産額も莫大なるものに及び、非常な勢ひで繁昌した。大正十五年には更に本店の北側角に支店を設置し、ガーゼ、タオル及び寝巻其の他の製品の販賣を行つて好評を博してゐる。

元來水洗ひは那珂川の清流を利用して行つてゐるが、年々發展に伴れて、仕事は繁激になり、遂に水洗機を發明して水洗業に刷新を加へた。同時に乾

ど工場の完備、販賣網の擴充等將來益々發展を囑目されてゐる。

本田又商店

合名會社本田又商店は、大正十年十一月本田又次郎氏によつて福岡市上山町に創業し、現在では關西、九州屈指の洋服問屋として數へられてゐる。同店は既製洋服を主として販賣し、その他羅紗、洋服生地をも取扱ひ、九州一圓、朝鮮、滿洲方面に至るまで販路を廣め「本田又商店」の名は廣く知られてゐる有様である。賣上高に於いても實に年三十萬圓を突破し、京阪地方の問屋に比べて決して遜色を見ず、斷然洋服卸問屋界の王座を占めて居る。確固たる基礎の下に益々躍進發展を續けた同店は、昭和十年三月には店屋町に約六萬圓を投じて、現在見るが如き宏壯、明朗なる店舗の新築を行ひ、竣工と同時に移轉營業したが、外觀、内容の充實に依り、更に業務は隆昌繁榮



店商又田本

に赴いてゐる。店主は本田又次郎氏で福岡縣朝倉郡安川村の出身、若くして博多に行き商店の店員として十五年間誠實に勤務し、大正十年獨立し今日に至つたものである。

現在同氏は福岡洋服既製品組合副會長として福岡洋服界に盡す所尠からざると同時に、小田組合長と共に常に組合の發展向上を圖つてゐる。

渡邊洋服店

して生れ、幼少にして両親を失ひ、當然先祖の家業を繼ぐべき筈であつたが、叔母に伴れられて長崎に行き、時恰も洋服流行時代の初期にして、最も將來發展性を持つてゐた洋服業に明治三十四年に弟子入りし、其の後孜々營々として撓ゆまざる努力を續け、大正五年一月現在の場所に移轉して獨立開業したのである。當時福岡縣立高等女學校の制服制度が研究され、氏は同校よりの依囑に依つて制服の裁斷考案に没頭したのであるが、當時は物價騰貴し、學校制服としての柄の選定に非常な苦心を要し、約二ケ年に亘つて制服の研究に日夜精進を續け、漸く今日の如き女學校制服の裁斷に成功し、全國の女學校から注文を受けてゐる有様である。現在ではその關係上、福岡縣大部分の中等學校制服の裁斷は同店が引きうけてゐる状態で、徒弟三十名、大量生産を目指して前進してゐる。

加來洋服店



氏郎太信來加

福岡市渡邊通り五丁目の加來洋服店主加來信太郎氏は、市内洋服界の權威で、女學校制服の考案者として又洋服裁斷法に最も研究苦心を重ねた人として洋服界の第一人者である。氏は福岡縣八女郡上廣川村に刀鍛冶の名匠信國の子孫と

福岡市上名島町の渡邊潛藏氏經營の渡邊洋服店は市内屈指の洋服店である。渡邊氏の生涯は幾多の辛酸努力の生涯とも云ふべきで、氏は明治七年一月大分縣臼杵町に生れたのであるが、父は臼杵藩士で、當時の赤鞘組と稱する急進組の隨一、イの一番に斷髪した變り種である。然し潛藏氏が七歳の時に至り父は逝去し一家は悲歎にくれたが、其の後少年ながらも奮闘と努力を續け、氏の伯父は世の漸次歐風化する時流を察し、洋服界の將來は益々有望なるを看取して、氏が十四歳の時博多中島町の洋服店に弟子入りさせた。それが今

日の氏のスタートであった。

其後京都に出て、寺町通共進堂洋服店に入門し、二十四歳の時獨立自營、福岡市箕子町に開業した。爾來逐年顧客が増加したので、現在の上名島町に移轉し、明治四十二年現在の場所に改築移轉し、業績は順調に進み、福博洋服業界に牢固として抜くべからざる勢力を扶植した。

大正四年以來福岡縣下全警察官服の請負となり、昭和二年三月には博多片土居町に支店を置いて、既製品の販売を始め、年々繁昌に向つてゐる。尙ほ渡邊氏は福岡洋服商工組合長、九州洋服商聯合會長、商工會議所議員の榮職にある。

小田喜洋服店



小田喜七郎氏

博多中間町小田喜洋服店は洋服界の老舗であり、中國、九州の代表的洋服店で、店主小田喜七郎氏は、福岡市洋服既製品組合長他二三の會長代表として斯界の重鎮でもある。

氏は又既製洋服の改良にも九州、中國同業者の主唱者となり、福岡市の同業幹事數名と共に各産地に出張裁斷裁縫の改良に努力した結果、今や全九州の賣行は年々増額の盛況を示しつつある。氏はこの隆昌に慢らず、事業を終始の趣味として薄利多賣を標語に「捨てよ懸値守れ正價」の主義のもとに商賣繁昌を計り、隆盛の一途をたどつてゐる。又令息勇氏は多年大阪にあつて洋服裁斷法を研究し、商業を學び大いに努力研鑽

今は店員同様父喜七郎氏の訓育を受け明日に備へてゐるが、頗るその發展性を囑望されてゐる福岡唯一の洋服店である。

酒井米穀店

福岡市今泉若宮町酒井米穀商店は明治初年に酒井佐平氏が創業したのであるが、現在は三代目酒井泉吉氏が引繼いで經營してゐる。

氏は博多商工會議所議員として表裏ともに商工界の發展のために活躍、福博商工界になくはならぬ人であることは衆目の見るところである。一方今泉區に於ては、財産區會議員の要職にあつて、重要な役割を有し、今泉町發展の爲には莫大なる資産を投じ、或は貧民に對しては常に温い同情を寄せて援護してゐる等の美談の持主である。

嚴父初次郎氏も社會的に功をなしてゐる人で、三十餘年の長きに亘り、區會議員、町總代等を勤めた人で、町政に貢献するところ大であつたと言はれてゐる。

松本屋商店

福岡市上新川端町松本屋商店は田崎康治氏が大正十二年十一月始めて獨立開業したものである。當初は東中洲京極におたふくわた株式会社の特約店として綿の販賣營業を行ひ、年々向上して賣上高は他店を凌ぐものがあり、斯界に於いても頗る注目され、繁昌をなしてゐる。



田崎康治氏

其の後綿販賣にのみ止まらず、布團、枕、蚊帳等寝具類の製造をなして卸賣部を設け、營業種目の擴張を圖つた。店主田崎氏は他に先んじて働くといふ營業方針に依つて着々と隆盛に向ひ、今年年の販賣高三萬圓に上り、確固たる地位を占めてゐる。

昭和六年三月には現在の位置たる上新川端に移轉して、更に業績は向上し、販路は創業當初より擴張に擴張を來し、現在九州一圓に及ぶに至つてゐる。斯くの如く苦境に一度も陥らず發展向上して來た同店は、専ら店主田崎康治氏の奮闘に依るものであるが、氏は佐賀縣東松浦郡相知町の生れにして本年四十六歳の働き盛りである。

現在は株式會社渡邊鐵工所の創立者たる四代目渡邊藤吉氏が經營に當つて

ゐるが、從來各種金物鐵材、丸釘、板硝子の取扱ひと共に動力機械農具の販賣をも大々的に行つてゐるが、昭和三年機械農具販賣は廢止して、交通運輸の隆盛に伴うて自動車の販賣を開始し、販路を漸次植民地大陸に求め、臺灣滿洲方面に力を入れ門司、熊本に出張所を設け、朝鮮に於いては雄基に出張店を設け、滿洲への輸出に便ならしめ、且つまた需要者と本店との聯絡をとつてゐる。

斯くの如く發展を遂げた同店は、昭和十一年四月には資本金六十萬圓を以つて合名會社に組織を變更、代表社員に渡邊藤吉氏があたり、營業々務を家庭金物部、建築材料部、自動車部の三部に分ち、夫々専門的に營業をなしてゐるが、現在従業員は八十名に及んでゐる。

同店の特約商品としては全國有名會社を網羅してゐるが、主なるものは左の如きものがある。

にある。

小田喜洋服店



小田喜七郎氏

博多中間町小田喜洋服店は洋服界の老舗であり、中国、九州の代表的洋服店で、店主小田喜七郎氏は、福岡市洋服既製品組合他二三の會長代表として斯界の重鎮でもある。

氏は又既製洋服の改良にも九州、中国同業者の主唱者となり、福岡市の同業幹事数名と共に各産地に出張裁断裁縫の改良に努力した結果、今や全九州の賣行は年々増額の盛況を示しつつある。氏はこの隆昌に慢らず、事業を終始の趣味として薄利多賣を標語に「捨てよ懸値守れ正價」の主義のもとに商賣繁昌を計り、隆盛の一途をたどつてゐる。又令息勇氏は多年大阪にあつて洋服裁断法を研究し、商業を學び大いに努力研鑽

博商工界になくはならぬ人であることは衆目の見るところである。

一方今泉區に於ては、財産區會議員の要職にあつて、重要な役割を有し、今泉町發展の爲には莫大なる資産を投じ、或は貧民に對しては常に温い同情を寄せて後援してゐる等の美談の持主である。

嚴父初次郎氏も社會的に功をなしてゐる人で、三十餘年の長きに亘り、區會議員、町總代等を勤めた人で、町政に貢献するところ大であつたと言はれる。

松本屋商店

福岡市上新川端町松本屋商店は田崎康治氏が大正十二年十一月始めて獨立開業したものである。當初は東中洲京極におたふくわた株式會社の特約店として綿の販賣營業を行ひ、年々向上して賣上高は他店を凌ぐものがあり、斯界に於いても頗る注目され、繁昌をなしてゐる。

其の後綿販賣にのみ止まらず、布團、枕、蚊帳等寝具類の製造をなして卸賣部を設け、營業種目の擴張を圖つた。店主田崎氏は他に先んじて働くといふ營業方針に依つて着々と隆盛に向ひ、今年年の販賣高三萬圓に上り、確固たる地位を占めてゐる。



田崎康治氏

昭和六年三月には現在の位置たる上新川端に移轉して、更に業績は向上し、販路は創業當初より擴張に擴張を來し、現在九州一圓に及ぶに至つてゐる。斯くの如く苦境に一度も陥らず發展向上して來た同店は、専ら店主田崎康治氏の奮闘に依るものであるが、氏は佐賀縣東松浦郡相知町の生れにして本年四十六歳の働き盛りである。

渡邊藤吉本店

福岡市博多上西町合名會社渡邊藤吉本店は、文久年間に初代渡邊藤吉氏に依つて金物類板硝子等の販賣を開業したのであるが、商才にたけた渡邊氏は能く時代の趨勢に沿うて益々その敏腕を揮ひ、これこそ經濟不況を知らぬ福博隨一の老舗として其の偉名を高からしめてゐるのも、同店の確固たる營業方針に依るものであらう。同店の基礎は明治廿七年日清戰爭が勃發して金物類の注文が殺到したことによるもので、當時一躍渡邊藤吉本店取扱ひ商品の眞價が廣く認められ、其の後福博は勿論九州一圓、關西方面に販路は開け、今日に見る隆盛に向つたのである。

現在は株式會社渡邊鐵工所の創立者たる四代目渡邊藤吉氏が經營に當つてゐるが、從來各種金物鐵材、丸釘、板硝子の取扱ひと共に動力機械農具の販賣をも大々的に行つてゐるが、昭和三年機械農具販賣は廢止して、交通運輸の隆盛に伴うて自動車の販賣を開始し、販路を漸次植民地大陸に求め、臺灣滿洲方面に力を入れ門司、熊本に出張所を設け、朝鮮に於いては雄基に出張店を設け、滿洲への輸出に便ならしめ、且つまた需要者と本店との聯絡をとつてゐる。

斯くの如く發展を遂げた同店は、昭和十一年四月には資本金六十萬圓を以つて合名會社に組織を變更、代表社員に渡邊藤吉氏があたり、營業々務を家庭金物部、建築材料部、自動車部の三部に分ち、夫々専門的に營業をなしてゐるが、現在従業員は八十名に及んでゐる。

同店の特約商品としては全國有名會社を網羅してゐるが、主なるものは左の如きものがある。

- 住友伸銅管株式會社、ツルマル印アルミニウム製品、枝光安田製釘所、旭硝子株式會社、日本板硝子株式會社、株式會社淺野製鋼所、八洲自動車株式會社、京都工商株式會社、協同國產自動車株式會社、合資會社山城自動車商店等である。

平助筆と復古堂

平助筆、平助鉛筆の製造本舗たる博多麴屋町株式會社復古堂は、文龜年間に河原田平助氏の創業になつたもので老舗として誇りがある。元來博多毛筆は

昔時「筑紫の筆」なる名を博したものであるが、中世になつて漸次粗製濫造に流れ、過半は唐筆を模造して多く長崎に送り、唐筆として最も弘く販賣してゐるが慶應より明治初年に亘り、益々模造が盛んに行はれ、遂に他の名義商標を侵すを恥ぢざるに至つたので、之を早く矯正しなければ「筑紫の筆」は美名のみに止まり、實質之に伴はずして將來の運命は頗る憂慮されて來た。故に明治七年同業の組合を組織して粗製濫造を嚴禁し、製造業者各自の名義を付して技術の優劣を競うた結果、漸次悪弊を矯め功を奏したのである。



氏田原河主堂古復

當時河原田平助氏が永年組合長に擧げられ、率先して自己の製品たるを明にする爲め、筆軸に肖像寫眞を附して賣出したのが平助筆となり、爾來日に日に高評を博し隆盛を極めてゐるが、我國に於て偽造豫防に肖像寫眞を貼布したのは他の商品にも未だ嘗つてなく平助筆を嚆矢としてゐる。明治十九年六月該肖像を商標として登録の許可を得、益々信用を博すると共に我國教育上に絶大なる貢獻を齎らした。現在では全九州は勿論、關西、關東、上海等に販路を有し、又宮内省御用筆として多年納入してゐる。

大正十一年三月には長くも 皇后陛下九州行啓の御砌、扈從の金子堅太郎伯爵を経て、京都下雲か畑御獵鹿洞御下賜方を奏請したところ、翌年宮内省より鹿洞御下賜の恩命に接した。その鹿毛を以つて謹製した筆を 兩陛下並に皇太子殿下に献上、之を記念として「雲か畑筆」と銘名して發賣してゐる。尙ほ筆製造と共に鉛筆製造にもあたり、福岡市明治町五丁目鉛筆文具工

場を設置してゐるが、各製品とも品評會共進會には常に入賞して模範筆とされてゐる。

福岡煙草小賣人組合

福岡煙草小賣人組合聯合會は去る昭和七年十一月に創立し、會長一名、副會長一名地方委員十三名の役員を置き、事務所を福岡市下呉服町二十六番地に設け、其地區は福岡、佐賀、長崎、大分、山口及愛媛の六縣下に跨り現在四十九ヶ所の煙草小賣人組合と、一萬六千餘名の煙草小賣業者の統制機關として福岡たばこ新聞を發行する外、種々の事業を施設し、且又所轄福岡地方專賣局の諮問機關として煙草專賣事業に劃策大に斯界に活動して居る。

第十七章 門司市と産業

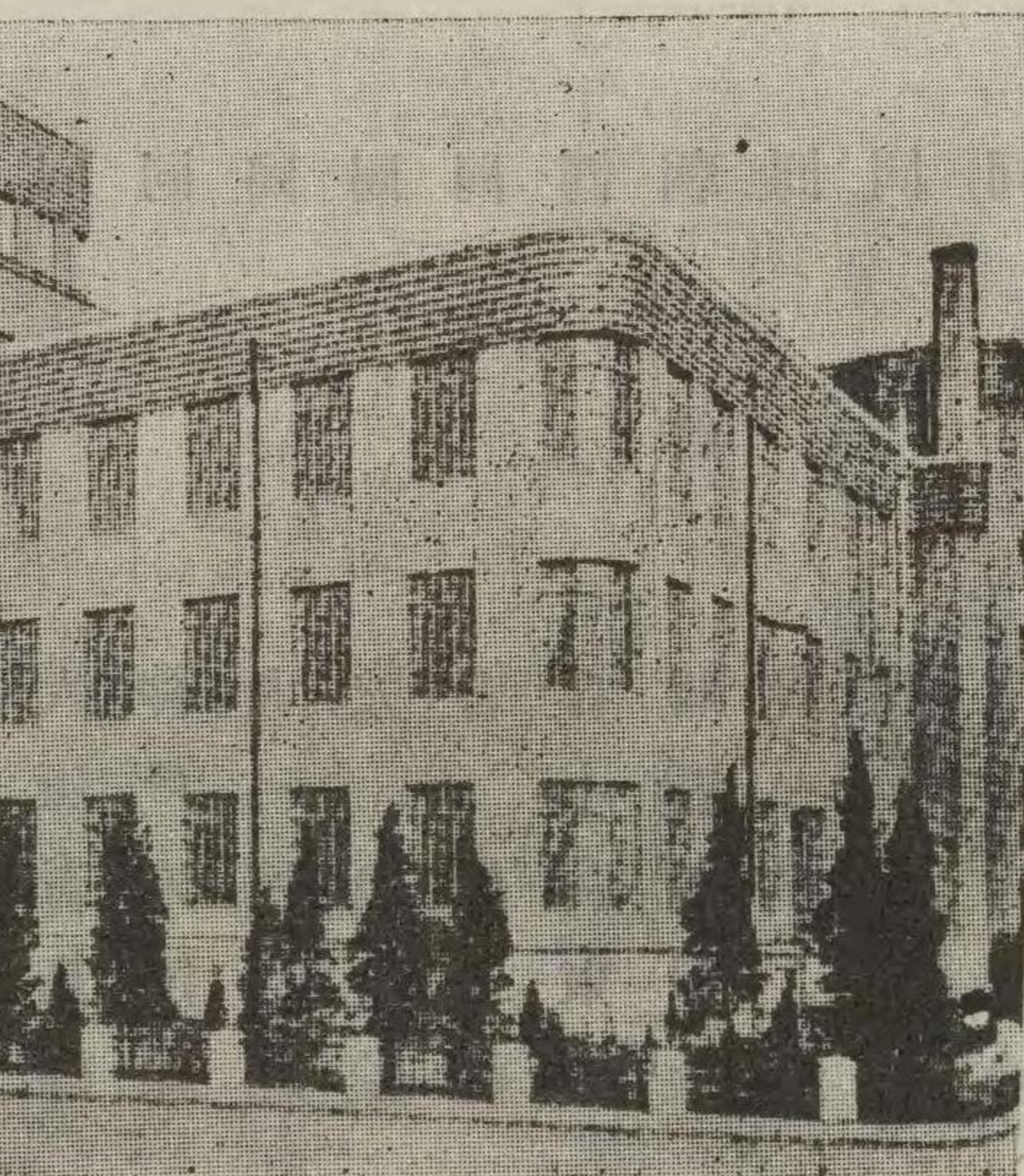
第一節 位置、面積

門司市は九州の北端に位して、九州各地に至る鐵道の起點であり、又本州との連絡地點を占め、海港としては内地各港はもとより、遠く臺灣、朝鮮、滿洲、支那、南洋、歐洲其他諸外國との國際交通上の要衝に當つてゐる。

明治初年、葭や薄の間に漁家を交へた海邊の素朴な楠原村、門司村の一寒村を思ふ時、如何に天與の地利と近代文化の恩恵とを享けてゐるとは云へ、僅僅四、五十年の間に人口十二萬餘を抱擁する西日本の代表的港灣都市になら

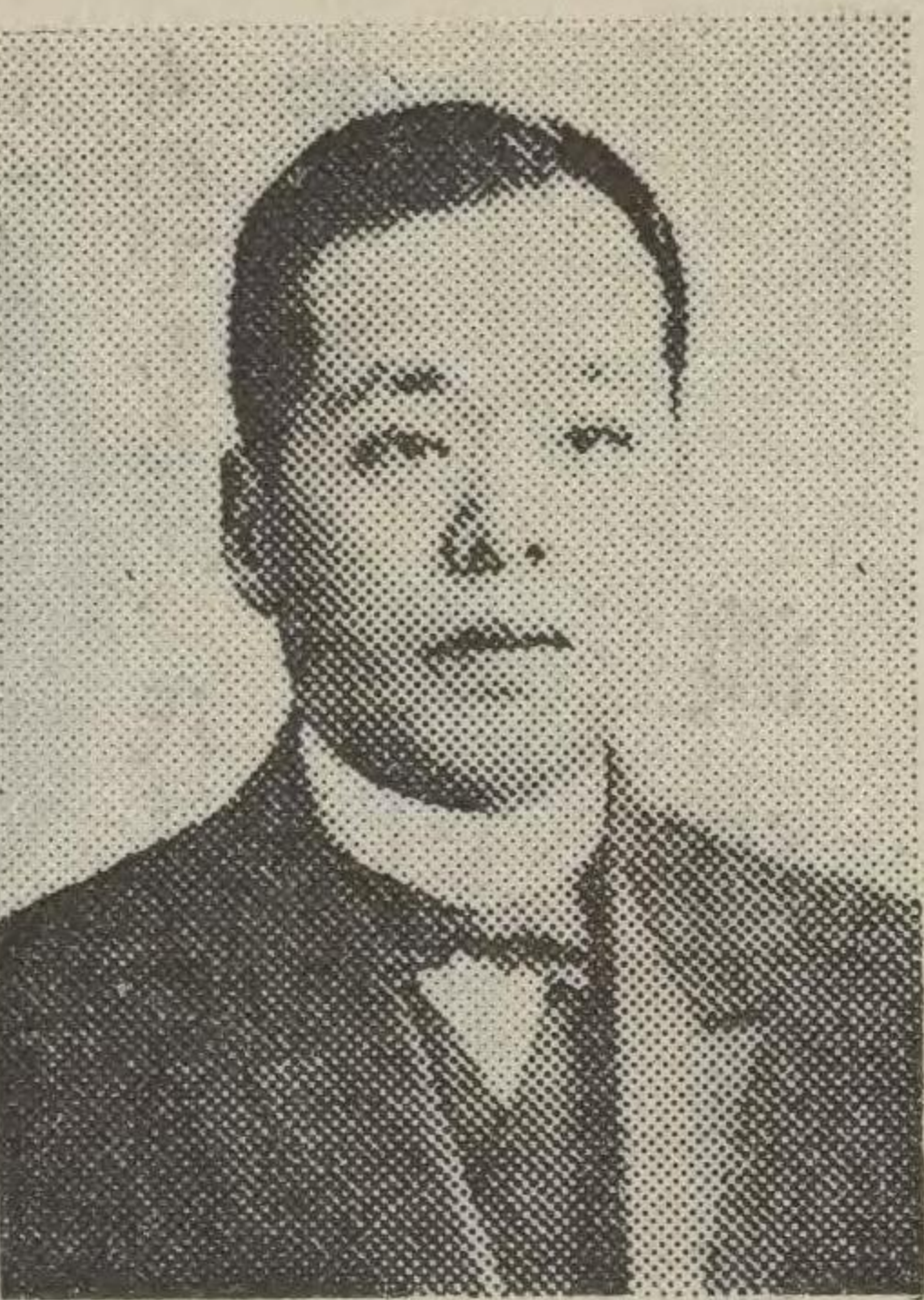
第二節 内外貿易

一九三四年の門司港外國貿易は、輸出五一、九四五、〇〇〇圓、輸入七三、九三四、〇〇〇圓で、前年に比し輸出に於て四、九六四、四二三圓、輸入二二、一一五、〇〇〇圓の各増加を示してゐる。



門司市

而して門司市當局の非常なる努力によつて完成された外貿岸壁の完成は、貿易港としての有利性を昂め、入港船舶數は愈々増加するに至り、一九三四年は實に入港船舶數七、九一〇隻、この總噸數二三、五二〇、〇〇〇噸といふ驚くべき數字を示し、大連、天津航路定



氏田原河主堂古復

にする爲め、筆軸に肖像寫眞を附して賣出したのが平助筆となり、爾來日に日に高評を博し隆盛を極めてゐるが、我國に於て偽造豫防に肖像寫眞を貼布したのは他の商品にも未だ嘗つてなく平助筆を嚆矢としてゐる。明治十九年

六月該肖像を商標として登録の許可を得、益々信用を博すると共に我國教育上に絶大なる貢献を齎らした。現在では全九州は勿論、關西、關東、上海等に販路を有し、又宮内省御用筆として多年納入してゐる。

大正十一年三月には畏くも 皇后陛下九州行啓の御砌、扈從の金子堅太郎伯爵を経て、京都下雲か畑御獵鹿御下賜方を奏請したところ、翌年宮内省より鹿洞御下賜の恩命に接した。その鹿毛を以つて謹製した筆を 兩陛下並に皇太子殿下に献上、之を記念として「雲か畑筆」と銘名して發賣してゐる。尙ほ筆製造と共に鉛筆製造にもあたり、福岡市明治町五丁目鉛筆文具工

四十九ヶ所の煙草小賣人組合と一萬六千餘名の煙草小賣業者の統制機關として福岡たばこ新聞を發行する外、種々の事業を施設し、且又所轄福岡地方專賣局の諮問機關として煙草專賣事業に劃策大に斯界に活動して居る。

第十七章 門司市と産業

第一節 位置、面積

門司市は九州の北端に位して、九州各地に至る鐵道の起點であり、又本州との連絡地點を占め、海港としては内地各港はもとより、遠く臺灣、朝鮮、滿洲、支那、南洋、歐洲其他諸外國との國際交通上の要衝に當つてゐる。

明治初年、葭や薄の間に漁家を交へた海邊の素朴な楠原村、門司村の一寒村を思ふ時、如何に天與の地利と近代文化の恩恵とを享けてゐるとは云へ、僅僅四、五十年の間に人口十二萬餘を抱擁する西日本の代表的港灣都市にならうとは誰が思ひ得たことであらうか。

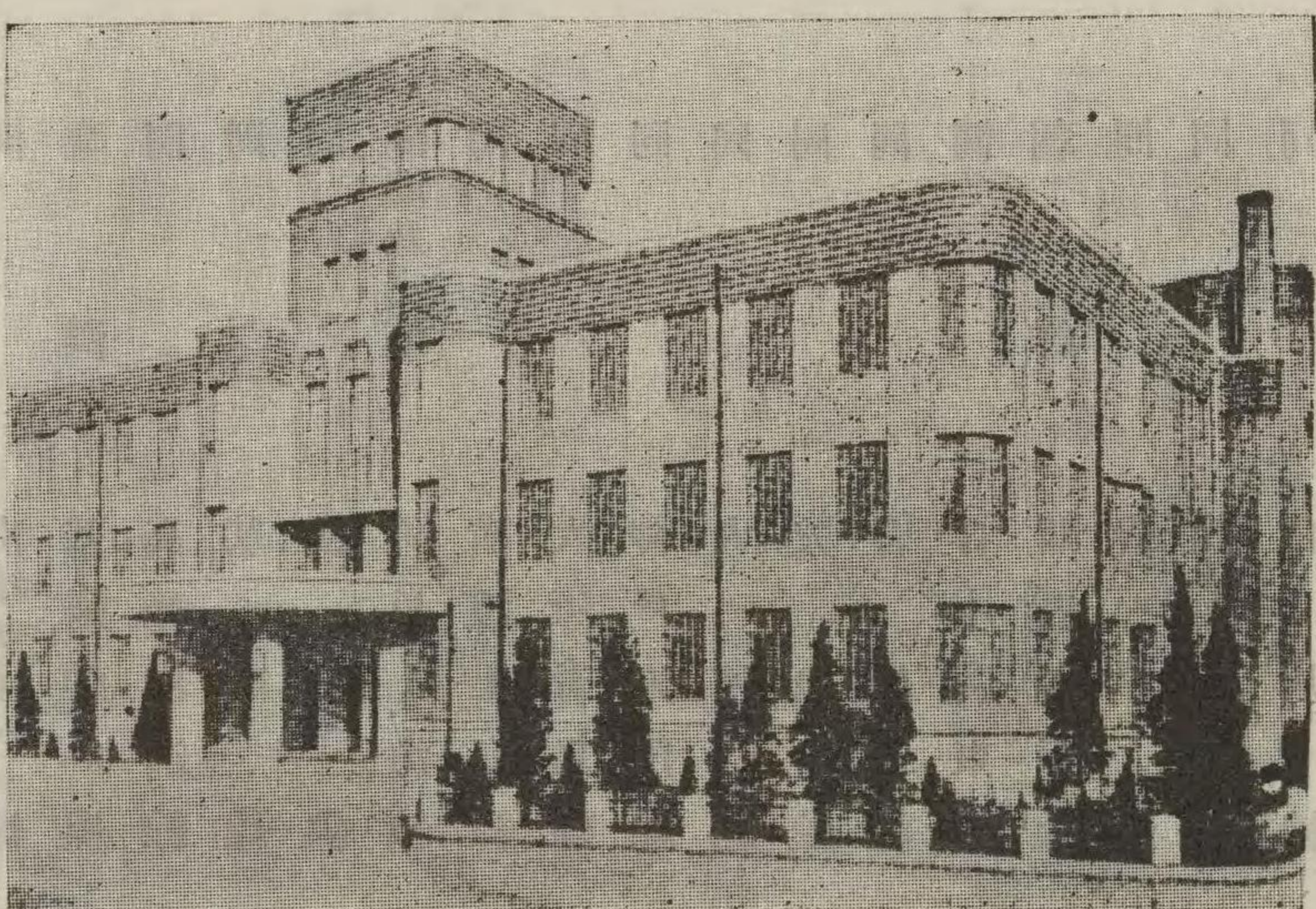
門司市と門司港、周知の如く海外貿易の有力なる海港都市としての門司の有つ意義は、滿洲事變以來通商上、軍事上比類なき重要性を獲得した。それは一方に於て日本海軍が戦術上大きな連繫の一地點であり、他面には北九州重要産業の運送地點として、二重の意義をもつものであり、この事は門司市の最も誇りとすべき事であらう。

昭和六年を底として、七年以後果進的輸出増加の繁榮は、門司港をして著しく強化し、特にインフレーション政策以後、北九州に於ける重工業界のブームは、門司港に非常なる繁榮をもたらした。

第二節 内外貿易

一九三四年の門司港外國貿易は、輸出五一、九四五、〇〇〇圓、輸入七三、九三四、〇〇〇圓で、前年に比し輸出に於て四、九六四、四二三圓、輸入一二、一一五、〇〇〇圓の各増加を示してゐる。

而して門司市當局の非常なる努力によつて完成された外貿岸壁の完成は、貿易港としての有利性を昂め、入港船舶數は愈々増加するに至り、一九三四年は實に入港船舶數七、九一〇隻、この總噸數二三、五二〇、〇〇〇噸といふ驚くべき數字を示し、大連、天津航路定期船は一日と雖も缺がしたことがないといふ状態である。



門司市廳

九人、世帯戶數二六、四一五戸を算するに至り、後方の山に遮られ、長く海岸線に沿つて發展し、隣接町村を合併し、海港都市としては既に充分の設備を完了してゐる。給水の設備、觀光用として推賞さるべきサレタドライブウェイの新設は僅々廿分にして風師山頂に達し、遠く日本海、瀬戸内海、北九

而して門司に寄航する定期航路船は左の如くで、如何に海外貿易港として重要な地帯を形成してゐるか、窺知されよう。

方面	航路名	初終及寄港名	會社名
歐洲	横濱倫敦線	横濱—門司—倫敦	日本郵船
同	リパブル線	同—門司—リパブル	同
同	ハンブルグ線	同—門司—ハンブルグ	同
米國	紐育線	神戶—香港—門司—紐育	同
同	紐育急航線	フィリッピン—門司—紐育	大阪商船
南米	南米西岸線	香港—門司—バルパライソ	日本郵船
同	中南米ガルフ線	神戶—マニラ—門司—ニ	同
同	南米	ニューオルレアンス	同
同	日本南洋濠洲線	横濱—門司—メルボルン	同
同	濠洲線	同—門司—マデリード	同
同	印度及暹羅	同—門司—ニュージブラント	大阪商船
同	甲谷陀線	同—門司—甲谷陀	日本郵船
同	日本甲谷陀線	同—門司—同	大阪商船
同	孟買線	同—門司—孟買	同
同	孟買線	同—門司—同	日本郵船

滿洲及支那	朝鮮	南洋	其他
神戶上海線	神戶—門司—上海	大阪—門司—上海	日本郵船
横濱上海線	横濱—門司—上海	大阪—門司—青島	同
大阪青島線	大阪—門司—青島	大阪—門司—天津	同
神戶天津線	神戶—門司—天津	大阪—門司—大連	同
大連線	大連—門司—大連	同—門司—天津	同
天津線	天津—門司—天津	同—門司—青島	同
青島線	青島—門司—青島	同—門司—廣東	同
日本廣東線	日本—廣東—神戶	同—門司—雄基	同
朝鮮	雄基神戶線	神戶—門司—雄基	近海郵船
朝鮮	清津線	大阪—門司—同	大阪商船
朝鮮	仁川線	京濱—門司—同	同
朝鮮	北鮮線	大阪—門司—仁川	同
朝鮮	仁川線	京濱—門司—鎮南浦	同
朝鮮	南鮮線	神戶—門司—仁川	同
朝鮮	仁川線	同—門司—雄基	同
朝鮮	清津雄基線	大阪—門司—雄基	同
朝鮮	新義州線	同—門司—新義州	同
朝鮮	浦蘆斯德線	同—門司—浦蘆斯德	同

以上の他に左の如き内外航路がある。

攝陽商船株式會社 (代理店大阪商船株式會社)	大阪山陽線	自大阪至門司	(往復) 毎日
同	大阪若松線	自大阪至若松	(一復) 毎日
宇和島運輸株式會社 (代理店大阪商船株式會社)	門司宿毛線	自下關至宿毛	(往復) 毎日
南洋海運株式會社 (代理店大阪商船株式會社)	瓜哇線	自内地至瓜哇	(往復) 月二回
石原産業海運株式會社	新嘉坡線	自横濱至新嘉坡	(往一) 月三回
原田汽船株式會社 (代理店株式會社巴組)	大阪青島線	自大阪至青島	(往復) 月二回
同	宇野大連線	自宇野至大連	(往復) 月二回
尼崎汽船部	中國線	自大阪至門司	(往復) 毎日
インド	チャイナ汽船株式會社 (代理店上繁船舶部)	日本甲谷陀線	自大阪至甲谷陀 (一復) 二週一回
イースタン	エンド	オーストリアン	ステイムシップ
カムパニー	リミテッド	(代理店瓜生商會)	
濠洲	線	自メルボルン至横濱	(往復) 月一回
ブリテイッシュ	インデア	ステイム	
ナビゲーション	カムパニー	(代理店瓜生商會)	

門司税關

門司税關は明治二十二年石炭、米、麥粉、麥、硫黄五品の特殊輸出港として門司港が指定され、同時に長崎税關門司出張所が設置されたのに始まるもので、年代的に列記すると

- (1) 同三十年六月十七日に門司税關支署と改稱、(2) 同三十二年管轄地域を周防、長門、豊前、豊後、日向と定めらる、(3) 同年七月十三日一般開港となり八月四日から實施、(4) 同年八月臨時海港検疫所を設置、(5) 同三十二年門司海港検疫所と改稱、(6) 同三十五年福岡縣港務部を設置、(7) 同四十二年十一月五日門司税關獨立、(8) 大正三年十一月一日農商務省植物検査所門司支署設置、(9) 同五年東海岸外國貿易設備工事着手—同九年工事完成、(10) 同九年西海岸外國貿易陸上設備着手、(11) 同十三年港務部、植物

- 検査所を税關に併掌、(12)昭和二年四月十二日門司港境界を擴張、(13)同年四月二十日港區を改正す、(14)同年九月門司税關其の他合同廳舎竣工(現在)、(15)同年十月十日熊本遞信局海事部及海員審判所を長崎より移轉(昭和六年四月十日農林省輸出蜜蜂検査事務所開設、(17)同年九月三十日門司港修築工事完成

門司築港株式會社

門司市大久保にある門司築港株式會社について、左に列記しよう。

- (1) 大正九年大阪で資本金一千萬圓、元商相依孫一、島德藏等公有水面埋立、築港の經營、中央鐵道、電氣軌道、市外住宅地の經營を目的として創立、門司に支店を置く。
- (2) 大正十三年十月減資を計畫、門司支店を本店と改め、十四年春資本金二百五十萬圓となる。
- (3) 大正十三年十二月門司市東本町、田ノ浦間電氣軌道開業、自動車の發達によつて經營困難となり、昭和八年一月より三ヶ年間九軌に委託經營したが、契約期間満了後九軌が再契約せぬため、十一年一月軌條撤去(これが十一年上半期赤字の理由)
- (4) 昭和四年舊門司大久保間に中央鐵道を敷設し、農林省國立倉庫の米穀及全國購買組合肥料工場の肥料等を一日約三百噸宛輸送してゐる。
- (5) 土地、建物五萬坪を有し、倉庫、住宅等を建設、賃貸借してゐる。
- (6) 將來田ノ浦港が開港場に指定され、筑豊炭の積出を見越して、一、大

久保、柄杓田、田ノ浦の埋立、二、大久保より田ノ浦を経て日豊線會根を過ぎ小倉鐵道石田に通ずる鐵道新設を計畫し、目下認可申請中

大阪商船門司支店

創業當時 大阪より中國及び九州方面へ向ふ社船は、下關へ寄港してゐたので赤間關支店を設けてゐたが、明治二十二年十二月九州鐵道の起點となつてから門司寄港が便利となつたため、明治二十四年十月一日門司に設置、門司港の繁榮に伴ひ、二十八年三月一日日本社直轄の出張所となし、更に三十年六月一日門司支店と改稱した。

切符發賣所 門司税關岸壁に同社大連航路及び天津航路の繋留開始と同時に、昭和七年十月税關岸壁旅客待合所内に乗船券の發賣、船客の案内、社船連絡の事務を開始、税關交通特許場所たる同店棧橋は、交通量の増加に伴ひ、利用船客に對する施設の完備を期して、昭和六年十二月棧橋際の市有地を借入れ税關吏事務室、旅具検査場、船客待合室、警官詰所、棧橋係員詰所を包含するスレート葺木造平家建一棟を新築、躍進國際港門司の繁榮に伴ひ、門司支店では内外施設の充實を圖り、支店従業員は創業當初の十人から一躍ハイジャンプして百名を突破した。現支店長は石垣簾氏、船客の海陸連絡用としてランチ六隻を有し、支店は門司市港町にある。

山下汽船九州支店

山下汽船株式會社九州支店は門司市西海岸通海運ビルにある。當支店は大

株式會社巴組



株式會社巴組 社長 野真吾 氏

株式會社巴組は先頃迄合資會社巴組として中野真吾氏が統率經營してゐた海運業會社である。社運の隆昌は門司港發展と軌上を共にし、新時代の飛躍に應ずべく經營法に面目一新を求め、斯くは株式會社巴組として組織をあらためられたものである。

其の事業は氏が令兄にして國際通運の社長たる運輸界の大御所中野金次郎氏より受け繼いだものにして、遠く創立は大正五年である、爾來内地航路は勿論北鮮航路、大連航路、青島航路を主要航路となし、大連汽船、辰馬汽船、原田汽船の各代理店等を兼ね、所屬の船舶としては白山丸、彦山丸、第六雲丸等々を有し、備船に至つては常に十數萬噸を數へてゐる有様である。特に近來門司港發展と港灣修築の結果は、躍進的發展を氏の事業上にもた

石原産業門司出張所

正二年二月、合名會社山下汽船門司出張所として設置、大正六年五月株式組織に改められ、山下汽船株式會社門司出張所となる、昭和十一年六月九州支店に昇格、支店長は鶴野木健造氏である。支店は比律賓、濠洲、南洋方面の礦石、鹽、曹達等を不定期に大量輸入する。本社は東京で明治三十年横濱石炭商會として創立、現在の社長は山下龜三郎氏で、資本金は二千萬圓であり世界に類の無い不定期貨物船を運航し、取扱船總噸數百萬噸、取扱貨物年間七、八千萬噸に及んでゐる。同社は目下濠洲、ニュージールランド、歐洲、南洋、南阿、イラン、ペルシア方面に定期航路計畫中である。

石原産業株式會社門司出張所は門司市西海岸通海運ビルにあり、大正十三年設置され、現支店長は藤澤留十郎氏である。

門司市大久保にある門司築港株式會社について、左に列記しよう。

- (1) 大正九年大阪で資本金一千萬圓、元商相依孫一、島徳藏等公有水面埋立、築港の經營、中央鐵道、電氣軌道、市外住宅地の經營を目的として創立、門司に支店を置く。
- (2) 大正十三年十月減資を計畫、門司支店を本店と改め、十四年春資本金二百五十萬圓となる。
- (3) 大正十三年十二月門司市東本町、田ノ浦間電氣軌道開業、自動車の發達によつて經營困難となり、昭和八年一月より三ヶ年間九軌に委託經營したが、契約期間満了後九軌が再契約せぬため、十一年一月軌條撤去（これが十一年上半期赤字の理由）
- (4) 昭和四年舊門司大久保間に中央鐵道を敷設し、農林省國立倉庫の米穀及全國購買組合肥料工場の肥料等を一日約三百噸宛輸送してゐる。
- (5) 土地、建物五萬坪を有し、倉庫、住宅等を建設、賃貸借してゐる。
- (6) 將來田ノ浦港が開港場に指定され、筑豊炭の積出を見越して、一、大

正二年二月、合名會社山下汽船門司出張所として設置、大正六年五月株式組織に改められ、山下汽船株式會社門司出張所となる、昭和十一年六月九州支店に昇格、支店長は鶴野木健造氏である。支店は比律賓、濠洲、南洋方面の礦石、鹽、曹達等を不定期に大量輸入する。本社は東京で明治三十年横濱石炭商會として創立、現在の社長は山下龜三郎氏で、資本金は二千萬圓であり世界に類の無い不定期貨物船を運航し、取扱船總噸數百萬噸、取扱貨物年間七、八千萬噸に及んでゐる。同社は目下濠洲、ニュージールランド、歐洲、南洋、南阿、イラン、ペルシア方面に定期航路計畫中である。

石原産業門司出張所

石原産業株式會社門司出張所は門司市西海岸通海運ビルにあり、大正十三年設置され、現支店長は藤澤留十郎氏である。當社の不定期シンガポール航路船は月に二回寄港し、主として八幡製鐵所行きの鐵礦石を輸入し、シンガポールへ雜貨を輸出す。石原産業は大正九年九月十日資本金十萬圓で南洋礦業公司として設立されたもので、社長は明倫會の事實上の總裁とも云ふべき石原廣一郎氏である。昭和四年七月廿五日業務擴張の爲め、資本金を百五十萬圓に増資、石原産業海運合資會社となり、昭和九年資本金五百萬圓で株式會社となり、今日に至つたものである。當社の關係會社は左の如くである。

石原合名會社、大連石原合資會社、株式石原産業公司、南洋航路株式會社、南洋倉庫株式會社、南洋海運株式會社

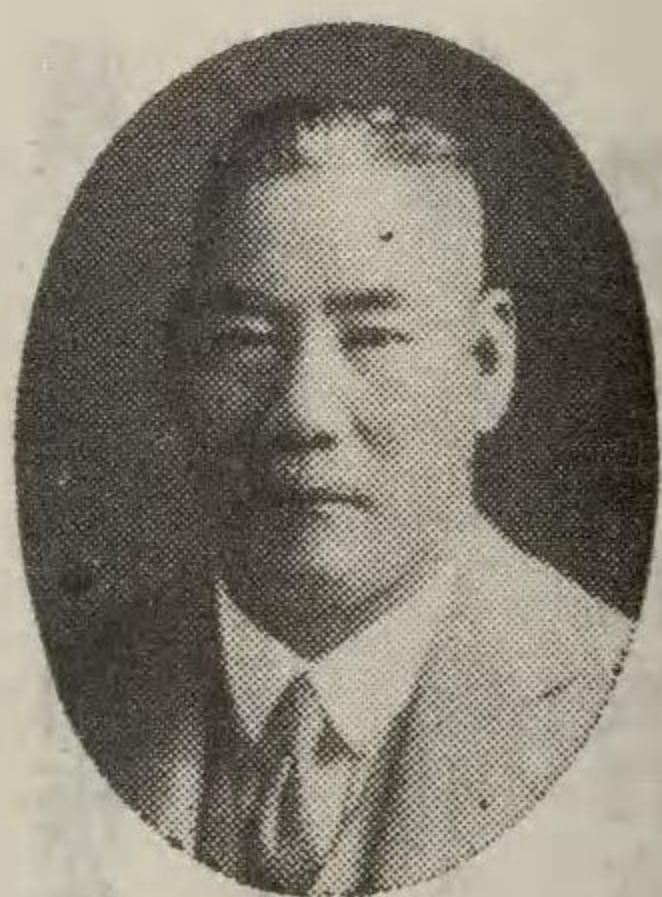
年六月一日門司支店と改稱した。

切符發賣所 門司税關岸壁に同社大連航路及び天津航路の繋留開始と同時に、昭和七年十月税關岸壁旅客待合所内に乗船券の發賣、船客の案内、社船連絡の事務を開始、税關交通特許場所たる同店棧橋は、交通量の増加に伴ひ、利用船客に對する施設の完備を期して、昭和六年十二月棧橋際の市有地を借入れ税關吏事務室、旅具検査場、船客待合室、警官詰所、棧橋係員詰所を包含するスレート葺木造平家建一棟を新築、躍進國際港門司の繁榮に伴ひ、門司支店では内外施設の充實を圖り、支店従業員は創業當初の十人から一躍ハイジャンプして百名を突破した。現支店長は石垣廉氏、船客の海陸連絡用としてランチ六隻を有し、支店は門司市港町にある。

山下汽船九州支店

山下汽船株式會社九州支店は門司市西海岸通海運ビルにある。當支店は大

株式會社巴組



株式會社巴組 社長 野真吾氏

株式會社巴組は先頃迄合資會社巴組として中野真吾氏が統率經營してゐた海運業會社である。社運の隆昌は門司港發展と軌上を共にし、新時代の飛躍に應ずべく經營法に面目一新を求め、斯くは株式會社巴組として組織をあらためられたものである。

其の事業は氏が令兄にして國際通運の社長たる運輸界の大御所中野金次郎氏より受け繼いだものにして、遠く創立は大正五年である、爾來内地航路は勿論北鮮航路、大連航路、青島航路を主要航路となし、大連汽船、辰馬汽船、原田汽船の各代理店等を兼ね、所屬の船舶としては白山丸、彦山丸、第六雲丸等々を有し、備船に至つては常に十數萬噸を數へてゐる有様である。

特に近來門司港發展と港灣修築の結果は、躍進的發展を氏の事業上にもたらし、更に公人としては市會議員初當選に於て既に副議長となり、昭和七年冬には議長となり、他面商工會議所常議員、海運業組合長の重職を兼ね、今日まで市政及び經濟界方面に於て各種の難問題を解決し、常に献身的に公に報じ、門司市民の衆望を一身に集め寧日なき有様である。

思ふに私財を公的に散じ、身を以て社會事業の爲めに努力する氏の如きを持つ門司市は幸福と云はねばならぬ。更に其の事業と政治的生命と唇齒の關係にある事業に於て尙よく隆盛なるは、其の經綸の法よろしきは勿論ながら、氏が雅量に富み、よく明哲なる頭腦を以て事業に精進したる爲であると云ふべきであらう。

第四節 商業及金融界

商業 門司市は海港都市として發達した特殊の貿易都市であるために市域にかつては工業らしき形態の企業を持たなかつた。只大里町との合併によつて、大里町の櫻ビールが唯一の大工業として所在することゝなつたのである。従つて門司市自身の工業物による商業の發展といふものはなく、殆んど對外的通商上に依存する商業である。こゝに門司市の商業界の弱點と強味とがあるわけで、貿易上の景氣、不景氣は門司市に於ては特に早く現れると云へる。

金融 福岡縣の金融機關の大宗として、日本銀行門司支店の存在は特に注目し得る。此の他三井、三菱を始めとして中央及地方銀行支店が存在してゐるし、次に見る如く庶民金融機關としての有限責任門司信用組合が存在してゐる。

門司信用組合

有限責任門司信用組合は大正十二年十月二十三日の設立であつて、現在の預金は九一六、一〇六圓、貸付は八六六、五〇五圓、組合員数は九二六名である。門司信用組合の設立については、大正八、九年のパンニックにより金融梗塞し、中小商工業者の窮乏に前組合長梅月瀨太郎氏が着眼して組合を設立、昭和二年五月大里支所、四年六月一日葛葉支所開設、事業の分量増加で事務所は狹隘を告げ、五年十二月現事務所を新築移轉し、組合員は商工業者を主と

ば、門司のバナナとして有名である。本市にある門司臺果會社から捌かれてゆくバナナは年額百萬圓を越え、九州は勿論關西より滿、鮮、支那に至るまでおよそ門司の地を經てゐないものはない。

三井物産門司支店

明治三十二年下關支店門司出張所から門司支店となり、北九州を始め九州の石炭、機械類、金物、砂糖、穀物、肥料、麥粉その他を取扱つてゐる。事業の隆昌に伴ひ事務所の狹隘を告げ、工費約五十萬圓を投じて十一年一月着工、十二年五月竣工の豫定で、棧橋通りに地階六層建の大事務所を建築中で、支店長は金井潤三氏である。

し、果物、鑛油、船具商、市内各銀行の間に介在して唯一の相互金融機關として重きをなしてゐる。

門司市物産陳列所

滿洲國の建設を契機として、滿蒙を中心に海外取引の助長促進を圖る目的の下に、昭和九年十二月開設せられたるもので、其特徴とする處は、市内物産はもとより、全國主要都市優良物産の展示、即賣、紹介、斡旋を目的としてゐる點で、其位置が門司港の玄關とも云ふべき埠頭の中心西海岸通、税關東へ二丁で而も外航船横付の税關岸壁に近く、地の利を占むる關係上、大連天津、青島等を通じて來往する内外客の參觀頗る多い。

山中硯 門司の裏海岸白野江山中の一帯は古來硯石を以て名高い。その種類九種を數へ、鹿の子石を優れるものとなし、紫金石、葡萄石之れに亞ぐ。石質堅牢艶麗にして世上赤間硯といはれるものも、その優秀なるは此地を指して他に産しない。最も愛硯家の嗜好に適する。

梅花石 白野江海岸に沿へる岩石中に産するも極めて少い。紫黒堅緻の石質であつて、白梅花の斑紋(原生動物の化石)がある。その秀麗なるものに至つては、眞に畫工も尙及ばない稀有の奇石である。彫刻を加へて硯或は置物等となして愛用される。

竹細工 雅致に富める人形、玩具、花籠等の細工物あり、就中「多慶船」はみなと門司の象徴として絶好の土産品である。

バナナ 光と熱の臺灣から移入されるあの美しいバナナも門司の港に入れ員二五〇名、二階食堂は美人女給のサービスと相俟つて好評を博してゐる。

出光商會

門司市西本町に本店を有する鑛油業出光商會は、西日本實業界の覇者門司商工會議所會頭出光佐三氏の經營なるものである。出光氏は、明治十八年福岡縣宗像郡に生れ、神戸高商を卒へ、始め神戸酒井商會に勤務してゐたが明治四十四年六月門司市の地理的國際地位に着眼して出光商會を創業したが爾來二十有餘年、隆々たる今日の地盤を築いた。

營業種目は鑛油、揮發油、機械油、グリース、アスファルト及植物性油等重工業に不可缺の原料を北九州大工業地帯をはじめ、滿鮮、支那本土、臺灣に供給する外、日本石油、滿洲石油、大日電線、大阪變壓器、大阪鐵工所、菅原電氣商會、西部カーバイド販賣會社、豐國セメント、大連窯業、帝國ニユ

云へる。
金 融 福岡縣の金融機關の大宗として、日本銀行門司支店の存在は特に注目に値する。此の他三井、三菱を始めとして中央及地方銀行支店が存在してゐるし、次に見る如く庶民金融機關としての有限責任門司信用組合が存在してゐる。

門司信用組合

有限責任門司信用組合は大正十二年十月二十三日の設立であつて、現在の預金は九一六、一〇六圓、貸付は八六六、五〇五圓、組合員数は九二六名である。門司信用組合の設立については、大正八、九年のパニックにより金融梗塞し、中小商工業者の窮乏に前組合長梅月瀨太郎氏が着眼して組合を設立、昭和二年五月大里支所、四年六月一日葛葉支所開設、事業の分量増加で事務所は狹隘を告げ、五年十二月現事務所を新築移轉し、組合員は商工業者を主と

ば、門司のバナナとして有名である。本市にある門司臺果會社から捌かれてゆくバナナは年額百萬圓を越え、九州は勿論關西より滿、鮮、支那に至るまでおよそ門司の地を経てゐないものはない。

三井物産門司支店

明治三十二年下關支店門司出張所から門司支店となり、北九州を始め九州の石炭、機械類、金物、砂糖、穀物、肥料、麥粉その他を取扱つてゐる。事業の隆昌に伴ひ事務所の狹隘を告げ、工費約五十萬圓を投じて十一年一月着工、十二年五月竣工の豫定で、棧橋通りに地階六層建の大事務所を建築中で、支店長は金井潤三氏である。

山城屋百貨店

門司市唯一の百貨店山城屋は、市の中心棧橋通りにあり、資本金廿五萬圓の合資會社であつて、社長は木村富次郎氏、店長は木村悌藏氏である。山城屋の沿革を略記すると、山城屋が門司に根をおろしたのは、遠く北清事變前で、大阪の山城屋が朝鮮、滿洲および九州への販路獲得を目指し、その足場として市内内本町に出張所を設け、明治四十五年四月二十九日合資會社に組織を改め、昭和九年十二月十日平井屋デパートのあとを引ついで山城屋百貨店と看板を塗り替へ、内容を充實してデヴューし、更に十年十月西堀川町に製菓部を設置して、名實共に門司市唯一の百貨店として君臨してゐる。従業

てゐる點で、其位置が門司港の玄關とも云ふべき埠頭の中心西海岸通、税關東へ二丁で而も外航船横付の税關岸壁に近く、地の利を占むる關係上、大連天津、青島等を通じて來往する内外客の參觀頗る多い。

山中硯 門司の裏海岸白野江山中の一帯は古來硯石を以て名高い。その種類九種を數へ、鹿の子石を優れるものとなし、紫金石、葡萄石之れに亞ぐ。石質堅牢艶麗にして世上赤間硯といはれるものも、その優秀なるは此地を措いて他に産しない。最も愛硯家の嗜好に適する。

梅花石 白野江海岸に沿へる岩石中に産するも極めて少い。紫黒堅緻の石質であつて、白梅花の斑紋(原生動物の化石)がある。その秀麗なるものに至つては、眞に畫工も尙及ばない稀有の奇石である。彫刻を加へて硯或は置物等となして愛用される。

竹細工 雅致に富める人形、玩具、花籠等の細工物あり、就中「多慶船」はみなと門司の象徴として絶好の土産品である。

バナナ 光と熱の臺灣から移入されるあの美しいバナナも門司の港に入れ

員二五〇名、二階食堂は美人女給のサービスと相俟つて好評を博してゐる。

出光商會

門司市西本町に本店を有する鑛油業出光商會は、西日本實業界の覇者門司商工會議所會頭出光佐三氏の經營になるものである。出光氏は、明治十八年福岡縣宗像郡に生れ、神戸高商を卒へ、始め神戸酒井商會に勤務してゐたが明治四十四年六月門司市の地理的國際地位に着眼して出光商會を創業したが爾來二十有餘年、隆々たる今日の地盤を築いた。

營業種目は鑛油、揮發油、機械油、グリリス、アスファルト及植物性油等重工業に不可欠の原料を北九州大工業地帯をはじめ、滿鮮、支那本土、臺灣に供給する外、日本石油、滿洲石油、大日電線、大阪變壓器、大阪鐵工所、菅原電氣商會、西部カーバイド販賣會社、豐國セメント、大連築業、帝國ニヒューム鋼管、ブリヂストンタイヤ等々の各會社及明治火災、三菱海上火災、東京海上火災保險會社の代理店をつとめ、頗る多種多様廣範圍に及んでゐる。年間取引額は二千萬圓を突破してゐる状態で、支店、出張所は北九州各地は勿論、東は中國諸地方から名古屋、東京、西は朝鮮、滿洲から上海を中心とする支那各地、南は臺灣まで三十餘ヶ所の多きに上つてゐる。

氏は實業界に活躍する一方、門司市政界に三巨頭の一人として重きをなし大正十三年會議所議員を振り出しに、昭和七年會頭となり、滿洲國の初代門司名譽領事の榮職に就いてゐるが、今回またもや輿望を擔つて會頭に重任するなど氏の前途は實に洋々たるものがある。

第十八章 小倉市と産業

第一節 小倉市

舊城下街小倉市は、軍都としての重要性は勿論北九州五市の中心として、今や人口二十萬、豫算總額二百萬圓を突破し、天恵とも言ふべき海陸交通、用水等の近代産業の基幹は、市當局の助長策と相俟つて大いにその將來を期待されてゐる。躍進小倉の産業方面から見た素描は

交通 關門海峡を渡つて門司驛を出發する汽車は、十五分のうちには必ず小倉にとまる。鹿兒島方面に行くにも、長崎方面に行くにもまた別府を経て大分、宮崎方面に行くにも必ず小倉を経由せねばならぬ。小倉鐵道社線は企救の平野を縦斷して筑豊炭田地方と連結し、九軌電車は東は門司から西は戸畑、八幡の各市から折尾町に延び、恰も一市内の市街電車の觀を呈してゐる。このほか大阪町から衛戍地北方にいたる小倉電軌をはじめ、バス網も四通八達してゐる。

港灣 只海への出口は昔は本土九州連絡の要津であつたものが、近代的臨港設備に遅れた爲めに漸く最近にいたり、淺野小倉築港が八分通り完成して、壹萬噸級汽船四隻を同時に接壁せしめ得る準備成り、商船、御用船等の發着が急速力に増加しつゝある。小倉港は門司の貿易、若松の石炭などにはいま



小百 必ずや重大なる役割を演ずる約束に立つて輝かしい將來が期待されてゐる。現在でもこの地方に於ける軍需の中心があり、裁判所、官營工場長氏 等存在し、病院と辯護士と寺院と更にまた消費

の中心市場として各種の間屋、商店などが軒を並べてゐる。

生産 同市の産業は近年長足の進歩をなしつゝあり、昭和十年度總生産額は六六、六三四、〇二六圓を算し、昭和五年度の生産額二二、四一七、六〇八圓に比し實に約二倍の増加である。十年度生産物を示せば、(單位圓)

- 鐵製品二八、二八七、二九九△電気一〇、五八五、九二三△ワイヤロープ三、六七二、四二五△西洋紙三、六三三、二二五△工業用藥品三、〇九〇、九四〇
- △陶磁器二、二〇〇、〇〇〇△電球一、八七九、〇八三△硬化油七二八、九二〇
- △織物六五九、〇一八△導火線六五二、七八六

就中寺産物として著名なものは小倉縮であつて、三百年來の歴史を有し、遠

だ及びもつかないが、其特色は軍事上の重要使命を帯びてゐること、紫川の清流を有するため、關門北九州の都市は何れも水に苦心してゐる。昭和九年の早魃の際などは何れも斷水の悲鳴をあげたうちに、獨り小倉市のみは超然として給水を続け、不足の都市に援水を送つてゐた事實に徴し、用水の豊富を物語つてゐる。年々増加する人口に對する飲料水は勿論、工業用水にも毫も事を欠かない、これは一に清冽なる紫川と云ふ寶庫を有してゐるからである。近々着手せんとする工費百十五萬圓の上水道第二期擴張工事が竣工すれば、人口二十萬に達するまで絶対に事缺かないので、廣漠なる埋立地の利用と共に工場經營者の深く着目すべきところである。



小倉市役所

中心 北九州には五つの市が集結して、各其特色を發揮しつゝ繁榮を競つてゐる、就中人口の點では八幡と門司が秀でゐるが、位置、交通および背後地の關係から見て小倉はまさに五市の中樞である。他日五市合併の暁には



小倉魚市場

一千萬圓の取引高に達してゐる。今回縣營大貯木場建設の計畫あるもこの故である。また昭和十一年度から工藝傳習所を建設すべく目下着々準備中であり、木工藝の改良發展を圖ることになつたが、一方商店街振興策にも大なる努力を拂ふ等産業各方面の助長啓

今や人口二十萬、豫算總額二百萬圓を突破し、天恵とも言ふべき海陸交通、用水等の近代産業の基幹は、市當局の助長策と相俟つて大いにその將來を期待されてゐる。躍進小倉の産業方面から見た素描は

交通 關門海峡を渡つて門司驛を出發する汽車は、十五分のうちには必ず小倉にとまる。鹿兒島方面に行くにも、長崎方面に行くにもまた別府を経て大分、宮崎方面に行くにも必ず小倉を経由せねばならぬ。小倉鐵道社線は企救の平野を縦斷して筑豊炭田地方と連結し、九軌電車は東は門司から西は戸畑、八幡の各市から折尾町に延び、恰も一市内の市街電車の觀を呈してゐる。このほか大阪町から衛戍地北方にいたる小倉電軌をはじめ、バス網も四通八達してゐる。

港灣 只海への出口は昔は本土九州連絡の要津であつたものが、近代的臨港設備に遅れた爲めに漸く最近にいたり、淺野小倉築港が八分通り完成して、壹萬噸級汽船四隻を同時に接壁せしめ得る準備成り、商船、御用船等の發着が急速力に増加しつゝある。小倉港は門司の貿易、若松の石炭などにはいま



小倉市 必ずや重大なる役割を演ずる約束に立つて輝かしい將來が期待されてゐる。現在でもこの地方に於ける軍衙の中心があり、裁判所、官營工場長氏等存在し、病院と辯護士と寺院と更にまた消費

の中心市場として各種の間屋、商店などが軒を並べてゐる。

生産 同市の産業は近年長足の進歩をなしつゝあり、昭和五年度總生産額は六六、六三四、〇二六圓を算し、昭和五年度の生産額二二、四一七、六〇八圓に比し實に約二倍の増加である。十年度生産物を示せば、(單位圓)

- 鐵製品二八、二八七、二九九△電気一〇、五八五、九二三 △ワイヤロープ三、六七二、四二五△西洋紙三、六三三、二一五△工業用藥品三、〇九〇、九四〇
- △陶磁器二、二〇〇、〇〇〇△電球一、八七九、〇八三 △硬化油七二八、九二〇△織物六五九、〇一八△導火線六五二、七八六

就中特産物として著名なものは小倉縮であつて、三百年來の歴史を有し、遠く海外に輸出し、現在二織工場があつて各地市場に於て好評を博してゐる。

但し商工業の青春期である同市は、交通と水利と動力と廣大なる未利用埋立地との四拍子揃つて、躍進的に遠からず大小倉を出現することが期待されてゐる。

施設 小倉市營魚市場と青果市場は紫川口の小倉港岸壁に沿うて設けられ、海陸の連絡利便で、何れも年間取扱高百萬圓を越え、小倉市民の臺所の需要を満たしてゐるは勿論、隣接八幡市および企救町や筑豊炭礦地にも多量に仕向けられ、北九州地方生糧品の供給に重要な使命を果してゐる。なほ同市は從來木材の集散地として、其の供給區域は北九州は勿論南九州に及び、年間



中心 北九州には五つの市が集結して、各其特色を發揮しつゝ繁榮を競つてゐる、就中人口の點では八幡と門司が秀でゝゐるが、位置、交通および背後地の關係から見て小倉はまさに五市の中樞である。他日五市合併の暁には

工業用水にも毫も事を欠かない、これは一に清冽なる紫川と云ふ寶庫を有してゐるからである。近々着手せんとする工費百十五萬圓の上水道第二期擴張工事が竣工すれば、人口二十萬に達するまで絶対に事缺かないので、廣漠なる埋立地の利用と共に工場經營者の深く着目すべきところである。



小倉魚市場

一千萬圓の取引高に達してゐる。今回縣營大貯木場建設の計畫あるもこの故である。また昭和十一年度から工藝傳習所を建設すべく目下着々準備中であり、木工藝の改良發展を圖ることになつたが、一方商店街振興策にも大なる努力を拂ふ等産業各方面の助長啓蒙に努めつゝある。

土木建築界の小林徳一郎氏

小倉土木建築業界の異彩として、小倉市の小林徳一郎氏のことには若干ふれておき度いのである。氏は夙に事業方面に志を抱き、明治二十八年小倉で土木建築請負業を開始した。まもなく鑛山業に進出し、現に金銀鑛九鑛區、石炭鑛十八鑛區に亘り、目下起業中のもの金銀鑛二ヶ所、石炭鑛三ヶ所にして

何れも着々成績をあげ前途を囑望されてゐる、目下経営中の主なるものを列記すれば、

朝鮮咸北明川郡昭和炭鑛(投資額百二十萬圓)△以下會社組織として大株主事務取締役として活躍中のもの大分縣速見郡立石町四德金山鑛業株式會社(資本金五十萬圓)、東京市麴町區大手町日本産寶金山株式會社(資本金三百萬圓)∥鑛山大分縣速見郡中山香村鶴成金山、大分縣日田郡前津江村平嶽金山、朝鮮平南東岩面大龍金山△佐賀縣西松浦郡城德炭鑛等

一面公人としては大正六年以來消防組頭として貢献するところ多く、大正九年市議選出以來參事會員、都市計畫地方委員等にあげられ、大正三年小作調停委員に選ばれたほか、小倉商工會議所議員として盡瘁した。かくて大正四年十一月賞勳局より金盃一組、同年十二月銀盃一組、同七年二月更に金盃一組下賜、同十年十月鐵道運輸五十周年記念に當り、鐵道大臣より功勞者として表彰され、同十年十一月社會事業に多額の金品寄附の功により、紺綬褒賞下賜の名譽を擔うた、なほ大正十三年六月當時天下の耳目を惹いた熊本縣郡築村小作爭議に際し、居中調停につとめ、同縣知事から特別感謝狀を授與された外知事、市長、公共團體からの表彰數十回に及んでゐる。また信仰心に篤い同氏は出雲大社に大鳥居を寄進し、熊本本妙寺に一大コンクリート造りの仁王樓門を建立寄附して畏くも、久邇宮殿下の御染筆になる扁額を賜はり、石見高原神社を造營、最近出雲横田に巨萬の淨財を投じて稻田神社を建立したる等、その淨財喜捨は數限りない。同氏はその性剛膽、直情にして智謀また優れ、一旦決心したる事業は如何なる萬難を排しても貫徹達成を期してやまない氣概は、天性の任俠と信念を合はせて圓熟し、事業家中の人格者として

地方まれな存在である。

第十九章 八幡市と産業

第一節 八幡市

八幡市は門司、小倉、若松、戸畑等と共に北九州諸都市の一連の都市として、北九州重工業の重要な地點を形成するものであり、「鐵の都」の名によつて世界的に著名である。

明治二十二年村制施行の當時は、人口僅に千を越える程度の一小寒村で、何人も今日見る八幡を想像し得なかつた程平凡なる水田と鹽田との村落であ

ない程、市の盛衰は製鐵の黒煙と關係がある。昭和十年の國勢調査によれば戸數三萬九千戸、人口十九萬餘を算し、北九州に於ける最大の都市である。



八幡市

九年市議選出以來參事會員、都市計畫地方委員等にあけられ、大正三年小作調停委員に選ばれたほか、小倉商工會議所議員として盡瘁した。かくて大正四年十一月賞勳局より金盃一組、同年十二月銀盃一組、同七年二月更に金盃一組下賜、同十年十月鐵道運輸五十周年記念に當り、鐵道大臣より功勞者として表彰され、同十年十一月社會事業に多額の金品寄附の功により、紺綬褒賞下賜の名譽を擔うた、なほ大正十三年六月當時天下の耳目を惹いた熊本縣郡築村小作爭議に際し、居中調停につとめ、同縣知事から特別感謝狀を授與された外知事、市長、公共團體からの表彰數十回に及んでゐる。また信仰心に篤い同氏は出雲大社に大鳥居を寄進し、熊本本妙寺に一大コンクリート造りの仁王樓門を建立寄附して畏くも、久邇宮殿下の御染筆になる扁額を賜はり、石見高原神社を造營、最近出雲横田に巨萬の淨財を投じて稻田神社を建立したる等、その淨財喜捨は數限りない。同氏はその性剛膽、直情にして智謀また優れ、一旦決心したる事業は如何なる萬難を排しても貫徹達成を期してやまない氣概は、天性の任侠と信念を合はせて圓熟し、事業家中の人格者として

第十九章 八幡市と産業

第一節 八幡市

八幡市は門司、小倉、若松、戸畑等と共に北九州諸都市の一連の都市として、北九州重輕工業の重要な地點を形成するものであり、「鐵の都」の名によつて世界的に著名である。

明治二十二年村制施行の當時は、人口僅に千を越える程度の一小寒村で、何人も今日見る八幡を想像し得なかつた程平凡なる水田と鹽田との村落であり、背後の山岳は狐狸の巢窟であつたと言はれてゐた位で、明治三十年八幡製鐵所の設立を見るに及んで、漸く徐々に都市的形態をなすに至り、爾來日本資本主義の發展と共に、製鐵事業の重要性と諸他の工業が附近の地域に企設されるに至り、急速に人口の膨脹をなし、遂に大正六年市制の實施を見るに至つたものである。それは正に



八幡市師範市長 長氏

焰炎々 波濤を焦がし
煙濛々 天に漲る
天下の壯觀 我が製鐵所

と八幡市歌の一節にある通りで、八幡を語るには製鐵所を語らなければなら

ない程、市の盛衰は製鐵の黒煙と關係がある。昭和十年の國勢調査によれば戸數三萬九千戸、人口十九萬餘を算し、北九州に於ける最大の都市である。



八幡市役所

第二節 商工機關と主要事業

八幡商工會議所

「鐵都八幡」は實に文字通り日本經濟界の重要な一地點である。明治三十年官營八幡製鐵所設立せられ、爾來製鐵品を中心として大小工場が増集し、何人も豫想し得なかつた急テンポを以て、今日の如き工業都市八幡の現出を見たが、何人も茫洋たる一寒村が廿一萬六千四百四十一人の人口と戸數四萬二千八百五戸（昭和十一年四月一日現在）を抱擁する大都市を形成することは、夢想だにし得なかつたところであらう。



中村副會頭



八幡商工會議所會頭



山本副會頭

凡そ近代都市の發達は商工業殊に工業文明によるもの多く、本市發達の因が製鐵所を中心とする幾多官民諸工業の勃興に依ることは疑ひない事實にして、工業の興隆に伴ひ、都市人口の増加は必然的歸結として、本市人口の増加もその例に洩れず、製鐵所設立後三年の明治三十三年には六千四百六十人、更に十七年後市制施行一年目の大正六年に於ては八萬四千六百八十二人、大正十五年は前年の槻田、黒崎の合併に伴ふ増加と自然増加とに依り十二萬九千九百六十八人、昭和九年には廿萬人を突破すること五百餘人に及ぶ大躍進を示し、斯くの如き急激な

る人口の増加を見たるは他に多く其の例を見ないところである。更に工業方面より見るに、明治二十八年中央セメント工場が舊黒崎町に創設され、次で八幡製鐵所を初め、大正十二年に旭硝子牧山工場が創設せられ、其後安田製釘所、安川電機、九州化學、黒崎窯業、三菱骸炭等の如き大工場相ついで建設せられ、洞海湾沿岸を繞つて愈々股脈を極め、大正初期を劃期として、資本主義大工業の殿堂は絢爛として華々しき生産へと拍車をかけ、重工業八幡建設の基礎は此の時全く成つたのである。

斯くて伸び行く八幡の工業は、其後多少の消長は免れなかつたとは云へ、概して好調の下に之等大工場の躍進と共に、一面八幡伸鐵株式會社、日本油脂株式會社等を筆頭として、化學工業、鐵工業の中小工場は年を逐うて創立せられ、一方家庭工業にあつては國家の産業統制方針の下に、自治的に或は法規による組合組織を成し、八幡市鐵工業購買販賣組合は組合員二十五、年産額百六萬圓、八幡洋服商業組合は八十六人、年産三十九萬八千圓、北九州莫大小工業組合は十二人、三十萬二千圓と云ふが如き生産状態を示し、八幡機械工業組合亦最近著るしき進出を見せ、各組合は益々強化に努力しつゝある而して昭和六年彼の滿洲事變の勃發を契機として、軍事豫算の膨脹に伴ふ財政インフレーションの影響に依る軍需工業の好調と、輸出工業活況の波に乗つた我が八幡市産業の進展こそ實に目覺しいものがあり、昭和七年に於ては生産額二千四百三十八萬圓（製鐵關係を除く）を算し、翌八年には一躍四千三百一十一萬圓（製鐵所關係を除く）となり、昭和九年には製鐵所生産額を加へ實に二億三千九百十四萬圓を示し、八幡市産業の黄金時代を再現するに至つた叙上の如く、八幡市の産業が工業的に一大躍進を來したことは否まれない

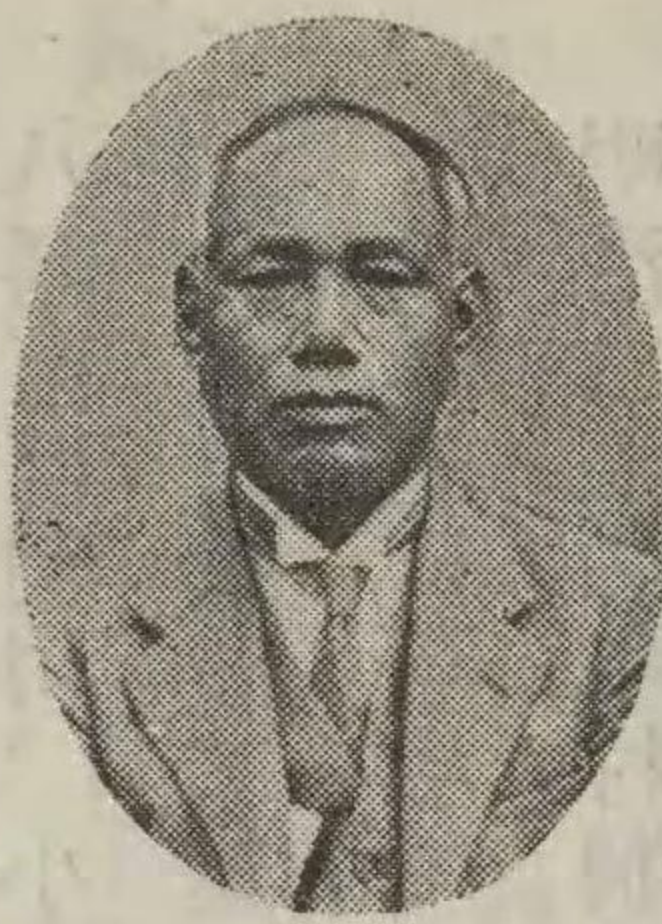
所であるが、工業の起るところに其の配給部門として商業の發達は必至の勢ひにして、本市の商業亦發達極めて顯著にして、昭和九年に於ける商業者は六萬五千人、八幡市總人口の三割三分弱を有し、會社總數二百四社、組合組織せられたるもの八十餘組合にして商工相呼應し、八幡市産業に氣を吐いて居るのである。而して斯くの如き産業都市八幡に於ける唯一の商工機關として八幡商工會議所の存在がある。本會議所は昭和三年十月十八日の創立になり、同年十一月三十日第一次議員選舉、昭和七年十一月三十日第二次選舉を行ひ、二次に亘る議員任期中に於ける會議所の活動は、内に外に極力會議所本來の機能發揮に努め、工業、商業、理財、運輸、交通各調査部會の調査研究に基き、之が實施に邁進し、最近工業部會の研究に基き本會議所の運動効を奏し、縣營金屬工業試驗所の設置を本市に實現せしめたことは、金屬工業

線を有し、海運に天恵の良港洞海湾を抱擁し、又筑豊炭田の資源豊庫を控へ且つ又相當の都市を形成するに足るべき地域を有する所の實に天與の工業都市と云ふべきである、かゝる有利な條件を具備せる本市の工業は、將來一層伸長發展するであらうことは疑をいれなからうである。殊に最も其の可能性を強調しつゝあるものは黒崎方面に於ける廣大なる敷地の存在である、先づ西八幡港沿岸一帯に於ける八十一萬坪は實に將來の工場地帯とさるべきものであり、尙黒崎驛前の六萬坪は商業地帯、神原に於ける十五萬坪は住宅地として設定せられたるものにして、大都市建設の態型を備へ、西八幡港臨海地の工場化は既に着々として進められ、日本タール株式會社染料工場の設置せられたるも極めて最近のことに屬し、同地域の工場地區化も遠き將來のことではあるまい。

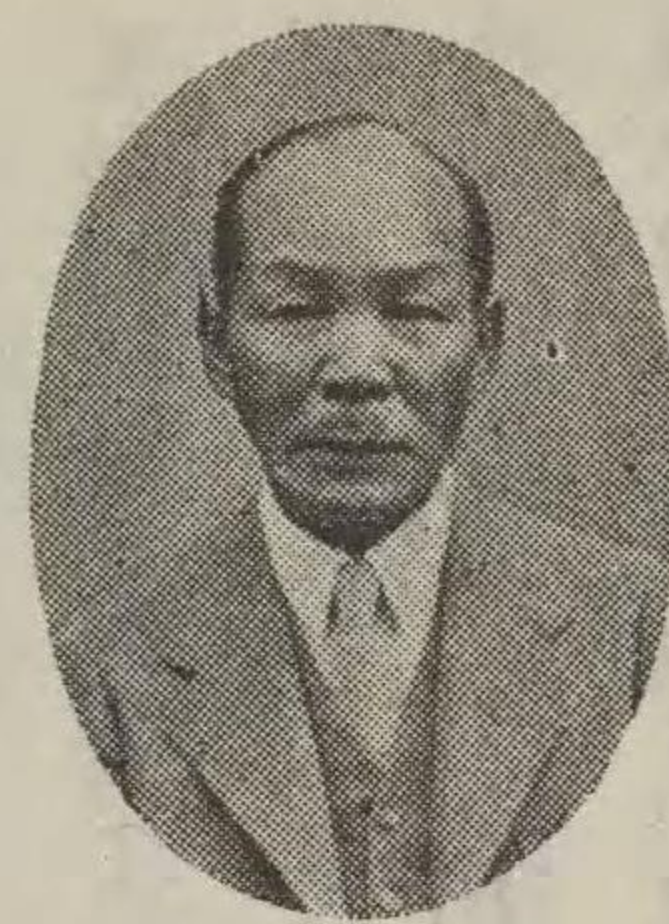
とす所である。

八幡市工業の前途は洋々として涯なく、産業八幡を背負つて起つ八幡商工會議所の將來こそ市内商工業者と共に多事多忙であり、大なる期待を持つて

八百五戸(昭和十一年四月一日現在)を抱擁する大都市を形成することは、夢想だにし得なかつたところであらう。



中村副会長



八幡商工會議所副会長



山本副会長

凡そ近代都市の發達は商工業殊に工業文明によるもの多く、本市發達の因が製鐵所を中心とする幾多官民諸工業の勃興に依ることは疑ひない事實にして、工業の興隆に伴ひ、都市人口の増加は必然的歸結として、本市人口の増加もその例に洩れず、製鐵所設立後三年の明治三十三年には六千四百六十人、更に十七年後市制施行一年目の大正六年に於ては八萬四千六百八十二人、大正十五年は前年の槻田、黒崎の合併に伴ふ増加と自然増加とに依り十二萬九千九百六十八人、昭和九年には廿萬人を突破すること五百餘人に及ぶ大躍進を示し、斯くの如き急激な

概して好調の下に之等大工場の躍進と共に、一面八幡伸鐵株式會社、日本油脂株式會社等を筆頭として、化學工業、鐵工業の中小工場は年を逐うて創立せられ、一方家庭工業にあつては國家の産業統制方針の下に、自治的に或は法規による組合組織を成し、八幡市鐵工業購買販賣組合は組合員二十五、年産額百六萬圓、八幡洋服商業組合は八十六人、年産三十九萬八千圓、北九州莫大小工業組合は十二人、三十萬二千圓と云ふが如き生産状態を示し、八幡機械工業組合亦最近著るしき進出を見せ、各組合は益々強化に努力しつつある而して昭和六年彼の滿洲事變の勃發を契機として、軍事豫算の膨脹に伴ふ財政インフレーションの影響に依る軍需工業の好調と、輸出工業活況の波に乗つた我が八幡市産業の進展こそ實に目覚ましいものがあり、昭和七年に於ては生産額二千四百三十八萬圓(製鐵關係を除く)を算し、翌八年には一躍四千三百一十一萬圓(製鐵關係を除く)となり、昭和九年には製鐵所生産額を加へ實に二億三千九百四十四萬圓を示し、八幡市産業の黄金時代を現示するに至つた叙上の如く、八幡市の産業が工業的に一大躍進を來したことは否まれない

所であるが、工業の起るところに其の配給部門として商業の發達は必至の勢ひにして、本市の商業亦發達極めて顯著にして、昭和九年に於ける商業者は六萬五千人、八幡市總人口の三割三分弱を有し、會社總數二百四社、組合組織せられたるもの八十餘組合にして商工相呼應し、八幡市産業に氣を吐いて居るのである。而して斯くの如き産業都市八幡に於ける唯一の商工機關として八幡商工會議所の存在がある。本會議所は昭和三年十月十八日の創立になり、同年十一月三十日第一次議員選舉、昭和七年十一月三十日第二次選舉を行ひ、二次に亘る議員任期中に於ける會議所の活動は、内に外に極力會議所本來の機能發揮に努め、工業、商業、理財、運輸、交通各調査部會の調査研究に基き、之が實施に邁進し、最近工業部會の研究に基き本會議所の運動効を奏し、縣營金屬工業試驗所の設置を本市に實現せしめたことは、金屬工業に多分の將來性を有する本市として極めて有効であり、本會議所の最も欣快とする所である。

之は單に本會議所のなし來つた事業の一例に過ぎず、黒崎電話の合併、黒崎驛の改築、洞海湾修築陳情、商權擁護運動等其の實蹟を數へ來れば枚擧に追ないのである。惟ふに本市商工業の發達は、當業者自治的の進歩發達と會議所の機能の遂行に依つて今日の隆盛を齎したことも蓋し否めない事實であらう。由來都市の發達如何は自然力に支配されること極めて大である、工業都市にせよ、商業都市にせよ、其の發達にはそれに適應せる條件の具備を要し、條件の享有なくして偶然的發達は望み得ないところであつて、八幡市の如き最も此の工業都市的發達を來すに有利な條件を享有して居り、そこに今日の發達があり將來の強味が存するのである。即ち本市は陸運に國鐵九州本

線を有し、海運に天恵の良港洞海湾を抱擁し、又筑豊炭田の資源豊庫を控へ且つ又相當の都市を形成するに足るべき地域を有する所の實に天與の工業都市と云ふべきである、かゝる有利な條件を具備せる本市の工業は、將來一層伸長發展するであらうことは疑をいれなからう。殊に最も其の可能性を強調しつつあるものは黒崎方面に於ける廣大なる敷地の存在である、先づ西八幡港沿岸一帯に於ける八十一萬坪は實に將來の工場地帯とさるべきものであり、尙黒崎驛前の六萬坪は商業地帯、神原に於ける十五萬坪は住宅地として設定せられたるものにして、大都市建設の態型を備へ、西八幡港臨海地の工場化は既に着々として進められ、日本タール株式會社染料工場の設置せられたるも極めて最近のことに屬し、同地域の工場地區化も遠き將來のことではあるまい。

八幡市工業の前途は洋々として涯なく、産業八幡を背負つて起つ八幡商工會議所の將來こそ市内商工業者と共に多事多忙であり、大なる期待を持つて産業八幡の名に於て我が産業界を風靡するであらう。

マルキユー百貨店

鐵都八幡のメンストリート中央區新町の一角に聳え立つ豪壯な五階建帶褐色のビルディングは株式會社丸九百貨店である。創業は昭和七年十一月二十三日、資本金二十萬圓全額拂込済、その株主の主なるものは取締役社長原田都美治氏とその同族及取引關係の京都問屋筋等で、手堅い人々によつて組織されてゐるだけに社礎も相當に鞏固と謂へよう。「誠を賣る」がモットーの同店

の業績は、逐年顧客方面から信用を博して良好さを加へ、近々増資をする
さへ傳へられてゐる。現在従業員は男一二〇名、女九六名。これ等の人々が
店則をよく吞込んで、一般顧客に對し親切な態度を示してゐるので客筋の足
も繁く、一日に一千七八百名を下るやうな事はないと言ふから、その將來も



マキルキユニ百貨店

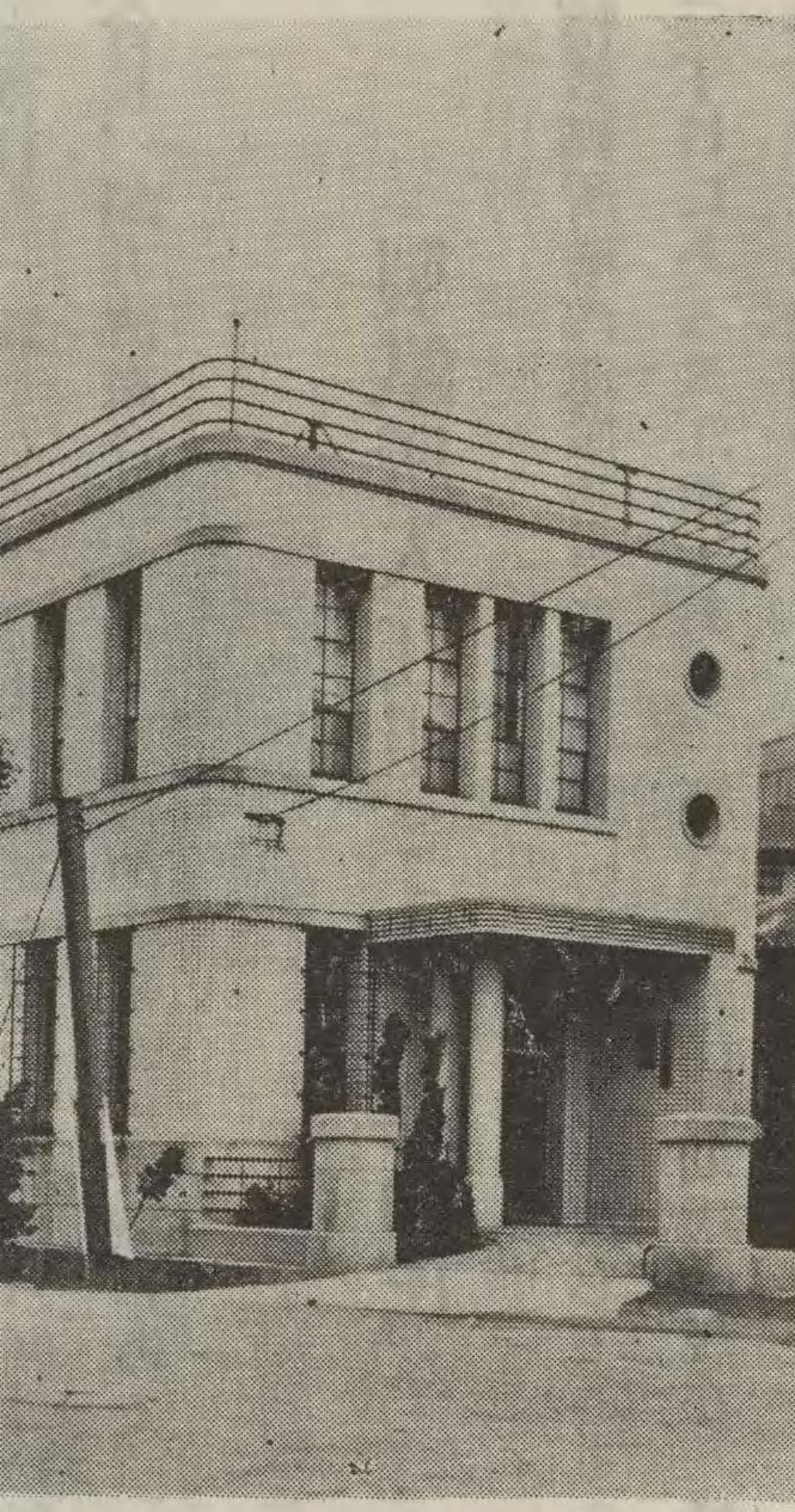
また洋々たるものがある。
この丸九百貨店が中央區に
出現するまでの八幡市日用
品物價は非常に區々で、市
民も相當惱まされてゐたが
兎にも角にも「マルキユ」
によつて市場日用品價格も
漸次調整標準化され、從來
の不便さから市民が免れ得
たことは同店の派生的な功
績とも謂へる。

創業以來まだ日も淺く僅
僅四ヶ年ではあるが、買上
品に對する八幡、戸畑、若松、小倉四市への無料特別配達も敢行し、顧客か
ら非常によろこばれてゐるが、更に六月二十日から「外商部」を設け、居な
がらにして買物が出来るやうにとの積極策も行つてゐる。

社長原田都美治氏は岡山縣西江原出身で、現在筑豊銀行常務取締役、合名
會社階川商店代表者の職にあり、かつては直方市商業團々長、直方市學務委

久富商事株式會社

同社は八幡市白川町一丁目にあり、社長久富季九郎氏の經營である。久富
氏は佐賀縣有田町の生れで、八幡製鐵所創業時代の明治三十三年頃から製鐵
所構内運搬請負事業に携はり、刻苦精勵、製鐵所の作業能率の向上に努力し
有數の陣容と堅實なる營業地盤を獲得しつゝ今日に至つた。現在では令息久



久富商事株式會社

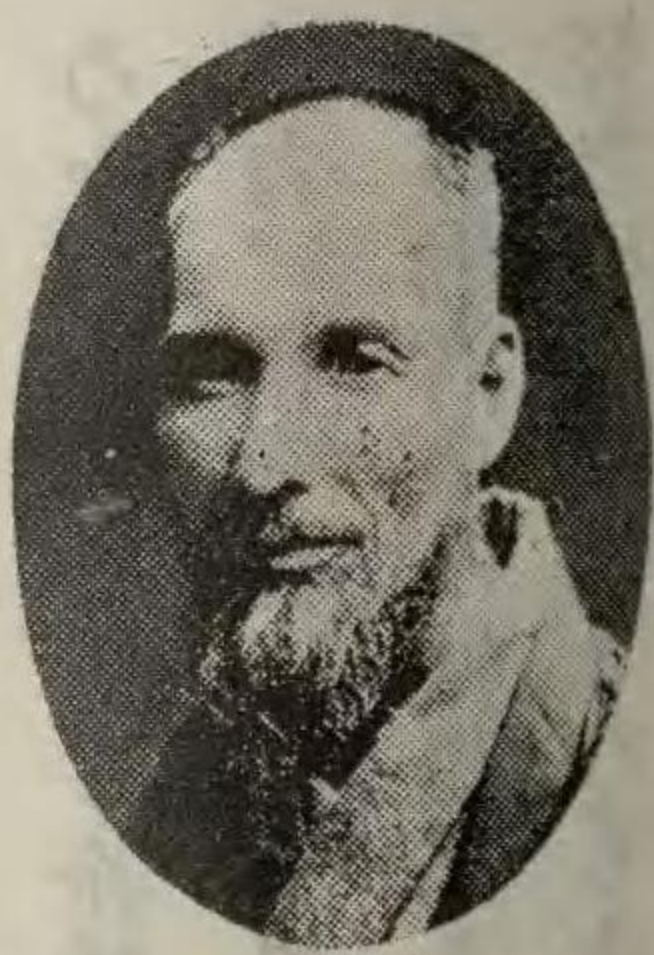
員所、得税調査委員、相續稅審査委員等の要職にあつて直方市の文化的開發
あるひは青少年育英のために永い間努力盡瘁して來つたものである。溫和な
態度のうちに商機を觀るに鋭敏なる頭腦を有し、北九州重工業地帯、就中八
幡市の發展躍進の有様を觀て早くも百貨店經營を目論見、遂に今日の如く八
幡市の一名物とまで仕上げた程の手腕家であるが、氏の好き相談役たり女房
役たる専務取締役山本康之助氏の力もあづかつて大いなるものがある。山本
専務は姫路市坂本町の出身で、百貨店の魁とも謂ふべき大阪道頓堀丸玉百貨
店の實際經營に多年從事して來たが、丸九百貨店設立計畫があり、それが實
現するや間もなく同店専務として一切の經營を行ふことになつたもので、そ
の多年の蘊蓄を傾注して、丸九百貨店業績の向上を銳意企圖したる粒々の辛
苦は遂に報いられて今日の大をなすに至つたものである。

九州化學工業株式會社



石崎敏氏行

「九州化學工業株式會社」は大正四年九州化學
工業商會として八幡市枝光港町二丁目に創立せ
られ、「ナフタリン」を製造、大正七年十月年産
七百萬ポンドの生産を目指し、資本金十萬圓の
株式會社を組織し、九州化學工業株式會社と稱
し、社長石崎敏氏が就任、目下日本ナフタリン工業界に雄飛してゐるが、
同社は更に大飛躍を期し、昭和十年十月から工場の大改造を計畫、木造の舊
工場を漸次鐵筋組立工場に変更しつゝある。



久富商事株式會社 取締役 季九郎氏

附帶する各種事業を包括經營してゐる。
因に同社重役は取締役社長久富季九郎、専務
取締役久富二六、常務取締役久富藤九郎、正司
亮次、常任監査役牟田彌一、監査役正司怒助の
諸氏で本店係主任は會計主任高崎富五郎、販賣係主任中原輝義、現場係主任
(兼務)牟田彌一、納品係主任石橋喜一郎の諸氏である。

山九運輸八幡出張所



山九運輸 常務取締役 山本精七郎氏

門司市に本社を置く山九運輸株式會社の八幡
出張所は市内北本町三丁目にあり、周知の如く
同社は山陽、九州、朝鮮にかけて絶大な信用と
優秀なる海運力を伸ばしてゐる。同社は神戸市

の中村組社長中村精七郎氏の主宰するところ、九州に於ける一切の業務は



民も相當惱まされてゐたが、免にも角にも「マルキュー」によつて市場日用品價格も漸次調整標準化され、從來の不便さから市民が免れ得たことは同店の派生的な功績とも謂へる。

創業以來まだ日も浅く僅僅四ヶ年ではあるが、買上品に對する八幡、戸畑、若松、小倉四市への無料特別配達も敢行し、顧客から非常によろこばれてゐるが、更に六月二十日から「外商部」を設け、居ながらにして買物が出来るやうにとの積極策も行つてゐる。

社長原田都美治氏は岡山縣西江原出身で、現在筑豊銀行常務取締役、合名會社階川商店代表者の職にあり、かつては直方市商業團々長、直方市學務委

久富商事株式會社

同社は八幡市白川町一丁目にあり、社長久富季九郎氏の經營である。久富氏は佐賀縣有田町の生れで、八幡製鐵所創業時代の明治三十三年頃から製鐵所構内運搬請負事業に携はり、刻苦精勵、製鐵所の作業能率の向上に努力し有數の陣容と堅實なる營業地盤を獲得しつゝ今日に至つた。現在では息久



久富商事株式會社

富二六氏が専務となり、事業の衝に當り、製鐵所を初め各方面の運搬勞力供給などの事業に關係、その斬新な經營手腕をふるひ、徒らに功利に走らぬ透徹した方針は、益々同社の確固たる地盤を擴大強化し、盛業見るべきものがある。久富藤九郎氏も事業に參畫して熱心に采配を揮ひ、共に父業を守つて生彩ある經營を示してゐる。

會社組織にしたのは昭和六年四月で、資本金五十萬圓を以つて製鐵所本事務所前に事務所を新築し、現に運送取扱、船舶業、請負業、販賣仲介業等に

現するや間もなく同店専務として一切の經營を行ふことになつたもので、その多年の蘊蓄を傾注して、丸九百貨店業績の向上を銳意企圖したる粒々の辛苦は遂に報いられて今日の大をなすに至つたものである。

九州化學工業株式會社



石崎敏行氏

「九州化學工業株式會社」は大正四年九州化學工業商會として八幡市枝光港町二丁目に創立せられ、「ナフタリン」を製造、大正七年十月年産七百萬ポンドの生産を目指し、資本金十萬圓の株式會社を組織し、九州化學工業株式會社と稱し、社長石崎敏行氏が就任、目下日本ナフタリン工業界に雄飛してゐるが、同社は更に大飛躍を期し、昭和十年十月から工場の大改造を計畫、木造の舊工場を漸次鐵筋組立工場に變更しつゝある。



久富季九郎氏

附帶する各種事業を包括經營してゐる。因に同社重役は取締役社長久富季九郎、専務取締役久富二六、常務取締役久富藤九郎、正司亮次、常任監査役牟田彌一、監査役正司努助の諸氏で本店係主任は會計主任高崎富五郎、販賣係主任中原輝義、現場係主任(兼務)牟田彌一、納品係主任石橋喜一郎の諸氏である。

山九運輸八幡出張所



山九運輸久藤後氏

門司市に本社を置く山九運輸株式會社の八幡出張所は市内北本町三丁目にあり、周知の如く同社は山陽、九州、朝鮮にかけて絶大な信用と優秀なる海運力を伸ばしてゐる。同社は神戸市の中村組社長中村精七郎氏の主宰するところで、九州に於ける一切の業務は常務取締役後藤久氏が統轄してゐる。資本金七十萬圓、日鐵八幡製鐵所構内運搬請負事業にも携はり、製鐵所の原料輸送の外、徳山燃料廠、吳工廠、日鐵の朝鮮兼二浦などの原料、製品の海運を請負ひ、徳山、若松、八幡に支店を、吳、江迎、下松に出張所を置き、門司市の本社が一切を統制してゐる。同社の業績は大いに擧り、「山九」の名は關門の海運界を風靡し制海權を握つてゐる。社長中村精七郎氏は肥前平戸が生んだ奇才、夙に海運業に従事し、日露戰役當時、渡韓し、鎮南浦に於て軍艦輸送の御用を命ぜられ、明治三十八年一月中村組を鎮南浦に置き、同三十九年時の韓國政府より黃海道窟産の鐵礦石を八幡製鐵所に運搬を命ぜられたのが、朝鮮鐵石輸送の初めて、次いで載

寧、股票、長連等の採掘鐵礦石の輸送を繼續し、明治四十五年より製鐵所と輸送契約を締結今日に至つた。中村氏は現在、山九運輸を初め、朝鮮商工株式會社、株式會社中村組、比律賓木材輸出株式會社を主宰し、本據を神戸市に置き海運界に雄飛し、俊敏果敢なる事業家として知られてゐる。

山九運輸常務取締役後藤久氏は、大分縣宇佐郡出身の才氣活潑の士、明治三十七年翻然八幡に來り、磯部組にあつてその俊才を現し、大正七年山九運輸株式會社成立と同時に入社、事業家の手腕を發揮、漸次果進して現に常務取締役として門司本社の營業部長を兼務し、同社經營の實權を握り、八幡出張所の事務をも總攬してゐる。生來不撓不屈の意氣に燃えた事業家で、常に理論と實行を一致せしめて部下の信望が厚い。現に八幡製鐵所構内運搬請負業組合長、同共濟組合理事長、八幡消防組頭の要職にある。

製鐵所入江組と入江賢助氏

八幡製鐵所構内運搬請負業者の間に近來頭角を現してゐるのは、八幡市蛭子町三丁目にある入江組である。經營者入江賢助氏は現在八幡商工會議所會頭、株式會社八幡劇場社長、市會議員等の要職にある。同氏は香川縣多度津の生れ、製鐵所創業時代の明治三十二年八幡に來り、一時歸郷し、同四十三年再び來幡製鐵所構内請負事業に携はり、製鐵所の作業能率向上に献身的努力を續けて來た奮闘的企業家で、「責任を以つて仕事をすると云ふ氏の信念は、製鐵所當局に認められ、今日の盛業を見るに至つた。

現在では原料品運搬作業の外、鋼材製品積込作業にも従事し、「入江組」は

第二十章 若松市と産業

第一節 若松市

一 位置及面積

若松市は、福岡縣の北端、門司市を距ること陸路にして十一哩、福岡市より東三十六里で、東經百三十度四十九分、北緯三十五度五十五分の間に位してゐる。元黒田家の領地で荒寥



「堅實」を生命とし、作業上に工夫改良を加へるなど、製鐵所にその事業と生命を打込んだところに氏の眞劍さが現はれてゐる。市民に推されて現に市會議員たること三期、八幡商工會議所成るや副會頭に推され、更に會頭に推され、八幡市内の中小商工業發展のため盡力、居常温厚、且つ公共的奉仕を怠らず、市民の信賴深く、八幡市に於ける代表的人物とされてゐる。令嗣博氏は父業を輔佐して益々業績大に擧る。

郵船組と竹尾筆吉氏



八幡郵船組總取締 竹尾筆吉氏

竹尾氏は八幡製鐵所構内請負事業の現場作業に携はり、郵船組の總取締として知られてゐる。現在八幡市會議員、氏は大分縣臼杵町の出身で、任侠に富む快男子然も己を信するものためには、よく資を割き力を致して面倒を見る。大正五年製鐵所構内運搬請負業關係有志と圖り、請負人所屬の工夫三百名を以つて協交會を組織、現在會長に推され、十數年これを統制指導してゐる。

同會は製鐵所構内運搬請負業組合の任務の一部を代行し、専ら作業能率の増進に就て統制ある活躍をなし、一面稼働者に對しては、その要求するところを出來得る限り詮議或は實行し、また思想善導の方面にも力を盡し、一致協力、相愛親睦の美風を養成したので、各地に勞働爭議が勃發したが、同會の稼働者のみは超然として平穩無風その業に精勵して來た。これは一に氏の努力に負ふところも少くあるまい。住居は八幡市曙町四丁目にある。

とを繋ぐ江川を挟んで折尾町に接し、西は蘆屋町、北は彦島、六連島に、そして遙かに朝鮮に相對してゐる半島若松市は、海路の便に於て優れた特色を持つてゐる。

その面積は三、六四平方里、東西四里十七町南北一里十八町で、市街地は概ね平坦であり、戸數一萬五千八百八十三戸、人口七萬一千七百八十八人を算し、福岡縣下に於て十市中第六位を占めてゐる。

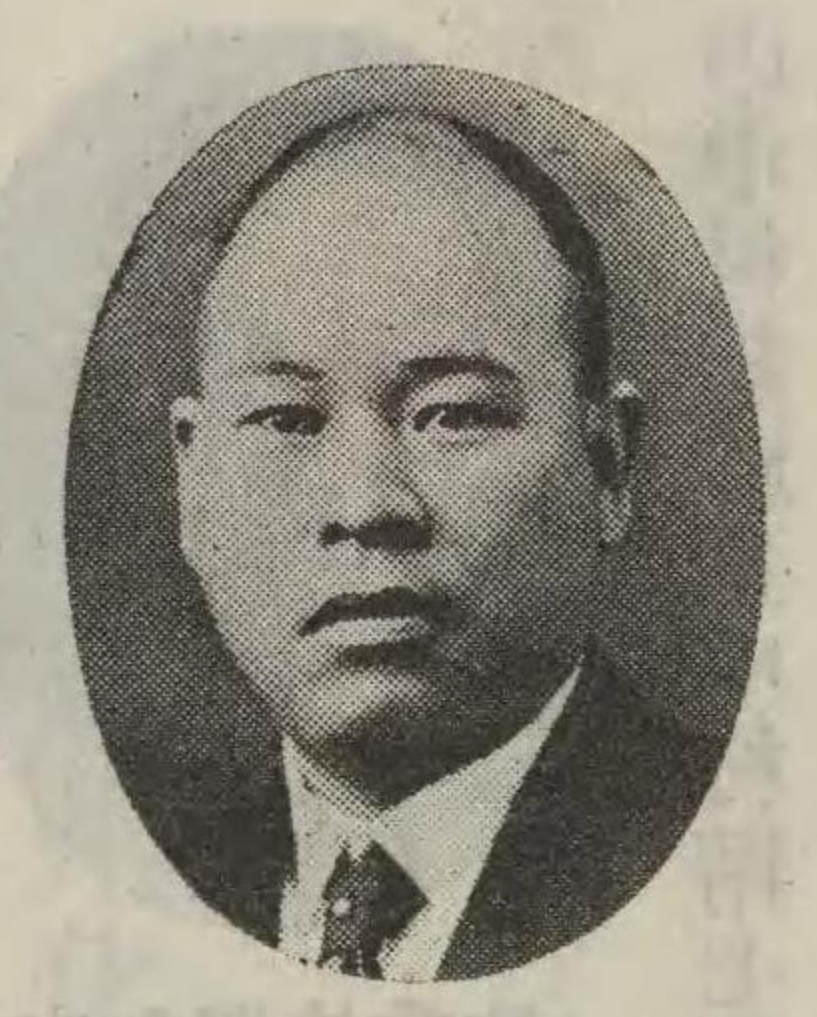
「黒田甲斐守長政筑前を領し、江戸參觀の節、波の險惡なる玄海の風波を避けんがため、此處を乗船の地として兼ねて國産米の積出港として修多羅より分離して若松村を置き、船方役人及其扶持する船頭等を居住せしめてより、漸く其名が一部に認められたが、天保九年十二月には戸數二百六十九、人口千二十二人に過ぎず、明治初年となつても尙戸數三百に満たない一小漁村であつた」と「若松市勢要覽」は述べてゐる。

今日の若松の繁榮よりして、恐らく何人もかくの如き一寒村であつたとは

張所の事務をも總攬してゐる。生來不撓不屈の意氣に燃えた事業家で、常に理論と實行を一致せしめて部下の信望が厚い。現に八幡製鐵所構内運搬請負業組合長、同共濟組合理事長、八幡消防組頭の要職にある。

製鐵所入江組と入江賢助氏

八幡製鐵所構内運搬請負業者の間に近來頭角を現してゐるのは、八幡市蛭子町三丁目にある入江組である。經營者入江賢助氏は現在八幡商工會議所會頭、株式會社八幡劇場社長、市會議員等の要職にある。同氏は香川縣多度津の生れ、製鐵所創業時代の明治三十二年八幡に來り、一時歸郷し、同四十三年再び來幡製鐵所構内請負事業に携はり、製鐵所の作業能率向上に献身的努力を續けて來た奮闘の事業家で、「責任を以つて仕事をすると云ふ氏の信念は、製鐵所當局に認められ、今日の盛業を見るに至つた。現在では原料品運搬作業の外、鋼材製品積込作業にも従事し、「入江組」は



八幡市船組總長 尾竹 吉 氏

ものためには、よく資を割き力を致して面倒を見る。大正五年製鐵所構内運搬請負業關係有志と圖り、請負人所屬の人夫三百名を以つて協交會を組織、現在會長に推され、十數年これを統制指導してゐる。

同會は製鐵所構内運搬請負業組合の任務の一部を代行し、専ら作業能率の増進に就て統制ある活躍をなし、一面稼働者に對しては、その要求するところを出來得る限り詮議或は實行し、また思想善導の方面にも力を盡し、一致協力、相愛親睦の美風を養成したので、各地に勞働爭議が勃發したが、同會の稼働者のみは超然として平穩無風その業に精勵して來た。これは一に氏の努力に負ふところも少くあるまい。住居は八幡市曙町四丁目にある。

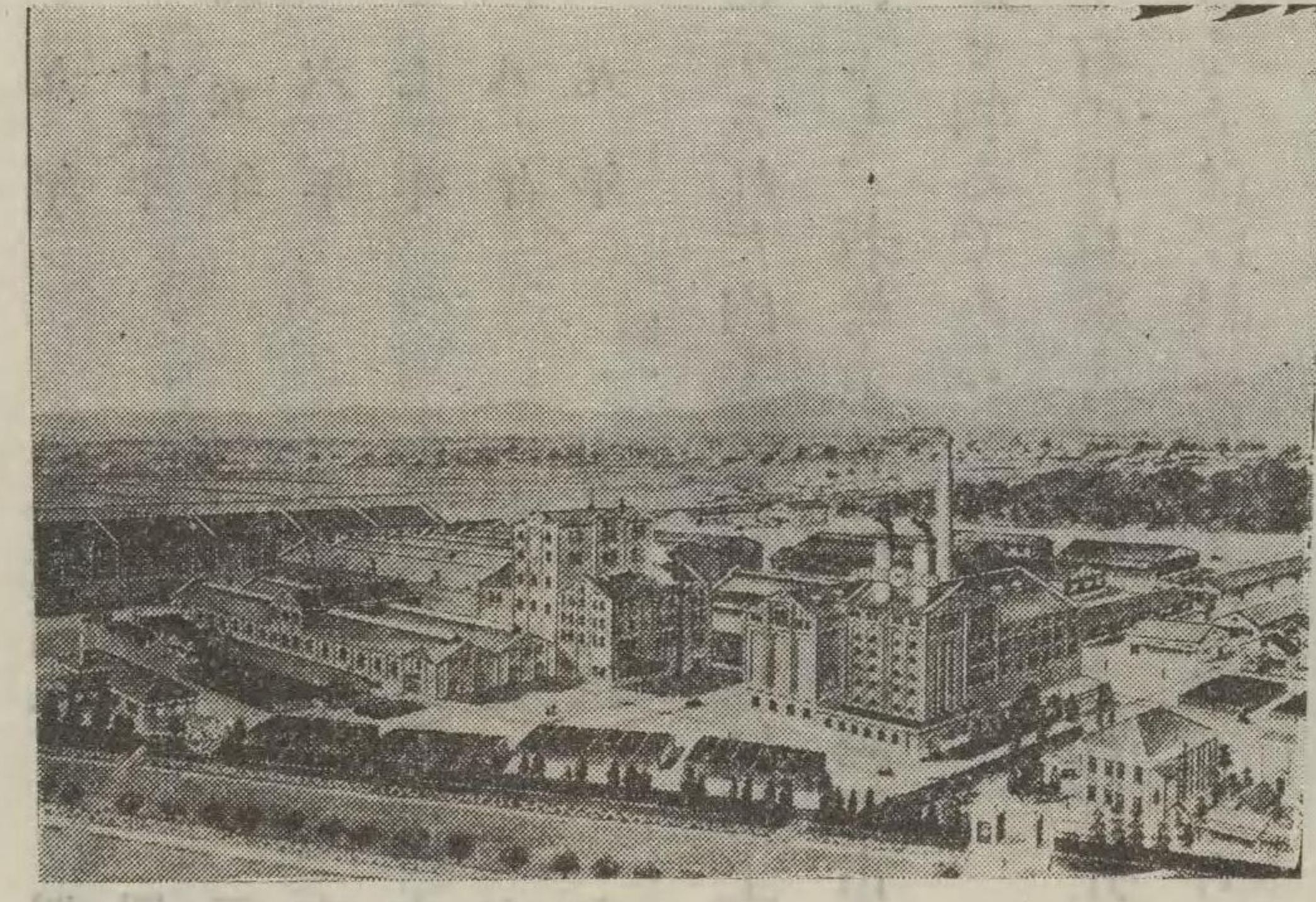
竹尾氏は八幡製鐵所構内請負事業の現場作業に携はり、郵船組の總取締として知られてゐる。現在八幡市會議員、氏は大分縣臼杵町の出身で、任侠に富む快男子然も己を信する

第二十章 若松市と産業

第一節 若松市

一 位置及面積

若松市は、福岡縣の北端、門司市を距ること陸路にして十一哩、福岡市より東三十六里で、東經百三



若松市街地

十度四十九分、北緯三十五度五十五分の間に位してゐる。元黒田家の領地で荒寥たる一漁村であつたが、海路の便と筑豊炭田の集散地として、地の理が遂に今日の大若松市を實現せしめたものである。

東は洞海湾口を扼して戸畑市に望み、南は洞海の波を隔て、鐵都の八幡市に對し、一部は洞海湾と蘆屋町

とを繋ぐ江川を挟んで折尾町に接し、西は蘆屋町、北は彦島、六連島に、そして遙かに朝鮮に相對してゐる半島若松市は、海路の便に於て優れた特色を持つてゐる。

その面積は三、六四平方里、東西四里十七町南北一里十八町で、市街地は概ね平坦であり、戸數一萬五千八百八十三戸、人口七萬二千七百八人を算し、福岡縣下に於て十市中第六位を占めてゐる。

「黒田甲斐守長政筑前を領し、江戸參觀の節、波の險惡なる玄海の風波を避けんがため、此處を乗船の地として兼ねて國産米の積出港として修多羅より分離して若松村を置き、船方役人及其扶持する船頭等を居住せしめてより、漸く其名が一部に認められたが、天保九年十二月には戸數二百六十九、人口千二百二人に過ぎず、明治初年となつても尙戸數三百に満たない一小漁村であつた」と「若松市勢要覽」は述べてゐる。今日の若松の繁榮よりして、恐らく何人もかくの如き一寒村であつたとはよく想像し得ないところであらう。

二 戸口

左に發展の跡を知る一助として戸口累年比較を掲げておかう。

戸口累年増加表 (若松市役所調査に據る)	
明治二十二年	七六六 ^戸
同 二十四年	八八一
同 三十一年	二、三〇八
同 三十九年	四、六〇三
	(市町村制施行)
	(町制施行)
	(小石合併)
	(藤木二島合併)

大正三年	六、二五八	三七、三九三	(市制施行)
同 九年	八、九四九	四九、三三六	(第一回國勢調査)
同 十五年	一一、四〇一	四九、九三〇	(第二回國勢調査)
昭和五年	一〇、九〇九	五七、三二六	(第三回國勢調査)
同 六年	一二、八〇〇	六七、四三一	(島鄉村合併)
同 七年	一三、〇一二	六八、五四七	
同 八年	一三、一一九	六九、〇七五	
同 九年	一五、一八三	七一、七〇八	内(海上)戸數一、三六三 人口四、五一六

右表に示された内で特徴的な點は海上戸數及び人口數の多いことで、この點に於いても、若松市が如何に港灣都市としての他に類例のない様相を示してゐるかが判るであらう。

而して右の戸口數を職業別にすれば左の如くで、近時益々工業戸數が増加してゐることは注目し得る現象であらう。

職業別戸數 (昭和九年末現在)
(若松市役所調査に據る)

農業	九八〇戸	公務自由業	一、四〇四戸
水産業	二五三戸	其他の有業者	一、五〇三戸
工業	二、六六四戸	家事使用人	二六五戸
鑛業	三二七戸	無職業	九三〇戸
商業	三、七七五戸	計	一五、一八三戸
交通業	三、〇八二戸		

第二節 産業

次に若松市の産業について述べるに當つて先づ總産額表を掲げてみよう。

明治卅九年	三八三、七四五圓
大正十二年	一七、九三〇、六一〇
同 十三年	一八、四〇八、四〇九
同 十四年	一八、七九五、五九四
同 十五年	一八、六八七、六〇五
昭和二年	一五、六一六、六五八
同 三年	二〇、二九四、八七六
同 四年	二一、五七八、七五四
同 五年	二二、五四二、八四八
同 六年	二二、〇三二、五〇二
同 七年	二一、八〇四、八三三
同 八年	二九、七八四、七九三
同 九年	三六、八四五、〇二〇

右の表によれば、昭和七年の低下が特に目立つてゐるが、これは全国的にアメリカ恐慌の餘波による影響で、若松市のみ現象ではない。従つて、昭和七年の特殊な點を抹消すれば、生産額は逐年著増の一路を辿つてゐる。而してこれを生産物總價格別にすれば次の如くなる。(昭和九年度分)

農産	七一九、七五五圓	林産	一一二、四〇四
水産	三〇九、四一五	工業	三五、四四八、五三七
畜産	二六三、九〇九	計	三六、八五四、〇二〇

農業 若松市の農業は、昭和六年島鄉村の合併によつて著しく耕作面積が増大した。商工業の發達による工場、住宅地の増大は各都市の悩みであるが、若松市は海面埋立によつて、この悩みを緩和して餘りある状態である。現在では未だ何等耕作面積には影響なく、農家一戸當り耕地反別一町四反六畝

總計一四、〇〇八反で、年産額三十萬圓に達してゐる。

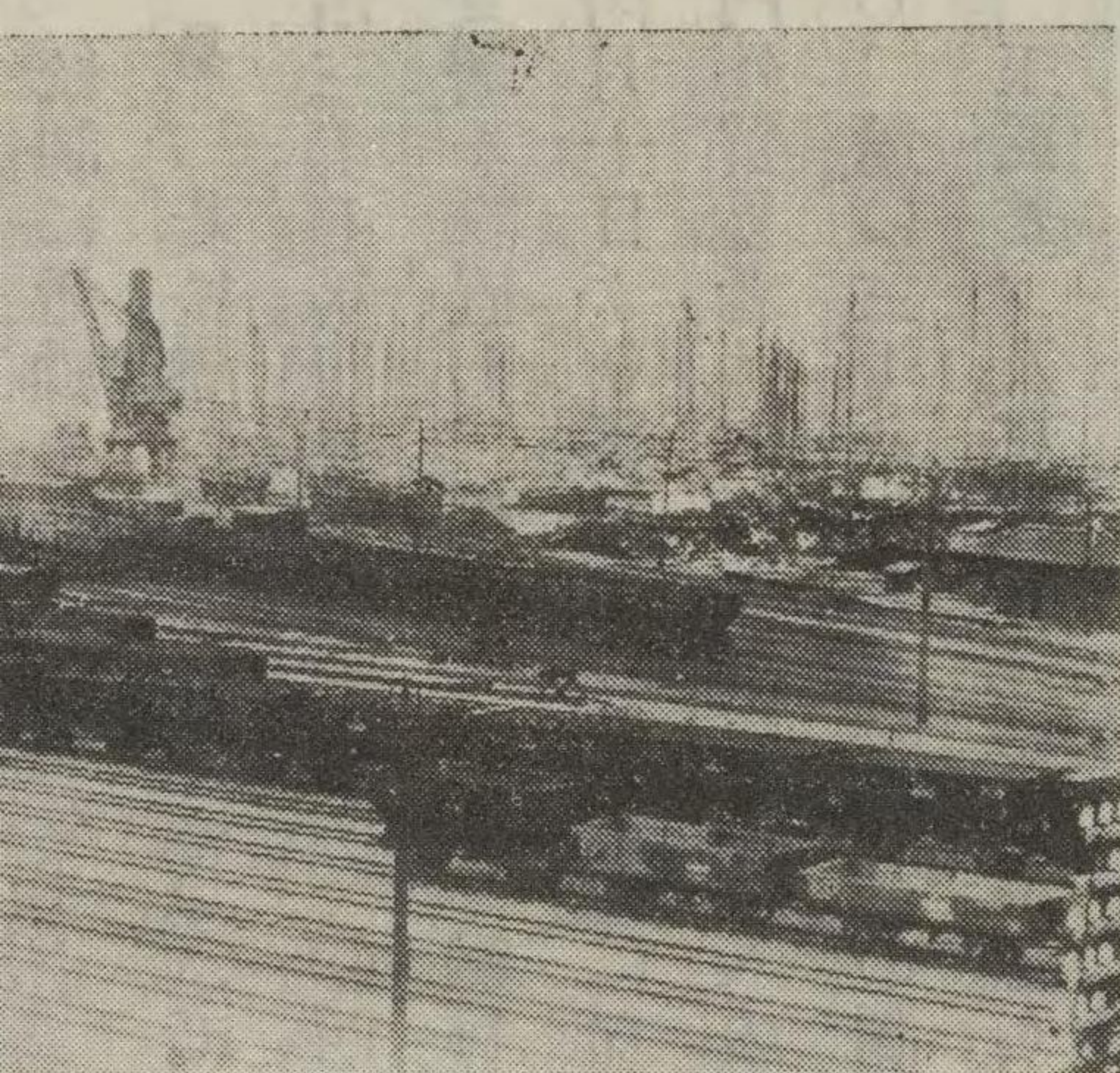
産額中第一位は米の一〇、〇二二石、二八二、〇二二圓であつて、順位別にすれば、蔬菜二三七、〇六四圓、麥四、一三五石の八二、八八三圓、果實三七、六七一圓、豆芋類二、一七九圓、蠶繭

頭、兎一〇四頭、家禽六〇、六七八羽で勞役に服さしめる程度で他に見るべきものはない。

林産業 島鄉村の合併は、林野面積を一躍二千五百二十六町餘歩、即ち全市地積の五五%を占めるに至つた。特に近來縣市當局の造林獎勵によつて、その成績漸次發展し、竹林の産額も亦増加しつゝある。即ちこれを産額別にすると用材二五、六一六圓、薪炭材六九、六〇〇圓、竹材九、二五〇圓其他七、九三八圓計一一二、四〇四圓である。

水産業 商工業の飛躍的發展は、漁業従業者の轉身による萎靡を招來したが、尙且つ二百五十八の漁戸と二百餘隻の漁船、年産四十萬圓を保持してゐる。即ち漁類一三三、一九三圓、貝類三、五〇〇圓、藻類五、三五二圓、製造物九二、六〇〇圓其他七四、七七〇圓計四〇九、四一五圓で、特に近來ウニの蠔詰は特産物として定評を博してゐる。

工業 石炭市場として飛躍した若松市も、工業に於て永く不振の状態に



洞海灣を望む

點に於いても、若松市が如何に港灣都市としての他に類例のない様相を示してゐるか判るであらう。
 而して右の戸口數を職業別にすれば左の如くで、近時益々工業戸數が増加してゐることは注目する現象であらう。

職業別戸數 (昭和九年末現在) (若松市役所調査に據る)

農 業	九八〇戸	公務自由業	一、四〇四戸
水産業	二五三戸	其他の有業者	一、五〇三戸
工業	二、六六四戸	家事使用人	二六五戸
鑛業	三二七戸	無職業	九三〇戸
商業	三、七七五戸	計	一五、一八三戸
交通業	三、〇八二戸		

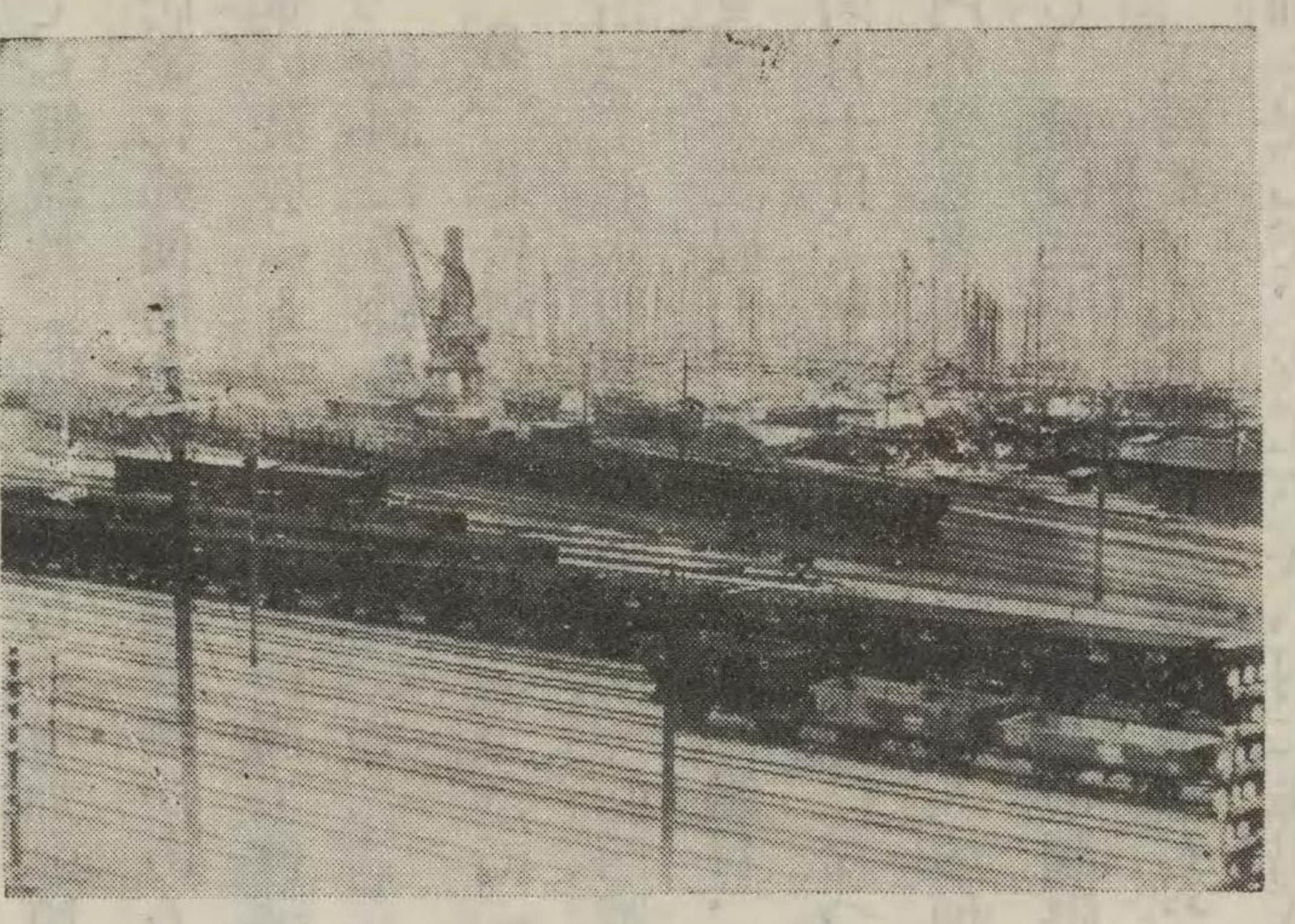
第二節 産 業

同 四年	二一、五七八、七五四
同 五年	二三、五四二、八四八
同 六年	二三、〇三二、五〇二
同 七年	二一、八〇四、八三三
同 八年	二九、七八四、七九三
同 九年	三六、八四五、〇二〇

右の表によれば、昭和七年の低下が特に目立つてゐるが、これは全国的にアメリカ恐慌の餘波による影響で、若松市のみ現象ではない。従つて、昭和七年の特殊な點を抹消すれば、生産額は逐年著増の一路を辿つてゐる。而してこれを生産物總價格別にすれば次の如くなる。(昭和九年度分)

農 産	七一九、七五五圓	林 産	一一二、四〇四
水 産	三〇九、四一五	工 産	三五、四四八、五三七
畜 産	二六三、九〇九	計	三六、八五四、〇二〇

農 業 若松市の農業は、昭和六年島郷村の合併によつて著るしく耕作面積が増大した。商工業の發達による工場、住宅地の増大は各都市の悩みであるが、若松市は海面埋立によつて、この悩みを緩和して餘りある状態で、現在では未だ何等耕作面積には影響なく、農家一戸當り耕地反別一町四反六畝



洞海灣を望む

總計一四、〇〇八反で、年産額三十萬圓に達してゐる。産額中第一位は米の一〇、〇二二石、二八二、〇二二圓であつて、順位別にすれば、蔬菜二三七、〇六四圓、麥四、一三五石の八二、八八三圓、果實三七、六七一圓、豆苧類二、一七九圓、蠶繭二、〇八二圓、蜂蜜二〇〇圓、其他七五、六五四圓、計七一九、七五五圓である。都市に於ける農産物の多い

事は、その地域に比較すれば實に若松市は海港都市であり、農業都市でもないと云へよう。市當局は昭和五年度より七年度に亘つて特に自作農創設に努力し、自作農奨励資金として、五二、七五〇圓の借入と耕地十三町歩四反戸數四十の自作農創設をなして、農業問題緩和に一步を進めた。

畜産業 この方面に於ては牛八〇〇頭、馬二一八頭、豚九三頭、山羊四五

頭、兎一〇四頭、家禽六〇、六七八羽で勞役に服さしめる程度で他に見るべきものはない。

林産業 島郷村の合併は、林野面積を一躍二千五百二十六町餘歩、即ち全市地積の五五%を占めるに至つた。特に近來縣市當局の造林奨励によつて、その成績漸次發展し、竹林の産額も亦増加しつゝある。即ちこれを産額別にすると用材二五、六一六圓、薪炭材六九、六〇〇圓、竹材九、二五〇圓其他七、九三八圓計一一二、四〇四圓である。

水産業 商工業の飛躍的發展は、漁業従業者の轉身による萎靡を招來したが、尙且つ二百五十八の漁戸と二百餘隻の漁船、年産四十萬圓を保持してゐる。即ち漁類一三三、一九三圓、貝類三、五〇〇圓、藻類五、三五二圓、製造物九二、六〇〇圓其他七四、七七〇圓計四〇九、四一五圓で、特に近來ウニの鱧語は特産物として定評を博してゐる。

工業 石炭市場として飛躍した若松市も、工業に於て永く不振の状態にあつたが、明治四十五年の上水道の敷設並に海陸連絡設備の竣成等によつて、近年著るしく發達を見、市總産額の九割を占める一大飛躍をなした。即ち各工業別に見ても化學工業の一六、四四六、七一五圓、鐵工業一六、八九六、九八九圓、造船工業四一八、一三三圓、飲食物工業六二七、三四二圓、雜工業一、〇五九、三五八圓、總計三五、四四八、五三七圓に達してゐる。

右の内化學工業に於ける主要産物は、日本板硝子工場の板硝子、日華製油工場の肥料豆粕及石鹼、中外雷管工場の工業用及獵用の雷管にして、之等は本市の工業特産品とも謂ふべきものであつて、板硝子の生産は鶴見、牧山と比肩して全國の三割を占めてゐる。豆粕、植物性油、石鹼は前者と共に遠く海外

にも進出し、工業用雷管は全國有数のものであつて、其の製品は海外にも雄飛してゐるが、主として筑豊炭田に鑛山用として歓迎せられてゐる。

商業及び金融 昭和九年末現在の市の商業戸数は三、六四二戸で、全戸數の約三割に達してゐる。然も港灣修築の完成は、將來若松市の商業界を一大飛躍せしめないではおかない。市内に存在する法人會社は、昭和九年末市當局の調査に據ると、本店百十四、支店四十九、計百六十三である。金融方面に於ても組織數は近時著しく増加の傾向を示し、三井、住友、安田三銀行の支店並に郵便局其他の金融機關がある。

商業の發展にとつては、若松商工會議所を中心として五十餘の商業團體が指導、統制に活動を續けてゐる。

貿易 若松港の貿易概況について「市勢要覽」は次の如く述べてゐる。「明治三十七年四月七日勅令第一〇四號を以つて若松港を開港に加へ、若松税關支署を設置し、輸出品石炭、鐵材、鋼材、輸入に於て鐵、鐵鑛を指定して、同月十日より實施せらるゝ様になつた。斯くして一度開港の班に加はると、内外貿易者は何れも直接輸出入の便益を喜び、進んで制限品目の増加を要望し、遂に三十八年九月輸出品の制限を撤廢し、生卵、米、粃、大麥、小麥、燕麥、玉蜀黍、及豆類、銑鐵を追加した。然し貿易の進歩は之に満足せず漸次追加を促して、大正六年八月に輸出入の制限は完全に撤廢せられて、國際關係は愈々密度を加へて來た、一方保税倉庫假置場、上屋、藏置場が設置せられ、若松税關支署の派出所、監所が數ヶ所に設けられて、貿易は一入活潑に行はるゝ様になつた。明治三十九年には其貿易額は三九三、四八六圓であつたが、二十八ヶ年を經過せる現在に於ては四〇七、五〇〇、六九六圓となり、

出貨に於ては本邦第一位として君臨し、入貨に於て第五位を占めてゐる。本邦最近の貿易は入超に喘ぐ中に本港は獨り年々出超を見せ、斷然異彩を放つて悠然たるものがある。昭和八年中の出超は數量に於て五百四十一萬噸餘價格一億一千七萬圓餘である。」

交通 かつては水深六尺にも満たず、港内の諸所には淺洲があり、繫留場は狹隘で潮流の急なるため小潮の場合には卅、四十萬斤積の帆船でも滿載しては出港が出来なかつた港灣も、若松築港株式會社の創立によつて、港口、港内の浚渫及水深干潮面下十五尺の浚渫と延長千八十間の防波堤の築造、此浚渫土砂を用ひて十萬一千餘坪の埋立工事が施工されるに至つて、今日の如く三四千噸級の汽船の入港荷役が可能となり、石炭積出港として海運交通上の大なる地歩を占めるに至つた。現在では港區を外港、一、〇四三、六〇〇面坪、本港二四〇、四六三面坪、内港三、〇七八、五四一面坪、製鐵所専用區域の四つに區分してゐる。外港は河蚪島以東外海に通ずる航路及兩側であり、本港は河蚪島と葛島の間で主として汽船溜場、内港は葛島以西の製鐵所専用區域を除いた部分である。若松市の生命は港灣に依存するとも云へるものであるだけに、港灣設備には、延長一三、五七五間の防波堤、四千噸級用七、三千噸級用一六、五百噸級用六の繫船浮標及び若松埠頭の所謂雜貨専用の二十尺岸壁百五十間の繫船岸壁が設けられ、港灣設備の萬全を期するために市當局及關係者は不斷の注意を拂つてゐる。

又陸運の機關としての國鐵にとつては、筑豊線の起點として若松は早くより鐵道の便を確保してゐた。即ち明治二十四年八月筑豊興業鐵道會社によつて若松直方間の線路が初めて敷設せられ、爾後延長工事着々進捗し、一方臼井

より大隈を経て上山田に及び、飯塚より分岐して長尾に至り、一方は金田より楠を経て伊田に連絡して、客貨殊に石炭運搬の操業は益々盛んとなり、越えて明治三十九年九州鐵道會社と合併せられ、日露戰爭以後政府は軍事上の理由と鐵道運輸統一計畫に基いて、同三十九年三月法律第十七號國有鐵道法に依つて買収せられて國鐵となつたのである。昭和四年に至つては、長尾より九州本線原田驛に通ずる長原線の開通を見るに至つて、愈々九州一圓の貨物は若松市に大部分集散される所となつた。一日實に九十列車を編成し、構内線路の複數は八十條此延長は實に三六、六軒即ち九里強の長きに達してゐる。發着貨物六百萬噸に達せんとし、炭車の到着數は實に四十萬輛を越えてゐる。乗降客は六十二萬を越えてゐるのである。

倉庫 海陸荷物の集散の頻繁なるに従つて、運送業の發達及び倉庫業の發達は著るしいものがあり、現在倉庫の主なるものとしては三菱倉庫及び市倉庫がある。此他法人及個人經營の大小倉庫が幾多備つて居り、之等貨物の

學事 本市に於ける教育設備は年を逐うて充實せられつゝあり、市制施行の翌年即ち大正四年には小學兒童數は四千三百、學級六十七、小學校費三萬千六百圓に過ぎなかつたが、現在では十三校兒童數一萬五百四十三、學級數は百六十八にして倍數となり、費用十七萬四千圓に膨脹してゐる、其他補充的教育機關も完備して子弟の養成に力めてゐる。

社寺兵事 神社の崇敬は我國特有の傳統的國家觀念にして、人口の増加に伴ひ氏子數の増加するのは必然である、宗教的信仰は依然佛教に集り、其他各種の教會等も漸増の傾向を有してゐる。

徴兵人員は之又人口増加と共に増加し、十年前に於ける徴兵受檢人員は百二十三名であつたが、現在では五倍に増加してゐる。甲種合格者は壯丁百人中三十四人強に當つてゐる。

社會事業 若松市における社會事業は、可なり徹底した施設がなされてゐる。第一に海員兒童の寄宿舎の如きは秩序ある家庭教育が行はれて居り、貧

商業の發展にとつては、若松商工會議所を中心として五十餘の商業團體が指導、統制に活動を續けてゐる。

貿易 若松港の貿易概況について「市勢要覽」は次の如く述べてゐる。「明治三十七年四月七日勅令第一〇四號を以つて若松港を開港に加へ、若松税關支署を設置し、輸出品石炭、鐵材、鋼材、輸入に於て鐵、鐵礦を指定して、同月十日より實施せらるゝ様になつた。斯くして一度開港の班に加はると、内外貿易者は何れも直接輸出入の便益を喜び、進んで制限品目の増加を要望し、遂に三十八年九月輸出品の制限を撤廢し、生卵、米、粃、大麥、小麥、燕麥、玉蜀黍、及豆類、銑鐵を追加した。然し貿易の進歩は之に満足せず漸次追加を促して、大正六年八月に輸出入の制限は完全に撤廢せられて、國際關係は愈々密度を加へて來た、一方保税倉庫假置場、上屋、藏置場が設置せられ、若松税關支署の派出所、監所が數ヶ所に設けられて、貿易は一入活潑に行はるゝ様になつた。明治三十九年には其貿易額は三九三、四八六圓であつたが、二十八ヶ年を經過せる現在に於ては四〇七、五〇〇、六九六圓となり、

より大隈を経て上山田に及び、飯塚より分岐して長尾に至り、一方は金田より楠を経て伊田に連絡して、客貨殊に石炭運搬の操業は益々盛んとなり、越えて明治三十九年九州鐵道會社と合併せられ、日露戰爭以後政府は軍事上の理由と鐵道運輸統一計畫に基いて、同三十九年三月法律第十七號國有鐵道法に依つて買收せられて國鐵となつたのである。昭和四年に至つては、長尾より九州本線原田驛に通ずる長原線の開通を見るに至つて、愈々九州一圓の貨物は若松市に大部分集散される所となつた。一日實に九十列車を編成し、構内線路の複數は八十條此延長は實に三六、六籽即ち九里強の長きに達してゐる。發着貨物六百萬噸に達せんとし、炭車の到着數は實に四十萬輛を越えてゐる。乗降客は六十二萬を越えてゐるのである。

倉庫 海陸荷物の集散の頻繁なるに従つて、運送業の發達及び倉庫業の發達は著るしいものがあり、現在倉庫の主なるものとしては三菱倉庫及び市倉庫がある。此他法人及個人經營の大小倉庫が幾多備つて居り、之等貨物の取扱に従事してゐる仲仕の數は三千人を算し、沖積部、陸部、雜貨部に分れて統制されてゐる。

其他の交通機關としては、市營の渡船場より二島を経て折尾、脇田、岩屋に至る乗合自動車並に私營の東海岸線、若松蘆屋線等がある。戸畑市と若松市の共同經營になる海路旅客輸送の渡船がある。参考に諸車數を記しておく。

自動車 六五 荷車 二、九七〇 自動自轉車 一二
牛馬車 二九七 人力車 一六 自轉車 四、〇〇八

若松市の項を終るに際して文化及社會方面の事項に關して以下簡単に述べて終ることとする。

浚渫土砂を用ひて十萬一千餘坪の埋立工事が施工されるに至つて、今日の如く三四千噸級の汽船の入港荷役が可能となり、石炭積出港として海運交通上の大なる地歩を占めるに至つた。現在では港區を外港、一、〇四三、六〇〇面坪、本港二四〇、四六三面坪、内港三、〇七八、五四一面坪、製鐵所專用區域の四つに區分してゐる。外港は河崎島以東外海に通ずる航路及兩側であり、本港は河崎島と葛島の間で主として汽船溜場、内港は葛島以西の製鐵所專用區域を除いた部分である。若松市の生命は港灣に依存するとも云へるものであるだけに、港灣設備には、延長一三、五七五間の防波堤、四千噸級用七、三千噸級用一六、五百噸級用六の繫船浮標及び若松埠頭の所謂雜貨專用の二十尺岸壁百五十間の繫船岸壁が設けられ、港灣設備の萬全を期するために市當局及關係者は不斷の注意を拂つてゐる。

又陸運の機關としての國鐵にとつては、筑豊線の起點として若松は早くより鐵道の便を確保してゐた。即ち明治二十四年八月筑豊興業鐵道會社によつて若松直方間の線路が初めて敷設せられ、爾後延長工事着々進捗し、一方臼井

學事 本市に於ける教育設備は年を逐うて充實せられつゝあり、市制施行の翌年即ち大正四年には小學兒童數は四千三百、學級六十七、小學校費三萬千六百圓に過ぎなかつたが、現在では十三校兒童數一萬五百四十三、學級數は百六十八にして倍數となり、費用十七萬四千圓に膨脹してゐる、其他補充的教育機關も完備して子弟の養成に力めてゐる。

社寺兵事 神社の崇敬は我國特有の傳統的國家觀念にして、人口の増加に伴ひ氏子數の増加するのは必然である、宗教的信仰は依然佛教に集り、其他各種の教會等も漸増の傾向を有してゐる。

徴兵人員は之又人口増加に共に増加し、十年前に於ける徴兵受檢人員は百二十三名であつたが、現在では五倍に増加してゐる。甲種合格者は壯丁百人中三十四人強に當つてゐる。

社會事業 若松市における社會事業は、可なり徹底した施設がなされてゐる。第一に海員兒童の寄宿舎の如きは秩序ある家庭教育が行はれて居り、貧困兒童の夜間二部教授、若松救療會の診療施設、職業紹介所、保育園等々救貧、保育或は市立第一、第二病院、傳染病院の公營による衛生事業等、可なり發展を示してゐる。

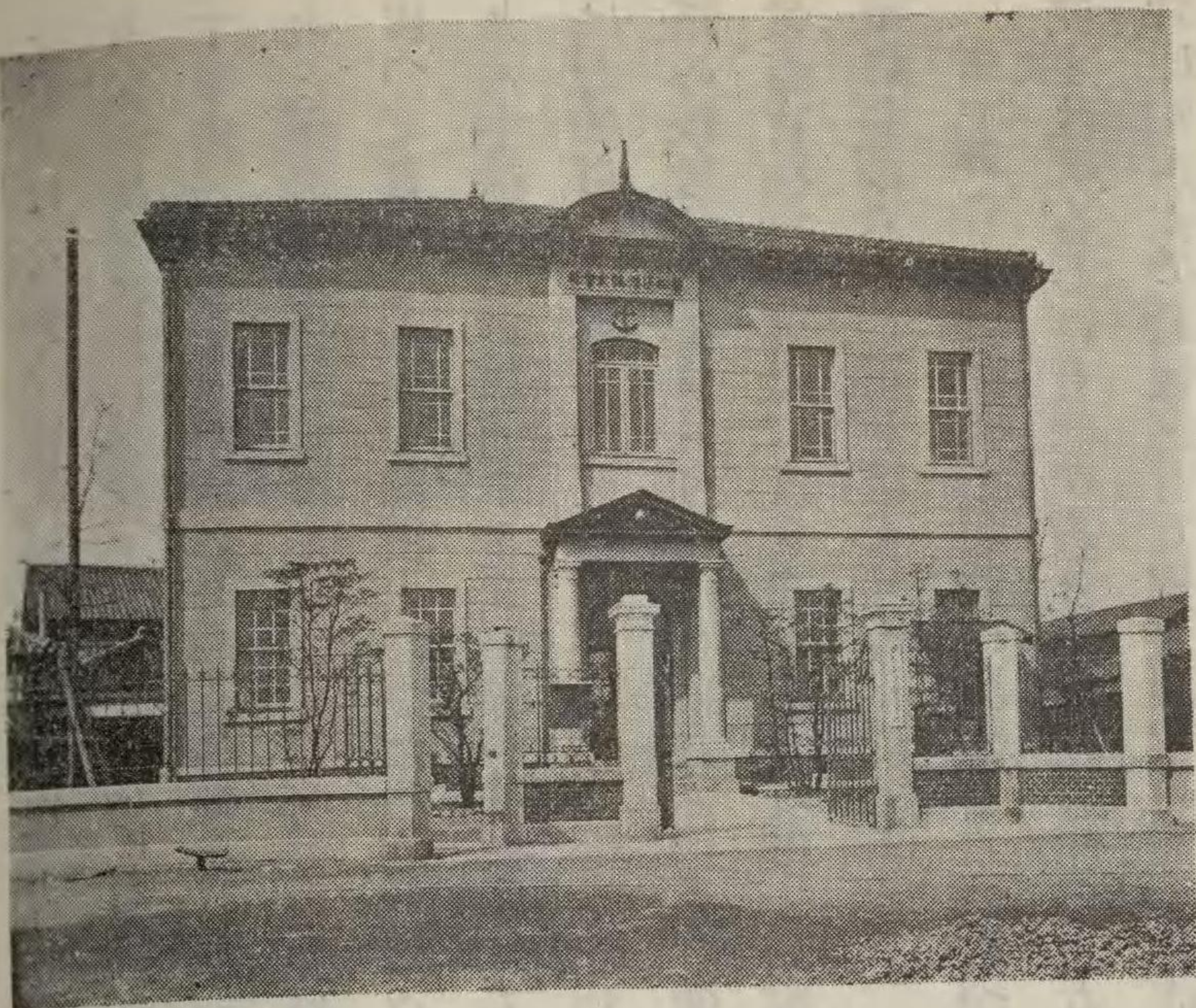
水道 明治三十九年八幡製鐵所に於て遠賀川を水源とする水道計畫あるを機に、導水管敷費として七萬一千圓に相當する鐵管を提供し、一晝夜三十萬立方尺を限度として源水の分與を受け、製鐵鬼ヶ原貯水池より對岸戸畑市牧山に引水濾過し、牧山海岸より葛島を通し市内岬ノ山海岸に二ヶ所の海底鐵管を沈敷、洞海灣を横斷市内に配水するの計畫を樹て、明治四十二年八月總工費六十六萬一千圓三ヶ年繼續事業として工を起し、明治四十五年三月竣

工同年四月より給水を開始した。然るに水道の需用漸次増加して、大正十一年一月第二期擴張工事費八十萬九千五百圓を以つてその工を起し、大正十三年竣工今日に及んだ。

下水道 下水道は暗渠式合流法で、埋設下水管によつて海中に放流せしめる施設がなされてゐる。

若松築港株式會社

若松市東海岸通一丁目にある若松築港株式會社の創立は、明治二十二年十



若松築港株式會社

一月三日で、前身浚疏會社に濫觴してゐる。筑豊炭田唯一の石炭集散市場であつた遠賀郡芦屋が玄海の荒海に面するのと、遠賀川流出の土砂で港内が埋もれるのとで、漸次遠賀川より川幹で堀川、江川を上下して、若松へ送炭することになつた。而し當時の洞海湾は水深淺く、到る所に洲があり大船巨舶を容るゝには適しなかつた、文化の進むに伴

れ石炭需要の増加は筑豊採炭業の勃興となつて、消費市場へ輸送能力増大の必要に迫られ、時の筑豊石炭鑛業組合長石野寛平氏によつて、若松港浚渫の計畫が樹てられ、當時第六區土木監督署長内務三等技師石黒五十二、同六等技師長崎桂兩氏主任となつて、明治二十一年八月始めて若松港内の實地測量



若松築港株式會社社長 松本健次郎氏



若松築港株式會社支配人 徳田文作氏

及試錐が行はれた、同年十一月浚疏會社を創立翌二十二年に之を資本金六十萬圓の若松築港株式會社に變更されたものである。同年十一月筑豊興業鐵道會社が設立され、間もなく若松直方の鐵道開通に及んで、若松港の改修事業は一層急を要し、且つ八幡へ官營製鐵所の設立を見るに至つたので、八幡地先の改修と事業擴張の必要に迫られ、同三十一年十一月十五日資本金を百五十萬圓に、大正六年には更に三百六十萬圓に増額し、創立以來四十餘年の日子と、一千六百六十六萬六千餘圓の工事費とを費し、僅かに五尺に足らなかつた港内を干潮面二十尺に浚渫、港口には千四百間の防波堤を築造し燈臺、航路標識設備、護岸、船入場等港灣施設の整備によつて、汽船碇泊能力は七十九隻、噸數では九萬三千五百七十七噸を收容し得る大港灣とならした。

人工施設の完備は天然の惠與と相俟つて、港灣價值は政府に認めらるゝ處となり、明治三十七年四月特別輸出入港に、越えて大正六年には特別輸出入の制限を撤廢され、今や年間の出入船舶は十三萬隻に達し、貿易額も七億圓臺に及ぶ全國有數の重要港となつた異狀の躍進を思ふ時、同會社の大きな功績

に深い感謝が拂はるべきであらう。現在の幹部は社長取締役松本健次郎、同吉田良春、同貝島太市、同男爵黒田長和、同三橋信三、同麻生義之介、監査役大藏藤作、同佐藤慶太郎、支配人徳田文作の諸氏である。

丸柏吳服店

「みなと若松」の繁華街中川通の中央に堂々の屋舎と古き歴史を誇る合資

昭和九年一月一日資本金十八萬圓の合資會社に組織更へをなし、支配人に宮地万吉君が就任して社長二代目善藏氏を輔佐、洋反、雜貨部仕入部長を兼

ね、會計、庶務部長に社長

令弟柏原廣、宣傳及吳服仕

入部長に村上幸士、吳服販

賣主任柏村一夫、雜貨販賣

主任宮村正植の諸氏を起用

男女約百名の店員を夫々適

材適所主義で各部へ配置し

て陣容を完備し、昭和十一

年二月十一日には、本市の

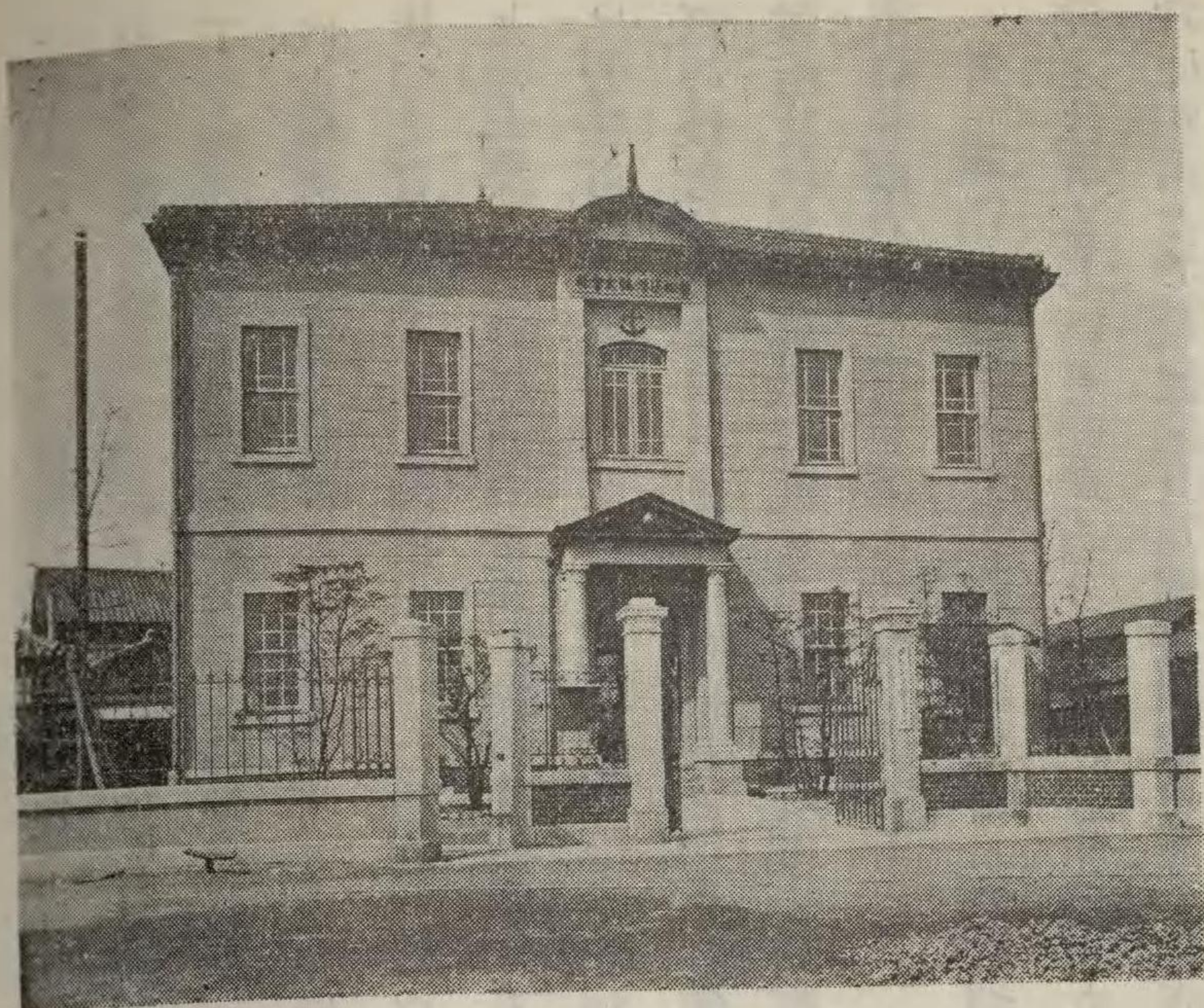
トップを切つて私設丸柏青

年學校を設立、店員の指導



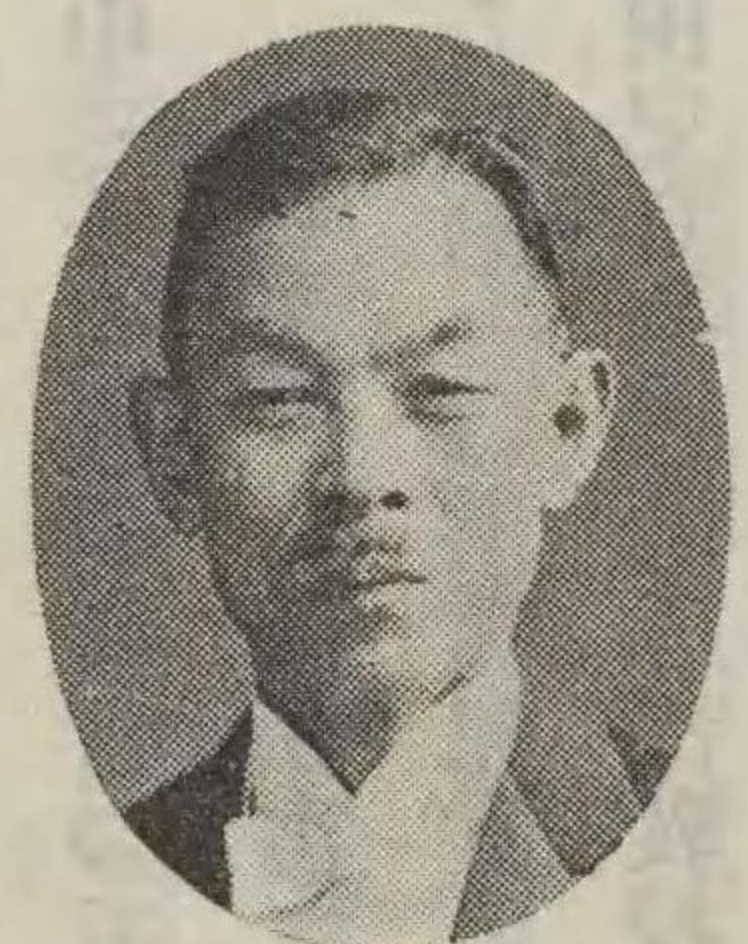
丸柏吳服店

若松市東海岸通一丁目にある若松築港株式會社の創立は、明治二十二年十



若松築港株式會社

一月三日で、前身浚疏會社に濫觴してゐる。筑豊炭田唯一の石炭集散市場であつた遠賀郡芦屋が玄海の荒海に面するのと、遠賀川流出の土砂で港内が埋もれるのとで、漸次遠賀川より川舛で堀川、江川を上下して、若松へ送炭することになつた。而し當時の洞海湾は水深淺く、到る所に洲があり大船巨舶を容るゝには適しなかつた、文化の進むに伴



若松築港株式會社 支店長 若松 田正

間の鐵道開通に及んで、若松港の改修事業は一層急を要し、且つ八幡へ官營製鐵所の設立を見るに至つたので、八幡地先の改修と事業擴張の必要に迫られ、同三十一年十一月十五日資本金を百五十萬圓に、大正六年には更に三百六十萬圓に増額し、創立以來四十餘年の日子と、一千六百六十六萬六千餘圓の工事費とを費し、僅かに五尺に足らなかつた港内を干潮面二十尺に浚渫、港口には千四百間の防波堤を築造し燈臺、航路標識設備、護岸、船入場等港灣施設の整備によつて、汽船碇泊能力は七十九隻、噸數では九萬三千五百七十七噸を收容し得る大港灣とならした。

人工施設の完備は天然の恵與と相俟つて、港灣價值は政府に認めらるゝ處となり、明治三十七年四月特別輸出入港に、越えて大正六年には特別輸出入の制限を撤廢され、今年年間の出入船舶は十三萬隻に達し、貿易額も七億圓臺に及ぶ全國有數の重要港となつた異狀の躍進を思ふ時、同會社の大きな功績

に深い感謝が拂はるべきであらう。現在の幹部は社長取締役松本健次郎、同吉田良春、同貝島太市、同男爵黒田長和、同三橋信三、同麻生義之介、監査役大藏藤作、同佐藤慶太郎、支配人徳田文作の諸氏である。

丸柏吳服店

「みなと若松」の繁華街中川通の中央に堂々の屋舎と古き歴史を誇る合資會社丸柏吳服店は、明治二十三年先代柏原善藏氏の創立に成るものである。善藏氏は廣島縣御調郡中庄村の農家に生れたが、青雲の志強く、利智に富み二十二歳の若冠で、僅か三圓六十錢を懐中にして旅商に出で、未知の若松と往復、郷里の手織木綿と筑前蠟燭との交換の中に商術を體得、若松が淋しい漁村から石炭集散地に變つて其躍進が約束づけられた明治二十三年八月五日初めて柏原太物店を開業、茲に商業經營の根據を置いた。

商品の精選と價格の低廉は他人の容易に眞似得べくもない、徹底した低頭サービスは斷然人氣を博し、若松の異常な躍進と共に伸び、大正十一年六月十五日柏原吳服店と改稱し、屋舎を現在の中川通二丁目角に改築した。經營も太物専門より吳服に變ると共に、懸賣りの情弊を一掃して現金賣りに改め、近代式商店經營によつて若松商店界に覇を稱へるに至つた。

昭和九年一月一日資本金十八萬圓の合資會社に組織更へをなし、支配人に宮地万吉君が就任して社長二代目善藏氏を輔佐、洋反、雜貨部仕入部長を兼ね、會計、庶務部長に社長



丸柏吳服店

によつて修養團が早くより設けられ、機會ある毎に講演指導を受けて實踐、丸柏獨特の店風を確立、感じのよい店として定評がある。

令弟柏原瀆、宣傳及吳服仕入部長に村上幸士、吳服販賣主任柏村一夫、雜貨販賣主任宮村正植の諸氏を起用男女約百名の店員を夫々適材適所主義で各部へ配置して陣容を完備し、昭和十一年二月十一日には、本市のトップを切つて私設丸柏青年學校を設立、店員の指導教養に一段の努力を拂ふことになつた、同店は先代の氣風を繼承した宮地支配人

第廿一章 戸畑市と産業

第一節 戸畑市勢

(1) 地勢

戸畑市は筑前國東北端に位し、東經百三十度四十九分二十六秒、北緯三十三度五十四分四十七秒に在り、東は堺川を隔て、小倉市と界し、西は洞海湾口を扼して若松市に對す。南面一帯は八幡市に接し、北は響灘に面す、東西約三千六百米、南北四千七百米、面積九百九萬五千平方メートルの廣袤を有し、人口七萬人、戸畑及び中原の二大字に分る。地勢概ね平潤なるも、東南部は堂ヶ峯、牧山の山脈連帶し、地勢は西北に向つて傾斜をなしてゐる。

鐵道鹿兒島本線は海岸に沿うて東西に貫通し、戸畑驛は市の中央に在り、九軌電車は戸畑埠頭より小倉を経て門司に、一つは全埠頭より八幡、折尾に聯絡し、對岸若松市へは全埠頭より直ちに公營渡船の便あり、縣道は小倉より本市を縦貫福岡市に至るものと、明治町より分岐し八幡市に至る二線及び停車場線を有し、共に要衝の地を貫通し交通至便である。

(2) 沿革

本市は洞海湾口の要衝を扼する天恵の地利を占め、其の位置海陸聯絡に便

利なる爲め夙に史蹟に其の名現はる。往時は漁農の一寒村に過ぎざりしも、歳と共に發達し、明治三十二年町制を施行し、更に大正十三年九月市制を施行す、海陸運輸至便にして



戸畑市役所

工業地に適し、戸畑耐火煉瓦、明治紡績、戸畑鑄物、三菱骸炭、旭硝子及び明治製糖戸畑工場等設置せられ續いて久原鑛業の戸畑製鐵所の創立を見たが、大正七年久原鑛業、東洋製鐵の合併成り、昭和八年日本製鐵株式會社創立せらるるや、昭和九年三月同社と合併し一文字埠頭完成と共に合同水産工業、戸畑製罐、共同漁業、豊洋漁業、日本水産

日本漁網、博多トロール其他の水産事業諸會社工場設置せられ、戸口日に月に激増し、商工水産都市として異數の發達を爲し、今日の如き戸畑市を形成するに至つたものである。

(3) 農業及牧畜

自作農は二七戸、小作は一五一戸、自作兼小作四六戸計二二四戸で、耕地

反別數は田六六四反、畑七八二反で、工産、水産、農産、畜産物の比較を見ると次の如くである。

生産物調 (昭和九年中)	工産高(圓)	水産高(圓)	農産高(圓)	畜産高(圓)
昭和九年	五六,〇三二、九二二	八,二五、九一四	一〇三、九一九	六三、七三三

牧畜では、家禽が多く、牛、馬、豚、羊類は極めて僅少で、搾乳の如きも搾乳場五、搾乳牛數四九頭、搾乳高五六三石、價格一萬六千八百九十圓に過ぎない。

(4) 工業物

戸畑市の工業物は、昭和九年中の調査によれば次の如くである。

化學工業	木製品工業	食料品工業	其の他の工業	計
九	七九	一四五	一七八	五〇九
一、四六三	三九三	五七三	五五二	六、八八八
二三、七〇〇、七九六	九〇九、八一四	七、七五〇、九一一	八九五、二二一	五六、〇三二、九二一

(5) 水産業

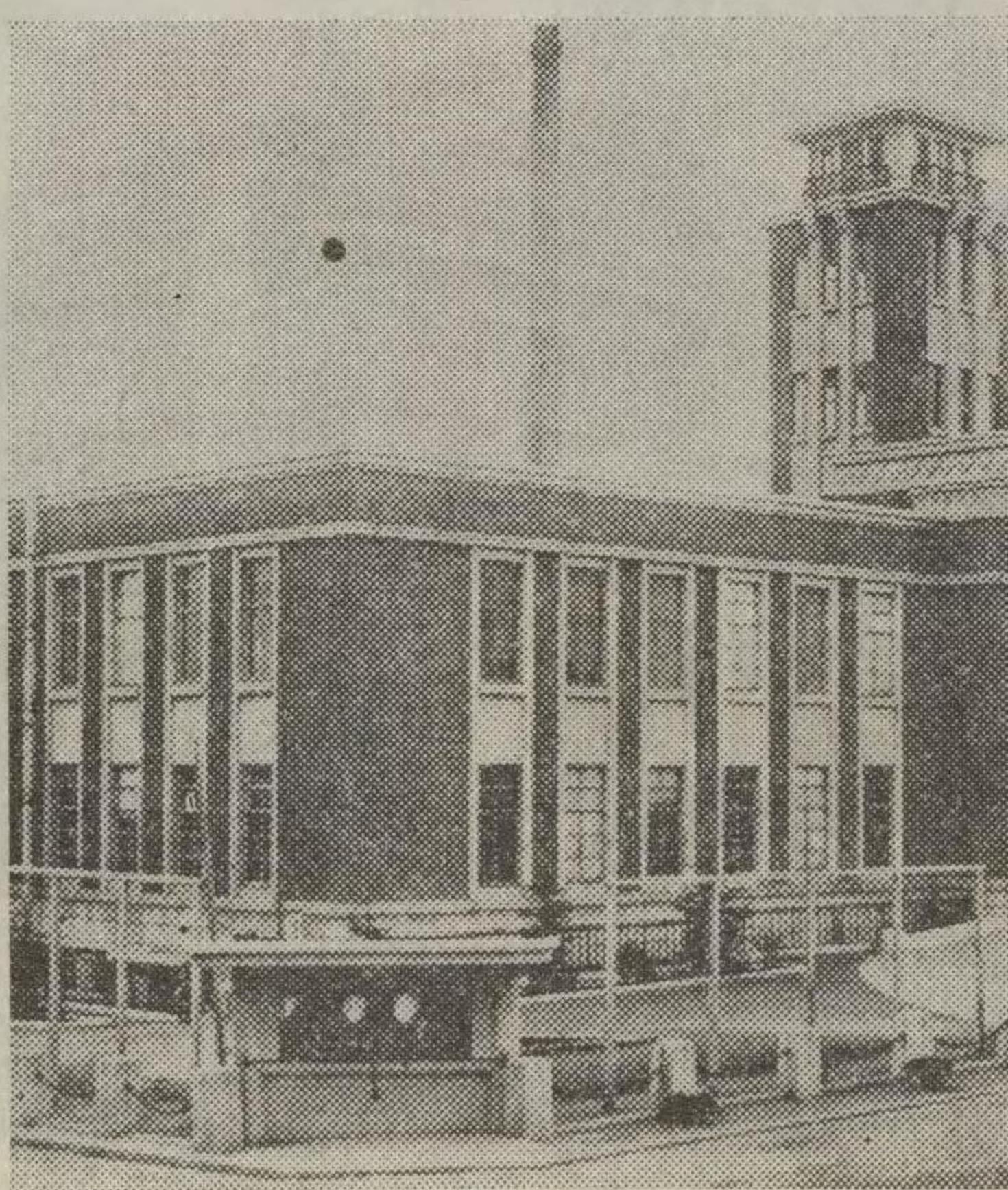
戸畑市は工業都市であると共に水産都市でもある。勿論水産都市と云ふ意味は、戸畑が漁業上の根據地たる意味に於てである。戸畑には多くの工場がある。即ち次に示すが如くであつて、工業都市としては依然として主要な地位にあり、その産額に於ても前述の農工、水産額の比較に於て見られる如くで、戸畑市の水産高は第二位にある。只近時日本産業系によつて漁業根據地點として著るしく發展した點に於て、記者は只しかく誇示しておき度いと思ふ。九州水産業のために、尙水産團體は次の如くである。

戸畑市は筑前國東北端に位し、東經百三十度四十九分二十六秒、北緯三十三度五十四分四十七秒に在り、東は堺川を隔て、小倉市と界し、西は洞海湾口を扼して若松市に對す。南面一帯は八幡市に接し、北は響灘に面す、東西約三千六百米、南北四千七百米、面積九百九萬五千平方メートルの廣袤を有し、人口七萬人、戸畑及び中原の二大字に分る。地勢概ね平潤なるも、東南部は堂ヶ峯、牧山の山脈連帶し、地勢は西北に向つて傾斜をなしてゐる。

鐵道鹿兒島本線は海岸に沿うて東西に貫通し、戸畑驛は市の中央に在り、九軌電車は戸畑埠頭より小倉を経て門司に、一つは全埠頭より八幡、折尾に聯絡し、對岸若松市へは全埠頭より直ちに公營渡船の便あり、縣道は小倉より本市を縦貫福岡市に至るものと、明治町より分岐し八幡市に至る二線及び停車場線を有し、共に要衝の地を貫通し交通至便である。

(2) 沿革

本市は洞海湾口の要衝を扼する天恵の地利を占め、其の位置海陸聯絡に便



市役所の創立を見たが、大正七年久原鑛業、東洋製鐵の合併成り、昭和八年日本製鐵株式會社創立せらるるや、昭和九年三月同社と合併し一文字埠頭完成と共に合同水産工業、戸畑製罐、共同漁業、豊洋漁業、日本水産

(3) 農業及牧畜

自作農は二七戸、小作は一五一戸、自作兼小作四六戸計二二四戸で、耕地

反別数は田六六四反、畑七八二反で、工業、水産、農産、畜産物の比較を見ると次の如くである。

昭和九年	生産物調 (昭和九年中)			
	工業高(圓)	水産高(圓)	農産高(圓)	畜産高(圓)
	五、〇三、三二一	八、五、九四	一〇、三、九一	三、七、三

(4) 工業物

戸畑市の工業物は、昭和九年中の調査によれば次の如くである。

種別	製造個數	職工數	價格(圓)
紡績	五	一、一三二	三、五六〇、八四五
金屬	五	一、〇〇八	四、一九九、五二〇
機械器具	七七	一、〇七七	四、九二九、四四八
窯業	一一	六九〇	一〇、〇八六、三六六

主要會社工場

會社名	創業年月	資本金(圓)
合資會社 高谷鐵工所	明治二十六年七月	一五〇、〇〇〇
日本タール工業株式會社牧山工場	同 三十一年八月	五、〇〇〇、〇〇〇
合資會社 戸畑耐火煉瓦製造所	同 三十六年五月	二七五、〇〇〇
明治鐵業株式會社	同 四十一年一月	二〇、〇〇〇、〇〇〇
九州電氣軌道株式會社	同 四十二年十二月	五六、〇〇〇、〇〇〇

福岡縣産業の卷

(5) 水産業

戸畑市は工業都市であると共に水産都市でもある。勿論水産都市と云ふ意味は、戸畑が漁業上の根據地たる意味に於てである。戸畑には多くの工場がある。即ち次に示すが如くであつて、工業都市としては依然として主要な地点にあり、その産額に於ても前述の農工、水産額の比較に於て見られる如くで、戸畑市の水産高は第二位にある。只近時日本産業系によつて漁業根據地點として著るしく發展した點に於て、記者は只しかく誇示しておき度いと思ふ。九州水産業のために。尙水産團體は次の如くである。

名	創立年月	組合員	經費豫算(圓)	市補助(圓)	基金(圓)
戸畑浦漁業組合	明治三、八	空	三、〇一	一〇〇	七、一三六
福岡縣遠洋底曳網水産組合	昭和六、二	三	一七、九六	—	—

主要製品

諸機械製作修理
炭製
耐火煉瓦
石炭採掘
電車、電燈電力供給

六六七

明治紡績合資會社	同	四十二年十月	三、〇〇〇、〇〇〇	綿糸紡績
戸畑鑄物株式會社	同	四十三年六月	一五、〇〇〇、〇〇〇	各種鑄物、打物、銑鐵及機械
九州水力電氣株式會社	同	四十四年四月	八六、〇〇〇、〇〇〇	電燈電力の供給販賣
戸畑無盡株式會社	同	大正三年二月	一〇〇、〇〇〇	無盡
旭硝子株式會社	同	三年八月	二〇、〇〇〇、〇〇〇	硝子
株式會社 宮島商店	同	三年九月	五〇〇、〇〇〇	醬油
合名會社 金子商店	同	四年六月	四〇、〇〇〇	醬油
栃木商事株式會社	同	四年十二月	二、〇〇〇、〇〇〇	海運業及陸上運送業
明治製糖株式會社	同	五年七月	四八、〇〇〇、〇〇〇	糖
旭硝子株式會社	同	六年六月	一二、五〇〇、〇〇〇	灰
三笠工業株式會社	同	七年十月	一三〇、〇〇〇	曹達
株式會社 堀内組	同	十年十一月	一〇〇、〇〇〇	炭製
株式會社 大庭組	同	十四年二月	一〇〇、〇〇〇	勞力請負
合名會社 木村商店	同	十四年三月	九〇、〇〇〇	勞力請負
合資會社 九州製油所	同	大正十四年十二月	一五〇、〇〇〇	酒類卸賣
嘉穂鐵業株式會社	同	十五年十二月	三〇〇、〇〇〇	グリース製造、油脂精製
戸畑運送株式會社	同	昭和二年三月	一〇〇、〇〇〇	石炭採掘及販賣
日本食料工業株式會社	同	二年十二月	一五、二〇〇、〇〇〇	海陸運送、倉庫、代理
株式會社 鴻池組	同	三年五月	一、〇〇〇、〇〇〇	水産品加工、製氷、冷蔵、冷凍業、漁港經營
九州瓦斯株式會社	同	四年二月	四、〇〇〇、〇〇〇	瓦斯
戸畑乘合自動車株式會社	同	四年五月	三〇、〇〇〇	旅客運送
東洋製罐株式會社	同	四年十一月	六、〇〇〇、〇〇〇	空罐製
共同漁業株式會社	同	四年十二月	一〇、〇〇〇、〇〇〇	漁撈
株式會社 丸神運送店	同	四年十二月	一五〇、〇〇〇	運送
日本漁網船具株式會社	同	四年十二月	一、〇〇〇、〇〇〇	漁網船具販賣
戸畑魚市株式會社	同	五年四月	三〇〇、〇〇〇	魚市場
日本水産株式會社	同	五年四月	二、五〇〇、〇〇〇	漁撈、製函及魚類委託販賣業
戸畑驛構内 車屋自動車株式會社	同	五年五月	三二、五五〇	運送

平山鐵業株式會社	同	六年一月	二、〇〇〇、〇〇〇	石炭
高速冷蔵汽船株式會社	同	六年三月	二〇〇、〇〇〇	運送
日本製鐵株式會社	同	八年四月	三五九、八二一、〇〇〇	製鐵業
株式會社 戸畑青果卸賣市場	同	八年十一月	一〇〇、〇〇〇	市場
九州製網株式會社	同	九年九月	一〇、〇〇〇、〇〇〇	製網

石炭	製鐵業
運送	製鐵業
市場	製鐵業
製網	製鐵業

(6) 商業金融

(7) 交通

戸畑市の商業は、上述の諸工場及び水産業に従属して居る観がある。従つて生産都市としての面目を備へてゐる。

金等も活潑な動きを見せてゐる。

戸畑市の商工業指導機關として戸畑商工會議所は次の如くである。

交通に於ては、昭和十年二月末市當局の調査に據ると次の如くである。

市道 延長一〇六、二六二米、平均幅員四、五四〇米で、維持修理費は一三、二八七圓を要してゐる。

戸畑商工會議所

諸車 自轉車三、二二六、自動自轉車二六、荷馬車一九八、荷車一、八二四

設立年月 顧問 役員及理事 議員 選舉有権者數 經費豫算(圓)

四汽船一〇四、帆船五四、艇船九六、海船四八、川船八を數へてゐる。汽車電車は次の如くである。

三 等 工 業 株 式 會 社	同	七 年 十 月	一 三 〇、〇 〇 〇	製 造
株 式 會 社 堀 内 組	同	十 年 十 二 月	一 〇 〇、〇 〇 〇	製 造
株 式 會 社 大 庭 組	同	十 四 年 二 月	一 〇 〇、〇 〇 〇	製 造
合 名 會 社 木 村 商 店	同	十 四 年 三 月	九 〇、〇 〇 〇	商 賣
合 資 會 社 九 州 製 油 所	大 正 十 四 年 十 二 月	一 五 〇、〇 〇 〇	製 造	
嘉 德 鐵 業 株 式 會 社	同 十 五 年 十 二 月	三、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
戶 畑 運 送 株 式 會 社	昭 和 二 年 三 月	一 〇 〇、〇 〇 〇	運 送	
日 本 食 料 工 業 株 式 會 社 戶 畑 事 業 支 所	同 二 年 十 二 月	一 五、二 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
株 式 會 社 鴻 池 組 九 州 出 張 所	同 三 年 五 月	一、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
九 州 瓦 斯 株 式 會 社	同 四 年 二 月	四、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
戶 畑 乘 合 自 動 車 株 式 會 社	同 四 年 五 月	三、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
東 洋 製 鐵 株 式 會 社	同 四 年 十 一 月	六、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
共 同 漁 業 株 式 會 社 戶 畑 工 場 戶 畑 營 業 所	同 四 年 十 二 月	一 〇、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
株 式 會 社 丸 神 運 送 店 戶 畑 支 店	同 四 年 十 二 月	一 五 〇、〇 〇 〇	製 造	
日 本 漁 網 船 具 株 式 會 社 戶 畑 出 張 所	同 四 年 十 二 月	一、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
戶 畑 魚 市 株 式 會 社	同 五 年 四 月	三 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
日 本 水 産 株 式 會 社 戶 畑 荷 割 所	同 五 年 四 月	二、五 〇 〇、〇 〇 〇	製 造	
戶 畑 驛 構 内 車 庫 自 動 車 株 式 會 社	同 五 年 五 月	三 二、五 五 〇	製 造	

(6) 商業金融

平 山 鐵 業 株 式 會 社	同	六 年 一 月	二、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造
高 速 冷 藏 汽 船 株 式 會 社	同	六 年 三 月	二 〇 〇、〇 〇 〇	製 造
日 本 製 鐵 株 式 會 社 八 幡 製 鐵 所 戶 畑 工 場	同	八 年 四 月	三 五 九、八 二 一、〇 〇 〇	製 造
株 式 會 社 戶 畑 青 果 卸 賣 市 場	同	八 年 十 一 月	一 〇 〇、〇 〇 〇	製 造
九 州 製 網 株 式 會 社	同	九 年 九 月	一 〇、〇 〇 〇、〇 〇 〇	製 造

(7) 交通

金等も活潑な動きを見せてゐる。

戸畑市の商業は、上述の諸工場及び水産業に従属して居る観がある。従つて生産都市としての面目を備へてゐる。

交通に於ては、昭和十年二月末市當局の調査に據ると次の如くである。

戸畑商工會議所

設立年月	顧問	役員	理事	一號	二號	計	一級	二級	計	經費豫算
昭和七年三月	四	二	一	四	七	三	二七	五四	五七	一七、五四二

市道 延長一〇六、二六二米、平均幅員四、五四〇米で、維持修理費は一三、二八七圓を要してゐる。

汽車電車、橋内延長哩數 (昭和九年末)

區 別	停車場(門司起點より)	構内線延長
鐵 道	鹿 兒 島 本 線	一七軒二四〇米
九 軌 電 車	戶 畑 線	二四軒三八〇米
臨 港 鐵 道 線	自 戶 畑 驛 至 臨 港 主 要 地	一軒一七一米
		四軒九七〇米

戸畑市については上述の他に、文化、社會的諸機關、保健衛生設備等についても述べるべきであるが、紙數の關係上其等の施設の殆んど全ては完成されるか或は完成の途上にあると云ふことだけを述べておくに止めたい。

金融方面では、次の如くである。

十七銀行戸畑支店	大正十年九月設立
大村銀行戸畑支店	大正十五年八月設立
豊前銀行戸畑支店	昭和五年十二月設立
戸畑無盡株式會社	大正三年二月設立
戸畑信用組合	昭和三年八月創立
戸畑第一信用組合	昭和三年九月創立

高谷鐵工所

戸畑市の南方、市の唯一の河川である天籟寺川の河口は、西南牧山峠を経て八幡市に續き、東は小倉市に通じて電車、自動車等の交通機關の便のために各種の大工場があるが、その内に個人鐵工所として出發した所謂地付き工



高谷鐵工所工場の一

場高谷鐵工所の存在は、異彩である。同鐵工所は設立の歴史に於ては諸工場中最も古く

明治二十七年の設立であつて明治時代の鐵工業に見るが如く當初は、鑄造、機械仕上、銀冶、製罐等の一般鐵工品製作に過ぎなかつたものであつた。大正七年五月合資會社に改め規模を擴大し、昭和六年同九年と前三回に渉る規模擴張し、現在では小型機械の製作工場として異色ある存在を斯界に投じてゐる。現在の主要製品は高級鉄鑄物を主體とする電氣機械、化學鑛山用諸機械、非鐵合金鑄造等で年産三六〇〇噸に上つてゐる。左に諸生品の細別表を掲げて置かう。最大製品の大きさ 最大重量十五噸、直徑十八呎高さ十呎の範圍

一ヶ年平均生産高の實績 バルブ及コック類一五〇〇〇噸、コンデンサ一類三五〇〇、甍唧筒及附屬品一〇〇〇、電動機部分品一五〇〇噸 化學工業用諸機械二八〇〇、甍鑄鐵製部分品三〇〇〇噸、鑛山用諸機械及部分品八五〇噸、非鐵合金製品三八〇噸、其他機械部分品及修理一五〇〇噸

六七〇

アオキ 石鹼 化粧品 製造所

飯塚市立岩八二六番地にある青木桂一郎氏の經營するアオキ石鹼化粧品製造所は、大正六年四月創業である。

現在資本金は三拾萬圓であつて、製品は化粧石鹼、洗濯石鹼、化粧、蠟燭殺蟲劑等であるが、その主要商品マークは次の如くである。

アオキホーサン石鹼、アオキ黒砂糖石鹼、アオキ粉末石鹼、アオキ記念號石鹼、アオキクリーム、アオキローソク、卵乳石鹼

然して當所の販路は、九州一圓、中國、臺灣、朝鮮の一部で年産額は壹百萬圓に及んでおり、納入先も日鐵二瀨鑛業所、第十二師團經理部、三井、三菱、古河、貝島、麻生、藏内、日本炭礦、明治鑛業、金丸鑛業、昭和鑛業の各主要鑛山業の大手筋會社に納入してゐるのを始めとして、大小各會社官廳に納入して好評を得てゐる飯塚市唯一の化學工場である。

現主腦部代表者たる青木桂一郎氏は、斯業界での手腕家であつて、中堅の代理店主を以つてアオキ同志會を組織し、需給の圓滑と共存共榮の實を收め販賣の主力とならしめ、或は東阪の石鹼の壓迫に對抗してよく孤軍奮闘する等、地方實業家中の一方の權威であると云ふも過言ではあるまい。

第廿二章 飯塚市と産業

第一節 飯塚市

(1) 地勢

飯塚市の位置は福岡縣の中軸嘉穂平野の中心にあつて、廣袤東西一里十町南北一里二十六町、面積一方里一分四厘、東は庄内村、南は稻築村、穗波村西は鎮西村、二瀨町に接して遠く關の山、古處山、三郡山等の諸山脈を望み北は幸袋町、瀬田村に境し、東西南を圍繞する諸山脈に源を發してゐる嘉麻



を賞し、各郷里に還歸し給ひ、大御帝都に還り坐ける時、兵士等猶躑して何時又天顏を拜し奉らむと深く歎き慕ひしにより、名付けてイツカ(飯塚)の里と云ひ傳へ、又一説には辨阿上人今より七百四、五十年前浄土宗鎮西派開

山の際本市太養院に在りて鎮西村明星寺虚空藏再興及九重の塔御建立の時、郡民を集め良材を運び給ふ時、炊きし飯は積りて宛ら小山となり、塚の如く依て名付けて飯塚村と云傳へり。爾來戰國時代は杳として明らかならざるも、徳川幕府時代に至り九州諸公參觀交代



高谷鐵工所工場の一部

要製品は高級鉄鑄物を主體とする電氣機械、化學鑛山用諸機械、非鐵合金鑄造等で年産三六〇〇噸に上つてゐる。左に諸生品の細別表を掲げて置かう。
最大製品の大きさ 最大重量十五噸、直徑十八呎高さ十呎の範圍

明治二十七年の設立であつて、明治時代の鐵工業に見るが如く當初は、鑄造、機械仕上、鍛冶、製罐等の一般鐵工品製作に過ぎなかつたものであつた。大正七年五月合資會社に改め規模を擴大し、昭和六年同九年と前三回に渉る規模擴張し、現在では小型機械の製作工場として異色ある存在を斯界に投じてゐる。現在の主

造所は、大正六年四月創業である。現在資本金は三拾萬圓であつて、製品は化粧石鹼、洗濯石鹼、化粧、蠟燭殺蟲劑等であるが、その主要商品マークは次の如くである。
アオキホーサン石鹼、アオキ黒砂糖石鹼、アオキ粉末石鹼、アオキ記念號石鹼、アオキクリーム、アオキローソク、卵乳石鹼
然して當所の販路は、九州一圓、中國、臺灣、朝鮮の一部で年産額は壹百萬圓に及んでおり、納入先も日鐵二瀨鑛業所、第十二師團經理部、三井、三菱、古河、貝島、麻生、藏内、日本炭礦、明治鑛業、金丸鑛業、昭和鑛業の各主要鑛山業の大手筋會社に納入してゐるのを始めとして、大小各會社官廳に納入して好評を得てゐる飯塚市唯一の化學工場である。
現主腦部代表者たる青木桂一郎氏は、斯業界での手腕家であつて、中堅の代理店主を以つてアオキ同志會を組織し、需給の圓滑と共存共榮の實を收め販賣の主力とならしめ、或は東阪の石鹼の壓迫に對抗してよく孤軍奮闘する等、地方實業家中の一方の權威であると云ふも過言ではあるまい。

第廿二章 飯塚市と産業

第一節 飯塚市

(1) 地勢

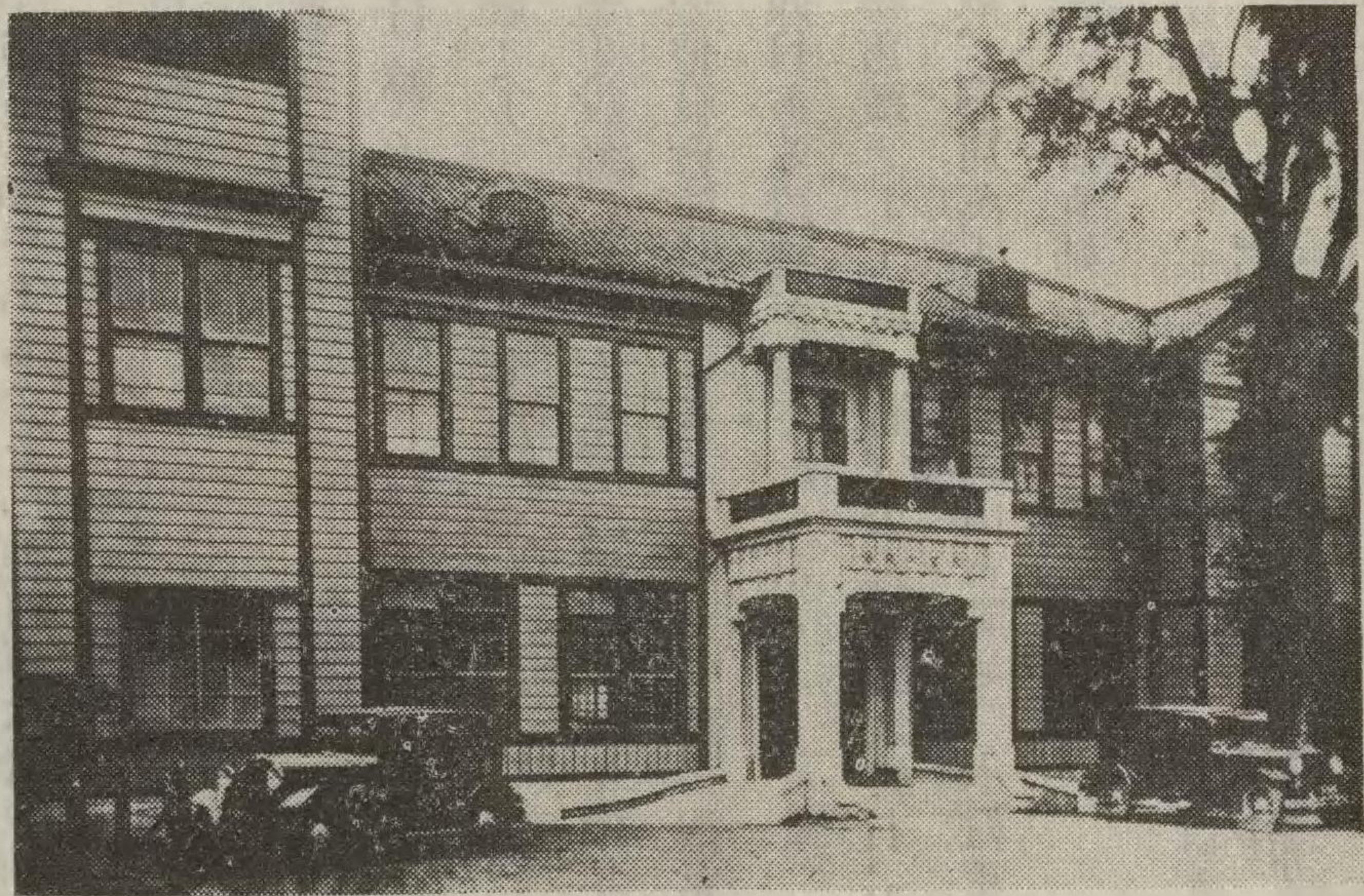
飯塚市の位置は福岡縣の中軸嘉穂平野の中心にあつて、廣袤東西一里十町南北一里二十六町、面積一方里一分四厘、東は庄内村、南は稻築村、穂波村西は鎮西村、二瀨町に接して遠く關の山、古處山、三郡山等の諸山脈を望み北は幸袋町、穎田村に境し、東西南を圍繞する諸山脈に源を發してゐる嘉麻川、穂波川は嘉穂平野を貫通し、市部に於て合流して遠賀川となつて北流してゐる。隣接地及市部地形は平坦で農産物の豐饒地として知られ、特に筑豊炭田の中樞として幾多の大炭坑が經營され、石炭の地下埋藏量は縣下最大とさへ謂はれてゐる。

(2) 沿革

飯塚市の沿革として幾多の史文が發展せられてゐる。こゝでは市要覽に記載せられたるものを左に引用しておかう。

「神功皇后三韓より御凱陣の砌蹕を嘉穂郡大分村に駐めて從軍兵士の功勞

福岡縣産業の卷



飯塚市役所

形成し商工業殷盛に赴き、村勢は漸次發達し來り、幕末に至り飯塚村に福岡藩六區の調所を置き、區長助務以下の役員ありて事務を處理し、更に其の下に嘉麻郡、穂波郡を六ヶ小區に分ち、各小區に大庄屋ありて之を管理せり。大庄屋の下各村に庄屋ありて大庄屋の職務を補佐し居たり。爾後數年を経て戸長副戸長の制となり、各村に保長を置き、明治十一年に至り從

を賞し、各郷里に還歸し給ひ、大御帝都に還り坐ける時、兵士等猶躰して何時又天顏を拜し奉らむと深く歎き慕ひしにより、名付けてイツカ(飯塚)の里と云ひ傳へ、又一説には辨阿上人今より七百四、五十年前淨土宗鎮西派開

山の際本市太養院に在りて鎮西村明星寺虚空藏再興及九重の塔御建立の時、郡民を集め良材を運び給ふ時、炊きし飯は積りて宛ら小山となり、塚の如く依て名付けて飯塚村と云傳へり。爾來戰國時代は否として明らかならざるも、徳川幕府時代に至り九州諸公參觀交代の要路に當り、筑前六宿の一に定められ、代官所其の他の役所設けられ、旅館商店等軒を列べ、既に市街を

來の調所を廢し、飯塚村に嘉麻穂波郡役所を置き、六小區を更に十二小區に改め、各小區に戸長、副戸長、保長ありて諸般の事務を司りたり。明治二十二年町村制實施と共に飯塚、徳前、菰田の三村を合し町制を布き飯塚町と改め、上三緒、下三緒、栢ノ森、立岩、川島、鯉田の各村を合せて笠松村と改稱せり。

明治初年頃より擡頭したる石炭礦業は、鯉田炭坑の明治十三年開鑿以來數多の大炭山の勃興するあり、頻りに町勢の進展を來し、明治四十二年飯塚村に笠松村を合併して以來、鐵道々路の發達に伴ひ地理的並に地勢的に恵まれ、戸數人口は年を追うて激増し、屢々世論を喚起したる市制施行も茲に町民總意の向ふ所となり、昭和六年八月二十二日付を以て市制施行申請中同年十二月二十九日付内務省告示第二九二號により飯塚町の區域を以て市制施行の義發布せらるゝに至り、昭和七年一月二十日市制を施行したり。

(3) 市 勢

飯塚市の人口は戸數八千廿五戸、人口四萬一千六百四十三人を算し、筑豊地方に於ける石炭工業の中心都市としては最大の都市であり、市區域の商工業は近年愈々發展擴大しつゝある。飯塚市の發展は次の市歳入出豫算の累進的增加によつてもその一端が窺はれよう。

年 度	歳 入 (圓)	歳 出 (圓)
大 正 六 年	九七、五七一	九六、二五四
昭 和 二 年	三三五、八七二	三二〇、九七九
昭 和 十 年	四六三、二六八	四六三、二六八

産業方面に於ては市地域の産業は冒頭に一言した如く石炭が最なるもので

十萬圓を以つて創立されたものである。

越えて昭和七年三月、有田氏經營の福岡、飯塚連絡の福飯自動車株式商會を買收して姉妹會社となし、更に昭和十年十月には沿線の篠栗、吉塚間の聯合自動車路線をも買收擴大し、爾來社業は發展の一路を進んでゐる。

同社の使用する車臺はダツチブラザー十人乗りで、現在三十六臺を算し、一日平均八十四回の回轉をなしてゐる。營業時間は毎日午前六時より午後八時三十迄で、福岡、飯塚の兩市停留所より十分毎に發車してゐるために利用者が多く、この兩市連絡所要時間は一時間二十五分の短時間で、料金は八十錢である。一ヶ月乗客數三萬五千名である。毎期利益は増加の一途を辿つてゐる有様で、將來福飯間の産業上の提携が密接の度を加へるにつれ、唯一の連絡機關たる同社の社業は強大になるであらうことは豫斷してもよいであらう。

現在同社重役は社長永島傳太郎、専務取締役赤坂猛、取締役中尾松太郎、高松宮吉、日原龜太郎、監査役尾原耕作、土田廣士、重岡篤の諸氏で、

(4) 交 通

金融其他商工業の繁榮は後段に述べる各會社の業績が示してゐる如くである。國鐵飯塚驛、新飯塚驛、鯉田驛、上三緒驛があり、これら一日平均乗客數は四驛を合して八千三百七十九人、發送貨物一、三四八、八一二噸到着貨物一五九、四〇〇噸である。その他諸車は次の如くである。

自動車	乗 用	貨 物	小 車	人力車	リヤカー
馬 車	一九四	一六	七四二	一六	八七二
自 轉 車	三、八一二				

官廳としては區裁判所、刑務支所、警察、二、三等郵便局、土木管區等々で、衛生設備に於ても水道設備(大正十四年十月三十日完成)に於ても、學校その他社會施設等に於ても、市當局の異常なる努力によつて近代都市としての面目ある設備が施されてゐる。

名勝舊蹟としては、勝守公園、元大神石、古館城地、飯ノ山、古墳、茶臼山勝負坂、洞窟萬古洞、土師山古戰場、木村重成息千代丸の墓、大墓、野村大學の墓、石童丸姉の墓等の史跡がある。

九州自動車株式會社

飯塚と福岡を連絡する唯一の機關として九州自動車株式會社の事業は見逃せない。同社は昭和二年十月飯塚市と福岡市間の自動車路線所有者青柳、兒島(永島、田原)三共(中尾、高辻、赤坂)の三者の合併によつて、資本金四

停留所を經由し絶えず運轉してゐる。

本社は福岡縣飯塚市吉原町にあり、久留米市驛前、田川郡後藤寺町驛前、京都郡行橋町驛前に出張所を設置し、業務の順調を圖つてゐる。

同社の經營には社長中尾松太郎、専務取締役吉田繁、取締役淵上代吉、同野見山幡次郎、赤坂猛、田原龜太郎、實藤寅雄、清水熊吉、高辻角太郎の諸氏が當つて發展せしめてゐる。

金本吳服店と金本三郎氏

氏は明治二十一年利兵衛氏の長男に生れ、嘉穂郡穂波村大字天道丸吉吳服店々員として勤續二十餘年、主家に盡す事眞劍の努力を以てし、遂に同店支配人となる。關西方面の卸元、丸紅、伊藤忠其他の信用愈々篤く、奮闘家の有爲の青年として將來を囑望される事となり、基礎を築くに至つた、大正十三年飯塚市本町二堂々と獨立して吳服店を開業す。氏の才能は遺憾なく發揮され

まれ戸数人口は年を追うて激増し、屢々世論を喚起したる市制施行も茲に町民總意の向ふ所となり、昭和六年八月二十二日付を以て市制施行申請中同年十二月二十九日付内務省告示第二九二號により飯塚町の區域を以て市制施行の義發布せらるゝに至り、昭和七年一月二十日市制を施行したり。

(3) 市 勢

飯塚市の人口は戸數八千廿五戸、人口四萬一千六百四十三人を算し、筑豊地方に於ける石炭工業の中心都市としては最大の都市であり、市區域の商工業は近年愈々發展擴大しつゝある。飯塚市の發展は次の市歳入出豫算の累進的增加によつてもその一端が窺はれよう。

年 度	歳 入 (圓)	歳 出 (圓)
大 正 六 年	九七、五七一	九六、二五四
昭 和 二 年	三三五、八七二	三二〇、九七九
昭 和 十 年	四六三、二六八	四六三、二六八

産業方面に於ては市地域の産業は冒頭に一言した如く石炭が最なるもので

十萬圓を以つて創立されたものである。

越えて昭和七年三月、有田氏經營の福岡、飯塚連絡の福飯自動車株式商會を買収して姉妹會社となし、更に昭和十年十月には沿線の篠栗、吉塚間の合自動車路線をも買収擴大し、爾來社業は發展の一路を進んでゐる。

同社の使用する車臺はダツチブラザー十人乗りで、現在三十六臺を算し、一日平均八十四回の回轉をなしてゐる。營業時間は毎日午前六時より午後八時三十迄で、福岡、飯塚の兩市停留所より十分毎に發車してゐるために利用者が多く、この兩市連絡所要時間は一時間二十五分の短時間で、料金は八十錢である。一ヶ月乗客數三萬五千名である。毎期利益は増加の一途を辿つてゐる有様で、將來福飯間の産業上の提携が密接の度を加へるにつれ、唯一の連絡機關たる同社の社業は強大になるであらうことは豫斷してもよいであらう。現在の同社重役は社長永島傳太郎、専務取締役赤坂猛、取締役中尾松太郎、高松常吉、田原龜太郎、監査役梶原耕作、辻田廣士、重岡篤の諸氏で、本社は飯塚吉原町にあり、福岡市吳服町に福岡支社がある。

嘉穂自動車株式會社

嘉穂自動車株式會社は、昭和三年十二月現營業路線各經營者合同して資本金六十萬圓を以つて設立されたものにして、飯塚市を起點として久留米、二日市、直方、後藤寺、行橋外嘉穂郡内合計十六路線の經營をなし、それ等路線に使用せる自動車數五十七臺を有し、飯塚地方交通運輸に至大なる利便を興へてゐる。創設以來日未だ淺きにも拘らず、その業績は顯著にして同地方の産業發展に貢献する所尠からず。一日の延運轉哩數も四千五百哩に及び、各

馬 車 一三 リヤカー 八七二
自 轉 車 三、八一二

官廳としては區裁判所、刑務支所、警察、二、三等郵便局、土木管區等々で、衛生設備に於ても水道設備(大正十四年十月三十日完成)に於ても、學校その他社會施設等に於ても、市當局の異常なる努力によつて近代都市としての面目ある設備が施されてゐる。

名勝舊蹟としては、勝守公園、元大神石、古館城地、飯ノ山、古墳、茶臼山、勝負坂、洞窟萬古洞、土師山古戰場、木村重成息千代丸の墓、大墓、野村大學の墓、石童丸姉の墓等の史跡がある。

九州自動車株式會社

飯塚と福岡を連絡する唯一の機關として九州自動車株式會社の事業は見逃せない。同社は昭和二年十月飯塚市と福岡市間の自動車路線所有者青柳、兒島(永島、田原)三共(中尾、高辻、赤坂)の三者の合併によつて、資本金四

停留所を經由し絶えず運轉してゐる。

本社は福岡縣飯塚市吉原町にあり、久留米市驛前、田川郡後藤寺町驛前、京都郡行橋町驛前に出張所を設置し、業務の順調を圖つてゐる。

同社の經營には社長中尾松太郎、専務取締役吉田繁、取締役淵上代吉、同野見山幡次郎、赤坂猛、田原龜太郎、實藤寅雄、清水熊吉、高辻角太郎の諸氏が當つて發展せしめてゐる。

金本吳服店と金本三郎氏

氏は明治二十一年利兵衛氏の長男に生れ、嘉穂郡穗波村大字天道丸吉吳服店々員として勤續二十餘年、主家に盡す事眞劍の努力を以てし、遂に同店支配人となる。關西方面の卸元、丸紅、伊藤忠其他の信用愈々篤く、奮闘家の有爲の青年として將來を囑望される事となり、基礎を築くに至つた。大正十三年飯塚市本町に堂々と獨立して吳服店を開業す。氏の才能は遺憾なく發揮され目覺ましい發展振りにて年々増築、亦改築を行ひ、約十餘年にして二市四郡を販路とする大吳服店となる事を得た。氏は非凡なる才能を有し、揮身の努力を惜まず、道德觀念の強い人格者にして徳望あり、店員は此の氣風を享け顧客に對し眞心より親切丁寧であつて、非常の好評を受けて居る。營業方針も大に合理化され、組織を合資會社となし六部、に分割し各部に部長を置き、部長一切の責任を以て經營の任に當る。亦斯業に關しては細密に亘り其研究を怠らず尖端を走つて居る。飯塚市が商工會議所を設置するに際し選ばれて議員となり、商業部長の要職にあり、亦修養團體より招聘されて講演する等の社會奉仕もやつて居り、其前途は多幸なる人である。

第廿三章 直方市と産業

第一節 直方市

(1) 位置及沿革

直方市は筑豊の中央に位し、東は企救郡中谷村に、西は鞍手郡宮田町に、南は田川郡上野村に、北は鞍手郡木屋瀬、植木兩町に接し、市の中央を遠賀川が流れ、東に秀峰福智山脈を巡らし、炭都に對比して山紫水明、風光絶佳にして、往時東蓮寺と稱してゐた(當時眞言宗道場東蓮寺があつたので寺の名をとつてゐたもの)寺院は、境内八町餘、塔頭八院の大伽藍であつたが、足利亂世時代兵火に罹り、寛永二年黒田長政家臣井上周防、吉田壹岐の兩人をして一子高政の居館の地をこの地に定め、遠賀、鞍手、嘉穂、穂波四郡の地四萬石を分領し士宅、商業を營み、俄かに殷賑を呈したが、元祿元年黒田長清の時五萬石に増領され、妙見山に城廓を築き、商工者の激増に依り一層の繁華を招來した。延暦三年邑名東蓮寺を直方と改稱したが、地名の起源は足利時代南朝方の志士が集つたので「皇方」と云ひ、後轉訛して「直方」となつたと云ひ傳へられる、享保五年長清歿し、嗣子繼高は黒田宗家を繼ぐことになり、福岡へ還城される様になつて商工業は衰微するので、參觀交代の通路を直方

に定めて貰ひ、産業の獎勵に努力し繁榮の挽回に努め、明治維新後石炭鑛業勃興に伴ひ、隨所に炭坑が開鑿されて筑豊炭田一帯の物資は總て直方に集中し遠賀川の水便により下流芦屋、若松方面に運ばれると云つた風で、物資集散地は直方とされたもので、出船千艘入船千艘と謳はれたのも當時を云ふのである。明治二十二年町村制



直方市役所

ある。明治二十二年町村制實施され直方町となり、同二十四年筑豊鑛業鐵道株式會社の鐵道が布設、直方驛が出来てスピード輸送の利が盛んとなり、長足的な進歩發達を遂げ、大正十五年一月一日新入、福地、下境、頓野の四ヶ町村を合併して大直方町を建設、昭和六年一月元旦を卜して市制を施行され、今日に至つたものであるが、現在東西一、五六キロ、南北六、六五

キロと云ふ大面積を有し、交通機關としては筑豊本線に直方、中泉の二驛、直方驛から田川郡伊田驛を経て日豊線行橋線に接続する田川線があり、現在では一日の列車上下發車百五十餘回を突破し、石炭輸送の炭車中繼數は一日二千臺を越えることもある。私鐵としては鞍手郡福丸に至る鞍手軌道と、乘

合自動車は直方驛を中心に福岡、八幡、飯塚各市へ通ずる定期路線が二十有餘に達してゐる。直方市に於ける重要産業としては鐵工業で、工場數は百六それに働く者約二千名、これが一ヶ年の生産高は實に八百萬圓の巨額にのぼつてゐる。各種卸業としても筑豊地方に誇る大商店が櫛比し、堅實な歩みを續け、黒ダイヤ景氣の餘波に乗つて景氣の絶頂にある。

(2) 財政

直方市の財政を示すと、(昭和十一年度豫算)總額六五一、一九七圓で歳入の重なるものでは市税二七五、一四八圓、使用料及手数料一六、一九二圓、國庫下渡金三四、九六八圓、雜收入六、九五七圓、歳出の主なるものは、役所費六六、六九六圓、土木費二六、九四九圓、教育費一三三、六三五圓、産業費八三、六三〇圓、上水道費八二、六五〇圓、特別戸數割一戸平均一六圓五十錢となつてゐる。

頓野安入寺、諸九尼墓、鴨生田公園、小野幸田内ヶ磯遊園地等々の史蹟があり、筑豊唯一のオアシスとして遊覽客が相等多い。

吳服問屋水町商店

筑豊炭田きつての吳服卸商として、直方市古町の水町商店は餘りにも有名な存在である。抑々開店以來今年で十七年、永い様でもまだ他の商店に比して見れば日なほ淺い店としか云ひ得ぬであらうが、全く店主水町信一氏の努力に外ならぬ、同店の沿革に「大正三年徒手空拳より身を起し、感ずる所あつて直方に來つて吳服商を營み、店主の信條たる誠の一字をモットーとし、刻苦奮勵臥薪嘗膽茲に五ヶ年、漸くにして大正八年五月直方町明神町に吳服卸商を創業し、爾來五ヶ年而して地理的環境の不便と店舗狹隘から、直方の銀座とも稱される古町に昭和三年七月新築移轉、其後數回に亘り増築云々」とある

直方市は筑豊の中央に位し、東は企救郡中谷村に、西は鞍手郡宮田町に、南は田川郡上野村に、北は鞍手郡木屋瀬、植木兩町に接し、市の中央を遠賀川が流れ、東に秀峰福智山脈を巡らし、炭都に對比して山紫水明、風光絶佳にして、往時東蓮寺と稱してゐた(當時眞言宗道場東蓮寺があつたので寺の名をとつてゐたもの)寺院は、境内八町餘、塔頭八院の大伽藍であつたが、足利亂世時代兵火に罹り、寛永二年黒田長政家臣井上周防、吉田壹岐の兩人をして一子高政の居館の地をこの地に定め、遠賀、鞍手、嘉穂、穂波四郡の地四萬石を分領し土宅、商業を營み、俄かに殷賑を呈したが、元祿元年黒田長清の時五萬石に増領され、妙見山に城廓を築き、商工者の激増に依り一層の繁華を招來した。延暦三年邑名東蓮寺を直方と改稱したが、地名の起源は足利時代南朝方の志士が集つたので「皇方」と云ひ、後轉訛して「直方」となつたと云ひ傳へられる、享保五年長清歿し、嗣子繼高は黒田宗家を繼ぐことになり、福岡へ還城される様になつて商工業は衰微するので、參觀交代の通路を直方

合自動車は直方驛を中心に福岡、八幡、飯塚各市へ通ずる定期路線が二十有餘に達してゐる。直方市に於ける重要産業としては鐵工業で、工場数は百六それに働く者約二千名、これが一ケ年の生産高は實に八百萬圓の巨額にのぼつてゐる。各種卸業としても筑豊地方に誇る大商店が櫛比し、堅實な歩みを續け、黒ダイヤ景氣の餘波に乗つて景氣の絶頂にある。

(2) 財政

直方市の財政を示すと、(昭和十一年度豫算) 總額六五一、一九七圓で歳入の重なるものでは市税二七五、一四八圓、使用料及手数料一六、一九二圓、國庫下渡金三四、九六八圓、雜收入六、九五七圓、歳出の主なるものは、役所費六六、六九六圓、土木費二六、九四九圓、教育費一三三、六三五圓、産業費八三、六三〇圓、上水道費八二、六五〇圓、特別戸數割一戸平均一六圓五十錢となつてゐる。

市當局の産業施設の一大事業として工場地帯設置問題が擡頭し、着々と實現に向つて努力しつゝあるが、これは都市計畫實施後市内に散在してゐる百餘工場を全部工場地帯内に移轉させ、電力の共同購入、製品賣買並に材料購入に便ならしむる様鐵道引込線の布設を圖り、一方商業地帯としては煤煙や雜音を去つて美化に努め、商工業の發展を期する計畫となつてゐるので、今後直方市の産業は大いに期待するものがあるであらう。

なほ市内の名勝としては鷹取城趾、岡森堰、日若公園、福智山のスキー場



が出來てスピード輸送の利
用が盛んとなり、長足的な
進歩發達を遂げ、大正十五
年一月一日新入、福地、下
境、頓野の四ヶ町村を合併
して大直方町を建設、昭和
六年一月元旦を卜して市制
を施行され、今日に至つた
ものであるが、現在東西一
一、五六キロ、南北六、六五

キロと云ふ大面積を有し、交通機關としては筑豊本線に直方、中泉の二驛、直方驛から田川郡伊田驛を経て日豊線行橋線に接続する田川線があり、現在では一日の列車上下發車百五十餘回を突破し、石炭輸送の炭車中繼數は一日二千臺を越えることもある。私鐵としては鞍手郡福丸に至る鞍手軌道と、乘

頓野安入寺、諸九尼墓、鴨生田公園、小野幸田内ヶ磯遊園地等々の史蹟があり、筑豊唯一のオアシスとして遊覽客が相等多い。

吳服問屋水町商店

筑豊炭田きつての吳服卸商として、直方市古町の水町商店は餘りにも有名な存在である。抑々開店以來今年で十七年、永い様でもまだ他の商店に比して見れば日なほ浅い店としか云ひ得ぬであらうが、全く店主水町信一氏の努力に外ならぬ、同店の沿革に「大正三年徒手空拳より身を起し、感ずる所あつて直方に来つて吳服商を營み、店主の信條たる誠の一字をモットーとし、刻苦奮勵臥薪嘗膽茲に五ケ年、漸くにして大正八年五月直方町明神町に吳服卸商を創業し、爾來五ケ年而して地理的環境の不便と店舗狹隘から、直方の銀座とも稱される古町に昭和三年七月新築移轉、其後數回に亘り増築云々」とあるが實に斯くの如くで沿革中にある様に無一文からたゞきあげ、現在營業範圍としては九州一圓は勿論日本全國及滿洲、ハワイ方面へ迄延び、賣上高も年間三百萬圓以上ののぼり、筑豊の水町から九州の水町へ、九州の水町から日本水町へと飛躍し、今日の隆盛を見てゐるのも、店のモットーたる誠を盡してゐるからであらう。

店員も二百餘名が仕入に或は發送荷造りに、來客の應接に目まぐるしい迄に活躍し、全くこゝばかりは不景氣知らずの感がする。

第廿四章 久留米市と産業

第一節 久留米市

(1) 地 勢

久留米市は福岡縣の南部大半を占むる筑後地方における、唯一の都市である。筑後平野の中央に位して、市街地は殆んど平坦で氣候も溫和で、總面積一、五四六方里東西一里二十五町三十間、南北一里三十一町十五間である。昭和十年度の國勢調査に據れば、戸數二萬二千三百戸、人口十萬で男四萬七千人、女五萬三千人を數へ、女子の多いことは都市として珍らしい現象であるが、これは後に見る如く久留米市産業に依るものであらう。

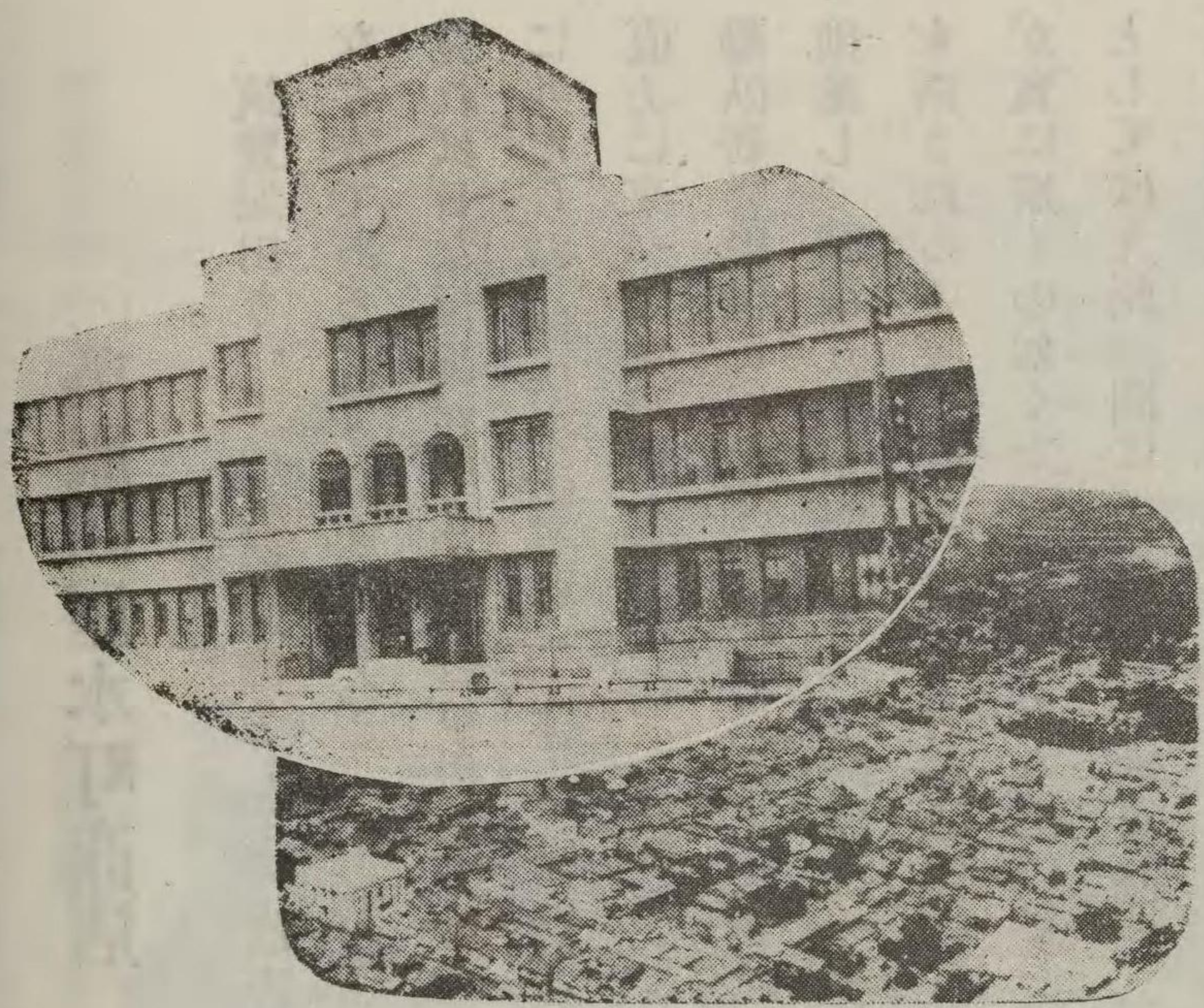
(2) 沿 革

久留米市制は、明治二十二年に施行されたもので、元和七年有馬豊氏が丹波より轉封されて以來、三百有餘年有馬氏の統管した領地であり、今に残る久留米の城跡は有馬氏の居城であつたもの。久留米の名稱については二つの説があつて、一は上古我が建國の元勳大久米命がこの地を領してゐられたことから久留米と轉訛したものでありとし、他は上古織部の民である吳部族が

占居してゐたから、其祖神久瑠見の名が轉訛したと言ひ傳へられてゐる。然しその出所はともあれ、筑後平原における唯一の城下町として、久留米は古くから發展した都會としての歴史を有つて今日に及んだ都市である。

(3) 交 通

國鐵路線の主要な驛としては次の如くである。



久留米市役所と市街

久留米驛 鹿兒島本線並に

長崎本線、それに九州横斷幹線たる久大線の要驛として、軍事、産業、觀光の三大使命を負ひ、乗降客數と貨物取扱高に於て有數の高を示し、久留米市並に筑後路の大支關口として又九州各方面への幾十條のバス路線の放射點をなしてゐる。

省線南久留米驛 久大線

南久留米驛は野中町に在り西町國分方面の觀賞植物地帯並に軍隊關係方面への要

驛として乗降客及貨物の輸送が盛んである。

九鐵久留米驛 (東町)久留米驛よりバス七分、急行電車を以て福岡市博多

天神町まで五十四分を以て福岡久留米を結ぶ交通機關として、近時益々利用され、この急行電車の貫通は沿線の農村地方の農業開發を促進してゐる。
上久留米驛 省線久留米驛の西南一丁繩手町に在り、大川ガソリンカー線の起點で、三潞郡大川町に通じ、東洋第一の大鐵橋を跨る筑後川口若津港を経て省線佐賀線に接續してゐるが、この久留米、大川間の交通は産業上の利益倍加し、久留米、大川二市町のより以上の強き結合を齎らすであらう。

日吉町停留所 市内の繁華街日吉町交叉點の停留所は、九鐵支線三井電車を以て朝倉郡甘木(太切洗)方面並に八女郡福島方面に通じ、郡部産業上重要な交通機關となつてゐる。

以上の鐵道並に交通機關の外に久留米地方の重要な交通機關として、自動車網の存在は特に久留米に於ては抹殺出來ない。省線久留米驛前に本社を有してゐる連絡自動車は、創立は昭和三年十月、同十二月に筑後軌道の路線を譲り受け、昭和十年四月に久留米自動車を買収、現在資本金(久留米自動車を合

ら全線のバスが久留米に集るので、一日中に於けるその車輛數は正に數臺千に達し、文字通り久留米名物バスの洪水を現出してゐる。又觀光バスとして現在久留米市の自動車數は三百餘臺を數へてゐる。久留米市内並に筑後一圓の觀光バスは久留米觀光協會に於て斡旋してゐる。

久留米連絡自動車會社

久留米市民の足である久留米自動車會社の前身は、筑後軌道會社自動車部で、昭和三年十月同會社より讓渡を受け、資本金二十萬圓をもつて創設されたもので、爾來社運隆々として旭日昇天の勢で發展を遂げ、昭和十年四月にはかねて競争會社たりし久留米自動車會社を合併し、久留米市を中心とした地域の交通網を完全に獨占し、強力なるバスブロックを結成するに至つた。即ちその運轉系統を一瞥すれば、市内全線は勿論、この外久留米驛を起點と

久留米市は福岡縣の南部大半を占むる筑後地方における、唯一の都市である。筑後平野の中央に位して、市街地は殆んど平坦で氣候も溫和で、總面積一、五四六方里東西一里二十五町三十間、南北一里三十一町十五間である。昭和十年度の國勢調査に據れば、戸數二萬二千三百戸、人口十萬で男四萬七千人、女五萬三千人を數へ、女子の多いことは都市として珍らしい現象であるが、これは後に見る如く久留米市産業に依るものであらう。

(2) 沿革

久留米市制は、明治二十二年に施行されたもので、元和七年有馬豊氏が丹波より轉封されて以來、三百有餘年間に有馬氏の統管した領地であり、今に残る久留米の城跡は有馬氏の居城であつたもの。久留米の名稱については二つの説があつて、一は上古我が建國の元勳大久米命がこの地を領してゐられたことから久留米と轉訛したものでありとし、他は上古織部の民である吳部族が



久留米市役所と市街

幹線たる久大線の要驛として、軍事、産業、觀光の三大使命を負ひ、乗降客數と貨物取扱高に於て有數の高を示し、久留米市並に筑後路の大支關口として又九州各方面への幾十條のバス路線の放射點をなしてゐる。

省線南久留米驛 久大線

南久留米驛は野中町に在り西町國分方面の觀賞植物地帯並に軍隊關係方面への要

驛として乗降客及貨物の輸送が盛んである。
九鐵久留米驛 (東町)久留米驛よりバス七分、急行電車を以て福岡市博多

天神町まで五十四分を以て福岡久留米を結ぶ交通機關として、近時益々利用され、この急行電車の貫通は沿線の農村地方の農業開發を促進してゐる。

上久留米驛 省線久留米驛の西南一丁繩手町に在り、大川ガソリンカー線の起點で、三潞郡大川町に通じ、東洋第一の大鐵橋を誇る筑後川口若津港を経て省線佐賀線に接続してゐるが、この久留米、大川間の交通は産業上の利益倍加し、久留米、大川二市町のより以上の強き結合を齎らすであらう。

日吉町停留所 市内の繁華街日吉町交叉點の停留所は、九鐵支線三井電車を以て朝倉郡甘木(太切洗)方面並に八女郡福島方面に通じ、郡部産業上重要な交通機關となつてゐる。

以上の鐵道並に交通機關の外に久留米地方の重要な交通機關として、自動車網の存在は特に久留米に於ては抹殺出來ない。省線久留米驛前に本社を有してゐる連絡自動車は、創立は昭和三年十月、同十二月に筑後軌道の路線を譲り受け、昭和十年四月に久留米自動車を買収、現在資本金久留米自動車を合して三十萬圓、車輛數百六十餘、従業員四百名、市内及び日田、佐賀、船小屋、保木、原鶴、吉井、草野、北野、鳥栖各方面への路線數六十餘、その延長四〇〇軒に達し、一日の運行千數百回と言はれて居り、その他久留米を起終點とする各會社の路線廿幾條を以て各方面への距離を短縮し、その主なる九州鐵道經營の八女線は山鹿熊本方面へ、同社の甘木線は太刀洗方面へ接続福島自動車の長野線、堀川自動車の黒木線は何れも福島、星野方面へ、末次内山田兩自動車の柳河線は何れも大川、大牟田方面へ、嘉穂自動車の飯塚線は嘉穂鞍手田川各方面へ、昭和、成富、江口各自動車の佐賀線は唐津、伊萬里武雄方面へ、大川鐵道經營の若津線は省線佐賀線との接続をなし、斯くてこれ

ら全線のバスが久留米に集るので、一日中に於けるその車輛數は正に數臺千に達し、文字通り久留米名物バスの洪水を現出してゐる。又觀光バスとして現在久留米市の自動車數は三百餘臺を數へてゐる。久留米市内並に筑後一圓の觀光バスは久留米觀光協會に於て斡旋してゐる。

久留米連絡自動車會社

久留米市民の足である久留米自動車會社の前身は、筑後軌道會社自動車部で、昭和三年十月同會社より讓渡を受け、資本金二十萬圓をもつて創設されたもので、爾來社運隆々として旭日昇天の勢で發展を遂げ、昭和十年四月にはかねて競争會社たりし久留米自動車會社を合併し、久留米市を中心とした地域の交通網を完全に獨占し、強力なるバスプロックを結成するに至つた。即ちその運轉系統を一瞥すれば、市内全線は勿論、この外久留米驛を起點とした豆田、保木、草野、吉井、北野、日田、羽犬塚、佐賀、船小屋線や、吉井一端間、御井町一鳥栖、佐賀一松隈等の路線を有し、宛然バス王國を形成してゐる。現社長は少壯敏腕の聞き高い竹下實氏、従業員は連絡系二百九十九名久留米自動車會社系八十名、合計三百七十名の堂々なる陣容である。

(4) 産業

久留米市の産業は最近素晴らしい躍進振りをみせ、特に筑後地方に於ける機械業界の中心都市として殷盛を極めてゐる。元來この地方の産業の端緒は元和年間に有馬藩がこの地方に轉封せられて以來、藩の勸業政策に基づいて、

農業經濟を基礎とした各種家庭手工業の發達を見たものであるが、明治維新の變革と共に、發達した資本主義は、久留米地方に於ける手工業的産業に一大變革を齎らした。

即ち足袋、ゴム靴、タイヤ、久留米緋、縞、タオル、久留米傘、藍胎漆器硝子製品、筑後木蠟の如き、從來の小規模工業の形態を放棄して近代的工場生産の基礎の上に立たしめるに至り、今日に見る如き有數な産業都市として屈指せられるに至つたものである。

特にゴム工業は、資本力の大、設備の近代的機械化並に技術化の點に於いて特筆すべきもので、昭和八、九年以來の我國貿易増進に伴つて海外への輸出増大を見、實に文字通りの躍進日本工業の寵兒で、久留米に於ける企業の花形である。左に久留米市域に於ける工業品の概況を示さう。

(1) 地下足袋、ゴム靴、ゴム底、帆布靴、支那靴、BSタイヤ、その他のゴム製品は、年産額二七、四七六、〇〇〇圓に上つてゐる。

(2) 久留米緋 年産額三、一四四、六九九圓

(3) 久留米織物 綿織物年産額六一八、八六三圓

絹織物及絹綿交織物一八、八四八圓

(4) 久留米傘 年産額一六六、二五〇圓

(5) 藍胎漆器 年産額一、二八、〇〇六圓

(6) 硝子製品 年産額一、四四、八六〇圓

以上の主要工業物の昭和十年度に於ける年産額總計は、實に三千三百卅八萬八千四百四十五圓に達し、人口、戸數比例よりも如何に久留米市が業市として活潑なる地方經濟の一要素であるかを判らう。

無盡會社 無盡會社としては南筑、共立、福岡、博濟の四會社が全市に勢力を持つてゐる。

市街地は諸取引の關係上料理屋業が多く、日吉町、西町方面には二百餘の料亭、待合、三百餘のカフェー食堂等があり、旅館、劇場、映畫常設館等も多い
市場 田町通りの久留米市場、東町の久留米青果市場及び切花市場、日吉町の公設市場を始め數箇所市場があつて、諸物品需給の圓滑を計つてゐる。

久留米商工會議所

久留米商工會議所は、明治三十二年商業會議所條例に依つて設立せられ、爾來歲月を閲すること茲に三十有八年、其の間日露大戰、歐洲大戰を始め、大正六年の金輸出禁止、同九年の財界大變動、昭和二年の財界恐慌、同五年の

(5) 農 業

久留米市は筑後平野の中央に位してゐる關係上、農業都市としても相當の産額を示してゐる。現在の耕地面積は

田 七、八六九反
畑 三、〇一一反

であつて、地味が肥沃であるために、年産額に於ても、觀賞植木類は九十三萬九千七百九十圓、切花類四萬七千圓を初め養蠶、蔬菜等の栽培は相當の成績を示してゐる。

然し市地域の工業の發達は漸次農業面積の減少を齎らしつゝあるし、人口の増加と筑後地方の交通機關の整備は、奥地の産物の集散地として久留米市の地域の減少を一層感ぜしめつゝある。

(6) 商 業

久留米市の商業の盛んなることは次の如き金融機關及び市街地の様相がこれを物語つてゐる。

久留米組合銀行に所屬する銀行としては、同市日吉町通りに軒を並べてゐる勸業銀行支店、住友支店、三和銀行支店、博銀支店、北野銀行支店、本町通りにある第一銀行支店、三本松町の十七銀行支店、東町の草野銀行支店、新町の不動貯金支店等がある。

産業組合 庶民金融機關の活動は久留米市に於て著るしく、久留米庶民金庫を始め七個の信用購買販賣組合がある。

介に應ずる外、組合の設立斡旋並に商品見本の證明、原産地の證明等をなすのみならず、各地の博覽會及商品見本市等に勧誘し、或は會議所自ら主催して之を開催して生産助長に努めつゝある。又經濟調査に關しては毎月主要商品の卸賣物價、日用品小賣物價、勞働賃金、出入貨物及主要生産品調査等を

なして關係各方面

に通報し、或は地

区内商工業者の参

考となるべき經濟

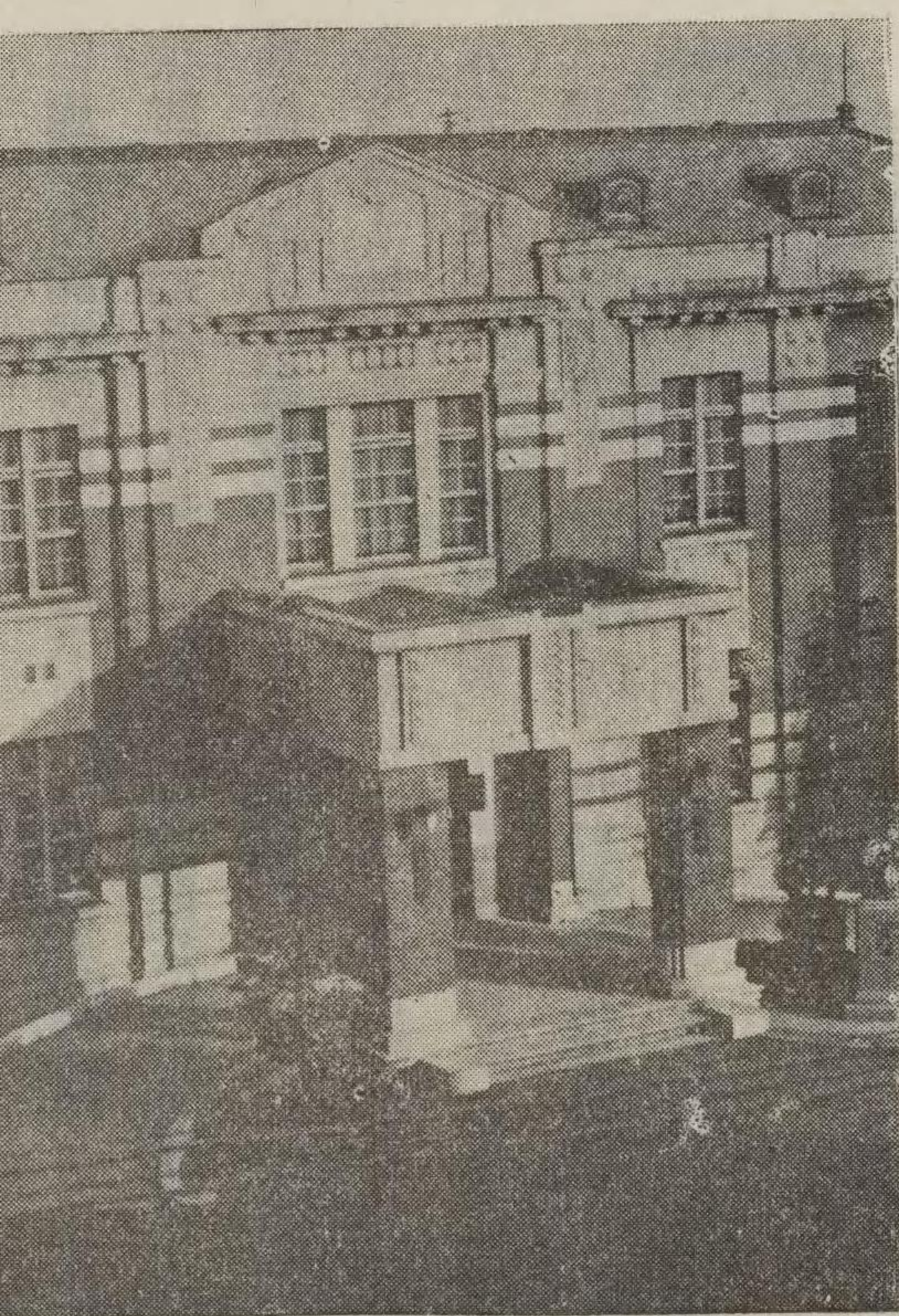
事情を時々會報等

によつて發表する

外商工人名錄、各

種パンフレット等

の圖書を刊行して



久留米商工會議所

て特筆すべきもので、昭和八、九年以來の我國貿易増進に伴つて海外への輸出増大を見、實に文字通りの躍進日本工業の寵兒で、久留米に於ける企業の花形である。左に久留米市域に於ける工業品の概況を示さう。

- (イ) 地下足袋、ゴム靴、ゴム底、帆布靴、支那靴、BSタイヤ、その他のゴム製品は、年産額二七、四七六、〇〇〇圓に上つてゐる。
- (ロ) 久留米耕 年産額三、二四四、六九九圓
- (ハ) 久留米織物 綿織物年産額六一八、八六三圓
絹織物及絹綿交織物一一八、八四八圓
- (ニ) 久留米傘 年産額一六六、二五〇圓
- (ホ) 藍胎漆器 年産額一二八、〇〇六圓
- (ヘ) 硝子製品 年産額一四四、八六〇圓

以上の主要工業物の昭和十年度に於ける年産額總計は、實に三千三百卅八萬八千四百四十五圓に達し、人口、戸數比例よりも如何に久留米市が業都として活潑なる地方經濟の一要素であるかと判らう。

績を示してゐる。

然し市地域の工業の發達は漸次農業面積の減少を齎らしつゝあるし、人口の増加と筑後地方の交通機關の整備は、奥地の産物の集散地として久留米市の地域の減少を一層感ぜしめつゝある。

(6) 商 業

久留米市の商業の盛んなることは次の如き金融機關及び市街地の様相がこれを物語つてゐる。

久留米組合銀行に所屬する銀行としては、同市日吉町通りに軒を並べてゐる勸業銀行支店、住友支店、三和銀行支店、博銀支店、北野銀行支店、本町通りにある第一銀行支店、三本松町の十七銀行支店、東町の草野銀行支店、新町の不動貯金支店等がある。

産業組合 庶民金融機關の活動は久留米市に於て著るしく、久留米庶民金庫を始め七個の信用購買販賣組合がある。

無盡會社 無盡會社としては南筑、共立、福岡、博濟の四會社が全市に勢力を持つてゐる。

市街地は諸取引の關係上料理屋業が多く、日吉町、西町方面には二百餘の料亭、待合、三百餘のカフェー食堂等があり、旅館、劇場、映畫常設館等も多い。市場 田町通りの久留米市場、東町の久留米青果市場及び切花市場、日吉町の公設市場を始め數箇所に市場があつて、諸物品需給の圓滑を計つてゐる。

久留米商工會議所

久留米商工會議所は、明治三十二年商業會議所條例に依つて設立せられ、爾來歲月を閲すること茲に三十有八年、其の間日露大戰、歐洲大戰を始め、大正六年の金輸出禁止、同九年の財界大變動、昭和二年の財界恐慌、同五年の金解禁等經濟的變革屢々ありしも、此の間時局の經濟思潮に善處し、常に事業の企畫と經濟的施設に専念し、幾多重要經濟問題に就き行政官廳の諮問に答申すると共に、或は建議又は請願し、以て目的の貫徹に努めた。就中筑後川治水工事の促進、第十二師團並に九州醫學專門學校の誘致、發明王田中近江大椽顯彰會の設立、久大線全通促進等其の實現を見たるもの枚擧に違なき有様である。他方また日本商工會議所、西部商工會議所聯合會等に毎回代表者を出席せしめて、各會議所と協力一致し、國家經濟組織の向上に資し、亦常に商工業に關する紛議の調停仲裁、各種の調査統計等苟も商工業に關する重要事項に就ては、一般關係者に隨時通報し、商取引其他各種の調査又は當業者の紹

介に應ずる外、組合の設立斡旋並に商品見本の證明、原産地の證明等をなすのみならず、各地の博覽會及商品見本市等に勧誘し、或は會議所自ら主催して之を開催して生産助長に努めつゝある。又經濟調査に關しては毎月主要商品の卸賣物價、日用品小賣物價、勞働賃金、出入貨物及主要生産品調査等をなして關係各方面



久留米商工會議所

に通報し、或は地區内商工業者の參考となるべき經濟事情を時々會報等によつて發表する。外商工人名錄、各種パンフレット等の圖書を刊行して久留米産業組織の發達並に生産品の紹介に資してゐる。

尙本會議所の施設事業の内各種賣出を斡旋するの外常に市及傍系たる久留米商工聯合會と協力して各種の經濟講演、商店改善、街路照明改善講演會等を催して、地區内商工業者の資質向上並に經濟知識の涵養、且は其の繁榮に資する事も尠くない又稅務相談部、工業相談部を開設し、夫々會議所独自の斡旋をなしてゐる。

惟ふに星霜三十有八年、歴代会頭として田中順信、内藤半次郎、三谷有信、日高常次郎、林田守隆、菊井嘉市、中川喜次郎の諸氏を経て現會頭石橋徳次郎氏に及び、また事務局主脳部の理事者は今村秀夫、松本豊太、熊谷陽次郎、武田令太郎諸氏の書記長及理事を経て現理事久富金作氏に及び、何れも歴代会頭を輔佐し、機能の振作を圖ると共に地區内商工業の隆盛發達に寄與し、以て産業都市大久留米の建設に邁進しつゝある。殊に昨昭和十年より當會議所は日本商工會議所常議員會議所に選任せられ、其の責重大なるを自覺すると共に、我が久留米産業の彌榮隆昌に赴くことを期するものである。

久留米市丸萬株式會社

久留米市三本松町丸萬株式會社は、昭和六年三月資本金二十萬圓を以て創業され、徳永保資氏を社長に戴き、百三十人の従業員が統制ある經營組織のもとに働いてゐる。業態は食堂部、雜貨部、下駄部に分かれ、下駄の販路は九州に擴がつてをり、其の賣上は年間百萬圓近くに上つてゐる。マーケットは久留米繁華街の中央に位し、地理的に見ても頗る有利の位置にあり、デパートの無い久留米にとつて充分にその役を果し、購買者に便宜を與へる處が少くない。社長徳永保資氏は非常は徳望家で、従業員に對しては温情主義をもつて望み、慈父の如き心服をうけ、社運も隆々たる勢で發展してゐる。

金 文 堂

久留米市米屋町の金文堂書店は資本金七十三萬圓の合名會社で、現在従業員

員百五十名、福岡市中島町に支店を有し、業界の九州探題をもつて自他共に任じてゐる。金文堂は遠く遡つて文久元年先代儀平氏の創業にかゝるもの、書肆二文字屋に始まり、嘉平氏が家業を繼ぐに及んで今日の隆盛を致した。明治三十八年福岡縣國定教科書特約店となり同四十二年不幸失火の厄に遭ふたが經營宜しきを得て商賣益々繁昌し、殊に世界大戰後の好況に乘じ出版界も未曾有の景氣が到來したので、金文堂は事業の大擴張を斷行し、店舗倉庫の建築に着手し、大正十一年には第一倉庫三階建、翌年には第二倉庫住宅同十五年には鐵筋コンクリート近代建築の四階建が落成、同年合名會社組織に變更し、内容外觀共に整備して堂々たる偉容を誇るに至つた。販路は九州、中國、四國、臺灣、朝鮮、滿洲、支那に亘り、年間取扱高は五百萬圓に及び、書籍、樂器、運動具、文具を販賣し、名實共に關西唯一の書肆へと飛躍した。尙同店出身者は全部金文堂の頭文字「金」の一字を取り入れた屋號の使用を許され、金文會と稱して岡山、廣島、山口、門司、小倉、八幡、大牟田、熊本、八代人吉、鹿兒島、大分、別府、杵築、日田、柳河、唐津、佐世保、京城、大邱大連に至る西日本二十餘店は何れも金文堂の傘下に集り、強大なプロックを結成、これら金文會員は全部金文堂より書籍の配給を受けてゐる。現社長は菊竹大藏氏である。

赤 司 廣 樂 園

四季とりくく燦爛の花園、久留米市東町赤司廣樂園は明治五年創業、資本金六萬二千圓で、現在福岡市新大工町大濠公園内に支店を有し、「花の合資

會社」で知られてゐる。華麗極りない久留米躑躅を始め、四季の花弁盆栽より種子、苗木、庭木等を陳列栽培し、内地は勿論、朝鮮、滿洲、支那から、遠く南洋にまで販路を拓いて、萬丈の氣を吐いてゐる。久留米躑躅は廣樂園お自慢のもの、小郡には廣大な栽培場を有し、紅白紫の花弁が艶姿を競つて

一大奇觀を呈し、行人の足を

とどめてゐるが、久留米躑躅

は外のつゝじに較べて樹性强

く、到る所の風土に適し、樹

枝は大ならず、樹齡限りなく

その枝葉は婉にして玉作（傘

作）自然作何れの整枝にも適

し、室内、店頭、庭前の花壇から

好評を博し、庭前の花壇から



久留米赤司廣樂園



久留米市京町合資會社中野材木店は、福岡縣久留米市京町合資會社中野材木店は、明治十五年代表社員中野猪之助氏によつて創業され、本店を久留米市京町に、支店を大分縣日田郡三芳村に置き、また大分縣玖珠郡森町には玖珠工場を設けて、無盡藏の大分縣の山林豊庫より切り出した木材を此處で製材した上、筑後川の水運及鐵道の便を利用して一旦久留米へ送り、夫より北九州長崎、朝鮮へ輸送し、社運は逐年隆昌に赴き、資本金も五十萬圓に増額され、全額拂込み濟みとなつてゐるが、大正十三年に合資會社に改め、事業を擴大して販路を九州、朝鮮全般に擴げ、遞信局、鐵道其他各方面に得意を持ち、産額五

中 野 材 木 店

ぬ云々の讃辭を呈し、一躍廣樂園の聲價を高めた話も有名である。

久留米市丸萬株式會社

久留米市三本松町丸萬株式會社は、昭和六年三月資本金二十萬圓を以て創業され、徳永保資氏を社長に戴き、百三十人の従業員が統制ある經營組織のもとに働いてゐる。業態は食堂部、雜貨部、下駄部に分かれ、下駄の販路は九州に擴がつてをり、其の賣上は年間百萬圓近く上つてゐる。マーケットは久留米繁華街の中央に位し、地理的に見ても頗る有利の位置にあり、デパートの無い久留米にとつて充分にその役を果し、購買者に便宜を與へる處が少くない。社長徳永保資氏は非常は徳望家で、従業員に對しては温情主義をもつて望み、慈父の如き心服をうけ、社運も隆々たる勢で發展してゐる。

金 文 堂

久留米市米屋町の金文堂書店は資本金七十三萬圓の合名會社で、現在従業員

し、内容外觀共に整備して堂々たる偉容を誇るに至つた。販路は九州、中國、四國、臺灣、朝鮮、滿洲、支那に亘り、年間取扱高は五百萬圓に及び、書籍、樂器、運動具、文具を販賣し、名實共に關西唯一の書肆へと飛躍した。尙同店出身者は全部金文堂の頭文字「金」の一字を取り入れた屋號の使用を許され、金文會と稱して岡山、廣島、山口、門司、小倉、八幡、大牟田、熊本、八代人吉、鹿児島、大分、別府、杵築、日田、柳河、唐津、佐世保、京城、大邸大連に至る西日本二十餘店は何れも金文堂の傘下に集り、強大なブロックを結成、これら金文會員は全部金文堂より書籍の配給を受けてゐる。現社長は菊竹大藏氏である。

赤司 廣樂園

四季とりどりの燦爛の花園、久留米市東町赤司廣樂園は明治五年創業、資本金六萬二千圓で、現在福岡市新大工町大濠公園内に支店を有し、「花の合資

ぬ云々の讃辭を呈し、一躍廣樂園の聲價を高めた話も有名である。

中野材木店



久留米市東町中野材木店 中野猪之助氏 福岡縣久留米市京町合資會社中野材木店は、明治十五年代表社員中野猪之助氏によつて創業され、本店を久留米市京町に、支店を大分縣日田郡三芳村に置き、また大分縣玖珠郡森町には玖

珠工場を設けて、無盡藏の大分縣の山林豊庫より切り出した木材を此處で製材した上、筑後川の水運及鐵道の便を利用して一旦久留米へ送り、夫より北九州長崎、朝鮮へ輸送し、社運は逐年隆昌に赴き、資本金も五十萬圓に増額され、全額拂込み濟みとなつてゐるが、大正十三年に合資會社に改め、事業を擴大して販路を九州、朝鮮全般に擴げ、逓信局、鐵道其他各方面に得意を持ち、産額五十萬圓に上つてゐる。代表社員中野猪之助氏は現在久留米市の消防組員を勤めてゐるが、以前代議士市會議員等にも數回當選、徳望高く久留米市に於ける民政黨の元老として仰がれてゐる。

井上食品工場

久留米市東町株式會社井上食品工場は、日露戰役の勇士にして郷軍久留米支部理事、國分分會長、商工會議所常議員の公職にある井上權市氏を取締役社長に、同氏長男で神戸商大出身の俊才隆晴氏を専務取締に擧げ、食糧報國



久留米赤司廣樂園

一大奇觀を呈し、行人の足をとどめてゐるが、久留米躑躅は外のつゝじに較べて樹性強く、到る所の風土に適し、樹枝は大ならず、樹齡限りなくその枝葉は婉にして玉作（傘作）自然作何れの整枝にも適し、室内、店頭の花壇として好評を博し、庭前の花壇から公園遊園等大規模の花壇にも好適、殊に洋式毛氈、花壇に於いて無敵を誇つてゐる。外人にも好評を博し、近時滿洲北支に向け盛んに輸出されて

ゐるが、歐米にも少からぬ輸出を見、大正七年五月米國ポストンハーバート大學教授ウイルソン博士が廣樂園を訪れ、歸國役ポストン・イヴニングトランスクリプトといふ夕刊新聞に堂々見學記を掲載、赤司廣樂園は眞の仙境に入り、米國や歐洲の花の愛好者は斷じて斯かる美に接することは出来

を旗印とし軍需食糧品を始め各種食品の製造經營に當つてゐる。同工場は大正十四年九月の創業で資本金十萬圓を有し、井上こな味噌を始め携帯味噌、キャベツ白菜、カツヲ菜、たか菜、山鹽菜、法蓮草、馬鈴薯、人參、大根、蓮根等の乾菜類、玉園煮、進軍煮、小鯛甘露煮、昆布佃煮等の瓶並に罐詰類家庭向ミルク、砂糖入キングココア、同コーヒー、純細末高級品キングコーヒ、大衆向家庭向飲料メーゼンコーヒ、ココア、携帯用コーヒ、ココア、彦九郎しるこ等の甘味品を製造し、東京、滿洲、牡丹江に支店を設け、内地はもとより朝鮮、北海道、臺灣、滿洲各地の師團諸部隊、關東軍、陸軍糧秣廠、海軍軍需部等に納入し、最近三ヶ年の統計を見ても其の數五百萬食と言ふ龐大な數字を示してゐる。此の外一般市場販路は、九州、中國、近畿臺灣に及び年々躍進的發展を遂げてゐる。因に同工場は陸軍糧秣廠の指定工場であるが近く佐世保、横須賀、吳の海軍々需指定工場となり、益々業務發展の輝しい未來が約束づけられてゐる。井上氏は日露戰爭從軍當時、日本人活動の源泉を爲す味噌が水分多く、携帯に不便にして徴を生じ、貯藏に耐へないのを遺憾とし、乾燥粉末味噌の研究に没頭し、爾來十ヶ年二十萬圓に餘る私財を投じて粉味噌及携帯味噌の製造に成功、專賣特許を獲得した立志傳中の人にして林銑十郎大將が陸相の折軍事功勞者として表彰され、また在郷軍人會總裁 閑院元帥宮殿下より有功章を拜受するの光榮に浴し、圓滿なる人格者として知られてゐる。

第廿五章 大牟田市と産業

第一節 大牟田市

(1) 位 置

大牟田市は九州中央部、有明海に臨む躍進途上にある産業と觀光の新興都市であつて、福岡縣の最南端に位し、人口十一萬、戸數二萬を擁してゐる。市の東南部は山岳丘陵を負ひ、所謂三池炭山の所在地にして、西北は平坦となり市街地は概ね此の方面に發展してゐる。河川は大牟田川、諏訪川の二流が

歴史の扉を開けば、茫々二千年の古長くも鳳輦を止めさせ給ひし高田の行宮趾を東に控へ、西に千古の謎を秘めし名も不知火の有明海を隔て、遙かに靈峯雲仙、多良の雄姿を仰ぎ、地に不盡の富を藏し、海に無限の幸を産む天恵豊かなる我が大牟田市は、半世紀前には未だ戸數數百にも満たざる寂寥の一

寒村に過ぎなかつた。然る

に一度其の炭山に科學の力

及んで鑛山事業起るや、山

紫水明の此の地は忽にして

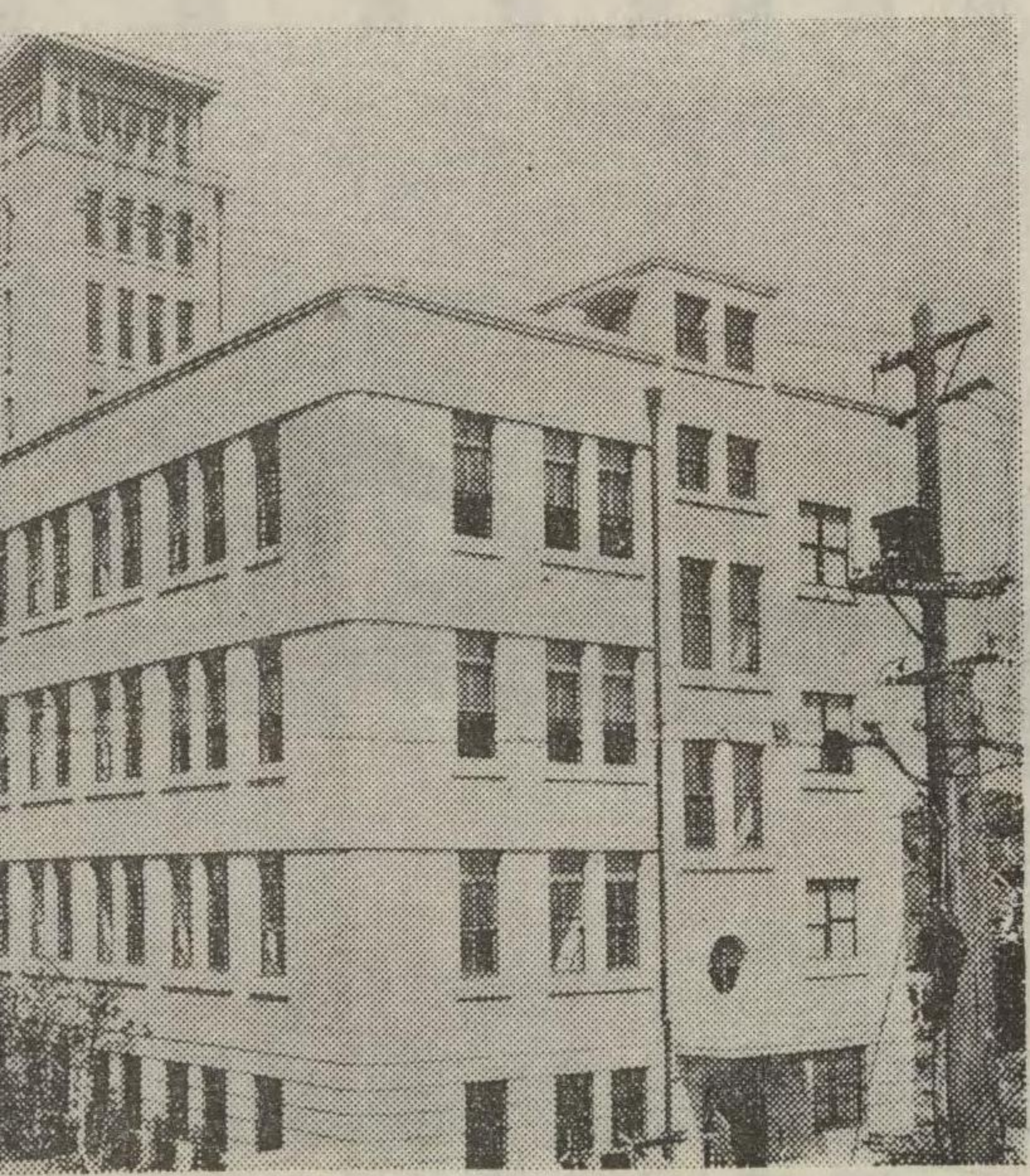
近代産業の大組織下に、爾

來躍進又躍進、僅か五十年

を経ざる間に、人口十一萬

を擁する九州中部の大新興

都市となつた。而かも今や



大牟田市役所

糧秣廠、海軍軍需部等に納入し、最近三ヶ年の統計を見ても其の數五百萬食と言ふ龐大な數字を示してゐる。此の外一般市場販路は、九州、中國、近畿臺灣に及び年々躍進的發展を遂げてゐる。因に同工場は陸軍糧秣廠の指定工場であるが近く佐世保、横須賀、吳の海軍々需指定工場となり、益々業務發展の輝しい未來が約束づけられてゐる。井上氏は日露戰爭從軍當時、日本人活動の源泉を爲す味噌が水分多く、携帯に不便にして黴を生じ、貯藏に耐へないのを遺憾とし、乾燥粉末味噌の研究に没頭し、爾來十ヶ年二十萬圓に餘る私財を投じて粉味噌及携帯味噌の製造に成功、專賣特許を獲得した立志傳中の人にして林銑十郎大將が陸相の折軍事功勞者として表彰され、また在郷軍人會總裁 閑院元帥宮殿下より有功章を拜受するの光榮に浴し、圓滿なる人格者として知られてゐる。

第廿五章 大牟田市と産業

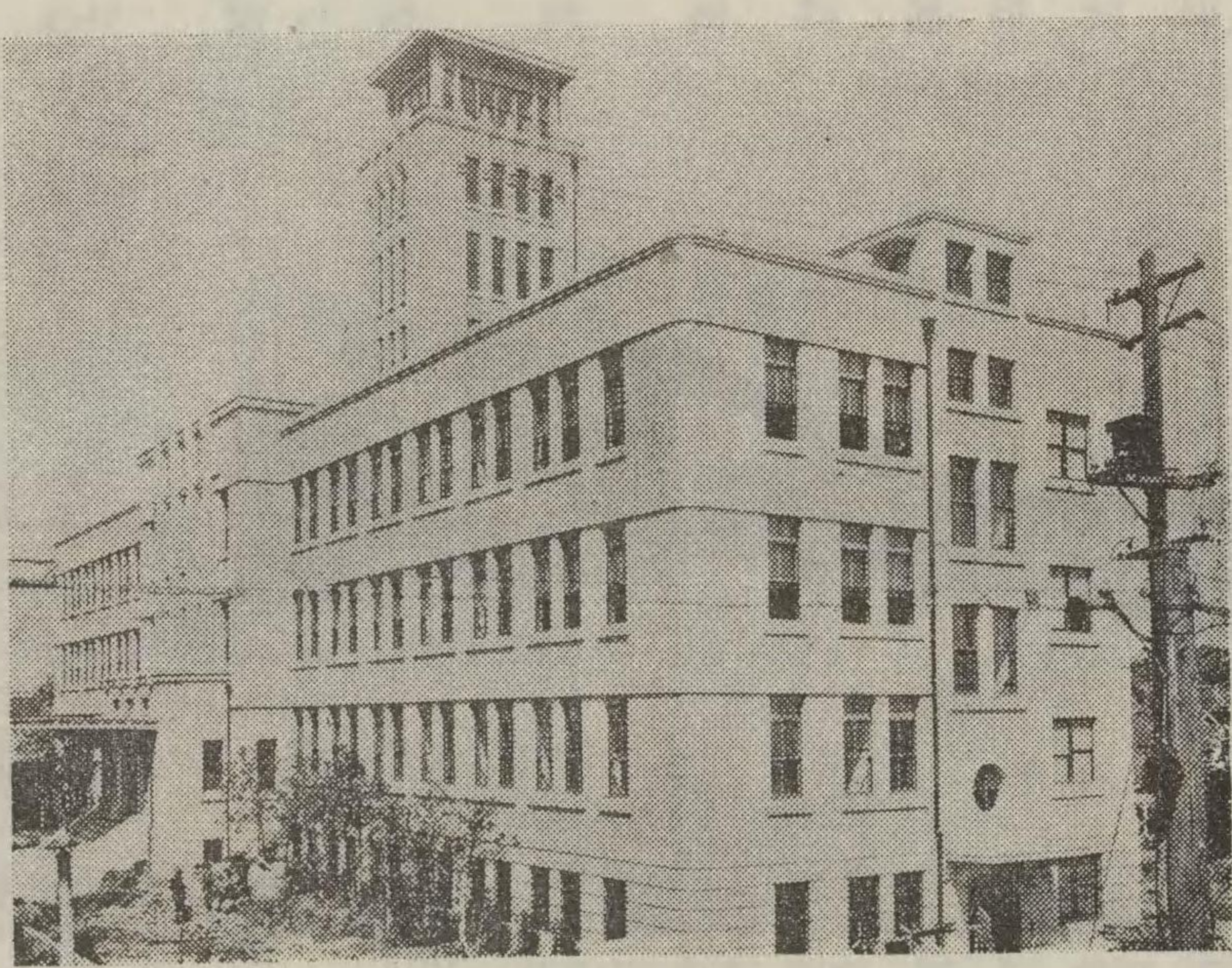
第一節 大牟田市

(1) 位置

大牟田市は九州中央部、有明海に臨む躍進途上にある産業と観光の新興都市であつて、福岡縣の最南端に位し、人口十一萬、戸數二萬を擁してゐる。市の東南部は山岳丘陵を負ひ、所謂三池炭山の所在地にして、西北は平坦となり市街地は概ね此の方面に發展してゐる。河川は大牟田川、諏訪川の二流があつて、市の南北に併流し共に有明海に注ぎ、西方遙かに雲仙、多良の靈峯を仰ぎ島原半島とは指呼の間にある。省線鹿兒島本線は市の中央を貫通し、電車自動車網亦四圍に伸び、大牟田、三池の兩港は有明海沿岸は勿論、内外各地と運輸交通の便開け、臨港鐵道開通の曉は將に四通八達の要地として中部九州に君臨するのも遠くはない。觀光コースとしては、三池港より天下の公園雲仙に至る最短コースたる島原港との間に一日數回の定期船が往復してゐる外最近佐賀線の開通と鳥栖、大牟田間に、快速ガソリンカーの運轉を見るに至り、別府、阿蘇、雲仙、霧島、日田、耶馬溪を回遊する觀光客を喜ばせてゐる。

(2) 現勢

歴史の扉を開けば、茫々二千年の古畏くも鳳輦を止めさせ給ひし高田の行宮趾を東に控へ、西に千古の謎を秘めし名も不知火の有明海を隔て、遙かに靈峯雲仙、多良の雄姿を仰ぎ、地に不盡の富を藏し、海に無限の幸を産む天恵豊かなる我が大牟田市は、半世紀前には未だ戸數數百にも満たざる寂寥の一



大牟田市役所

寒村に過ぎなかつた。然るに一度其の炭山に科學の力及んで鑛山事業起るや、山紫水明の此の地は忽にして近代産業の大組織下に、爾來躍進又躍進、僅か五十年を経ざる間に、人口十一萬を擁する九州中部の大新興都市となつた。而かも今や世界に比肩し得るもの無き各種の化學工場を有するのみならず、或は驚歎す可き人間の威力を示す三池築港地下千尺の底に、科學の華咲く四山萬田の炭坑あつて、工鑛都市としては世に冠絶すと言ふも敢て過言ではなからう。加ふるに市の中央に常盤の色に包まれし眺望絶佳の片平山公園と、僅かに歩を郊外にうつせば、鷗飛び交ふ有明海に峙ち、老松奇岩による黒崎公園あり、其の他語れば盡きぬ歴史の糸に纏はれる幾多の史蹟と歎賞之

を久しうする景勝の地が尠くない。

第二節 産業

(1) 化學工業

本市は豊富なる石炭を中心として、又各種化學工業並に重工業地帯として我國の重要な産業地域をなしてゐる。年産二千萬圓と稱せられ、世界に於ける染料、化學工業、藥品市場を風靡せんとしてゐる三池染料工業所、我國亞鉛需要高の約五割近くを生産する三池製煉所、「世界最純品」として内地は勿論滿鮮、南支、南洋、北米方面まで飛躍してゐる硫安肥料製造の三池窒素工場東洋高壓工場、石灰窒素、セメント等を併産する電氣化學大牟田工場、それに各種機械製造に於て斬新精巧なる設備と技術の優秀を以て鳴る三池製作所其他綿糸紡績の鐘紡工場等、之等大工場を繋ぐ北部大牟田市の一帯は輸出工業、軍需工業の飛躍を中心として素晴らしい躍進を示し、黒煙、響音の世界を現出し隆盛を極めてゐる。

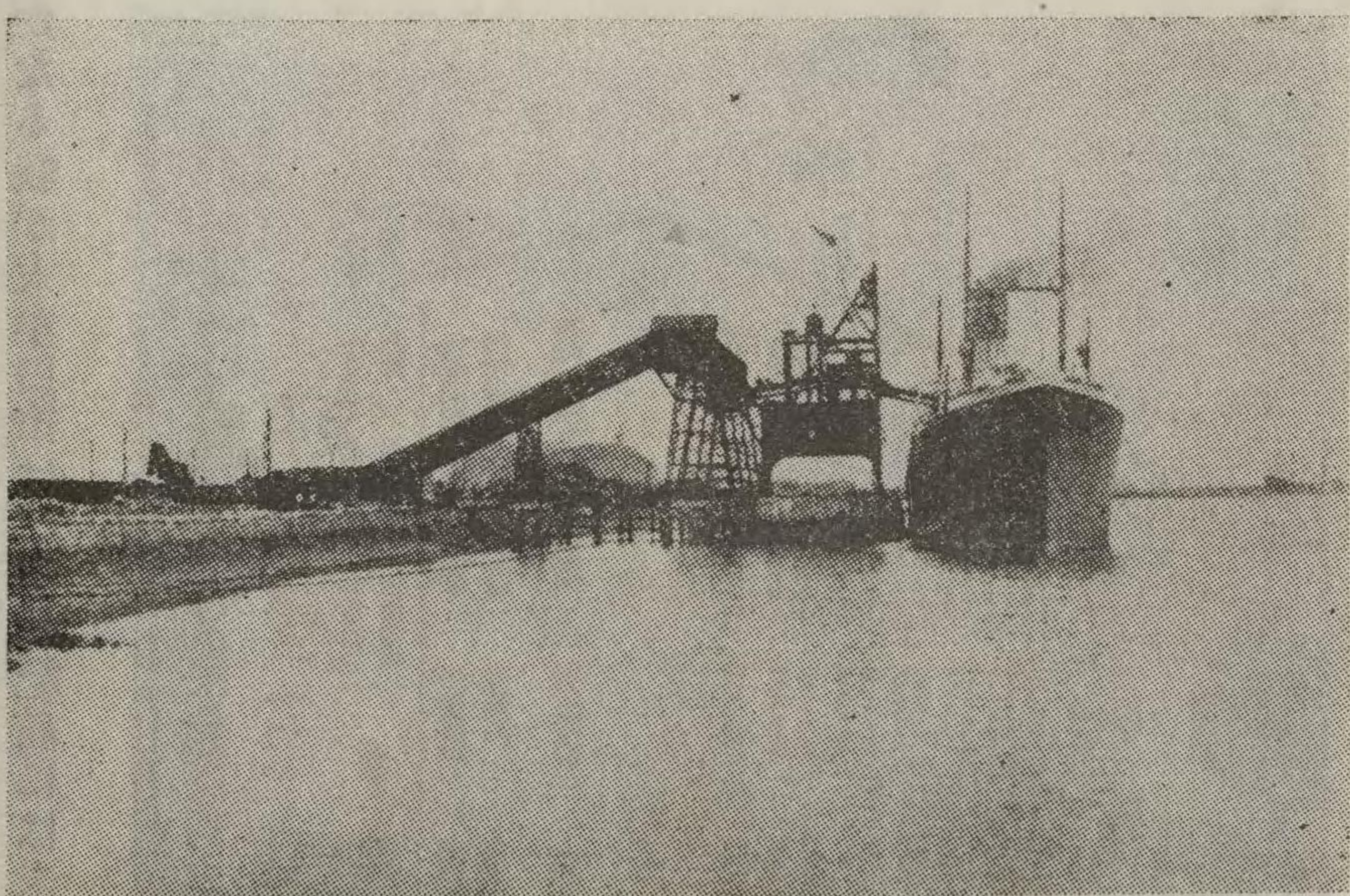
(2) 三池港

三池港は有明海の東海岸、大牟田市の南端を扼する本邦屈指の開港場であつて、三井鑛山株式會社が數百萬圓の巨費を投じ、十數年の歳月を費して竣工せしめたもので、其の人工的設備に於いて完備せることは將に東洋隨一の稱があり、最近一ヶ年内の入港大型汽船一千隻を越え、内外貿易額五千萬圓に

を刈り枯葉を集めて暖を取りしに、偶々黒色の岩片燃焼するものあるを見一燃ゆる石なることを知つた、是即ち當炭礦發見の始めなりと云ふ、稻荷山は當時の開坑に係り、享保年間更に平野山を開掘し、嘉永の末年に生山を開掘した。當時此の三山を總稱して三池炭山と云ふ、爾來明治初年に至るまで小規模ながら數個所の開坑をみたが、同六年政府の有に歸し、其の後二十二年三井家が之を引受け、銳意事業の擴張に努め、斬新精巧の機械を装置し、急速なる發展をなし、三井鑛山株式會社の事業として經營するに及び、誠に我が炭礦史上に特筆すべき存在となつた、現在は宮浦坑、萬田坑、四山坑の三坑より成り、年額三百萬噸の出炭を擁し、従業員數八千人、斷然斯界の王座に君臨して居る。

達する状況である。殊に最近市民多年の要望に依り公衆荷揚場が開設せらるるに至つたので、之が設備の曉は臨港鐵道の完成と共に、將來九州中部に於ける物資集散の市場として益々樞要の港たるところである。

(3) 大牟田港



三池港内港

本港は昭和七年三月縣營港灣に編入せられ、南筑中樞の重要港灣として、地方産業啓發上大いに囑望せられてゐる所で、現在では三百噸内外の船舶が出入出來得る程度であるが、近い中に大擴張工事が完成することになるので、その曉は千噸以上の船舶は優に出入し得ることとなり、九州沿岸は勿論全国各地との海運の利便は更に増大し、一大躍進を見る事は明なことであらう。

(4) 三池炭礦

今を去る四百餘年前、文明年間三池郡稻荷村の一農夫稻荷山に於いて、柴

(1) 乗合自動車

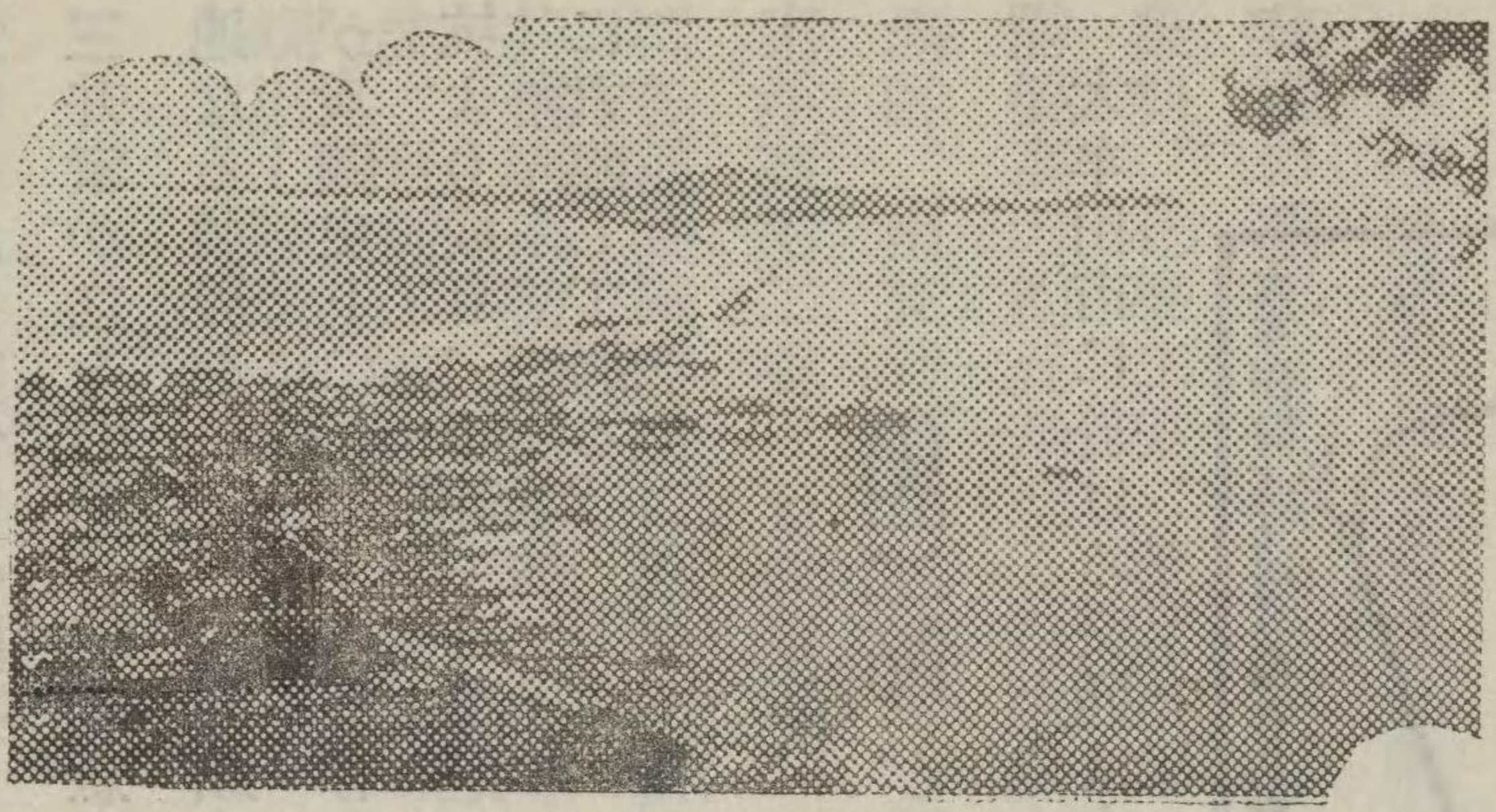
經營者	線名	起點	主なる經過地	終點	料程
大牟田電氣軌道株式會社	三池線	大牟田驛	東新町、通町	三池町	五、四、五
同	三川線	同	白金町、三川町	三池町	八、四、七
同	萬田線	同	三川町、荒尾町	三池町	三、四、七
同	櫻町線	同	宮ノ原、片平	荒尾	六、三
同	倉掛線	同	宮ノ原、櫻町	櫻町	三、六
同	萬田線	同	櫻町、船津	倉掛	四、七
同	黒崎線	同	大正町、明治町	萬田驛	七、五
同	環狀線	同	須鼻町、大正町、新濱田町、本町、不知火町	黒崎	五、五
同	環狀線	同	大牟田驛	大牟田驛	五、三

第三節 交通

銀水、渡瀬、江

志賀島と志賀島汽船

福岡縣の島嶼中、志賀島と隣の島は種々な意味に於て特筆すべき存在であらう。特に志賀島は、枇杷畑耕作の點で著名である。實に枇杷の産額は、志賀島の農産物の中でも二萬餘圓の年收穫で、本島唯一の農家収入物である。



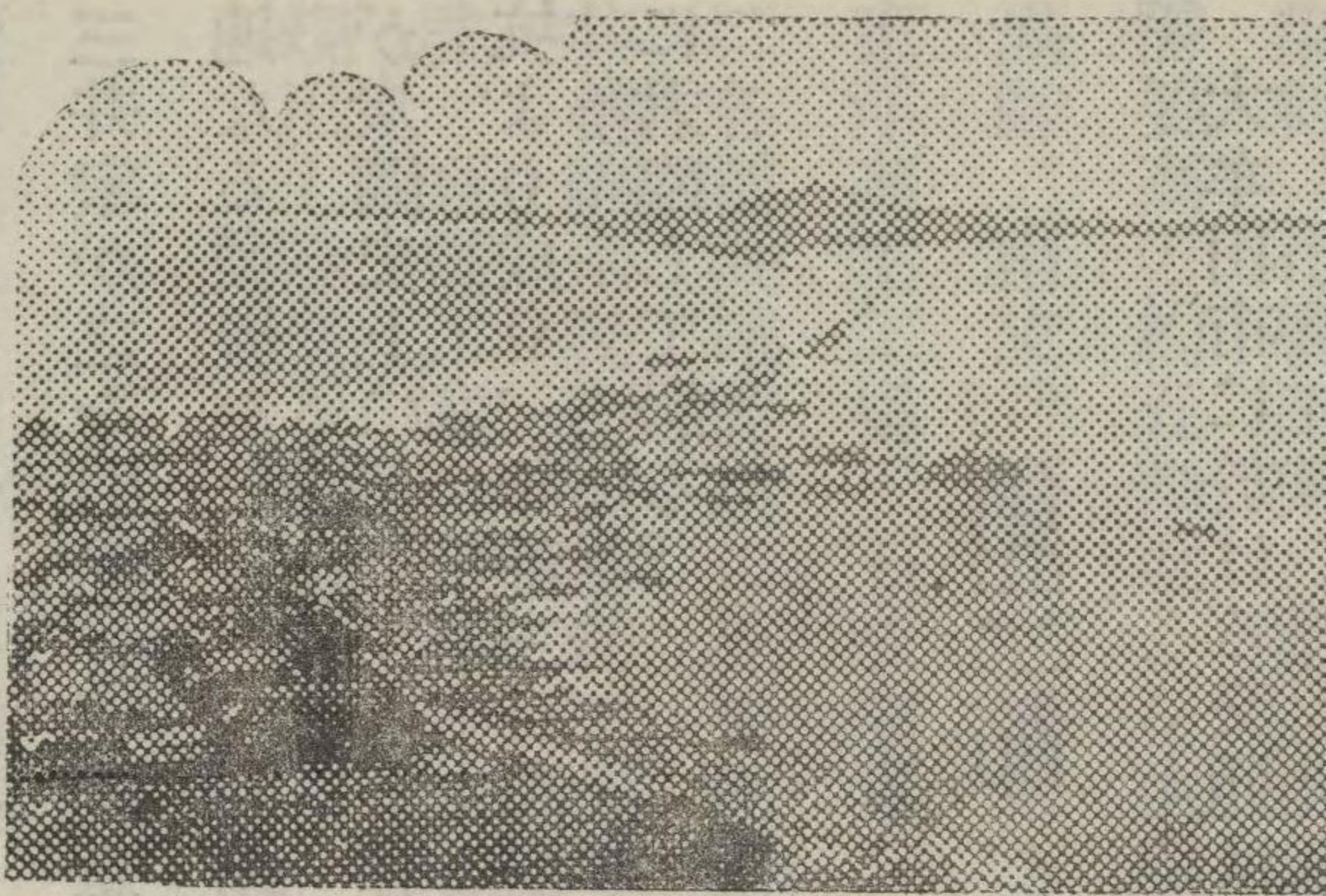
志賀島枇杷の起源については、一挿話がある。約廿五、六年前、福岡縣郡農會清水技手が、島の眞隅農會副會長を訪ねた際、たまたま庭にあつた野生の小枇杷を食つて、その味の勝れてゐるのにヒントを得て、眞隅副會長に、志賀島で小枇杷を改良して市場に出せば、必ず好評を得るに違ひないとすゝめたのが、志賀島枇杷の今日あらしめた發端である。

眞隅副會長は、島の有志坂本氏と謀つて、早速在來種に田中種を接いで見た所が、非常に好成績を得たので、爾來兩氏は島人の嘲笑に超然として、自分の一等畑にも枇杷を栽培し、機會ある毎に島人にすゝめたのであるが、始めは嘲笑してゐた島人も兩氏の熱心に動かされ、遂に島全民が擧げて枇杷栽培に従事する様になり、荒地も麥畑も枇杷畑に變化し、今日の如き志賀島名産となるに至つたものである。

志賀島枇杷は門司、福岡の地のみでなく、近時益々遠近各地で好評を博してゐることは、獨り志賀島々民の誇りであるばかりでなく、福岡縣農産物界の誇りとすべきことであらう。志賀島は又一面雁の巢飛行場の開場及び附近に工場の設置を見に至つて、漸次他府縣人の移住者が増加しつつあり、島全體の富の狀態は向上の一途を辿つてゐる。

而して志賀島では、村の經營として志賀島、博多間の連絡汽船の經營をなしてゐるが、その業績は極めてよく、新造船の就航と海上の風景では日本一と言はれる博多灣の遊覽設備についても、福岡市側の意向如何では經營する準備があると云はれてゐる。

兎も角志賀島は、福岡縣唯一の海上の樂土であり、海の中仙道を控へた風景絶佳の島であり、軍事に於ても重要な島として、將來益々開發されるものと見るべきであらう。



志 約廿五、六年前、福岡縣郡農會清水技手
が、島の眞隅農會副會長を訪ねた際、たまた
ま庭にあつた野生の小枇杷を食つて、その味
賀 の勝れてゐるのにヒントを得て、眞隅副會長
に、志賀島で小枇杷を改良して市場に出せ
島 ば、必ず好評を得るに違ひないとすゝめたの
が、志賀島枇杷の今日あらしめた發端である。
眞隅副會長は、島の有志坂本氏と謀つて、
早速在來種に田中種を接いで見た所が、非常
に好成绩を得たので、爾來兩氏は島人の嘲笑
に超然として、自分の一等畑にも枇杷を栽培し、機會ある毎に島人にすゝめ
たのであるが、始めは嘲笑してゐた島人も兩氏の熱心に動かされ、遂に島全
民が擧げて枇杷栽培に従事する様になり、荒地も麥畑も枇杷畑に變化し、今
日の如き志賀島名産となるに至つたものである。

準備があると言はれてゐる。
兎も角志賀島は、福岡縣唯一の海上の樂土であり、海の中仙道を控へた風
景絶佳の島であり、軍事上に於ても重要な島として、將來益々開發される
ものと見るべきであらう。

佐賀縣の産業卷

佐賀縣の産業

第一章 概観

第一節 沿革

佐賀縣は往昔に於ては長崎縣と共に筑紫又は火の國の名稱で呼ばれ、朝鮮及び支那大陸と地理的に最短距離にあるので、太古より大陸との交通繁く神功皇后の三韓征伐軍が唐津松浦瀉を船出したことは傳説の傳ふるところであり、其の後の日韓交渉使節は松浦瀉を經由せぬものはないと云ふも過言ではない。支那本土との交通開けるや遣唐使、遣隋使、留學生等は、皆唐津、呼子、伊萬里等を船出して大陸に渡り、亦同コースを通りて歸來し、或は豊太閤が朝鮮征伐の軍を派するや自ら名護屋城を本陣として、采配を振りたるが

に、佐賀藩海軍所を設けて、汽鐘の製造を始め、洋船運用術の教習を行ひ、全國に率先して海事思想の涵養に力を注ぎ、帝國海軍の發祥地となつたことは、歴史の明示するところである。

明治維新となり、各國との交通頻繁となるにつれて、各地に開港場が設けられ、政治的中心地、經濟的中心地に遠い關係で、長崎港の重要性は一時減少したが、日本が東亞の盟主として大陸進出の覇業を企圖するに及んで、西陲肥前は再び東亞政策上の重要根據地化せんとしつゝある。

第二節 地勢

縣の北部は、所謂筑紫山脈にして九千部山、脊振山、金山、雷山、羽金山等を以て福岡縣と境し、その南方に天山、彦岳等の山嶽を有するも標高八百米乃至一千米餘に過ぎず、西部には船山、黒髮山等あるも標高低く、一般に

第一章 概観

第一節 沿革

佐賀縣は往昔に於ては長崎縣と共に筑紫又は火の國の名稱で呼ばれ、朝鮮及び支那大陸と地理的に最短距離にあるので、太古より大陸との交通繁く神功皇后の三韓征伐軍が唐津松浦瀉を船出したことは傳説の傳ふるところであり、其の後の日韓交渉使節は松浦瀉を経由せぬものはないと云ふも過言ではない。支那本土との交通開けるや遣唐使、遣隋使、留學生等は、皆唐津、呼子、伊萬里等を船出して大陸に渡り、亦同コースを通りて歸來し、或は豊太閤が朝鮮征伐の軍を派するや自ら名護屋城を本陣として、采配を振りたるがく、唐津、呼子、伊萬里は往時に於ける我が日本の大陸政策の策源地であった。従つて進歩せる朝鮮支那の東洋文明は此の地を経由して我が邦に輸入された。現今、佐賀縣、長崎縣の特産品として他府縣に誇り得る東洋趣味豊かな陶磁器、嬉野茶等は其の一例である。その後歐洲諸國の海運業大いに進み、我が國に開港を迫るや、徳川幕府は長崎縣平戸港、長崎港を開港して、オランダ、イギリス、ロシア、フランス等と貿易を始めた。當時の長崎の西洋文明輸入の門戸にして、その防備を擔任してゐた佐賀鍋島藩は、西歐は物質文明を逸早く多分に採用した。

封建時代に於て、或は機械工業を起し、或は現在の佐賀郡中川副村早津江

佐賀縣産業の巻

に、佐賀藩海軍所を設けて、汽罐の製造を始め、洋船運用術の教習を行ひ、全國に率先して海事思想の涵養に力を注ぎ、帝國海軍の發祥地となつたことは、歴史の明示するところである。

明治維新となり、各國との交通頻繁となるにつれて、各地に開港場が設けられ、政治的中心地、經濟的中心地に遠い關係で、長崎港の重要性は一時減少したが、日本が東亞の盟主として大陸進出の覇業を企圖するに及んで、西陲肥前は再び東亞政策上の重要根據地化せんとしつゝある。

第二節 地勢

縣の北部は、所謂筑紫山脈にして九千部山、脊振山、金山、雷山、羽金山等を以て福岡縣と境し、その南方に天山、彦岳等の山彙を有するも標高八百米乃至一千米餘に過ぎず、西部には船山、黒髮山等あるも標高低く、一般に臺地をなし、西南部は多良嶽ありて長崎縣との境界線をなしてゐる。

河川は佐賀、福岡兩縣の自然的境界線をなす筑後川を始め、有明海に入るものに、八田江川、嘉瀬川、牛津川、六角川、鹽田川があり、松浦瀉に注ぐものに、松浦川、玉島川、伊萬里灣に注ぐものに有田川がある。

縣の東南部は所謂筑紫の大平野である。

1. 土地

土地の總面積は、十八萬九千町歩で、その中國有地二萬四千町歩民有地十六萬五千町歩である。之を地目別に見ると田五萬四千町歩畑一萬九千町歩山

林六萬一千町歩、(國有地を含む)原野四萬一千町歩、その他一萬四千町歩にして其の割合は、田二割九分、畑一割、山林三割二分、原野二分、其他七分に當る。



2、氣候

氣候は概ね溫和で、毎年の平均氣温は、山間部の約十四度から海岸地方の約十六度の間にある。既往に於ける最高記録は三十七度七で、最低は零下六度五である。降雪は北部山間部地方には屢々あるが、平坦部に於ては極めて稀である。降雨の累年平均は、千七百耗内外で全國の中位にある。一般に秋から冬に少く春から漸次増量して六、七月の候に最も多い。

3、戸口

昭和十年十月一日現在の國勢調査に依る戸數は十二萬八千戸、人口六十八萬六千人で、前回昭和五年の國調に比較すると戸數に於て一千戸、人口に於て五千餘人を減少した。

而して、毎年の人口自然増加數(出生より死亡を差引いた數)は、約九千人の多きに拘はらず、前五ヶ年間に現在人口に於て斯の如き減少を見たのは炭坑の廢止、縮小に依る一部地方の人口激減に主因を有すると云ふ可きだが、由來佐賀縣は毎年出稼者多く、入寄留者の少いといふ一般的傾向に基因するものである。従つて男女の權衡も、女百人に對して男九十四人に當り、女子の超過を示してゐる。

人口密度は、一平方軒當、二百八十人に達し、郡市別に見た最少の小城郡〇百九十二人でも尙全國平均百八十一人を遙かに超過してゐる。

第二章 産業

第一節 概況

佐賀縣は氣候溫和にして、雨量多く、土地肥沃で農耕に適し、佐賀平野をはじめ濱崎、唐津の平坦地及び伊萬里、平野、鹿島平野は諸河川に依つて米作灌漑耕作地帯を形成し、其の他の低い丘陵部或は臺地は多く畑作に利用せられ、農業縣としての面目を發揮してゐる。

然しながら舊藩時代からの尙武の思想は、他面經濟思想に疎い傾向ありて商工業の發達は非常に遅れてゐる。

昭和九年に於ける生産總額は一億八百四十一萬四千三百六十二圓で其の内譯

第二節 鑛業

佐賀縣に於ける鑛業とは、石炭採掘業なりと云ふも過言ではない。勿論ゴールドラツシュの餘波は此の地方にも及びて、最近金銀鑛區の試掘を出願するもの漸次増加して、昭和九年には九件を數へ、又軍需工業の勃興に刺戟せられて約二十四萬坪のクロム鐵鑛の試掘出願あるも、未だ採掘に着手せるものなく、其の鑛區面積に於ても到底石炭の比ではない。

佐賀縣の地層は、大分市と伊萬里町を連ねる線に依りて南北に二分せられ北部は北九州と同地層を構成し、南部は所謂長崎、三角地帯に屬してゐる。従つて筑豊及び三池の地底が黒ダイヤを以て埋められてゐる如く、佐賀縣の地底に開發を待つてゐる石炭層の存在することは推斷に難からず、然し炭層

一人當り生産額 一五七圓

一戸當り生産額 八八二圓



昭和十年十月一日現在の國勢調査に依る戸數は十二萬八千戸、人口六十八萬六千人で、前回昭和五年の國調に比較すると戸數に於て一千戸、人口に於て五千餘人を減少した。

而して、毎年の人口自然増加數(出生より死亡を差引いた數)は、約九千人の多きに拘はらず、前五ヶ年間に現在人口に於て斯の如き減少を見たのは炭坑の廢止、縮小に依る一部地方の人口激減に主因を有すると云ふ可きだが、由來佐賀縣は毎年出稼者多く、入寄留者の少いといふ一般的傾向に基因するものである。従つて男女の權衡も、女百人に對して男九十四人に當り、女子の超過を示してゐる。

人口密度は、一平方杆當、二百八十人に達し、郡市別に見た最少の小城郡〇百九十二人でも尙全國平均百八十一人を遙かに超過してゐる。

第一章 産業

第一節 概況

佐賀縣は氣候溫和にして、雨量多く、土地肥沃で農耕に適し、佐賀平野をはじめ濱崎、唐津の平坦地及び伊萬里、平野、鹿島平野は諸河川に依つて米作灌漑耕作地帯を形成し、其の他の低い丘陵部或は臺地は多く畑作に利用せられ、農業縣としての面目を發揮してゐる。

然しながら舊藩時代からの尙武の思想は、他面經濟思想に疎い傾向ありて商工業の發達は非常に遅れてゐる。

昭和九年に於ける生産總額は一億八百四十一萬四千三百六十二圓で其の内譯は次の通りである。

農業	五〇、一三三、二四七圓	(四六・四%)
畜産	二、一六一、〇七〇圓	(二・〇%)
鑛産	五、八一九、〇九三圓	(五・四%)
工業	三七、七〇〇、〇四〇圓	(三四・八%)
蠶糸	七、〇〇六、九七六圓	(六・五%)
林産	一、三〇六、六六六圓	(一・二%)
水産	三、九八七、二七〇圓	(三・七%)
計	一〇八、一一四、三六二圓	(一〇〇%)

佐賀縣産業の卷

第二節 鑛業

佐賀縣に於ける鑛業とは、石炭採掘業なりと云ふも過言ではない。勿論ゴールドラッシュの餘波は此の地方にも及びて、最近金銀鑛區の試掘を出願するもの漸次増加して、昭和九年には九件を數へ、又軍需工業の勃興に刺戟せられて約二十四萬坪のクローム鐵鑛の試掘出願あるも、未だ採掘に着手せるものなく、其の鑛區面積に於ても到底石炭の比ではない。

佐賀縣の地層は、大分市と伊萬里町を連ねる線に依りて南北に二分せられ北部は北九州と同地層を構成し、南部は所謂長崎、三角地帯に屬してゐる。従つて筑豊及び三池の地底が黒ダイヤを以て埋められてゐる如く、佐賀縣の地底に開發を待つてゐる石炭層の存在することは推斷に難からず、然し炭層が千數百尺の深所にある爲めに、往時の技術を以てしては採掘は至難に屬し且つ佐賀縣の地盤が軟弱にして出水甚だしき爲めに、採算上看過され勝ちであつた。然るに最近に於ける著しき科學の進歩は、着々として往時の難關を突破し、一面軍需工業の殷盛に伴ひて近年續々として石炭試掘の願が提出されてゐる。

縣の西部東松浦郡松浦川流域、小城郡の多久盆地、杵島郡北部の杵島炭田は、夙に開發せられ、その炭質も良好なりしを以て、戰時好況時代には販路も大いに擴張せられ、活況を呈したが、其の後に襲ふた反動に依つて、中小炭坑は殆んど休業の己むなきに至り、更に昭和十年より三菱鑛業に屬する相



杵島炭坑

知の重要炭田の閉坑を見た結果、現在に於ては高取系の杵島炭坑、村井鑛業經營の向山炭坑、野上鑛業經營の入野炭坑、古川鑛業の新屋敷炭坑、貝島炭坑經營の岩屋炭坑、濱野治八氏の大久保炭坑等僅かに十數坑に減少したが、滿洲事變後に於ける鑛業界の活況に伴ひ、小城郡南部平坦地に於ける、大規模の東杵島炭坑及び東松浦郡西部に於ける星賀炭田の開發事業が開始されたのを初めとして、中小多數の炭坑が採炭を開始してゐるので、生産量も昭和十年を底として漸次増加するものと觀測されてゐる。

昭和五年以降同九年に至る採掘高及び主要炭坑の狀況を示せば次の通りである。

年次	採掘鑛區坪數	採掘數量	價格
昭和五年	六九、一七四、八九一	一、二五六、五〇三	八、三九六、〇八一
同 六年	六二、四九六、一一四	一、〇五七、〇一三	六、〇〇二、八四四
同 七年	六一、四七八、〇五二	八七二、二一八	四、七〇九、八三六
同 八年	六〇、九一三、二五二	八九四、一六八	六、二〇六、五六三
同 九年	六三、五八三、三八〇	七九〇、二三四	五、四二九、八五〇

尙産額五萬圓以上の主要炭坑を示せば左の如し。(昭和九年現在)

炭坑名	鑛區坪數	産出量	坑夫數	鑛業權者
相知芳谷坑	五、〇八七、〇〇〇	三、二二〇	三〇四	三菱鑛業株式會社
岩屋炭坑	五、五二五、二八一	一〇四、五三二	九〇七	貝島炭鑛株式會社
新屋敷炭坑	四〇五、一五二	五八、五五六	八四	古川鑛業株式會社
入野炭坑	八八六、五八〇	一四、三〇七	三五	野上鑛業株式會社
向山炭坑	八八八、六四〇	四、一一〇	五三	村井鑛業株式會社
大久保炭坑	三五〇、九七三	一五、二四七	二〇	濱野 治 八
杵島炭坑	六、四一八、九二〇	五〇、一八〇	三、四九八	杵島炭鑛株式會社

前表の示す如く、佐賀縣の石炭採掘業が縮小の途を辿つたことは事實であるが、之は伸びんが爲めの前提とも觀測される。即ち筑豊、筑後の炭田が既に老境に入つたと傳へられる時、佐賀縣炭田に着眼したる資本家は競うて鑛



岩屋炭坑

その面積は一億二千七百餘萬坪の廣地域に亘つてゐる點に徴しても、佐賀炭田が多分の將來性あることを推斷することが出來よう。殊に福岡縣の三池と有明海を距て、對向せる藤津郡の南部四千餘坪に對する三井の試掘願、多久及び東松浦炭田を有する三菱、杵島郡に於ける高取鑛業、小城郡南部に於ける東杵島炭坑の將來は、最も囑目されるものがある。然し佐賀縣は工業が未だ發達せず採炭量の八割は北九州、佐世保、長崎等の工業地或は唐津港、住ノ江港より移出せられる状態にある點より推しても、北九州及び長崎、佐世保の工業状態と佐賀炭田の開發とは密接なる關係を有し、その開發の遲速は北九州に於ける工業の盛衰如何にかゝつてゐると云へるであらう。

目下試掘を願せる主なるものを擧ぐれば左の通りである。

- 東杵島炭坑、三井鑛山、明治鑛業、三菱鑛業、栃木商事、九州合同炭坑
- 木村同族、帝國産業、九州炭坑、麻生商事、北海道炭坑汽船、高取鑛業
- 杵島炭坑、住友鑛業、高榮株式、其他多數



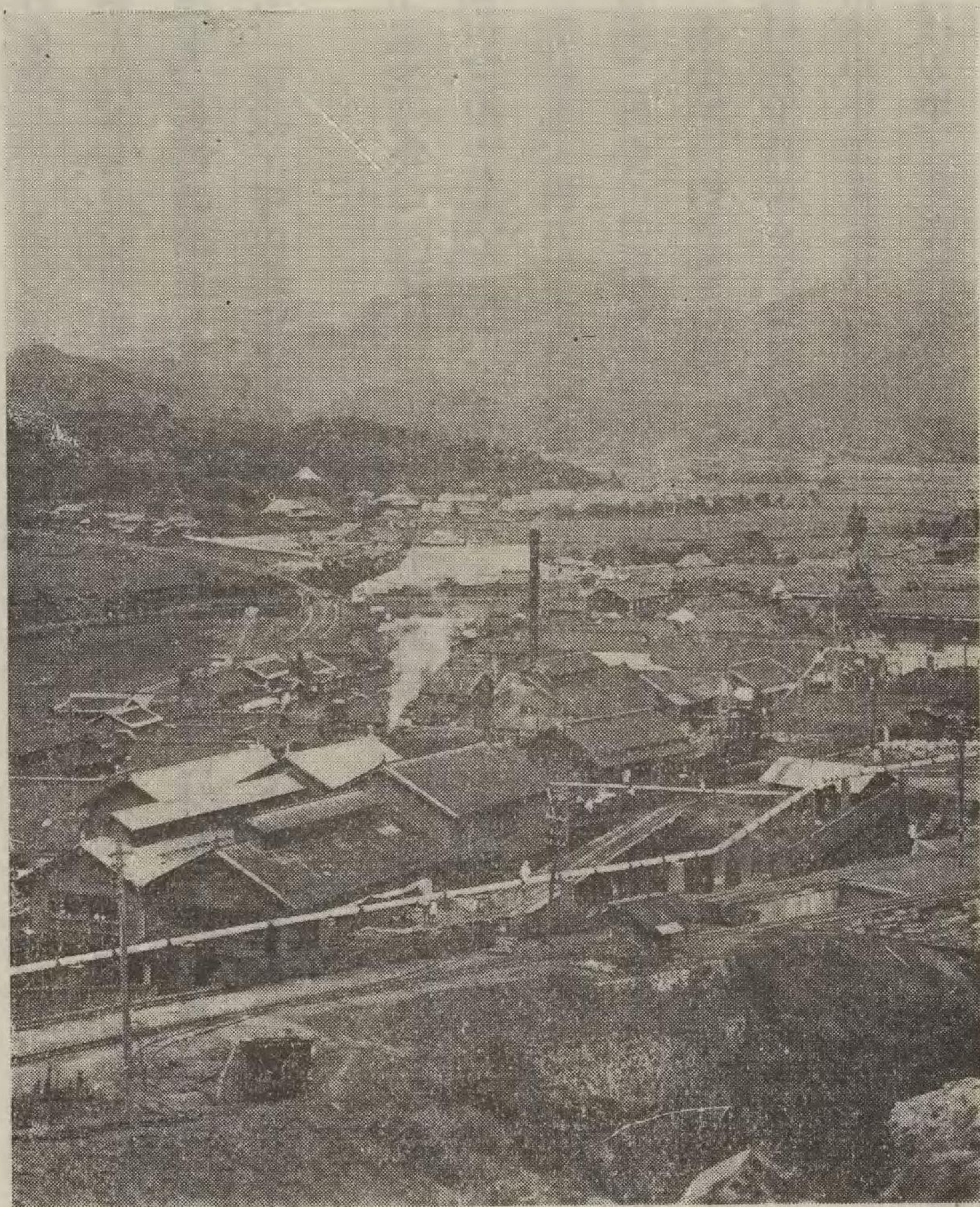
島炭坑

年次	採掘鑛區坪數	採掘數量	價格
昭和五年	六九、一七四、八九一	一、二五六、五〇三	八、三九六、〇八一
同 六年	六二、四九六、一一四	一、〇五七、〇一三	六、〇〇二、八四四
同 七年	六一、四七八、〇五二	八七二、二一八	四、七〇九、八三六
同 八年	六〇、九一三、二五二	八九四、一六八	六、二〇六、五六三
同 九年	六三、五八三、三八〇	七九〇、二三四	五、四二九、八五〇

尙産額五萬圓以上の主要炭坑を示せば左の如し。(昭和九年現在)

炭坑名	鑛區坪數	産出量	坑夫數	鑛業權者
相知芳谷坑	五、〇八七、〇〇〇	三、三〇〇	三、四〇	三菱鑛業株式會社
岩屋炭坑	五、五五、三六一	一〇四、五三三	九〇七	貝島炭鑛株式會社
新屋敷炭坑	四、〇五、一五二	五、五六六	八四	古川鑛業株式會社
入野炭坑	八八六、五六〇	一四、三〇七	三五	野上鑛業株式會社
向山炭坑	八八八、六四〇	四、一〇〇	五三	村井鑛業株式會社
大久保炭坑	三、五〇、九七五	一五、二四七	二〇	濱野治八
杵島炭坑	六、四二、一九〇	五〇、一八〇	三、四九八	杵島炭鑛株式會社

前表の示す如く、佐賀縣の石炭採掘業が縮小の途を辿つたことは事實であるが、之は伸びんが爲めの前提とも觀測される。即ち筑豊、筑後の炭田が既に老境に入つたと傳へられる時、佐賀縣炭田に着眼したる資本家は競うて鑛



岩屋炭坑全景

その面積は一億二千七百餘萬坪の廣地域に亘つてゐる點に徴しても、佐賀炭田が多分の將來性あることを推斷することが出來よう。殊に福岡縣の三池と有明海を距て、對向せる藤津郡の南部四千萬餘坪に對する三井の試掘願、多久及び東松浦炭田を有する三菱、杵島郡に於ける高取鑛業、小城郡南部に於ける東杵島炭坑の將來は、最も囑目されるものがある。然し佐賀縣は工業が未だ發達せず採炭量の八割は北九州、佐世保、長崎等の工業地或は唐津港、住ノ江港より移出せられる状態にある點より推しても、北九州及び長崎、佐世保の工業状態と佐賀炭田の開發とは密接なる關係を有し、その開發の遲速は北九州に於ける工業の盛衰如何にかゝつてゐると云へるであらう。

目下試掘を出願せる主なるものを擧ぐれば左の通りである。
 東杵島炭坑、三井鑛山、明治鑛業、三菱鑛業、栃木商事、九州合同炭坑
 木村同族、帝國産業、九州炭坑、麻生商事、北海道炭坑汽船、高取鑛業
 杵島炭坑、住友鑛業、高榮株式、其他多數

第三節 工業

佐賀縣に於ける工業戸數は、昭和九年度に於て本業九千八百六十六戸、副業五千五十一戸、合計一萬四千九百七十七戸にして縣下總戸數の一割二分を占めてゐるが、其の中で従業員五人以上を有する工場は四百十八である。

佐賀縣は、石炭、電力等の燃料資源に恵まれてゐる關係上當然大工業地に適する素質を有しながら、位置が稍々西に偏する爲めに北九州に壓せられ、大資本を投ずる實業家が少く、四、五の工場を除けば何れも中小工業と稱せ

區試掘を出願し、昭和九年に於ける試掘鑛區は百七十八件に達し、其の中金銀銅三件、クロム鐵一件、其の他二件を除いた百六十三件は石炭にして、

らるゝものである。

然し滿洲事變以後我が國の工業中心地は漸次西に移動せんとする傾向が見え、東亞に於ける九州の價值が高まるにつれて、大資本家にして佐賀縣に着眼するものが出現し始めた。西松浦郡に於ける川南工業所の如きはその一例である。

縣當局としても、商工業の進展を圖るには有力なる工場を誘致する必要を痛感し、基礎的調査を進むると共に、資本家に對して直接交渉を進めてゐるから、既設工場の擴張、新工場の誘致も遠からず實現するものと見られてゐる。

工業生産物の總額は三千七百七十餘萬圓に達して農産物に次ぎ、縣下總生産額の三四・八%を占め、清酒の五百七十三萬餘圓、綿糸の約五百四十四萬圓、鐵器類の四百三十八萬圓、麵類の三百一十一萬餘圓、陶磁器の二百八十八萬餘圓、賣藥の二百五十七萬圓、綿布の百五十七萬餘圓、醬油の百五十二萬圓、菓子類の約百七萬圓、菓製品の八十五萬五千圓、和紙の八十二萬八千圓板紙の六十八萬六千餘圓等が主なるものである。

由來中小工業は我が國の産業上より見て極めて重要な位置を占めてゐるに拘はらず、薄資微力の爲めに製造加工の設備に於て不十分なるは勿論、原料材料の購入から製品の販賣に至る迄不合理の點が多く、且つ同業者間に連絡統制無く、徒らに不必要な競争を敢てし共倒れとなり、或は信用を失墜して資金融通に支障を生ずるが如き状態のものも少くはない。

殊に近年農村工業の獎勵普及を見つゝあるとき、當業者の各自が覺醒し、自治的に弊害を矯正し、雜然たる企業状態を整理して統制ある合理的經營を

ある。殊に同工場の齒車製作機の如きは、日本は勿論、當時世界に三臺しかなかつたと稱せられた優秀機にして、従業員一千餘名を抱擁し、五千名の家族の生活を保障してゐたが、大正九年の世界的經濟恐慌の鯨波をうけて、佐賀市に本店を有する古賀銀行の大正十五年に破産するや、その餘波を受け谷口鐵工場も昭和二年閉鎖の止むなきに至つた。

其の後昭和六年同工場復活の運動が起り、計畫も着々として進行する途上同運動の中心人物たりし往時の谷口鐵工場の技師長片岡利一氏が急逝して、計畫は再び挫折し、据付けられてゐた諸機械は伊藤傳右衛門氏の手に移り、福岡縣幸袋工場に移さるゝに至つた。

かくて鍋島藩の名刀匠初代忠吉以來三百年の傳統を誇る工場も全く其の跡を絶つに至つたが、最近の軍需工業の股盛を思ふとき、佐賀縣として實に追憶一入の感がする。

なし、製品の改良統一と生産能率の増進を圖ることは最も急務であらう。又縣當局としても中小工業振興策として工業組合の設立を慫慂した結果、既に八組合が誕生して相當の實績を收めてゐるが、更に之を擴充して工業者の共同施設、指導機關の内容充實等を計り、一面農村工業の指導獎勵に際しては從來既存の企業との關係、殊に原料の取得、製品の販路等を慎重に調査研究して、經營者に不測の損害を與へ、或は中小工業業者と對立抗争せしむるが如き事なき様注意することが必要であると筆者は考へる。

第四節 機械器具工業

佐賀縣の機械器具工業の歴史は可なり古い。即ち長崎、平戸に傳來した西洋文明は、當時長崎港防備の任務を帯びてゐた佐賀藩に傳はり、封建制度の時代に於ては、我が邦に於ける機械工業の尖端を進み、嘉永年間既に兵器車臺等を製作して幕府に納付した歴史をもつてゐる。

明治維新後、採礦業勃興の機運に乗じて、明治十六年佐賀市に谷口鐵工場が創設されて諸機械の製作に着手し、明治二十五年より鐵管の製造をも開始し、日露の戦役には榴彈を造りて納入するに至つた。

(1) 谷口鐵工場

同所の製品は優秀にして、東京、大阪、熊本等の各遞信局、吳海軍工廠建築部、海軍燃料廠、臺灣、朝鮮の總督府等の納入品として好評を博し、現在福岡市東公園にある日連の銅像も實に此の谷口鐵工場に於て鑄造したもので

郡の舊芳谷炭坑直屬の鐵工所として創設されたのが濫觴で、大正五年獨立して資本金百萬圓の株式會社唐津鐵工所となつた。

現在は資本金五百萬圓の全額拂込済で、隆々日本五大メーカーの一として重工業界に光彩を放つてゐる。主要生産品は旋盤ミリングマシン、プレナーボーリングマシン、ドリル、セーパー類等の工作機械で七百三十名の熟練工を使用してゐるが、軍需工業の勃興で諸機械の注文が殺到し、國內工場の需用に追はれ國外への輸出は出來ぬ程の股盛振りである。同工場は國防上必要なる諸機械の製作が大部分を占めてゐる關係上日本の近時の國防の擴大は同工場擴張の機會となつてゐる。即ち同工場は裏海岸二千三百坪の埋立工事に着手し、將來の擴張發展の準備工作中である。

(4) 戸上電機製作所

戸上電機製作所は、大正十四年三月資本金六十萬圓の株式會社として佐賀

工業生産物の總額は三千七百七十餘萬圓に達して農産物に次ぎ、縣下總生産額の三四・八%を占め、清酒の五百七十三萬餘圓、綿糸の約五百四十四萬圓、鐵器類の四百三十八萬圓、麵類の三百一十一萬餘圓、陶磁器の二百八十八萬餘圓、賣藥の二百五十七萬圓、綿布の百五十七萬餘圓、醬油の百五十二萬圓、菓子類の約百七萬圓、菓製品の八十五萬五千圓、和紙の八十二萬八千圓板紙の六十八萬六千餘圓等が主なるものである。

由來中小工業は我が國の産業上より見て極めて重要な位置を占めてゐるに拘はらず、薄資微力の爲めに製造加工の設備に於て不十分なるは勿論、原料材料の購入から製品の販賣に至る迄不合理の點が多く、且つ同業者間に連絡統制無く、徒らに不必要な競争を敢てし共倒れとなり、或は信用を失墜して資金融通に支障を生ずるが如き状態のものも少くはない。

殊に近年農村工業の奨励普及を見つゝあるとき、當業者の各自が覺醒し、自治的に弊害を矯正し、雜然たる企業状態を整理して統制ある合理的經營を

ある。殊に同工場の齒車製作機の如きは、日本は勿論、當時世界に三臺しかなかつたと稱せられた優秀機にして、従業員一千餘名を抱擁し、五千名の家族の生活を保障してゐるが、大正九年の世界的經濟恐慌の鯨波をうけて、佐賀市に本店を有する古賀銀行の大正十五年に破産するや、その餘波を受け谷口鐵工場も昭和二年閉鎖の止むなきに至つた。

其の後昭和六年同工場復活の運動が起り、計畫も着々として進行する途上同運動の中心人物たりし往時の谷口鐵工場の技師長片岡利一氏が急逝して、計畫は再び挫折し、据付けられてゐた諸機械は伊藤傳右衛門氏の手に移り、福岡縣幸袋工場に移さるゝに至つた。

かくて鍋島藩の名刀匠初代忠吉以來三百年の傳統を誇る工場も全く其の跡を絶つに至つたが、最近の軍需工業の殷盛を思ふとき、佐賀縣として實に追憶一入の感がする。

(2) 眞崎鐵工所

明治十年九月に、佐賀市外高尾に眞崎鐵工所が創立され、夙に製麵機を發明して、當時手製のみであつた麵業界に劃期的革新を提供し、眞崎式製麵機の名聲は全國を風靡する有様であつた。近年製麵機の製作は稍下火であるが農村の機械化に應じて機械灌漑用のポンプを製作して、内地は勿論滿洲方面に迄盛に輸出してゐる。

(3) 唐津鐵工所

株式會社唐津鐵工所は、土佐の先覺者故竹内明太郎氏を坑主とする東松浦

佐賀縣産業の巻

第四節 機械器具工業

佐賀縣の機械器具工業の歴史は可なり古い。即ち長崎、平戸に傳來した西洋文明は、當時長崎港防備の任務を帯びてゐた佐賀藩に傳はり、封建制度の時代に於ては、我が邦に於ける機械工業の尖端を進み、嘉永年間既に兵器車臺等を製作して幕府に納付した歴史をもつてゐる。

明治維新後、採鑛業勃興の機運に乗じて、明治十六年佐賀市に谷口鐵工場が創設されて諸機械の製作に着手し、明治二十五年より鐵管の製造をも開始し、日露の戦役には榴彈を造りて納入するに至つた。

(1) 谷口鐵工場

同所の製品は優秀にして、東京、大阪、熊本等の各遞信局、吳海軍工廠建築部、海軍燃料廠、臺灣、朝鮮の總督府等の納入品として好評を博し、現在福岡市東公園にある日蓮の銅像も實に此の谷口鐵工場に於て鑄造したもので

郡の舊芳谷炭坑直屬の鐵工所として創設されたのが濫觴で、大正五年獨立して資本金百萬圓の株式會社唐津鐵工所となつた。

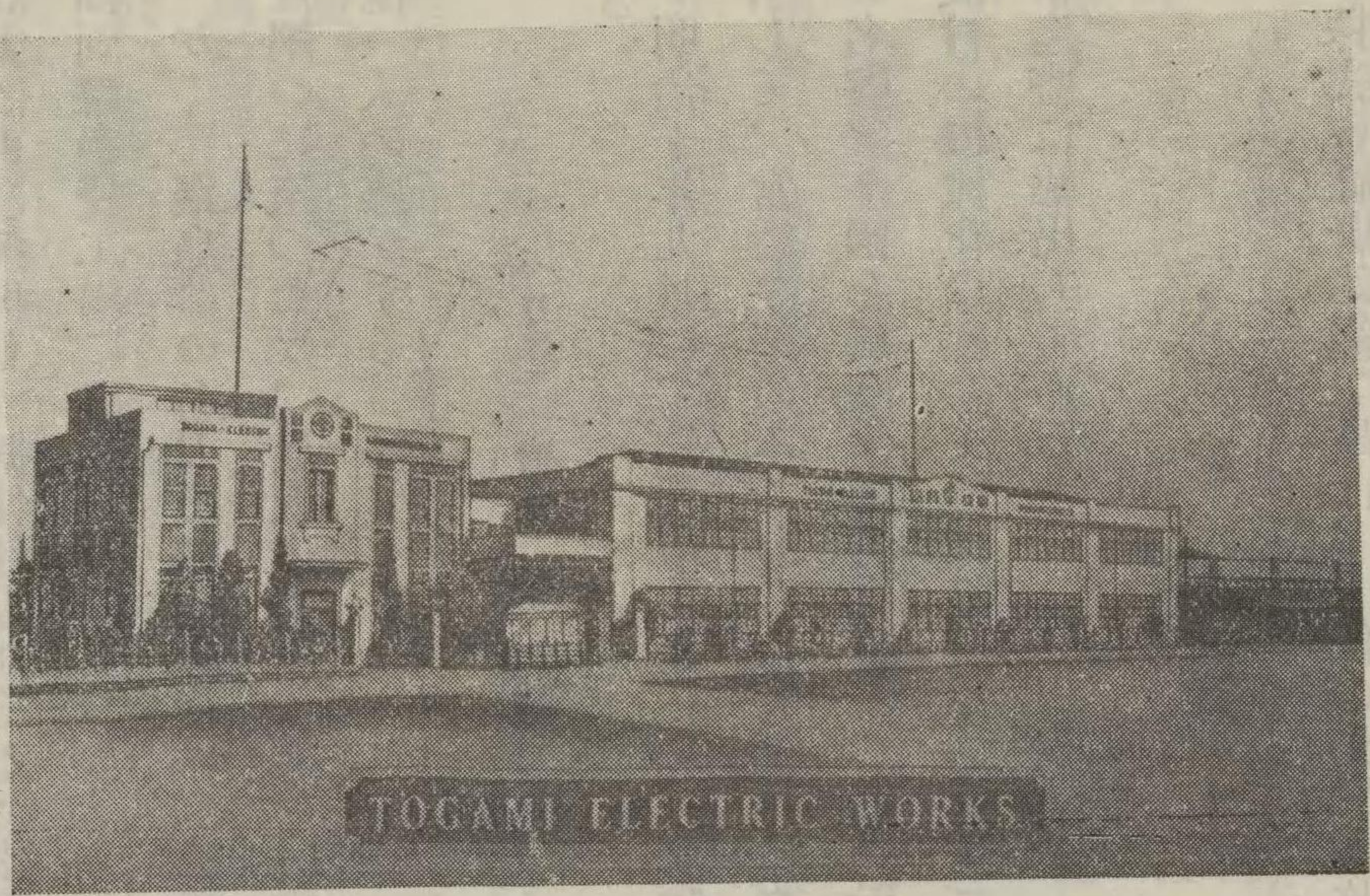
現在は資本金五百萬圓の全額拂込済で、隆々日本五大メーカーの一として重工業界に光彩を放つてゐる。主要生産品は旋盤ミリングマシン、プレナーボーリングマシン、ドリル、セーパー類等の工作機械で七百三十名の熟練工を使用してゐるが、軍需工業の勃興で諸機械の注文が殺到し、國內工場の需用に追はれ國外への輸出は出來ぬ程の殷盛振りである。同工場は國防上必要なる諸機械の製作が大部分を占めてゐる關係上日本の近時の國防の擴大は同工場擴張の機會となつてゐる。即ち同工場は裏海岸二千三百坪の埋立工事に着手し、將來の擴張發展の準備工作中である。

(4) 戸上電機製作所

戸上電機製作所は、大正十四年三月資本金六十萬圓の株式會社として佐賀市に誕生した、その製品は現専務取締役戸上文氏の發明考案に係る自動閉器、マグネツトスイッチ、動力線の遮斷器等五十數種の電氣機械にして殆んど新案特許品である、昭和十年末現在の従業員は男女工四百三十二名にして、最近の軍需工業の關係で注文に追はれ、従業員を増員中である、製品の販路は佐世保海軍工廠を初めとして内地は勿論、朝鮮、臺灣、滿洲、支那に跨り常に電氣器具發明の尖端を走り、將來の發展を囑目されてゐる。

以上の他佐賀市、唐津市を中心として群小鐵工所があり、何れも軍需景氣農村の電化、機械化の影響を受けて活氣を見せてゐる。佐賀市の石丸鐵工所の如きは獨特のポンプ、モーター等の製作で工場施設等も漸次擴大し、最近

六九五



戸上電気製作所

では鑄物工場も開き社運日に
進み、附近の地域を買収して
大擴張の準備を進めてゐる状
態である。

以上の如く佐賀縣下の鐵工
業界は滿洲事變後急激なる發
展途上にあるとはいへ、之を
福岡、長崎の工業界に比較す
ると、尙及ばざること遠きの
感なしとは云へない。

即ち昭和九年に於ける鐵器
類製作戸數は、二百七十三戸
職工一千七百六十二人、生産
額四百三十八萬六百七十五圓

で、その中鑄物類七萬六千三百五十八圓、
機械類四百一十一萬四千五百十八
圓、器具類十一萬五千九百七圓、其他七萬三千八百九十二圓等で、確に軍需
インフレの影響で近年著しく増産の途を辿つてはるるが、生産額に於ては福
岡、長崎の勢威に及ぶべきもない。

最近九年間の生産額を示せば左の通り

年次	總價格 (單位千圓)	鑄物類	機械類	器具類	其他
昭和元年	二、四三六	七九三	一、四三一	一〇三	一〇八
同二年	二、四二〇	六〇五	一、五九三	一一六	一〇四
同三年	二、七一三	五三五	一、二七八	八三四	六五
同四年	二、四七五	四一七	一、八五二	一三七	六七
同五年	一、七一九	三三	一、五〇九	一一四	六三
同六年	一、六八三	五一	一、四四六	一二五	六〇
同七年	二、〇一三	四六	一、七七四	一一八	七五
同八年	二、四〇一	五〇	二、二二八	六九	五二
同九年	四、三八〇	七六	四、一一四	一一五	七三

六九六

第三章 佐賀縣下の窯業

第一節 概観

佐賀縣に於て現在行はれてゐる窯業は、陶磁器、煉瓦、瓦、土管、硝子製
造等にして一時生産せられたセメント製造は、會社の廢業により全く其の跡
を絶つてゐる。

昭和九年の統計に依ると、縣の代表的特産品たる陶磁器の産額に比較する
と、他は極めて微々たるものにして、殊に硝子製品の如きは壘類、食器類、

第二節 有田陶業史

1 沿革

口碑として残つてゐる陶業の沿革は次の如くで、判然たる
史記は不幸にして残されてゐない。佐賀藩の始祖鍋島直茂が豊臣秀吉の朝鮮
征伐に先鋒を勤め、慶長二年凱旋するや陶工の渡來して歸化するものが多か
つた。佐賀郡金立村字玖摩山に在る者を金氏と言つて、後松浦郡山形村字瀧
川内に移つた。

又小城郡多久村に在る者を李參平と云ひ、朝鮮忠清道金江の生れである。
金ヶ江を氏とし、初め同村字道祖元に窯業を起したが、意に適ふ原料を得ず、
西漸して、元和二年松浦郡有田郷字亂橋に移り、後又有田字上白川に移住し
た。杵島郡武内村字内田の者を宗傳と云ひ、深海を氏とした。後に松浦郡有
田郷稗古場に移つた。是が慶長から元和、寛永年間の事にして現今の有田町
を當時は田中村と稱し、深林鬱蒼たる溪間で僅かに松浦郡平戸から杵島郡武



製作所

福岡、長崎の工業界に比較すると、尙及ばざること遠き感なしとは云へない。即ち昭和九年に於ける鐵器類製作戸数は、二百七十三戸職工一千七百六十二人、生産額四百三十八萬六千七百七十五圓

で、その中鑄物類七萬六千三百五十八圓、機械類四百一十一萬四千五百十八圓、器具類十一萬五千九百七圓、其他七萬三千八百九十二圓等で、確に軍需インフレの影響で近年著しく増産の途を辿つてはるるが、生産額に於ては福岡、長崎の勢威に及ぶべきもない。最近九年間の生産額を示せば左の通り

第三章 佐賀縣下の窯業

第一節 概観

佐賀縣に於て現在行はれてゐる窯業は、陶磁器、煉瓦、瓦、土管、硝子製造等にして一時生産せられたセメント製造は、會社の廢業により全く其の跡を絶つてゐる。

昭和九年の統計に依ると、縣の代表的特産品たる陶磁器の産額に比較すると、他は極めて微々たるものにして、殊に硝子製品の如きは壘類、食器類、燈火用品等の器具類にして、現在のところ大規模の工場はない。然し最近西松浦郡山城町に創立された資本金百萬圓の川南工業所は主として曹達灰の製造をしてゐるが、近き將來は板硝子製造を開始するものと見られてゐる。

種類	製造場數	職工數	總價格
陶磁器	二三七	三、〇〇三	二、八八五、八〇九
煉瓦	二二	二二一	一六二、三二一
瓦	二二一	八〇七	四五七、一九九
土管	二四	五八	一五、八六四
硝子	四	二七	二三、八三七

佐賀縣産業の巻

第二節 有田陶業史

1 沿革 口碑として残つてゐる陶業の沿革は次の如くで、判然たる史記は不幸にして残されてゐない。佐賀藩の始祖鍋島直茂が豊臣秀吉の朝鮮征伐に先鋒を勤め、慶長二年凱旋するや陶工の渡來して歸化するものが多かつた。佐賀郡金立村字玖摩山に在る者を金氏と言つて、後松浦郡山形村字瀧川内に移つた。

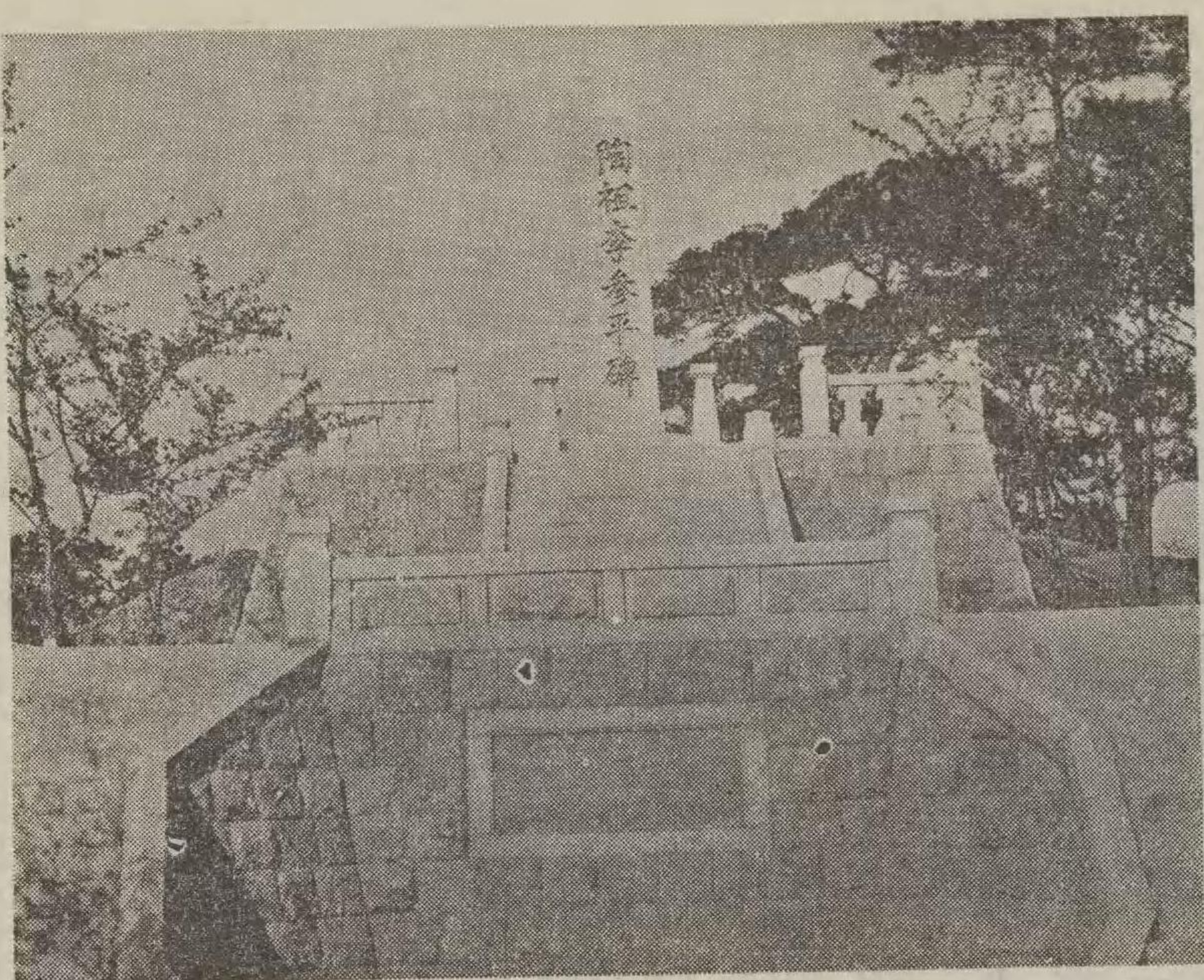
又小城郡多久村に在る者を李參平と云ひ、朝鮮忠清道金江の生れである。金ヶ江を氏とし、初め同村字道祖元に窯業を起したが、意に適ふ原料を得ず、西漸して、元和二年松浦郡有田郷字亂橋に移り、後又有田字上白川に移住した。杵島郡武内村字内田の者を宗傳と云ひ、深海を氏とした。後に松浦郡有田郷稗古場に移つた。是が慶長から元和、寛永年間の事にして現今の有田町を當時は田中村と稱し、深林鬱蒼たる溪間で僅かに松浦郡平戸から杵島郡武雄に通ずる道路があつたのみであると言ひ傳へられてゐる。

有田郷亂橋に居住してゐた李參平は、溪に沿うて遡り有田上白川に移住し窯を築き陶器の製造を開始するに至つたものであるが、思ふに此の地が薪炭を得るに便利であつた爲めであらう。

2 製陶業の革新 泉山の磁礦は、寛永年間李參平が発見したもので創業當時のものは粗製品なる爲め、當時は顧るものさへなかつた。然し後世から之を観ると、我が邦製陶業大革新の濫觴にして有田焼の今日あるは、實に李參平の賜であると云へる。又杵島郡字板野川内に窯を築いたが、現今遺蹟の存する百間窯がそれで、泉山の磁石を此處に運んで白磁器を創製したこ

とは廢窯から掘出される破片によつて今日では間違ひない事實として學界で斷定されてゐる。

然し此の地は極めて邊鄙であつたから、通路に接する字小樽の地に移築し



陶祖參平塚

ケ所、有田郷に七ヶ所残つてゐる。

當時の窯業戸數は百二十戸にして、皆金ヶ江參平の統轄に屬し製作描畫共に稍熟達してゐたが、彩畫着色を施し裝飾するやうな技術は未だ發見されなかつたものゝ如くである。

3 柿右衛門燒 正保元年、伊萬里の人東島徳右衛門は、長崎に來た

の信用を得て妻まで娶つたが、在右三年秘法を會得するや妻子を捨て、加賀に逃げ歸り窯業を始めた。之が九谷燒の發端であるが、狩野派の名手久隅守景を招いて意匠をかへ、青九谷の特色を顯はしてから有田燒の風趣は全く變つてしまつた。

寛文年間、東都の陶商伊萬里屋五郎兵衛は仙臺伊達侯の委囑を受けて有田に來り、二ヶ年の月日を過す中名工辻喜右衛門の作品を入手し、之を伊達侯に納めたところ、伊達侯

は其の逸品なるを稱揚し之を朝廷に



支那人總官に就いて彩畫着色の法を習ひ、之を有田郷南川原の陶工酒井柿右衛門に傳へた。柿右衛門は屢々試験すれども不成功に終り、之を吳洲權兵衛に謀り協力して幾多の研究の末、遂に成功し、かくて製磁に彩畫錦紋を施し、長崎に持ち出したところ清商の稱讚を得た。之有田燒を外國商人に賣る權利を得た所以であると云ひ傳へられてゐる。其の後清商蘭商と貿易して、彩畫錦紋の精巧な磁器を輸出するやうになつた。此の頃有田の陶商に青山幸右衛門といふ者があつた、京阪に往復して最良の磁器を販賣し、數多の顧客があつた、その中でも京都の陶商茶碗屋久兵衛とは最も親しい間柄であつたが、或る時久兵衛は、有田燒錦手の法を問ふたに、幸右衛門は平素親交ある間柄とて何心なく其の施法を説明すると、久兵衛は之を野々村仁清に傳へた。仁清只管その方法を研究して、幾何ならずして彩畫錦紋の技巧を顯はすに至つた。然し此の事が後になつて發覺し、幸右衛門は秘法を他國人に洩らした料により國法に依つて嚴刑に處せられた。之を傳へ聞いた久兵衛は、精神錯亂して自殺した。之が演劇でお馴染の碗久の事蹟である。

4 大川内燒 有田外山の中でも、大川内山は佐賀藩主から徳川將軍への献上品及び他藩主への贈進品を製造する藩窯のあつた所で、原料は有田泉山の磁礦地に御用坑を指定して、一般人の採掘を禁じ、藩士副田孫三郎を主幹とし、其の子孫が其の職を世襲したが、寛保以後は有田代官の所轄となつた。製品は蓋盤其の他精巧な裝飾器具にして、嚴密な規定を設けて模造を禁じた。

5 九谷燒 萬治年間加賀大聖寺の藩士後藤才次郎は、藩主前田氏の命を受けて有田燒金匱の秘法を探る可く雇夫に變裝して陶家に入り込み、傭主

幕府の禁令を犯して長崎から印度方面に密航して有田燒を販賣し巨利を得たが、發覺して次郎左衛門は長崎の獄に投ぜられて刑せられ柿右衛門は自刃した。現今歐洲に於て日本古伊萬里磁器と稱して貴重されるものゝ中には當時の密賣品が相當ある。

7 秘法の漏洩防止 肥後國天草は磁

陶器の原料豊富なるを以て窯業を起さんとする計畫あることを探知した佐賀藩は、秘法の漏洩を憂へ業者に嚴戒して防止に努めた。偶々大川内藩窯の名工副島勇七は監督藩吏と意思

の相違を來して脱走、諸國の陶業地を巡遊し産て有田陶法の秘訣を傳授してゐたが、追跡し



ケ所、有田郷に七ヶ所残つてゐる。

當時の窯業戸数は百二十戸にして、皆金ヶ江參平の統轄に屬し製作描畫共に稍熟達してゐたが、彩畫着色を施し裝飾するやうな技術は未だ發見されなかつたものゝ如くである。

3 柿右衛門燒

正保元年、伊萬里の人東島徳右衛門は、長崎に來た

祖は、廢窯の跡が各地に散在する點から判斷することが出来る。而して之は單に歸化の鮮人のみならず、遠近から有田に集り、陶業を企圖し其後各地に散在して部落をつくり、在所の山林を伐り倒して燃料とし、陶業を営んだ證據であつて、その跡は伊萬里郷に四

る時久兵衛は、有田燒錦手の法を問ふたに、幸右衛門は平素親交ある間柄として何心なく其の法を説明すると、久兵衛は之を野々村仁清に傳へた。仁清只管その方法を研究して、幾何ならずして彩畫錦紋の技巧を顯はすに至つた。然し此の事が後になつて發覺し、幸右衛門は秘法を他國人に洩らした科により國法に依つて嚴刑に處せられた。之を傳へ聞いた久兵衛は、精神錯亂して自殺した。之が演劇でお馴染の碗久の事蹟である。

4 大川内燒

有田外山の中でも、大川内山は佐賀藩主から徳川將軍

への献上品及び他藩主への贈進品を製造する藩窯のあつた所で、原料は有田泉山の磁礦地に御用坑を指定して、一般人の採掘を禁じ、藩士副田孫三郎を主幹とし、其の子孫が其の職を世襲したが、寛保以後は有田代官の所轄となつた。製品は蓋盤其の他精巧な裝飾器具にして、嚴密な規定を設けて模造を禁じた。

5 九谷燒

萬治年間加賀大聖寺の藩士後藤才次郎は、藩主前田氏の命

を受けて有田燒金匱の秘法を探る可く雇夫に變裝して陶家に入り込み、傭主

の信用を得て妻まで娶つたが、在有三十年秘法を會得するや妻子を捨て、加賀に逃げ歸り窯業を始めた。之が九谷燒の發端であるが、狩野派の名手久隅守景を招いて意匠をかへ、青九谷の特色を顯はしてから有田燒の風趣は全く變つてしまつた。

寛文年間、東都の陶商伊萬里屋五郎兵衛は仙臺伊達侯の委囑を受けて有田に來り、二ヶ年の月日を過ごす中名工辻喜右衛門の作品を入手し、之を伊達侯に納めたところ、伊達侯は其の逸品なるを稱揚し之を朝廷に献納した。此處に於て古來御使用の土器を廢し給ひて清淨なる有田燒を召さるゝことゝなり、佐賀藩主に命じて御器若干を辻喜右衛門に命ぜられ、辻氏は代々此の榮職を世襲し、三代喜平次に至り常陸大塚の稱號を許された。

6 陶器の密貿易

享保の頃

富村勘右衛門と嬉野次郎左衛門は、



幕府の禁令を犯して長崎から印度方面に密航して有田燒を販賣し巨利を得たが、發覺して次郎左衛門は長崎の獄に投せられて刑せられ勘右衛門は自刃した。現今歐洲に於て日本古伊萬里磁器と稱して貴重されるものゝ中には當時の密賣品が相當ある。

7 秘法の漏洩防止

肥後國天草は磁

陶器の原料豊富なるを以て窯業を起さんとする計畫あることを探知した佐賀藩は、秘法の漏洩を憂へ業者に嚴戒して防止に努めた。偶々大川内藩窯の名工副島勇七は監督藩吏と意思の相違を來して脱走、諸國の陶業地を巡遊して有田陶法の秘訣を傳授してゐたが、追跡した吏員に伊豫國砥部に於て捕へられ、有田と伊萬里の通路に當る鼓時にて梟首された。此の時代は、各陶業地から各種の人物が有田に入り込み、有田燒の秘法を盗まんとしたので、鍋島侯は他國陶商の産地入りを嚴禁して賣買は伊萬里で行ふことに定めた。伊萬里燒の名稱は之から始つたものである。

8 有田陶法の普及

天保時代は有田

陶業の黄金時代である。此の頃京都清水の陶

工鹽野熊吉郎は傭奴として有田の陶家に働き、青華磁器製法の秘訣を習得し京に歸りて之を高橋道八に傳へた。之が京都磁器發達の起因であるとい碑に残つてゐる。かく觀來ると我が邦屈指の陶業地、九谷、瀬戸、會津、京都の陶法は何れも有田陶法の流れを汲んだものが漸次變化したものであることが窺知される。

9 海外發展狀況

萬治元年有田の陶商田代紋左衛門は、英國との貿易公許を得て長崎に開店し、さきにオランダ貿易を許された有田の豪商久富與次兵衛と共に専ら貿易に従事した。安政六年横濱が開港され、慶應三年兵庫港も開かれて外國船舶の出入が頻繁となるにつれて、陶磁器の輸出も急増するに至つたので、深川榮左衛門も長崎に開店し、田代紋左衛門は事業を擴張して横濱に開店した、現在横濱、名古屋に陶磁器貿易商として盛名ある田代商店は氏の事業を繼承したものである。

10 明治時代の陶業

明治維新後率先して西洋の窯法を採用したのは佐賀藩であつた。藩主閑叟公は郡令百武兼貞に命じて陶業改良を企畫し、明治二年京都の陶工三代高橋道八を招聘し、更に長崎に來船したドイツ人ワグネルを聘して青年陶業者に傳授せしめ、又明治六年壘國ウイーンに開かれた萬國大博覽會に出品せしむると共に壘獨佛の窯業を視察させた。

11 香蘭社と深川製磁

明治八年深川榮左衛門は深海墨之助等と謀り香蘭社を創立したが、同十二年深海墨之助等は脱退して新に製磁會社を設け西洋人向の日用品を製造した、兩社共佛國式の製陶機を購入して大規模の事業を企畫した。然し深海氏歿して製磁會社は大損失を招き、深川榮左衛門氏も歿して社運は振はなかつた、深川忠次氏は榮左衛門の次男にして父の死後

別に製陶會社を起した、之が深川製磁株式會社である。

12 實業教育開始

明治十四年、有田小學校校長江越禮太氏の意見が認められて實業教育が開始された。之を勉脩學舎と稱し、本邦陶業界に於ける實業教育の先驅にして、方今の陶業又は美術工藝界に有爲の人物を出し、斯界に貢献してゐる。即ちこれが佐賀縣立有田工業學校の前身である。

13 窯業試験場

陶磁器業指導のため獨立試験場の必要を認め、縣は昭和四年第一窯業試験場を有田町に、第二窯業試験場を昭和五年壘田町に設立、後に第二窯業試験場は窯業指導所と改稱したが、何れも有田燒の意匠圖案等技術方面の改善發達に貢献中である。

第三節 有田燒の現状



佐賀縣陶磁器の各種

分、工賃五分の昂騰を見ながら製品は他府縣製陶地との關係上殆んど差異なく、有田地方に於ける七大工場 of 成績を見ても利益を得たるもの六工場、その利益金總額四萬五千九百五十三圓、損益なきもの一工場にして稍好轉の兆は認めらるゝも、小資本工場は生産費が高み製品は割安にして、且つ資金の融通に圓滑を缺ぎ、採算不充分的状態にある。此の状態を打開すべく、陶磁器工業組合は原料の共同購入、製品の共同販賣、資金の融通等に全力を盡してゐるとは云へ、未だ充分でない。將來製品の意匠圖案を更に研究改善し販賣方法を合理化し、生産設備を完備して生産費を低下し、進んで金融の圓滑を圖ることが最も必要である。

生産品中、日用品食器類は生産過剰の状態なるに對比して、電氣工業用品は不足を告げてゐる。従來有田燒は高級藝術品に屬し、従つて販路も主要都市に限られてゐるが、他府縣との對抗上近年は廉價なる大衆向の品も製作し

庫港も開かれて外國船舶の出入が頻繁となるにつれて、陶磁器の輸出も急増するに至つたので、深川榮左衛門も長崎に開店し、田代紋左衛門は事業を擴張して横濱に開店した、現在横濱、名古屋に陶磁器貿易商として盛名ある田代商店は氏の事業を繼承したものである。

10 明治時代の陶業 明治維新後率先して西洋の窯法を採用したのは佐賀藩であつた。藩主閑叟公は郡令百武兼貞に命じて陶業改良を企畫し、明治二年京都の陶工三代高橋道八を招聘し、更に長崎に來船したドイツ人ワグネルを聘して青年陶業者に傳授せしめ、又明治六年塙國ウイーンに開かれた萬國大博覽會に出品せしむると共に塙獨佛の窯業を視察させた。

11 香蘭社と深川製磁 明治八年深川榮左衛門は深海墨之助等と謀り香蘭社を創立したが、同十二年深海墨之助等は脱退して新に製磁會社を設け西洋人向の日用品を製造した、兩社共佛國式の製陶機を購入して大規模の事業を企畫した。然し深海氏歿して製磁會社は大損失を招き、深川榮左衛門氏も歿して社運は振はなかつた、深川忠次氏は榮左衛門の次男にして父の死後

別に製陶會社を起した、之が深川製磁株式會社である。

12 實業教育開始 明治十四年、有田小學校校長江越禮太氏の意見が認められて實業教育が開始された。之を勉脩學舎と稱し、本邦陶業界に於ける實業教育の先驅にして、方今の陶業又は美術工藝界に有爲の人物を出し、斯界に貢献してゐる。即ちこれが佐賀縣立有田工業學校の前身である。

13 窯業試験場 陶磁器業指導のため獨立試験場の必要を認め、縣は昭和四年第一窯業試験場を有田町に、第二窯業試験場を昭和五年鹽田町に設立、後に第二窯業試験場は窯業指導所と改稱したが、何れも有田焼の意匠圖案等技術方面の改善發達に貢献中である。

第三節 有田焼の現状

佐賀縣の特産品たる有田焼は、歐洲大戰後の好況時代には生産總額五百萬圓に上つたが、世界的經濟界反動の鯨波に壓倒されて漸次減少し、昭和五年には二百五十餘萬圓に減少した。然し昭和七年の二百二十五萬圓を底として再び漸増の傾向を辿り、昭和九年には二百八十八萬餘圓となり、前年に比較して二十七萬餘圓の増加を示した。之は一般財界の好轉に起因するのであるが、滿洲事變後に於ける同方面への輸出増加と軍需工業の勃興に伴ふ建築用器磚子、タイル等の化學工業用品の注文増加がその主因をなしてゐる。その結果として五工場が増設されて二百三十七工場となつたものゝ未だ好景氣を謳歌する程ではない。即ち主製陶地たる有田方面に於て九割、其の他の地方に於ては七割の操業に過ぎない。又原料も前年に比べると一割、薪炭に於て五



種各の器磁陶

分、工賃五分の昂騰を見ながら製品は他府縣製陶地との關係上殆んど差異なく、有田地方に於ける七大工場の成績を見ても利益を得たるもの六工場、その利益金總額四萬五千九百五十三圓、損益なきもの一工場にして稍好轉の兆は認めらるゝも、小資本工場は生産費が嵩み製品は割安にして、且つ資金の融通に圓滑を缺き、採算不充分的状態にある。此の状態を打開すべく、陶磁器工業組合は原料の共同購入、製品の共同販賣、資金の融通等に全力を盡してゐるとは云へ、未だ充分でない。將來製品の意匠圖案を更に研究改善し販賣方法を合理化し、生産設備を完備して生産費を低下し、進んで金融の圓滑を圖ることが最も必要である。

生産品中、日用品食器類は生産過剰の状態なるに對比して、電気工業用品は不足を告げてゐる。從來有田焼は高級藝術品に屬し、従つて販路も主要都市に限られてゐたが、他府縣との對抗上近年は廉價なる大衆向の品も製作し一方出張販賣や見本市、宣傳即賣會等を開いて紹介宣傳に努めた結果、有田焼の名聲は頓に揚がり、内地、朝鮮は勿論、海外にまでその眞價を謳歌されてゐる。特に滿洲國との貿易概況を見るに、昭和八年度に於ては僅かに七萬四千四百四十八圓に過ぎなかつたものが、九年度には十五萬一千七百四十圓に増加し、將來同方面に發展の餘地あることを示してゐる。有田焼の特徴は、素地淡麗、品質堅硬、技術亦優秀にして、他府縣産品をリードするも比較的生産費の高い憾がある、殊に取引販賣の方法は特殊の製造業者を除いては依然として佐賀、長崎兩縣下の商人に限定された非公開の入札販賣方法を採用し製品の撰擇に於ても不合理の點が多い。

かゝる事象は多年の慣習と、資金の不圓滑に起因するものとして縣當局は

陶磁器工業組合を督勵後援すると共に、同一産業地區たる長崎縣と提携して肥前陶磁器工業組合聯合會を組織し、政府當局の認可も得て舊弊打開に着手せんとしてゐる。又藤津郡方面の低廉なる家具、食器、飲食器、朝鮮向食器等は朝鮮に製陶會社が設立されたのと、愛知縣産品の壓迫の爲めに輸出も著しく減少し、其の更生には佐賀縣當局も頗る頭を悩ましてゐる状態である。昭和元年以降同九年に至るまでの生産状況を示せば次の通りである。(千圓未満切捨て單位千圓)

年次	總價格	家具裝飾	工業用	磚子	玩具	其他
昭和元年	四、三四九	二、五九三	三五	三三八	一三	一四七
同二年	三、七六八	二、二七二	二四	三七二	一三	一四四
同三年	三、八七三	二、二七九	二四	三四七	一三	一八九
同四年	三、四四九	一、九〇七	七〇	三五六	一八	一〇六
同五年	二、五八九	一、五五五	五六	二一一	一四	六四
同六年	二、三八八	一、四一七	五六	一七〇	一四	六二
同七年	二、二五一	一、四一二	一一九	一五二	一四	六〇
同八年	二、六一六	一、六六七	一〇五	一九〇	一六	六五
同九年	二、八八五	一、八二九	一一六	二一四	一四	七二

第四節 唐津燒の沿革

唐津は、朝鮮及び支那大陸と最も近く、早くより彼我の交易開けて、支那陶器が古くから輸入され、此處を集散地として内地全般に賣捌いた關係上陶器と唐津は密接な關係が結ばれ、往年有田方面の磁器が伊萬里港を集散地とした爲めに伊萬里燒と稱せられた如く、唐津は陶器の代名詞となり、關西各

地に重要な位置を占めた。唐津燒は遠く孝徳、齊明の朝に創業されたとの傳説もあるも、起源は不詳である。然し、久しい以前より傳はり、藩政時代には大いに振ひ、光格天皇の御宇小笠原氏は陶工に命じて肥後の八代燒に似た白紋で雲鶴を造らせ幕府に献じた事がある。唐津燒中「米量」と稱せらるゝのは元享年間に製作されたもので、陶膚に薄釉を施され潤澤がない、往時之を以て斗量にしたとの説あるも疑はしい。唯米を斟した爲めに此の名が生れたことだけは確からしい。

「根拔」といふのは、建武より文明に亘る間に製作されたものである。質白土のものもあれば、赤土を用ひたものもある。釉色は鉛色で臺輪の中に纒紗の如く纒狀に土質を露はし、釉は施してない。

「奥高麗」といふのは文明から、天正の間の作品にして、足利義政からは點茶が盛に行はれ、高麗の茶碗が珍愛されたが、船載のものは入手困難であつた爲めに唐津に於て模造した、之が後世奥高麗と稱するものである。蓋し奥は往古の意で古い高麗といふ意であらう。

陶膚稍密にして釉色は枇杷の實の如く、又青黄のものもある。之も臺輪の内に皺紋のあるのが優良品とされてゐる、以上の三種を總稱して古唐津といふ。「瀬戸唐津」といふのは應仁から天正年間に製作されたもので、尾張の國瀬戸の釉水を用ひたから生じた名稱である。白土に白色釉を濃く施したものである。従つて龜紋の勞痕が甚だしい。

「繪唐津」は慶長以降のものである。茶碗盞盆などの雜器が多い。質は赤土で青黄黒を兼ねた釉を施し、最も潤澤があり、繪は草繪である。

「朝鮮唐津」は、天正から寛永年間の作品にして、朝鮮の土及び釉を使用し

て唐津で焼いたものである。土質は赤黒く青白を雜へた釉を流布し水盞盞盆等に多く茶碗には稀である。

「掘出唐津」といふのは、寛永から享保年間の製品にして、陶質堅く青黒を帯びた釉色を使用し、臺輪の土質を露はすものと然らざるものがある。臺輪の内に皺紋のあるのが珍重されることは他と同じ、形は多くは正圓でなく掘出しと名づくるのは火熱高く或は窳み、或は缺損した爲めに工人が之を用ひたものとして土中に埋めたのを、後人が掘出して賞翫して此の名を冠するやうになつたことから出たもので、後には埋めなかつた完備品まで之と同種類のものも皆掘出しと名づけたものである。

唐津燒の起源は前述の通りであるが、之に一新紀元を劃したのは、秀吉の朝鮮征伐である。即ち鍋島直茂は朝鮮より凱旋するに際して多久美作守に命じて陶工を伴ひ歸らしめた。その陶工中の範丘といふものが唐津に於て李朝風の陶窯を築き、製陶を始めた。降つて慶長の頃寺澤志摩守忠次郎が唐津城

其の全盛時代の作品には古伊萬里の濃艶色、鍋島の純爛、柿右衛門の繊細さと相競つて佐賀縣陶窯中の一權威であつた。殊に佐賀縣に於ける陶窯が殆ど朝鮮渡來なるに對して、白石燒は土着の郷土人の手に依つて源平時代に起業され時代と共に漸次發達育成された事は特筆に値する。

生産地は三養基郡北茂安村の山間で初めは農耕の餘暇に各自の家庭日用品を製造し極めて幼稚な焙烙燒と稱するものであつたが、安政から萬延にかけては完全に白磁器を製造するに至つた。其の間幾多の興亡盛衰あり、一時は外國貿易にまで漕ぎ付けたものゝ種々の故障で中絶し、殆ど往年の面影は存せない。たゞ汽車賣の土瓶、雪平、甕等極めて幼稚な日用品類を小規模に製造し、年産額も東尾燒と合せて約一萬六千圓である。東尾燒は、三養基郡北茂安村附近に産する土燒の七輪類、桐缸或は朱泥に類する低火度の火鉢、煎茶焜爐、土盃、植木鉢等である。

昭和元年	四、三四九	二、五九三	三五	三三八	一三	一四七
同二年	三、七六八	二、二七二	二四	三七二	一三	一四四
同三年	三、八七三	二、二七九	二四	三四七	一三	一八九
同四年	三、四四九	一、九〇七	七〇	三五六	一八	一〇六
同五年	二、五八九	一、五五五	五六	二一一	一四	六四
同六年	二、三八八	一、四一七	五六	一七〇	一四	六二
同七年	二、二五一	一、四一二	一一九	一五二	一四	六〇
同八年	二、六一六	一、六六七	一〇五	一九〇	一六	六五
同九年	二、八八五	一、八二九	一一六	二一四	一四	七二

第四節 唐津焼の沿革

唐津は、朝鮮及び支那大陸と最も近く、早くより彼我の交易開けて、支那陶器が古くから輸入され、此處を集散地として内地全般に賣捌いた關係上陶器と唐津は密接な關係が結ばれ、往年有田方面の磁器が伊萬里港を集散地とした爲めに伊萬里焼と稱せられた如く、唐津は陶器の代名詞となり、關西各

て唐津で焼いたものである。土質は赤黒く青白を雜へた釉を流布し水壺盞盆等に多く茶碗には稀である。

「掘出唐津」といふのは、寛永から享保年間の製品にして、陶質堅く青黒を帯びた釉色を使用し、臺輪の土質を露はすものと然らざるものとがある。臺輪の内に皺紋のあるのが珍重されることは他と同じ、形は多くは正圓でなく掘出しと名づくるのは火熱高く或は窳み、或は缺損した爲めに工人が之を不用のものとして土中に埋めたのを、後人が掘出して賞翫して此の名を冠するやうになつたことから出たもので、後には埋めなかつた完備品まで之と同種類のものは皆掘出しと名づけたものである。

唐津焼の起源は前述の通りであるが、之に一新紀元を劃したのは、秀吉の朝鮮征伐である。即ち鍋島直茂は朝鮮より凱旋するに際して多久美作守に命じて陶工を伴ひ歸らしめた。その陶工中の範丘といふものが唐津に於て李朝風の陶窯を築き、製陶を始めた。降つて慶長の頃寺澤志摩守忠次郎が唐津城主となるや歸化陶工を督勵して窯業を奨勵し、茶道との交渉を密にし、面目を一新した。然し、此の爲めに一般大衆との交渉薄らぎたるに對し、有田方面に勃興した李朝風の窯業は天恵の磁礬を得、伊萬里、長崎を介して海外に迄發展したことは佐賀縣に傳はつた李朝風窯の兩對照である。然し茶道の衰微につれて唐津焼も不振に陥り、明治維新後一時全く廢絶したが、明治二十年草場見節に依つて再興され、現在は二戸の製造所がある。

第五節 白石焼と東尾焼

現今白石焼と稱せらるゝものは、粗雑な驛賣の茶瓶程度のものであるが、

佐賀縣産業の巻

土のものもあれば、赤土を用ひたものもある。釉色は銚色で臺輪の手に終結の如く縞状に土質を露はし、釉は施してない。

「奥高麗」といふのは文明から、天正の間の作品にして、足利義政から後は點茶が盛に行はれ、高麗の茶碗が珍愛されたが、船載のものは入手困難であつた爲めに唐津に於て模造した、之が後世奥高麗と稱するものである。蓋し奥は往古の意で古い高麗といふ意であらう。

陶質稍密にして釉色は枇杷の實の如く、又青黄のものもある。之も臺輪の内に皺紋のあるのが優良品とされてゐる、以上の三種を總稱して古唐津といふ。「瀬戸唐津」といふのは應仁から天正年間に製作されたもので、尾張の國瀬戸の釉水を用ひたから生じた名稱である。白土に白色釉を濃く施したものである。従つて龜紋の劈痕が甚だしい。

「繪唐津」は慶長以降のものである。茶碗盞盆などの雜器が多い。質は赤土で青黄黒を兼ねた釉を施し、最も潤澤があり、繪は草繪である。

「朝鮮唐津」は、天正から寛永年間の作品にして、朝鮮の土及び釉を使用し

其の全盛時代の作品には古伊萬里の濃艶色、鍋島の絢爛、柿右衛門の纖細さと相競つて佐賀縣陶窯中の一權威であつた。殊に佐賀縣に於ける陶窯が殆ど朝鮮渡來なるに對して、白石焼は土着の郷土人の手に依つて源平時代に起業され時代と共に漸次發達育成された事は特筆に値する。

生産地は三養基郡北茂安村の山間で初めは農耕の餘暇に各自の家庭日用品を製造し極めて幼稚な焙烙焼と稱するものであつたが、安政から萬延にかけては完全に白磁器を製造するに至つた。其の間幾多の興亡盛衰あり、一時は外國貿易にまで漕ぎ付けたものゝ種々の故障で中絶し、殆ど往年の面影は存せない。たゞ汽車賣の土瓶、雪平、甕等極めて幼稚な日用品類を小規模に製造し、年産額も東尾焼と合せて約一萬六千圓である。東尾焼は、三養基郡北茂安村附近に産する土焼の七輪類、桐缸或は朱泥に類する低火度の火鉢、煎茶焜爐、土盃、植木鉢等である。

第六節 美術工藝

佐賀縣の特産品たる陶磁器中には、柿右衛門焼、大川内焼、唐津焼等を初めとして花瓶、床置、茶器、帶止等美術工藝品に屬するもの多きも、既に窯業の部に於て説述したるを以て此の項に於ては生産額は僅少なも鍋島緞通及び鹿島錦に就て略述する。

鍋島緞通は、元祿年間、佐賀郡扇町古賀清右衛門の創始に係り、其の製法は綿絲を以て編織したものに牡丹花鳥等を織り出した上品な敷物である。清右衛門は平素農耕を業としてゐたが、傭人某を韓國に遣はし織氈の製法を習

得せしめ、その歸來後協同して研究を重ね自らその製法に熟練して町内の者にも奨め、扇町紋氈と名づけて賣り出した。

其の後佐賀藩主鍋島侯は、精巧優美且つ頗る雅趣に富むを感賞し、扶持米を與へて専ら製織に従事させ、製品は御用品として一般への販賣を禁じ、幕府親藩への献上又は贈與品となした爲めに、民間に於て其の聲價を知るものは少かつた。

明治維新となつて禁制を解かれるや名聲頓に擧がり、需要激増して製作に追はるゝ程の盛況を見た。其の後、幾度かの盛衰消長を繰り返し、經營者も屢々變り、松本喜左衛門、藤戸龜一、大島貞七、江島大吉等を経て吉島正敏之を繼承し、製法及び圖案に大改良を加へて現在の鍋島緞通を作るに至つたが、各種の共進會博覽會等に出品して好評を博し、その需要も益々増加の傾向がある。

鹿島錦は、今から約八十年前舊鹿島藩主鍋島直躰夫人の創案されたもので、金糸、金紙、銀紙、絹紙、塗紙等の材料を使つて御殿女中の趣味の手藝として製作されてゐたが、廢藩と共に衰微し、將にその跡を絶たんとした。佐賀縣當局は此の歴史ある郷土手藝の衰微を遺憾として再興を期し、鹿島立教實業學校女子部を督勵して鹿島錦の普遍化と商品化に力を注ぎ、一方地元鹿島町村に於ては編物に經驗ある婦人會員を以て鹿島錦生産組合を設けて再興にとめてゐる。製品は高尚優雅な護符袋、名刺入、巻煙草入、羽織の紐ネクタイ等の外最近では外人向用品の製作をも研究中である。

昭和九年末に於ける直接従業員は九百三十三名に達し、生産高は綿糸百十九萬九千餘貫、價格五百四十三萬九千餘圓、綿布百五十五萬五千餘圓に上り、工場敷地三萬坪の堂々たる威容を佐賀驛西側に示してゐる。而かも我が輕工業生産品が世界市場を制覇

するに及び、此の急速なる進出に驚いた英國、カナダ

濠洲、印度、蘭印等の高率

關稅政策にも屈せず毅然と

して工場の擴張中にして、

之が完備の曉は生産數量は

倍加される筈である。製品

は、全部錦華紡本社の手に

依り、支那、朝鮮、滿洲、

第四章 纖維工業

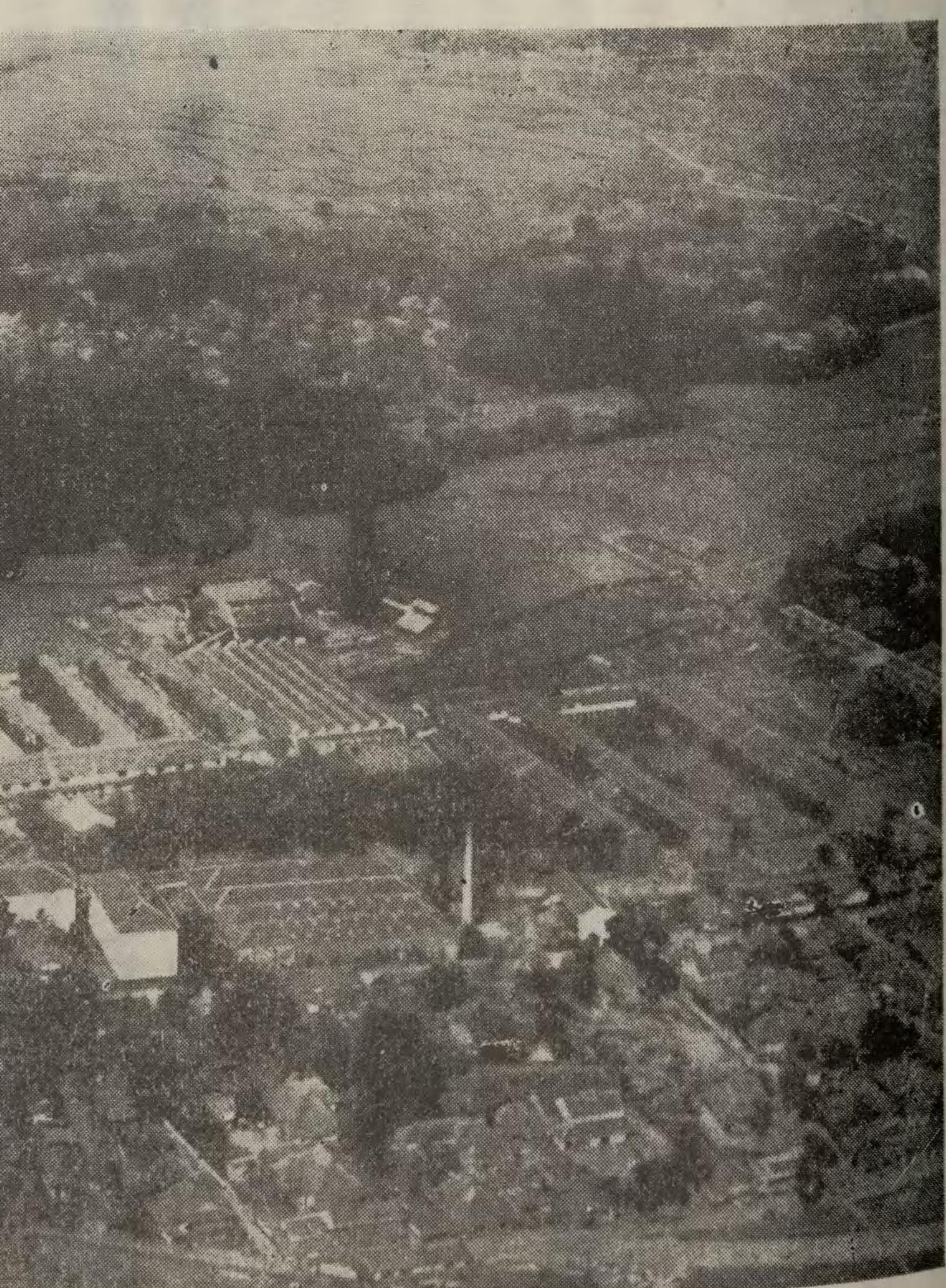
第一節 概 觀

歐洲の天地一度戰雲に包まるゝや、戰爭の中心地帯を遠く離れた我が國に於ける商工業は、俄然活氣を呈し、各地に大會社、大工場が相次いで創立され、黄金時代を現出したが、佐賀縣に於ても神戸の豪商鈴木商店の經營する佐賀紡績會社が佐賀市に創立され、華かなるスタートを切つたが、その後の所謂大戰後の反動的經濟界の不況襲來に、會社工場の倒潰するもの其の數を知らず、流石の鈴木商店も佐賀紡績の經營困難に陥り、之を放棄するの已むなきに至つた。

數千の従業員は四分五裂となり、佐賀縣市の蒙つた影響は實に激烈にして商工業は逐年衰微し、停止するところを知らざるまでの不況に當面した。此の苦境を打開す可く、時の佐賀市長野口能毅氏は寢食を忘れて佐賀紡績の再興の爲めに東奔西走、幾度かの失敗にも挫折せず、根氣強く運動を繼續し、遂に昭和三年二月に至り金澤市に本店を有する錦華紡績會社との交渉に成功し、直ちに大整理を斷行し、建築物の改修、並に補強工事に着手し、既設の舊式機械は新式の最高能率機と取り替へ、新陣容を整備して錦華紡績會社佐賀支店として昭和三年九月から一部の操業を開始した、之が現在佐賀縣に存在する唯一の綿糸紡績會社にして、運轉開始後は順調なる發展の途を進み、



佐賀錦華紡績株



片倉鳥栖製

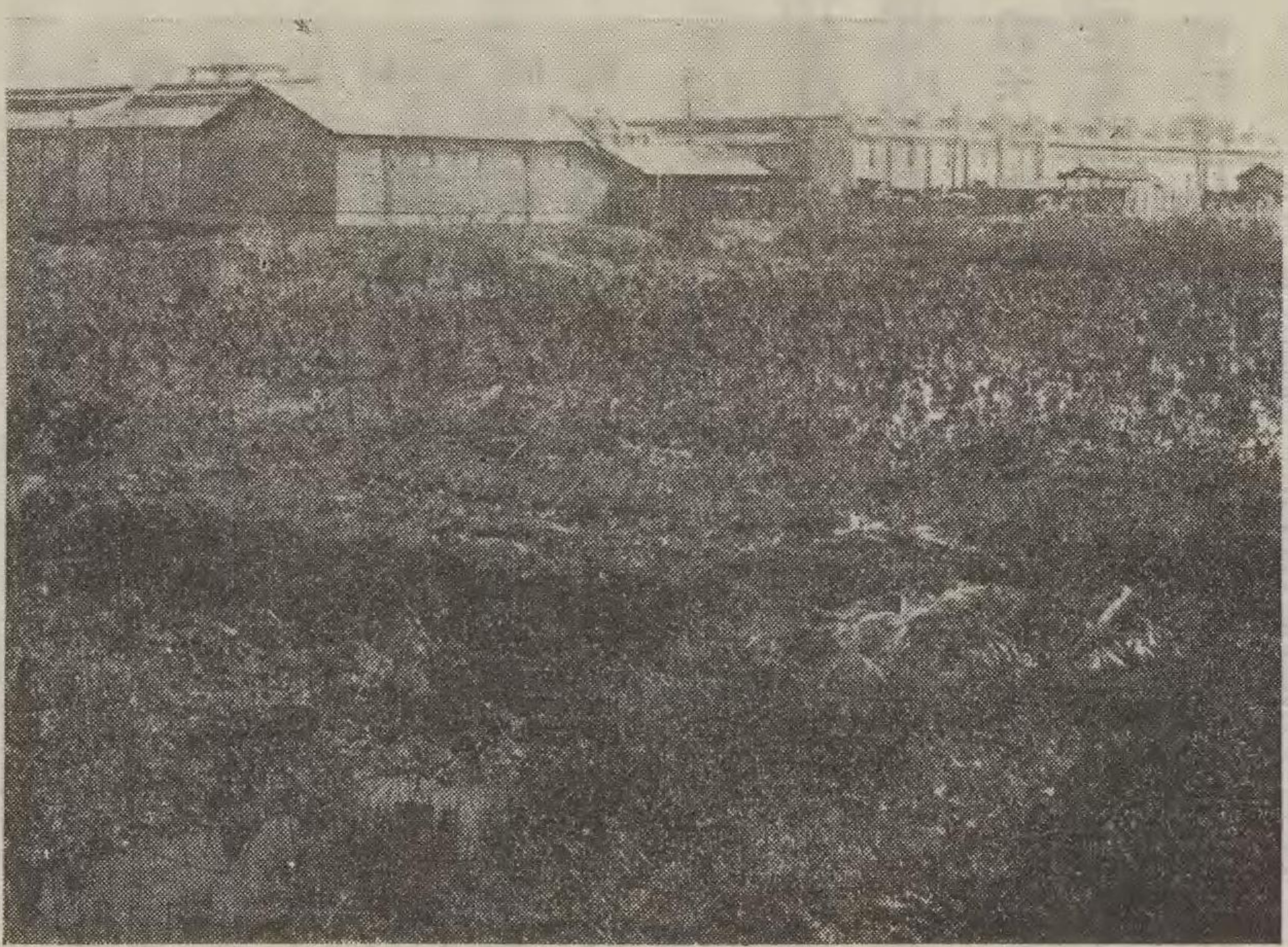
も屢々變り、松本喜左衛門、藤戸龜一、大島貞七、江島大吉等を経て吉島正敏之を繼承し、製法及び圖案に大改良を加へて現在の鍋島織通を作るに至つたが、各種の共進會博覽會等に出品して好評を博し、その需要も益々増加の傾向がある。

鹿島錦は、今から約八十年前舊鹿島藩主鍋島直彥夫人の創案されたもので、金糸、金紙、銀紙、絹紙、塗紙等の材料を使つて御殿女中の趣味の工藝として製作されてゐるが、廢藩と共に衰微し、將にその跡を絶たんとした、佐賀縣當局は此の歴史ある郷土手藝の衰微を遺憾として再興を期し、鹿島立教實業學校女子部を督勵して鹿島錦の普遍化と商品化に力を注ぎ、一方地元鹿島町村に於ては編物に經驗ある婦人會員を以て鹿島錦生産組合を設けて再興につとめてゐる。製品は高尚優雅な護符袋、名刺入、巻煙草入、羽織の紐ネクタイ等の外最近では外人向用品の製作をも研究中である。

れ、黄金時代を現出したが、佐賀縣に於ても神戸の豪商鈴木商店の經營する佐賀紡績會社が佐賀市に創立され、華かなるスタートを切つたが、その後の所謂大戦後の反動的經濟界の不況襲來に、會社工場の倒潰するもの其の數を知らず、流石の鈴木商店も佐賀紡績の經營困難に陥り、之を放棄するの已むなきに至つた。

數千の従業員は四分五裂となり、佐賀縣市の蒙つた影響は實に激烈にして商工業は逐年衰微し、停止するところを知らざるまでの不況に當面した。此の苦境を打開す可く、時の佐賀市長野口能毅氏は寢食を忘れて佐賀紡績の再興の爲めに東奔西走、幾度かの失敗にも挫折せず、根氣強く運動を繼續し遂に昭和三年二月に至り金澤市に本店を有する錦華紡績會社との交渉に成功し、直ちに大整理を斷行し、建築物の改修、並に補強工事に着手し、既設の舊式機械は新式の最高能率機と取り替へ、新陣容を整備して錦華紡績會社佐賀支店として昭和三年九月から一部の操業を開始した、之が現在佐賀縣に存在する唯一の綿糸紡績會社にして、運轉開始後は順調なる發展の途を進み、

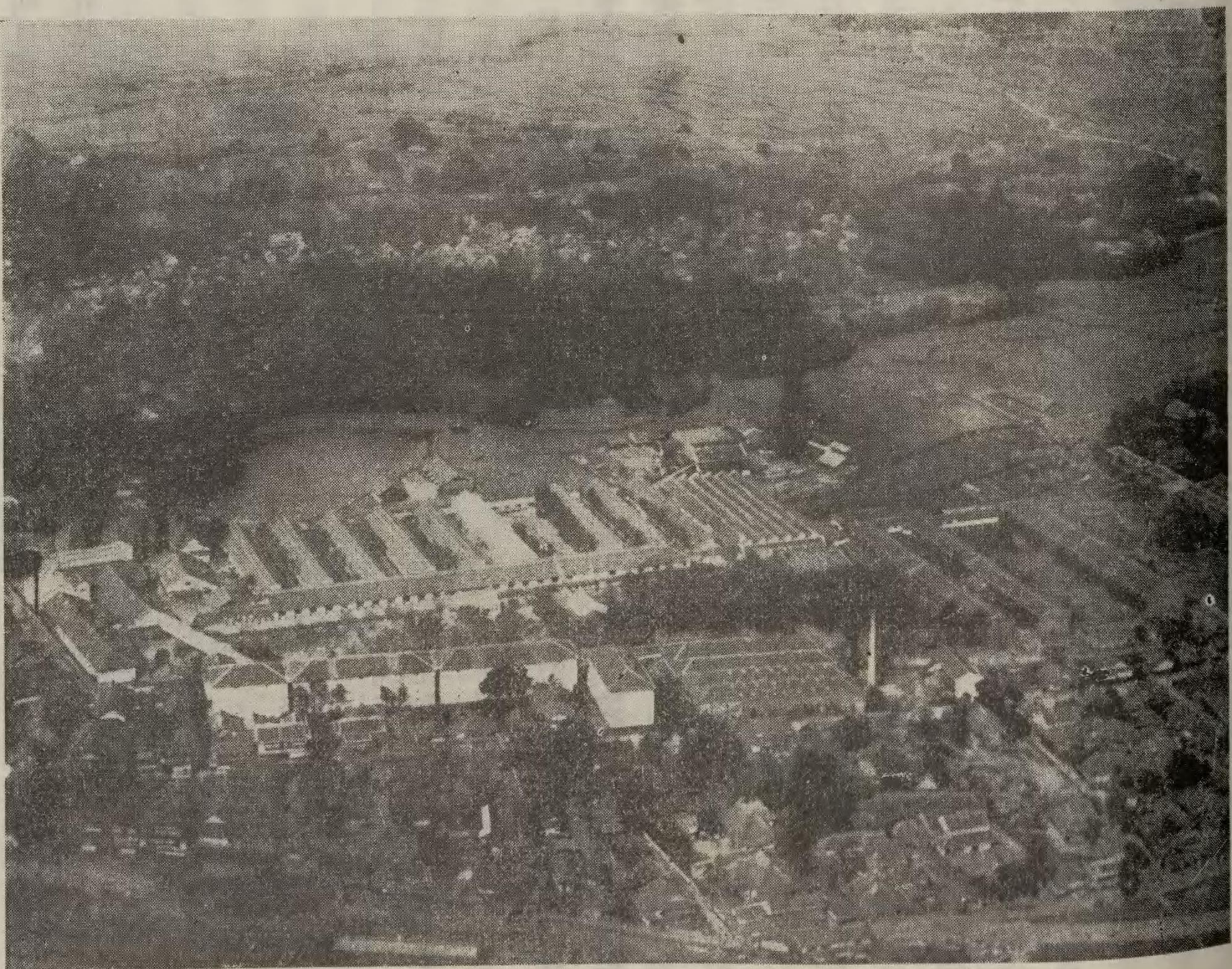
昭和九年末に於ける直接従業員は九百三十三名に達し、生産高は綿糸百十九萬九千餘貫、價格五百四十三萬九千餘圓、綿布百五十五萬五千餘圓に上り、工場敷地三萬坪の堂々たる威容を佐賀驛西側に示してゐる。而かも我が輕工業生産品が世界市場を制覇



佐賀錦華紡績株式會社

するに及び、此の急速なる進出に驚いた英國、カナダ、濠洲、印度、蘭印等の高率關稅政策にも屈せず毅然として工場の擴張中にして、之が完備の曉は生産數量は倍加される筈である。製品は、全部錦華紡本社の手に依り、支那、朝鮮、滿洲、印度方面に輸出せられ、原料たる棉花は之亦本社の手に依つて印度及び米國より輸入せられ、錦華紡佐賀支店としては直接販購事業を實施せぬとは云へ、同支店

の佐賀市經濟界に及ぼす影響は甚大なるものがある。
綿布製織工場としては其の他に佐賀市の綿ネル會社を始めとして佐賀市に四箇所、唐津市に二箇所、西松浦郡に一箇所、杵島郡に六箇所計十三箇所あ



片倉島製糸所

るが、金額數量共に錦華紡に比較すると雲泥の相違があり、之等の小會社中で最大なる佐賀メンネル會社も綿小倉、綿ネル等十萬圓程度の生産に過ぎず、其の他は殆んど手工業に近いものである。昭和三年錦華紡佐賀支店操業後の縣下の綿糸生産状況を年次別に示せば次の通りである。

年次	綿織職工	綿布生産額	綿糸生産額
昭和三年	一、三七五	三七四、七二六	六二九、二一五
同 四年	一、四六五	一、八〇〇、九六四	四、六九九、五〇〇
同 五年	一、二三七	一、五九〇、〇九二	三、四六〇、八三二
同 六年	一、〇二二	一、四六五、八〇二	三、二一八、〇四六
同 七年	一、一〇五	一、五四五、七〇一	四、二五一、〇八一
同 八年	一、〇七九	一、五八二、一〇一	四、八六七、四二一
同 九年	一、〇八四	一、五七四、二九三	五、四三九、三三八

尙右表中綿糸の生産高は、昭和三年の九九・〇二四貫から、毎年増産の一途を辿り昭和九年には一・一九九・八〇八貫となり途中の金額減は價格の低下に原因する。

製糸紡績は、佐賀縣の養蠶業の發達と密接なる關係を有するを以て、詳細は農業中の蠶糸業の項に譲ることとするが、現在佐賀縣下に於て操業中の製糸會社は片倉製糸紡績會社鳥栖製糸所、同社小城郡是製糸所、三養基郡基山村の基山製糸、西松浦郡伊萬里町の松浦製糸の四工場にして、昭和九年の生糸産額は八萬七千二百六十二貫、價格四百二十萬七千八百八十一圓、之に屑糸を加ふれば四百三十九萬二千六百二十四圓の龐大なる數字となり、その九割以上は片倉系會社の生産品である。現在操業の四製糸工場の釜數は、片倉鳥栖製糸所は御法川式三三三釜、普通機械四八〇釜、計八一六釜、片倉小城製糸

所は御法川式三〇〇釜、基山製糸は半田式二四〇釜、松浦製糸は普通機械二五釜である。最近五ヶ年間の生糸生産状況を表示すれば左の如し。

年次	總價	價格	
		白糸	黄糸
昭和五年	三、六三三、三六二	一、六八八、三八九	一、八九八、五三九
同 六年	三、〇三〇、三〇三	一、二七〇、三六八	一、六八五、一六二
同 七年	三、四四三、一二六	一、九七四、八二四	一、三一八、八二九
同 八年	三、九九〇、九三二	二、五四一、八一八	一、二六八、一七一
同 九年	四、三九二、六二四	三、一三七、三九五	一、〇六九、七八六

備考 右表中總價格は屑物の生産額を含むために白糸、黄糸の合計額よりも多いのである。

其の他の纖維工業品たる絹織物業は、手工業的に年産一萬五千圓程度の生産があり、メリヤスは二千六百餘圓を生産して僅かに形骸を存し、人造絹糸、麻糸紡績等は全然生産されてゐない。

第五章 化學工業

第一節 製紙業

佐賀縣に於ける製紙業は、手漉と機械製紙と板紙製造とに分類することを得る。

紙業の沿革 佐賀縣に於ける製紙業の起源は、各地方により異つてゐる。

佐賀郡松梅村方面のものは、元祿年間納富由助といふものが、村内耕地少く農民の生活不安なるを憂ひ、筑後溝口村にて僧日源の傳へた漉造の方法を習得し、村民に傳へたのに始まる。爾來舊藩時代には農家の副業として藩主より資金を給與され、國札の料紙、官衙用紙を造り、維新後も尙副業として現

發展の途につき、器具は改良され、技術は進歩し、農民の副業として山間部に普及した。明治四十年佐賀縣製紙同業組合が誕生して製品の検査、規格の統一をなし、各郡に傳習所を設置して指導獎勵するに及びて異常の進歩をなし、唐津紙を始めとして障子紙、傘紙、提灯紙等何れも強靱優美の特質を稱讚され、縣の主要物産として名聲を博した。歐洲大戰勃發するや紙業界は忽ち活況を呈し年産額は三百萬圓を突破した。此の紙業黄金時代に眼前の利益に目を奪はれた當業者は、將來を考慮せず、粗製濫造を敢てした爲めに一朝休戦の報傳はるや前代未聞の反動に、析角の野望も水泡に歸し、休業者は續出し、同業組合は財政に窮して有名無實の存在となり、指導機關を失ひて他府縣の後塵を拜するの止むなき苦境に陥り、加ふるに好況時代の粗製濫造が禍して肥前紙は市場の人氣を喪失した、此の難境打開策として佐賀縣産業協會は昭和三年専任技術員を設置して新生面の打開を策し、昭和六年有名無實の製紙同業組合の解散と同時に製紙組合聯合會を創立し、更に縣商工獎勵館

同 六年	一、〇二二	一、四六五、八〇二	三、二一八、〇四六
同 七年	一、一〇五	一、五四五、七〇一	四、二五一、〇八一
同 八年	一、〇七九	一、五八二、一〇一	四、八六七、四二一
同 九年	一、〇八四	一、五七四、二九三	五、四三九、三三八

尙右表中綿糸の生産高は、昭和三年の九九・〇二四貫から、毎年増産の一途を辿り昭和九年には一・二九九・八〇八貫となり途中の金額減は價格の低下に原因する。

製糸紡績は、佐賀縣の養蠶業の發達と密接なる關係を有するを以て、詳細は農業中の蠶糸業の項に譲ることとするが、現在佐賀縣下に於て操業中の製糸會社は片倉製糸紡績會社鳥栖製糸所、同社小城郡是製糸所、三養基郡基山村の基山製糸、西松浦郡伊萬里町の松浦製糸の四工場にして、昭和九年の生糸産額は八萬七千二百六十二貫、價格四百二十萬七千八百八十一圓、之に屑糸を加ふれば四百三十九萬二千六百二十四圓の龐大なる數字となり、その九割以上は片倉會社の生産品である。現在操業の四製糸工場の釜數は、片倉鳥栖製糸所は御法川式三三六釜、普通機械四八〇釜、計八一六釜、片倉小城製糸

其の他の纖維工業品たる絹織物業は、手工業的に年産一萬五千圓程度の生産があり、メリヤスは二千六百餘圓を生産して僅かに形骸を存し、人造絹糸、麻糸紡績等は全然生産されてゐない。

第五章 化學工業

第一節 製紙業

佐賀縣に於ける製紙業は、手漉と機械製紙と板紙製造とに分類することを得る。

紙業の沿革 佐賀縣に於ける製紙業の起源は、各地方により異つてゐる。佐賀郡松梅村方面のものは、元祿年間納富由助といふものが、村内耕地少く農民の生活不安なるを憂ひ、筑後溝口村にて僧日源の傳へた漉造の方法を習得し、村民に傳へたのに始まる。爾來舊藩時代には農家の副業として藩主より資金を給與され、國札の料紙、官衙用紙を造り、維新後も尙副業として現在迄紙業を繼續してゐる。

小城郡方面のものは、享保の大旱魃で田畑の作物悉く枯死し、農民が飢渴に迫つた際岩松村の辻彌兵衛なる者が、筑後の國から紙漉きの師匠を聘して村民に傳授し細民救済を策したのに始まる。

東松浦、西松浦、杵島郡地方の山間部は、耕地乏しく領民の生活不安なりしを以て、唐津藩主小笠原氏は資金を投じて領民に製紙及び楮の栽培を奨め紙方奉行所を設け、紙業の指導奨励に當らしめた、之が唐津紙今日の隆盛の基礎をなしてゐる。廢藩置縣後初代知事鎌田景弼氏は衰微の途にある紙業の振興を策し、有能の士をして先進地の技術を習得させた。かくて紙業は再び

發展の途につき、器具は改良され、技術は進歩し、農民の副業として山間部に普及した。明治四十年佐賀縣製紙同業組合が誕生して製品の検査、規格の統一をなし、各郡に傳習所を設置して指導奨励するに及びて異常の進歩をなし、唐津紙を始めとして障子紙、傘紙、提灯紙等何れも強靱優美の特質を稱讚され、縣の主要物産として名聲を博した。歐洲大戰勃發するや紙業界は忽ち活況を呈し年産額は三百萬圓を突破した。此の紙業黃金時代に眼前の利益に目を奪はれた當業者は、將來を考慮せず、粗製濫造を敢てした爲めに一朝休戦の報傳はるや前代未聞の反動に、析角の野望も水泡に歸し、休業者は續出し、同業組合は財政に窮して有名無實の存在となり、指導機關を失ひて他府縣の後塵を拜するの止むなき苦境に陥り、加ふるに好況時代の粗製濫造が禍して肥前紙は市場の人氣を喪失した、此の難境打開策として佐賀縣産業協會は昭和三年専任技術員を設置して新生面の打開を策し、昭和六年有名無實の製紙同業組合の解散と同時に製紙組合聯合會を創立し、更に縣商工獎勵館に和紙販賣幹部部を新設し、更に小城郡小城町に製紙試験場を開設して指導奨励、宣傳紹介、販路擴張に乗り出した結果、近年著しく聲價を挽回し、農村副業としての基礎を確立した。

手漉和紙の現状 昭和九年に於ける手漉和紙の年産額は、八十三萬二千圓にして、主なるものはマニラ塵紙の四十三萬二千圓、京花紙の十六萬五千圓白保紙及唐津半紙の十一萬二千圓、障子紙の五萬圓等である。製品の種類は前記の外傘紙、美濃紙、提灯紙、長座紙、折座紙、温床紙、選舉用紙、掃立紙、溝口紙、半切紙、改良半紙、趣味便箋、封筒、趣味の葉書等多種多様に於てマニラ塵紙を除いては殆んど手漉に屬し、規模に於ても經營方法に於て

も未だ極めて幼稚である。特に製品の販賣は縣下何れの地方も中間的商人の介在によりて行はれ、生産者は常に不利な立場にある。加ふるに概して資本に乏しく、その回收を急ぐ結果奸商に乗ぜられ易く、業者自體も眼前の利に走り自ら墓穴を掘る如き行動をなすものありて、其の改善は容易の業ではない。縣は近年生産販賣組合を奨励して産業の合理化に努力中にして現在十組合が誕生し、製造戸數一千七百戸、従業員男一千七百五十三名、女二千三百四十四名を數ふるに至つてゐる。更に共同作業場の設立を慫慂して昭和九年までに七十八箇所を設け、製品の統一と能率増進に力を注ぎ、關係産業組合と提携して金融の途を開き、原料薬品の共同購入、生産品の共同販賣等、斯業者の福利増進等あらゆる盡力をしてゐるが、中間商人の勢力未だ強く、組合機能の發揮は未だ不十分の感がある。

手漉紙の販路 佐賀縣は、製紙業の普及が比較的早かつた爲めに、紙商にして早く朝鮮、臺灣、滿洲等に渡り成功せるもの多きも、縣内には近時有力なる輸出紙商なく、製紙組合は直接に消費地と交渉し、販賣係は常に紙界の狀態を探查中にして、製紙組合聯合會は有力なる問屋筋を招待して取引懇談會、新製品展示批評會を開いて宣傳紹介、取引斡旋の衝に當つてゐる。主なる取引先は左の通り。

- 關東地方(東京) 中部地方(名古屋、静岡、岐阜、長岡、長野) 近畿地方(大阪、京都、神戸、姫路) 中國地方(鳥取、下關) 臺灣地方(臺北、基隆、馬公) 朝鮮地方(京城、仁川、釜山、大邱) 滿洲地方(大連、奉天) 九州地方(長崎、佐世保、久留米、福岡、熊本、鹿児島、大分、佐賀)

機械製和紙 佐賀縣に於て機械に依り和紙を生産してゐるものは、小城郡小城町の小城製紙所、同町の天山製紙所、同郡牛津町の今井製紙所、佐賀郡高木瀬村の七福製紙所の四工場である。

小城製紙所はマニラロープ、パルプ、ゴロス、マオランを原料として年九十萬を生産し、佐賀縣第一の和氏製造所である。

天山製紙所は、楮を原料として年七萬を有してゐる。

今井製紙は、楮を主原料として、マオラン、パルプ等を混用し、年産額は十四萬、七福製紙はマオランを主原料として二十萬を生産し、内地は勿論、朝鮮、臺灣、滿洲方面へ輸出してゐる。然し近年製紙原料は著しき昂騰を示せるに製品は却つて漸落歩調の傾向が見えるが、之は各製紙所共に生産過剩を來たし値を賣り崩してゐる結果であると思ふべきではあるまいか。殊に静岡縣製紙の東京市場進出は、運賃の關係上佐賀縣製紙の大敵であり、四國高松産紙は、關西市場を壓倒して逆に九州に販路を開拓する形勢にある等、正に佐賀縣産和紙の苦難時代の觀がある。

マオラン栽培 農林省の數次の警告にも拘はらず、昭和六年頃よりマオランは縣下各地に栽培され、縣會に於て栽培の可否を論議されたことも一再ではなかつた。然し縣當局としては本省の方針に則りて昭和十年新植を禁止した爲め栽培熱は下火になつたとは云へ、既栽培面積は六百町歩と稱せられてゐる。而して殘されたる問題は、その纖維としての工業價值と栽培者の採算であるが、現在の如くマニラロープの高騰せる場合は、其の代用品として使用されるとは云へ、マニラロープに比較すると水分を吸収し易く、強靱性にも乏しく、且つ硬質纖維であるから一旦マニラ麻が下落した場合は、需要も

減少すべく、又現在の如くマニラロープ高騰の場合に於て段當の収益は約三十五圓である。

板紙 佐賀縣生産品の王

座を占むる米の副産物たる藁の産額は、年々八千萬貫内外と推定せられ、その利用に着眼して創立されたのが、牛津及び久保田の兩板紙會社である。昭和九年に於ける兩會社の生産高は、一萬餘噸、總價格六十八萬六千餘圓にして牛

第二節 製藥業

佐賀縣は、全國第六位の賣藥産地にして、昭和九年に於ける産額は、二百五十七萬餘圓に上り、古くより肥前賣藥として關東地方以西、朝鮮、滿洲、支那、南洋方面に販路を有し、その約八割は、三養基郡鳥栖町、田代町、基里村附近に於て生産せられ、藤津郡鹿島町、佐賀市之に次ぎ、好況時代に於ては生産額四百萬圓に上り、その名聲を謳はれたが、最近は經濟界の一般的不況に伴ひ、他面に於て農村における産業組合の家庭藥配置の爲めに著しく販路を奪はれ年々減産の傾向が見える。

同 七年	一三四	八、一九四	四七一、一九〇
同 八年	四一五	九、六五八	六五七、二〇二
同 九年	一四四	一〇、二二九	六八六、六七二



と提携して金融の途を開き、原料薬品の共同購入、生産品の共同販賣等、斯業者の福利増進等あらゆる盡力をしてゐるが、中間商人の勢力未だ強く、組合機能の發揮は未だ不十分の感がある。

手漉紙の販路 佐賀縣は、製紙業の普及が比較的早かつた爲めに、紙商にして早く朝鮮、臺灣、滿洲等に渡り成功せるもの多きも、縣内には近時有力なる輸出紙商なく、製紙組合は直接に消費地と交渉し、販賣係は常に紙界の狀勢を探索中にして、製紙組合聯合會は有力なる問屋筋を招待して取引懇談會、新製品展示批評會を開いて宣傳紹介、取引斡旋の衝に當つてゐる。主なる取引先は左の通り。

關東地方(東京) 中部地方(名古屋、静岡、岐阜、長岡、長野) 近畿地方(大阪、京都、神戸、姫路) 中國地方(鳥取、下關) 臺灣地方(臺北、基隆、馬公) 朝鮮地方(京城、仁川、釜山、大邱) 滿洲地方(大連、奉天) 九州地方(長崎、佐世保、久留米、福岡、熊本、鹿兒島、大分、佐賀)



減少すべく、又現在の如くマニラロープ高騰の場合に於て段當の収益は約三十五圓である。

板紙 佐賀縣生産品の王

座を占むる米の副産物たる藁の産額は、年々八千萬貫内外と推定せられ、その利用に着眼して創立されたのが、牛津培及び久保田の兩板紙會社である。昭和九年に於ける兩會社の生産高は、一萬餘噸、總價格六十八萬六千餘圓にして牛津板紙會社は王子製紙の經營であり、久保田板紙會社は大阪の中井氏の經營に屬し、全

國的生産統制の結果三割二分程度の生産制限を實施中である。製品は本社の手により六割は印度、南洋方面に、四割は東京、大阪、京都、名古屋、九州方面に移輸出されてゐる。最近の業績は左の如し。

年次	職工數	生産數量	生産總額
昭和五年	一八〇	九、六〇六	六〇五、七七〇
同 六年	一五二	九、二五七	五二六、五〇五

佐賀縣産業の卷

論、朝鮮、臺灣、滿洲方面へ輸出してゐる。然し近年製紙原料は著しき昂騰を示せるに製品は却つて漸落歩調の傾向が見えるが、之は各製紙所共に生産過剰を來たし値を賣り崩してゐる結果であると見做すべきではあるまいか。殊に静岡縣製紙の東京市場進出は、運賃の關係上佐賀縣製紙の大敵であり、四國高松産紙は、關西市場を壓倒して逆に九州に販路を開拓する形勢にある等、正に佐賀縣産和紙の苦難時代の觀がある。

マオラン栽培 農林省の數次の警告にも拘はらず、昭和六年頃よりマオランは縣下各地に栽培され、縣會に於て栽培の可否を論議されたことも一再ではなかつた。然し縣當局としては本省の方針に則りて昭和十年新植を禁止した爲め栽培熱は下火になつたとは云へ、既栽培面積は六百町歩と稱せられてゐる。而して残された問題は、その纖維としての工業價值と栽培者の採算であるが、現在の如くマニラロープの高騰せる場合は、其の代用品として使用されるとは云へ、マニラロープに比較すると水分を吸収し易く、強靱性にも乏しく、且つ硬質纖維であるから一旦マニラ麻が下落した場合は、需要も

同 七年	一三四	八、一九四	四七一、一九〇
同 八年	四一五	九、六五八	六五七、二〇二
同 九年	一四四	一〇、二二九	六八六、六七二

第二節 製 藥 業

佐賀縣は、全國第六位の賣藥産地にして、昭和九年に於ける産額は、二百五十七萬餘圓に上り、古くより肥前賣藥として關東地方以西、朝鮮、滿洲、支那、南洋方面に販路を有し、その約八割は、三養基郡鳥栖町、田代町、基里村附近に於て生産せられ、藤津郡鹿島町、佐賀市之に次ぎ、好況時代に於ては生産額四百萬圓に上り、その名聲を謳はれたが、最近は經濟界の一般的不況に伴ひ、他面に於て農村における産業組合の家庭藥配置の爲めに著しく販路を奪はれ年々減産の傾向が見える。

かゝる苦境を打開す可く、斯業者は共同事業の施設により良質品廉賣の計畫を樹て、滿支人向きの意匠を考案して、滿洲、支那方面に新販路の開拓に努め、縣當局としては賣藥試驗場を縣衛生課内に設置し、商工課と提携して賣藥業の發展を助長してゐる。主なるものは田代方面の各種配置賣藥、鹿島の唐人膏、萬金膏、佐賀市の烏犀圓等で全國的にその眞價を認められてゐる。殊に田代方面の配置賣藥は三百餘年の歴史を有し、數十萬圓の資産家が風呂敷包を背負ひて山村僻地の軒をくぐり、戸毎に辭を低うして所持の賣藥を配置する有様は、往年の江州商人の進取性と忍耐力を偲ばしめるものがある。即ち田代地方は封建政治の時代に於ては佐賀鍋島藩と、福岡黒田藩との緩衝地帯として代官が置かれ、その誅求に苦しめられた住民は、賣藥を背負ひて藩外

七〇九

に販路を開いたもので、耕地に恵まれない甲州より甲州系財閥が生れ、代官の酷政に虐げられた近江より江州商人が生れたとその趣を同じうしてゐる感がある。賣藥業の殷盛に比較して、醫藥用藥品製造所は僅かに小城郡小城町に一工場が存するのみにして、昭和九年の生産額は、五萬七千餘圓なるも近時著しく増産の趨勢を辿つてゐることは注目し價する。

最近五ヶ年間に於ける製藥業の状況を示せば左の通りである。

年次	賣藥製造戸數	賣藥生産額	醫藥用藥品
昭和五年	三三二	三、四四三、二七〇	九、〇〇〇
同 六年	三一九	三、四四〇、三三五	九、三〇〇
同 七年	三一七	二、八四七、四七九	七、二四七
同 八年	三〇一	二、八五五、五九三	六、二〇〇
同 九年	二八三	二、五七〇、三八九	五七、三一〇

備考 賣藥製造戸數並生産額の激減に反して醫藥用藥品の増加は消毒藥等の軍需用品の需要増加に起因する。

第三節 曹達工業

佐賀縣に於ては從來曹達を生産する工場は絶無であつたが、昭和九年西松浦郡山城町浦ノ崎に資本金百萬圓を以て川南工業所が創立さるゝに及びて一新紀元を劃し、將來を大いに囑目されてゐる。

同工場は現在に於ては主として曹達灰を製造し、その生産額は一萬三千三百五十噸、價格九十七萬四千二百四十二圓にして、別に洗濯曹達百五十噸、價格七千五百圓を生産してゐるが、將來に於ては洗濯曹達を生産を増加すると共に、苛性曹達、鹽化石灰、板硝子の製造をなす計畫を樹てゐる。

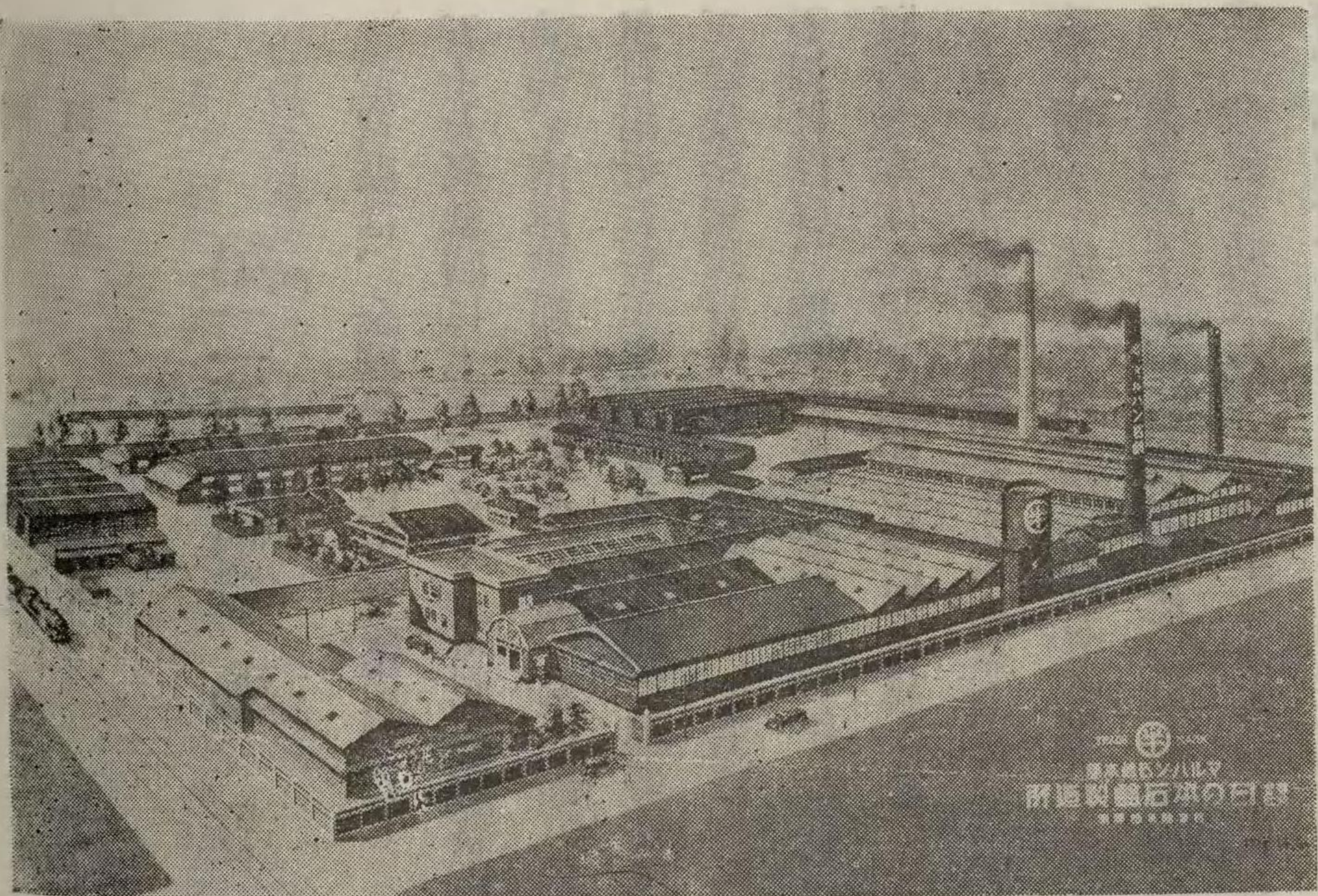
第五節 製油工業

菜種油

昭和九年に於ける菜種油の生産高は、二百四十四萬餘斤、その價格は四十一萬九千餘圓に上り、之を五年前の昭和四年に對比すると著しい増産である。之は佐賀縣當局が、昭和四年以來菜種の新品種普及と増産獎勵に力を注いだのと、滿洲事變以後軍需品として菜種油の需要が激増した結果當業者が増産を策したのと、政府の農村工業獎勵に基いて産業組合が利用組合組織に依る共同製油場を新設して事業を開始したためである。而して佐賀縣下に於ける菜種油生産量の過半数を占める神埼郡の同業者は、年々四十二萬五千圓の菜種を購入して、六萬七千五百圓の菜種油生産を計畫し、一致團結して工業組合の設立認可を申請中であるから之が認可された時は、劃期的に増産されるものと見られてゐる。

第四節 石鹼製造業

佐賀縣に於ける石鹼製造工場は、大正の末期迄は四ヶ所を數へ、生産額も七十五萬圓に垂としてゐたが、漸次減少して現在に於ては三養基郡鳥栖町の日ノ本石鹼工場を残すのみである。



同工場は明治四十三年神埼郡蓮池村に設立されたのを、大正六年現在の場所に移轉されたもので、資本金百萬圓、敷地面積三千五百餘坪、建坪一千五百坪の大工場である。而して従業員は男女合せて僅かに五十七名なるも、生産高は昭和九年に於て化粧用石鹼十六萬圓、洗濯用石鹼二十四萬圓、合計四十萬圓に上り丸半石鹼と呼ばれて内地は勿論朝鮮臺灣滿洲支那方面に輸出せられ、將來財政に餘裕を生ずれば大擴張をなすべく内計畫が進められてゐる。

第六節 製蠟工業

佐賀縣に於ける製蠟工業は、三養基、神埼郡等蠟栽培の旺盛なる地方に古くより發達し、蠟燭の原料として使用せられてゐたが、電燈及び電池の普及發達に伴ひて蠟栽培が衰へ、従つて製蠟工業も衰微し、大正十四年に於ける生産高四十八萬四千餘圓であつたものが、昭和六年には僅かに十一萬九千餘圓に減少した。縣當局に於ては此の傾向に鑑みて、蠟の増産を獎勵して組合設立を慫慂し、一方軍需方面に蠟の用途が開けて近年は稍上昇し、昭和九年には二十萬九千餘圓に増加した。最近十年間の生産統計を示せば左の如し。

年次	製造戸數	總價格(圓)	生蠟價格(圓)	晒蠟價格(圓)
同 九年	四一九、三九二	五〇、八一七	三、七六三	一七、二九六
大正十四年	一〇一	四八四、六五八	二六七、九六二	二一六、六九六

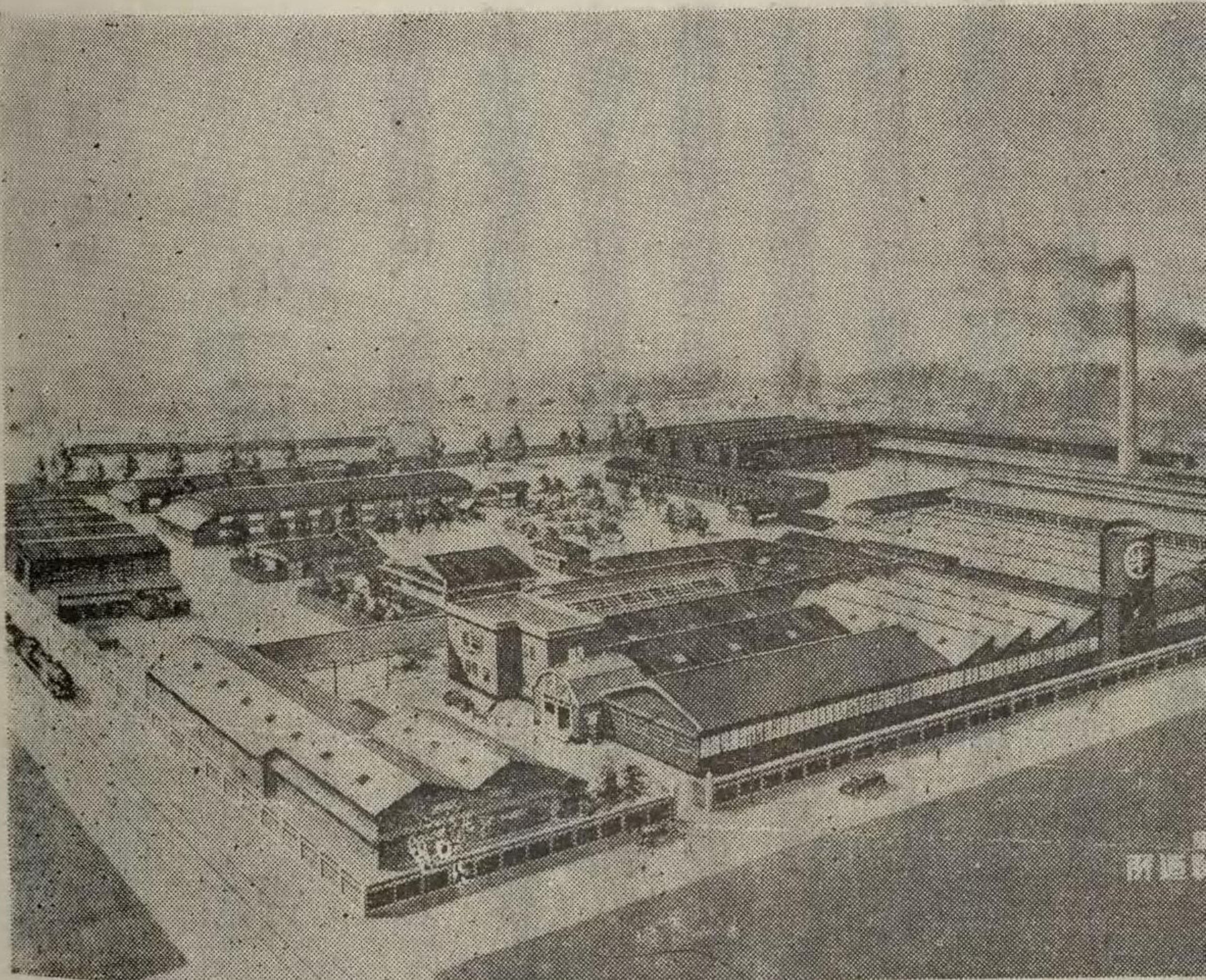
同 六年	三一九	三、四四〇、三三五	九、三〇〇
同 七年	三二七	二、八四七、四七九	七、二四七
同 八年	三〇一	二、八五五、五九三	六、二〇〇
同 九年	二八三	二、五七〇、三八九	五七、三一〇

備考 賣藥製造戸數並産額の激減に反して醫藥用藥品の増加は消毒藥等の軍需用品の需要増加に起因する。

第三節 曹達工業

佐賀縣に於ては從來曹達を生産する工場は絶無であつたが、昭和九年西松浦郡山城町浦ノ崎に資本金百萬圓を以て川南工業所が創立さるゝに及びて一新紀元を劃し、將來を大いに囑目されてゐる。

同工場は現在に於ては主として曹達灰を製造し、その生産額は一萬三千三百五十噸、價格九十七萬四千二百四十二圓にして、別に洗濯曹達百五十噸、價格七千五百圓を生産してゐるが、將來に於ては洗濯曹達を生産を増加すると共に、苛性曹達、鹽化石灰、板硝子の製造をなす計畫を樹てゐる。



① 日 本 の 石 鹼 本 廠 敷地面積三千五百餘坪、建坪一千五百坪の大工場である。而して従業員は男女合せて僅かに五十七名なるも、生産高は昭和九年に於て化粧用石鹼十六萬圓、洗濯用石鹼二十四萬圓、合計四十萬圓に上り丸半石鹼と呼ばれて内地は勿論朝鮮臺灣滿洲支那方面に輸出せられ、將來財政に餘裕を生ずれば大擴張をなすべく内計畫が進められてゐる。

第五節 製油工業

茶種油

昭和九年に於ける茶種油の生産高は、二百四十四萬餘斤、その價格は四十一萬九千餘圓に上り、之を五年前の昭和四年に對比すると著しい増産である。之は佐賀縣當局が、昭和四年以來茶種の新品種普及と増産獎勵に力を注いだのと、滿洲事變以後軍需品として茶種油の需要が激増した結果當業者が増産を策したのと、政府の農村工業獎勵に基いて産業組合が利用組合組織に依る共同製油場を新設して事業を開始したためである。而して佐賀縣下に於ける茶種油生産量の過半数を占める神埼郡の同業者は、年々四十二萬五千圓の茶種を購入して、六萬七千五百圓の茶種油生産を計畫し、一致團結して工業組合の設立認可を申請中であるから之が認可された曉には、劃期的に増産されるものと見られてゐる。

其の他の油 其の他少量ながら胡麻油、荏油、椿油等が生産され、殊に東松浦郡の加唐島には多數の天然椿が繁茂し、縣下各地にも椿栽培の適地が散在するので縣農務課は之等の地方に指導の手を延べて椿油の増産を企圖してゐる。

昭和五年以降の植物油生産状況は左の如し。

年 次	茶 種 油	胡 麻 油	荏 油	椿 油
昭和五年	一二七、八九九	二九、七九〇	四、一二五	二〇、二七二
同 六年	一四一、二六二	二八、八四二	五、二三八	一五、二五四
同 七年	二六四、八五六	四九、四一六	一〇、〇〇九	一六、九三六
同 八年	二五二、三四九	五四、二五二	一〇、〇三〇	一六、一七八

佐賀縣産業の巻

第六節 製蠟工業

佐賀縣に於ける製蠟工業は、三養基、神埼郡等蠟栽培の旺盛なる地方に古くより發達し、蠟燭の原料として使用せられてきたが、電燈及び電池の普及發達に伴ひて蠟栽培が衰へ、従つて製蠟工業も衰微し、大正十四年に於ける生産高四十八萬四千餘圓であつたものが、昭和六年には僅かに十一萬九千餘圓に減少した。縣當局に於ては此の傾向に鑑みて、蠟の増殖を獎勵して組合設立を慫慂し、一方軍需方面に蠟の用途が開けて近年は稍上昇し、昭和九年には二十萬九千餘圓に増加した。最近十年間の生産統計を示せば左の如し。

年 次	製造戸數	總價格(圓)	生蠟價格(圓)	晒蠟價格(圓)
大正十四年	一〇一	四八四、六五八	二六七、九六二	二一六、六九六
昭和元年	八一	二六九、一三三	一四六、二三五	一二二、八九六
同 二年	七七	三四一、二五四	一二三、二八九	二一七、九六五
同 三年	八九	二八五、八五〇	一〇八、四五七	一七七、四九三
同 四年	七八	二五〇、二二八	九七、三九〇	一五二、八三八
同 五年	七六	一四三、九五四	六五、七〇四	七八、二五〇
同 六年	八六	一一九、一三〇	四六、七二五	七二、四〇五
同 七年	九一	一三八、二〇六	五三、五〇七	八四、六九九
同 八年	九五	一九九、八五一	四八、五七四	一五一、二七七
同 九年	八四	二〇九、六二〇	三二、九五六	一七六、六六四

七二一

第六章 食料品工業

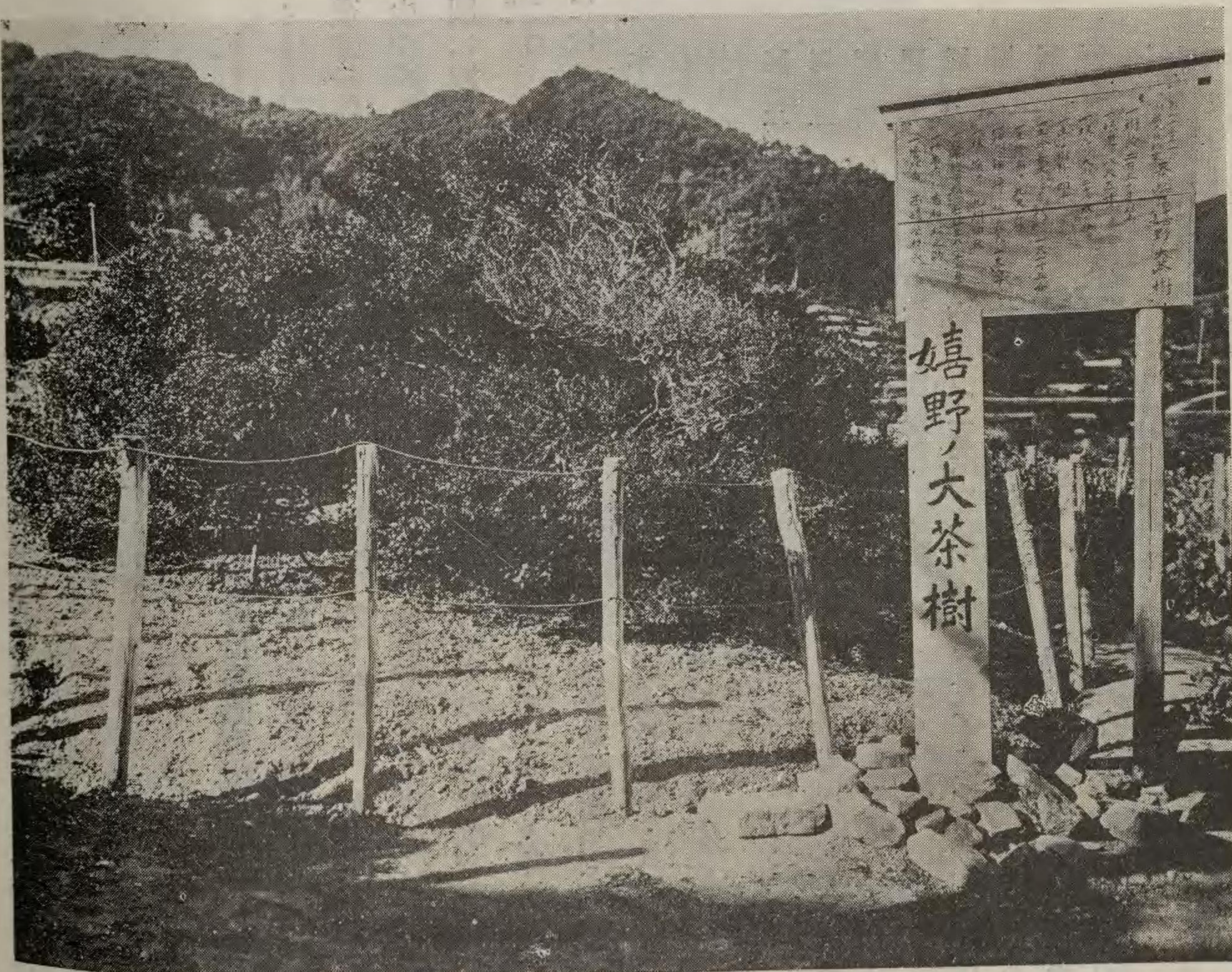
第一節 製茶業

佐賀縣に於ける茶業の起源は、頗る古く皇紀一八二八年臨濟宗の開祖榮西禪師が宋の江南より茶の種子を持ち歸り、肥前國春振山に下種し茶を製して岩上茶と稱した。之が我が國に於ける茶業の始祖にして、且つ佐賀縣に於ける茶業の嚆矢である。降つて皇紀二一〇〇年頃唐船が平戸に來り、嬉野町不動山に入り皿屋谷に於て陶器を製造し、又茶樹を栽培して自家用に供した。更に後柏原天皇の御宇(今から四百餘年前)明人紅令民といふ者、南京釜を所持して來朝し、嬉野皿屋谷に於て茶を試製し、好結果を收めた。之が現今有名な嬉野茶の濫觴であると傳へられてゐる。降つて後陽成天皇の慶長年間肥前國白石南郷の大庄屋吉村新兵衛といふもの皿屋谷の山野を開墾して茶樹を植ゑ、販路を開き村人にも茶業を奨励した結果、全村翕然として之に倣ひ、附近の山野は皆茶樹を以て充たされた、爾來幾多の變遷を経て現在に及んだが製茶事業の振興に劃期的の刺戟を與へたのは、昭和三年に於ける隣邦ソヴェト聯邦への輸出であらう。

對ソ輸出事業は不幸にして物質的の效果は收め得なかつたが、茶業刷新の氣運を醸成し、縣下各地に茶園開拓の結果を招來した。次いで昭和四年佐賀縣茶業組合も復活し、販路の調査、開拓、製品の向上統一に當つてゐる。



嬉野茶園



嬉野大茶樹園

現狀 從來嬉野茶の主産地は、藤津郡西部並に杵島郡西南部の山間地帯即ち嬉野、能古見、吉田、鹽田、東川登、西川登等の數ヶ町村に過ぎなかつたが、現在は唐津市、東松浦郡、西松浦郡、杵島郡、藤津郡、小城郡の一市五郡五十ヶ町村に普及し、茶園面積も五百町歩に擴大されてゐる。生産額は約十萬貫、價格二十五萬圓に上り、近き將來に更に著しく増産されることは確實視されてゐる。

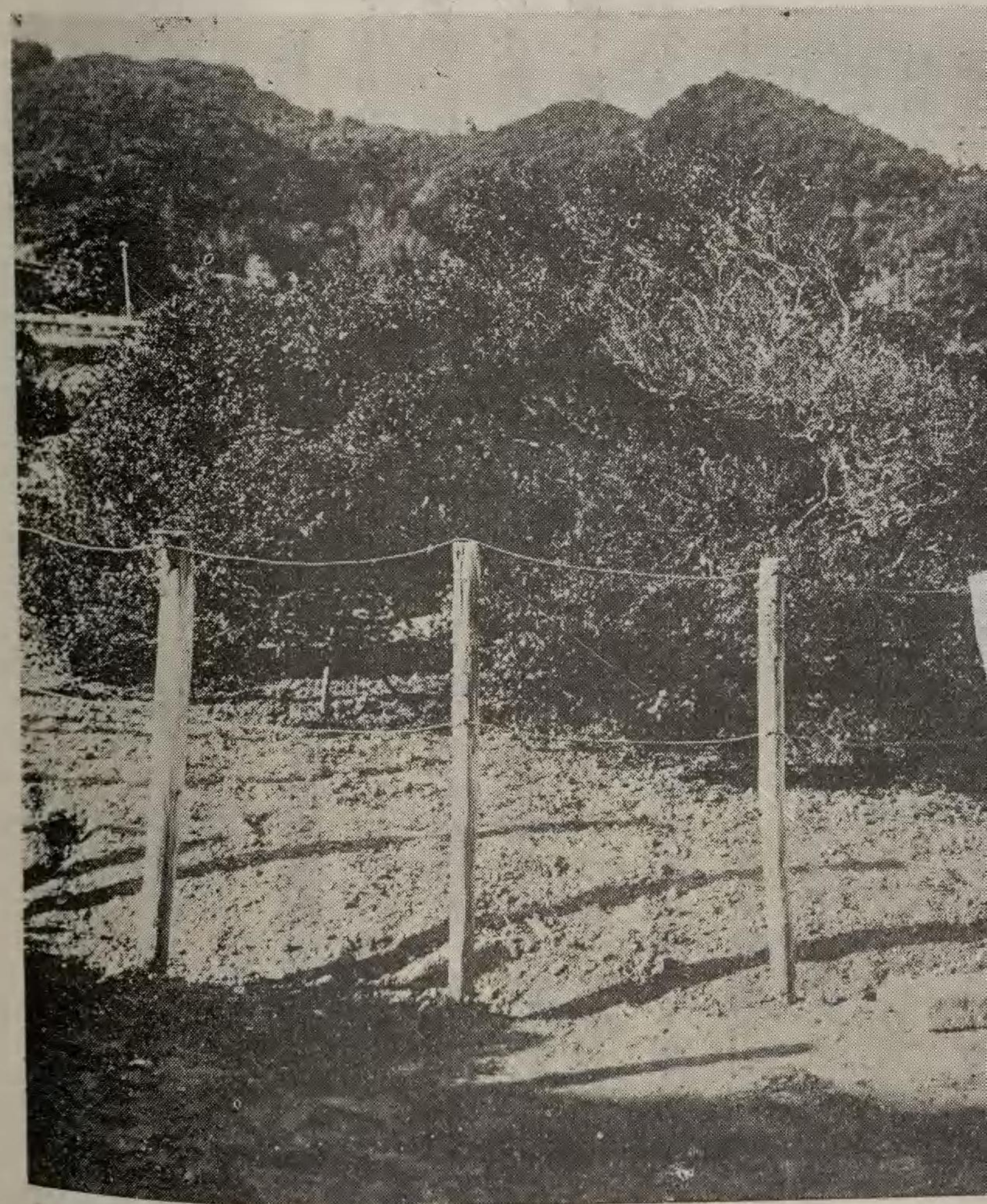
即ち縣當局は、茶園増殖五ヶ年計畫により、新に一千町歩の新植を企圖し集團茶園の設置を奨励すると共に既設の畦畔茶園の改善を慫慂中にして、十年後には茶園面積二千町歩、茶生産高百萬貫、價格二百萬圓の域に達せしめる目的を以て大いに奨励中である。

嬉野茶の特異性 佐賀縣で栽培する茶樹は、現今支那奥地で栽培する樹種に酷似し、四百餘年前明人紅令民が持參した原木も現存し、製茶の方法も支那

緑茶の本場たる北水の製茶法と同一なるを以て、製品が支那茶其の特異

岩上茶と稱した。之が我が國に於ける茶業の始祖にして、且つ佐賀縣に於ける茶業の嚆矢である。降つて皇紀二一〇〇年頃唐船が平戸に來り、嬉野町不動山に入り皿屋谷に於て陶器を製造し、又茶樹を栽培して自家用に供した。更に後柏原天皇の御宇(今から四百餘年前)明人紅令民といふ者、南京釜を所持して來朝し、嬉野皿屋谷に於て茶を試製し、好結果を收めた。之が現今有名な嬉野茶の濫觴であると傳へられてゐる。降つて後陽成天皇の慶長年間肥前國白石南郷の大庄屋吉村新兵衛といふもの皿屋谷の山野を開墾して茶樹を植ゑ、販路を開き村人にも茶業を奨励した結果、全村翕然として之に倣ひ、附近の山野は皆茶樹を以て充たされた、爾來幾多の變遷を経て現在に及んだが製茶事業の振興に劃期的の刺戟を與へたのは、昭和三年に於ける隣邦ソヴェト聯邦への輸出であらう。

對ソ輸出事業は不幸にして物質的の效果は收め得なかつたが、茶業刷新の氣運を醸成し、縣下各地に茶園開拓の結果を招來した。次いで昭和四年佐賀縣茶業組合も復活し、販路の調査、開拓、製品の向上統一に當つてゐる。



野大茶樹園



嬉野茶園全景

現狀 從來嬉野茶の主産地は、藤津郡西部並に杵島郡西南部の山間地帯即ち嬉野、能古見、吉田、壺田、東川登、西川登等の數ヶ町村に過ぎなかつたが、現在は唐津市、東松浦郡、西松浦郡、杵島郡、藤津郡、小城郡の一市五郡五十ヶ町村に普及し、茶園面積も五百町歩に擴大されてゐる。生産額は約十萬貫、價格二十五萬圓に上り、近き將來に更に著しく増産されることは確實視されてゐる。

即ち縣當局は、茶園増殖五ヶ年計畫により、新に一千町歩の新植を企圖し集團茶園の設置を奨励すると共に既設の畦畔茶園の改善を懇願中にして、十年後には茶園面積二千町歩、茶生産高百萬貫、價格二百萬圓の域に達せしめる目的を以て大いに奨励中である。

嬉野茶の特異性 佐賀縣で栽培する茶樹は、現今支那奥地で栽培する樹種に酷似し、四百餘年前明人紅令民が持參した原木も現存し、製茶の方法も支那綠茶の本場たる北水の製茶法と同一なるを以て、製品が支那茶其の特異性を有することは、過般支那奥地の茶業を視察し、歸途佐賀縣に立寄り嬉野茶の製造方法を親しく視察指導した、臺北帝大教授山本博士の證明に依つて明かである。

嬉野茶が静岡産、或は京都産の綠茶に比較して全く異なる特異性を有することは支那奥地の製法を其の儘持續してゐる結果であつて、支那北水産の綠茶がアフガニスタン方面回教徒の嗜好に合致し、多量に輸出されてゐる現狀より觀察して、嬉野茶の海外貿易には多分の將來性あることを看取し得る。然し海外輸出を唯一の目標とするときは、經濟界の變動に依り不慮の損害を蒙る危険性があるので、嬉野茶の特異性を武器として番茶焙茶の嗜好者にも

向く如く指導して、内地向きと外人向との二途を目標として製茶をなしてゐるが、この指導の任に就き主として佐賀縣茶業試験場が當つてゐる。

海外輸出の経過

昭和四年茶業組合中央會議所の懇懇に依り、長崎縣と共に同して十萬ポンドをソヴェートに輸出したが、當時は生産販賣兩機構共に無統制時代のことゝて全く失敗に終り、兩縣共に多大の損害を蒙つた。然し此の失敗は他山の石となり、生産費の低下、大量生産方法の研究、販賣機構の改善等茶業改革上に大なる教訓を與へたが、茶業が未だ農村副業の域を脱せぬ爲めに販賣機關は未設の状態なるも、生産方面に於ては昭和四年嬉野町に茶業研究所が新設されて全く面目を一新するに至つた。

第一回輸出の失敗に懲りて茶の大量輸出は警戒し、専ら海外の事情を研究中、昭和六年には印度商人より數千ポンドの注文があり、滿洲、朝鮮への新販路が開け、昭和九年には三菱との間に三萬ポンドの見本取引を契約し、大資本の後援に依る世界市場進出を期待されたが、經濟界の變動に依つて水泡に歸し、十年は遂に取引の實現を見ずに終つた。然し嬉野茶の將來に關しては、三井三菱共に多大の關心を有し、數次の交渉を重ねてゐるから近き將來に好轉の曙光を見るものと期待されてゐる。只海外輸出計畫は、一縣の目論見としては問題が大きすぎるので、昭和十年九月佐賀縣主催で開催した全九州釜熬綠茶協議會に於て九州を一丸とするブロック編成が議決せられ、九州釜熬玉綠茶統制審議會が組織され、同十一年には委員の顔觸れも決定するに至つた。

而して佐賀縣に於ては、機械を設備せる二十二部落の工場が専ら海外輸出を目標として、佐賀縣製茶工場聯合會を組織して、着々として海外輸出の計

畫を進めてゐるが、任意組合のことゝて不便の點が多いので、縣當局としては産業組合法に依る茶業組合設立を奨励し、再製設備まで備へた大工場の設置計畫を進めてゐる。

嬉野茶の將來

從來の茶業研究は、生産方法のみに偏倚し、茶樹栽培の研究は全く閑却されてゐた憾がある。然し茶樹栽培研究の必要なことは數年前より京都帝大竹崎博士に依つて唱導され、海外に於ける商品價値を高めるには茶樹の品種を改良することが先決問題たることが明瞭となり、農林省に於ても静岡、奈良、宮崎三縣に原種圃を委囑し、樹種の統制に着手し、各府縣に於ても之に追隨してそれら研究中である。佐賀縣としては嬉野茶の特異性を飽くまで保持増進せしむる目的を以て、嬉野血屋谷に現存する紅令民が持參した古木より形質優良なる種子を得て、新品種を創製す可く研究の歩を進めてゐる。

紅茶の栽培

世界に於ける茶の需要の九割を占めるものは紅茶である。佐賀縣に於ては未だ等閑に附せられてゐるが、先進地たる静岡縣、鹿児島縣に於ては既に栽培に着手してゐるが、不幸静岡縣産紅茶が在來種に屬し、品質粗悪であることは大いに斯業界で遺憾とせられてゐるところである。静岡紅茶に比し鹿児島縣産紅茶は、臺灣印度等の本場品に何等遜色なく、好評を博してゐることは、地理的關係よりして佐賀縣としては看過し得ないことである。佐賀縣は風土が茶栽培に適し氣温比較的に高きを以て鹿児島に於ける栽培法及び樹種に改良を加ふるならば、内地の栽培に適する紅茶の品種を考案發見することも至難では無いであらう。

産業協會

佐賀縣に於ける鑛山業の大成功者にして杵島炭坑の經營者であ

つた故高取伊好氏は、縣産業助長の目的を以て五十萬圓を寄附した。

縣は之を基金として、佐賀縣産業協會を設立し、現在では最も將來發展性ある製紙業、茶業の振興を助長してゐる、殊に茶業に對しては斯業者の熱望に依り昭和四年嬉野茶生産の本場たる藤津郡嬉野町に茶業研究所を設立し、茶業全般に關する試験研究は勿論斯業の統制指導に任じ、生産費低下と大量生産を目的として考案された製茶機械は完全に其の目的に副ひ、研究時代を過ぎて普及時代に入つて居り、現在同機により生産中のものは三十組合に達せんとしてゐる。

茶業試験場は、敷地二町歩、建物百二十坪、茶園一町六反歩にして釜熬製茶機械を備付け各種肥料試験、播種量併方式試験、豊凶考照試験、敷藁試験、剪枝耕耘に關する試験、仕立法に關する試験、釜熬茶品種改良試験、釜熬標準製茶の研究、輸向製茶法試験、釜熬茶生産費調査等の試験、研究、調査を實施し、講習會、講話會、製茶講習會を開いて斯業者を指導し、共同製茶

た。これに反し電力に依る製粉事業は各地に創始され、特に大正九年五月九州製粉株式會社が鳥栖町に設立せらるゝや、急激に生産の増加を示した。同會社は、大正十三年日清製粉會社に買収合併され、益々生産設備を改善して能率を増加し、昭和十年には縣外麥四十五萬俵、縣産麥十五萬俵、計六十萬俵を購入し、小麥粉百二十萬袋、價格三百八十四萬圓、其の他の麥粉十五萬一千二百袋、價格五十萬九千五百餘圓に上り、九州一圓はもとより朝鮮、臺灣、山口縣方面に移出し、將來益々生産販賣の増加を期してゐる。又一方政府の農村工業化政策に刺戟せられて、縣下の各産業組合に於て製粉事業を開始するもの頗る多く、縣當局も小麥増殖五ヶ年計畫の進展に伴ひ、小麥の自家消費を勸奨し、力武式、中島式、中村式等の製粉機購入に際しては、農事實行組合及び産業組合に依り購入費の半額を補助して其の設置を奨励した結果、縣下各市町村に此種組合の小工場が生れ、昭和九年には製造場數四百九十一箇所、生産高五百三十五萬三千餘貫、總價格三百一十一萬餘圓に達した。

茶業研究所が新設されて全く面目を一新するに至つた。

第一回輸出の失敗に懲りて茶の大量輸出は警戒し、専ら海外の事情を研究中、昭和六年には印度商人より數千ポンドの注文があり、滿洲、朝鮮への新販路が開け、昭和九年には三菱との間に三萬ポンドの見本取引を契約し、大資本の後援に依る世界市場進出を期待されたが、經濟界の變動に依つて水泡に歸し、十年は遂に取引の實現を見ずに終つた。然し嬉野茶の將來に關しては、三井三菱共に多大の關心を有し、數次の交渉を重ねてゐるから近き將來に好轉の曙光を見るものと期待されてゐる。只海外輸出計畫は、一縣の目論見としては問題が大きすぎるので、昭和十年九月佐賀縣主催で開催した全九州釜煎緑茶協議會に於て九州を一九とするブロック編成が議決せられ、九州釜煎玉緑茶統制審議會が組織され、十一年には委員の顔觸れも決定するに至つた。

而して佐賀縣に於ては、機械を設備せる二十二部落の工場が専ら海外輸出を目標として、佐賀縣製茶工場聯合會を組織して、着々として海外輸出の計

つた故高取伊好氏は、縣産業助長の目的を以て五十萬圓を寄附した。

縣は之を基金として、佐賀縣産業協會を設立し、現在では最も將來發展性ある製紙業、茶業の振興を助長してゐる、殊に茶業に對しては斯業者の熱望に依り昭和四年嬉野茶生産の本場たる藤津郡嬉野町に茶業研究所を設立し、茶業全般に關する試験研究は勿論斯業の統制指導に任じ、生産費低下と大量生産を目的として考案された製茶機械は完全に其の目的に副ひ、研究時代を過ぎて普及時代に入つて居り、現在同機により生産中のものは三十組合に達せんとしてゐる。

茶業試験場は、敷地二町歩、建物百二十坪、茶園一町六反歩にして釜煎製茶機械を備付け各種肥料試験、播種量併方式試験、豊凶考照試験、敷藁試験剪枝耕耘に關する試験、仕立法に關する試験、釜煎茶品種改良試験、釜煎標準製茶の研究、輸向製茶法試験、釜煎茶生産費調査等の試験、研究、調査を實施し、講習會、講話會、製茶傳習會を開いて斯業者を指導し、共同製茶場、優良製茶機械の設置を奨励して、大量生産をなし、生産費低下を計り、而して製品の品質統制に當つてゐる。

第二節 製粉及製麵事業

製粉事業 佐賀縣に於ける製粉事業は、明治時代に於ては水車の利用によつて神埼郡小城村の山間部に發達し、主として手製素麵の原料を提供してゐたが、東邦電力會社が送電を開始するに至り、地理的不利が禍因となつて水車業は殆んどその跡を絶ち現在操業を繼續せるものは指を屈する程に減少し

に於ても之に追隨してそれ（研究）中である。佐賀縣としては嬉野茶の特異性を飽くまで保持増進せしむる目的を以て、嬉野血屋谷に現存する紅令民が持參した古木より形質優良なる種子を得て、新品種を創製す可く研究の歩を進めてゐる。

紅茶の栽培 世界に於ける茶の需要の九割を占めるものは紅茶である。佐賀縣に於ては未だ等閑に附せられてゐるが、先進地たる静岡縣、鹿児島縣に於ては既に栽培に着手してゐるが、不幸静岡縣産紅茶が在來種に屬し、品質粗悪であることは大いに斯業界で遺憾とせられてゐるところである。静岡紅茶に比し鹿児島縣産紅茶は、臺灣印度等の本場品に何等遜色なく、好評を博してゐることは、地理的關係よりして佐賀縣としては看過し得ないことである。佐賀縣は風土が茶栽培に適し氣温比較的に高きを以て鹿児島に於ける栽培法及び樹種に改良を加ふるならば、内地の栽培に適する紅茶の品種を考案發見することも至難では無いであらう。

産業協會 佐賀縣に於ける鑛山業の大成功者にして杵島炭坑の經營者であ

た。これに反し電力に依る製粉事業は各地に創始され、特に大正九年五月九州製粉株式會社が鳥栖町に設立せらるゝや、急激に生産の増加を示した。同會社は、大正十三年日清製粉會社に買收合併され、益々生産設備を改善して能率を増加し、昭和十年には縣外麥四十五萬俵、縣産麥十五萬俵、計六十萬俵を購入し、小麥粉百二十萬袋、價格三百八十四萬圓、其の他の麥粉十五萬一千二百袋、價格五十萬九千五百餘圓に上り、九州一圓はもとより朝鮮、臺灣、山口縣方面に移出し、將來益々生産販賣の増加を期してゐる。又一方政府の農村工業化政策に刺戟せられて、縣下の各産業組合に於て製粉事業を開始するもの頗る多く、縣當局も小麥増殖五ヶ年計畫の進展に伴ひ、小麥の自家消費を勸奨し、力武式、中島式、中村式等の製粉機購入に際しては、農事實行組合及び産業組合に依り購入費の半額を補助して其の設置を奨励した結果、縣下各市町村に此種組合の小工場が生れ、昭和九年には製造場數四百九十一箇所、生産高五百三十五萬三千餘貫、總價格三百一十一萬餘圓に達した。

昭和五年以降同九年に至る生産狀況を示せば左の通りである。

年次	製造戸數	總生産額(圓)	内國産麥(石)	外國産麥(石)
昭和五年	四九一	二、七九一、四四七	一五九、五〇六	一四、八一五
同 六年	四七八	二、一〇二、〇二五	一三五、二一七	七四、七一一
同 七年	四七五	二、六四二、五七二	一三七、七〇三	七一、八一八
同 八年	四九一	二、六九八、六〇三	一四〇、四七一	七一、九〇〇
同 九年	四九一	三、一一一、八三〇	一四四、〇七二	六一、八〇〇

製麵業 昭和九年に於ける麵類製造戸數は三百三十二戸にして、十年前の大正十四年に比較すると、他府縣に於ける製麵業の勃興と大資本の壓迫との爲めに製造戸數に於て百十七戸、職人の數に於て二百五十一名を減じて八

百七十名となつた。従つて、生産高も當時の百二十六萬八千餘圓から逐年下つて昭和九年には半額にも足らぬ六十一萬四千餘圓を示す状態である。

生産品の主なるものは、素麺、乾餛飩等で明治時代には家内工業として小城郡、神埼郡方面に廣く生産され、神埼素麺、小城素麺の聲價は、近縣は勿論關西方面に迄知られるに至つたが、眞崎製麵機の發明以來、手製の麵類は機械製に壓倒され、加ふるに他府縣に於ける製麵業の勃興と、歐洲戦後の不況とに原因して移輸出は減少し、製造業者も淘汰されて一時は其の衰滅をさへ憂慮されたが、近年は手製獨特の長所を認められて、再び著しく擡頭しつつある。主産地は神埼郡にして總生産額の半を占め、佐賀郡、小城郡、藤津郡東松浦郡の順位で生産され、縣内の需要を充たすのみならず、九州各縣に向つて二十九萬圓を輸出してゐる。

大正十四年以降昭和九年に至る生産状況は次の通り。

年次	工場數	職人數	生産高(貫)	生産額(圓)
大正十四年	四四九	一、二二一	一、四七九、四一五	一、二六七、九九一
昭和元年	四四六	一、〇九七	一、五三六、四七七	一、二五七、九四三
同二年	四一四	一、〇二〇	一、四八四、八二八	一、一八七、六七二
同三年	四一六	一、〇〇三	一、四六八、九六六	一、一七三、八二五
同四年	四一〇	一、〇九〇	一、三九八、六七一	一、〇七四、三三六
同五年	三九三	九五四	一、三一、九三七	七九二、一一三
同六年	三七五	八八七	一、二五〇、九六一	六四〇、二三四
同七年	三七九	八七九	一、〇一四、七九七	六〇九、六九五
同八年	三六〇	八六八	九二五、九二六	五七二、〇八一
同九年	三三二	八七〇	九六六、六〇五	六一四、九二九

い状態にある。

清酒 清酒醸造は需要者の自家醸造より起り、税制の關係から漸次工業組織となつたもので、商品として販路を農村に得たことは近年の事に屬すると云へる。

かつての製品を現今の進歩したる標準眼で見ると、未製品の新酒にして貯藏調製の技能拙く世間の古酒嗜好に對しては、先進地の優良品を購入販賣するの己むなき状態にあつた。此の状態を看取された英藩主鍋島閑叟公は佐賀市を中心として改良酒の醸造を奨励されたので、佐賀酒の名聲頓に揚がり、品質は年を逐うて改善され、造石數量も増加して今日の盛運を見るに至つたものである。

最近十ヶ年間の清酒醸造状況を示せば左の通りである。

酒造年度	製造場數	査定石數(石)	一場平均(石)	全國酒造高(石)
大正十四年	三三二	八七〇	二、六二〇	一、二四七、六八六

第三節 醸造業

佐賀縣に於ける醸造業は、隣接する福岡縣、長崎縣に比較すれば品質に於ては福岡縣に匹敵するも、造石高に於て劣り、長崎縣に比較すれば品質造石高共に遙かに優越なる地位を占めて居り、とも角も九州に於ける有數の銘醸地と稱し得るであらう。然し一度視界を廣く全國の斯業上から嚴密に觀察すれば、未だ誇るに足らぬ状態であるとも云へる。

全國に於ける清酒の生産高五百萬石に對し、佐賀縣はその五十分の一たる十萬石に充たぬ査定高にして、醬油は諸味査定高二百五十萬石中その百分の一強の二萬九千石に過ぎず、清酒は漸く各府縣の平均數に達し、醬油は未だ平均數に達せぬ状態にある。

由來醸造業の盛衰は、交通機關の便否に關係すること多く、古來大醸造地と稱せらるゝ地方で氣候風土の天恵によつて成功せるものも間にはあるが、多くは大需要地との間に交通の便を有する地方が成功してゐる。清酒に於ける灘五郷、醬油に於ける野田、銚子等は蓋しその適例と云へよう。九州は氣温高く、且つ大寒中暖流の影響に依りドンコと稱する高氣温に遭遇する結果清酒醸造に不適なるのみならず、仕込の期間短く、附近に大需要地も無い有様であるにも不拘、斯業者は研究努力を重ね品質販路の改善開拓に奮闘しつつある。

醬油は氣温概して高い爲めに醸造に適し、且つ原料たる小麦の産額は多く大豆は朝鮮滿洲方面よりの輸入に便利であるが、佐賀縣は古來自家用醬油の醸造が盛に行はれ、縣内需要の六割を占めるので營業用の醬油醸造は振はな

ひ新販路を急激に開拓することは至難の業であるとも云ひ得る。而して一方製造免許者の數より觀察すれば、小賣專賣業者は逐年淘汰せられ、卸賣本位の醸造業者の増加を見てゐるが之は斯業の將來に好影響を齎すものと見られてゐる。佐賀縣では大正十年度から縣商工課に専任技術員を置き、醸造の實地指導に當らしめた結果、品質は著しく向上され、大正十五年度に於ける全國清酒品評會に於ては嶄然として頭角を現はし、入賞率全國第一位の榮冠を獲得した。

銘酒と經濟酒

佐賀縣清酒は三割以上を縣外に移出し數量は年と共に増加の傾向が見える。故に聲價を發揚して芳醇なる清酒の需要に應ずる爲め、各醸造場共一割乃至五割の優良酒醸造を目的に精選した原料を用ひて入念に仕込んでゐるが、又半面地方的嗜好及び販路關係を考慮して、低廉な原料により經濟的健全酒を造つて需要に應じてゐる。従つて縣當局としても銘酒と經濟的優良酒醸造の根本的に異なる二つの目標に向つて斯業者を指導中である。

ある。主産地は神埼郡にして總生産額の半を占め、佐賀郡、小城郡、藤津郡、東松浦郡の順位で生産され、縣内の需要を充たすのみならず、九州各縣に向つて二十九萬圓を輸出してゐる。

大正十四年以降昭和九年に至る生産状況は次の通り。

年次	工場數	職人數	生産高(貫)	生産額(圓)
大正十四年	四四九	一、一三一	一、四七九、四一五	一、二六七、九九一
昭和元年	四四六	一、〇九七	一、五三六、四七七	一、二五七、九四三
同二年	四一四	一、〇二〇	一、四八四、八二八	一、一八七、六七二
同三年	四一六	一、〇〇三	一、四六八、九六六	一、一七三、八二五
同四年	四一〇	一、〇九〇	一、三九八、六七一	一、〇七四、三三六
同五年	三九三	九五四	一、三一、九三七	七九二、一一三
同六年	三七五	八八七	一、二五〇、九六一	六四〇、二三四
同七年	三七九	八七九	一、〇一四、七九七	六〇九、六九五
同八年	三六〇	八六八	九二五、九二六	五七二、〇八一
同九年	三三二	八七〇	九六六、六〇五	六一四、九二九

十萬石に充たぬ査定高にして、醬油は諸味査定高二百五十萬石その百分の一強の二萬九千石に過ぎず、清酒は漸く各府縣の平均數に達し、醬油は未だ平均數に達せぬ状態にある。

由來醸造業の盛衰は、交通機關の便否に關係すること多く、古來大醸造地と稱せらるゝ地方で氣候風土の天恵によつて成功せるもの間にはあるが、多くは大需要地との間に交通の便を有する地方が成功してゐる。清酒に於ける灘五郷、醬油に於ける野田、銚子等は蓋しその適例と云へよう。九州は氣温高く、且つ大寒中暖流の影響に依りドンコと稱する高氣温に遭遇する結果清酒醸造に不適なるのみならず、仕込の期間短く、附近に大需要地も無い有様であるにも不拘、斯業者は研究努力を重ね品質販路の改善開拓に奮闘しつつある。

醬油は氣温概して高い爲めに醸造に適し、且つ原料たる小麦の産額は多く大豆は朝鮮滿洲方面よりの輸入に便利であるが、佐賀縣は古來自家用醬油の醸造が盛に行はれ、縣内需要の六割を占めるので營業用の醬油醸造は振はな

い状態にある。

清酒 清酒醸造は需要者の自家醸造より起り、税制の關係から漸次工業組織となつたもので、商品として販路を農村に得たことは近年の事に屬すると云へる。

かつての製品を現今の進歩したる標準眼で見ると、未製品の清酒にして貯藏調製の技能拙く世間の古酒嗜好に對しては、先進地の優良品を購入販賣するの己むなき状態にあつた。此の状態を看取された英藩主鍋島閑叟公は佐賀市を中心として改良酒の醸造を奨励されたので、佐賀酒の名聲頓に揚がり、品質は年を逐うて改善され、造石數量も増加して今日の盛運を見るに至つたものである。

最近十ヶ年間の清酒醸造状況を示せば左の通りである。

酒造年度	製造場數	査定石數(石)	一場平均(石)	全國酒造高(石)
大正十四年	一四七	一〇二、六一二	六九八	五、一四七、六八六
昭和元年	一四三	九七、一七四	六七九	四、八〇三、九四三
同二年	一四〇	九三、一〇七	六五五	四、八六一、三四七
同三年	一四四	九七、八四六	五七九	五、〇〇〇、五七六
同四年	一四三	八八、一七三	五二七	四、五五七、一四八
同五年	一四四	九一、二九二	五三四	三、八五〇、九六一
同六年	一三〇	七一、二四四	五八一	三、四八三、八七六
同七年	一二五	八〇、一四五	六四一	三、八〇七、九八九
同八年	一二八	八四、六七二	六五二	四、三一二、〇一一
同九年	一三〇	八二、〇九七	五三二	四、〇五一、九六六

而して清酒醸造高の増減は、其の年の農作物の豊凶及び商工業の盛衰と密接なる關係を有し、單に醸造技術の進歩のみに依りて他府縣清酒の販路を奪

ひ新販路を急激に開拓することは至難の業であると云ひ得る。而して一方製造免許者の數より觀察すれば、小賣專賣業者は逐年淘汰せられ、卸賣本位の醸造業者の増加を見てゐるが之は斯業の將來に好影響を齎すものと見られてゐる。佐賀縣では大正十年度から縣商工課に専任技術員を置き、醸造の實地指導に當らしめた結果、品質は著しく向上され、大正十五年度に於ける全國清酒品評會に於ては嶄然として頭角を現はし、入賞率全國第一位の榮冠を獲得した。

銘酒と經濟酒 佐賀縣清酒は三割以上を縣外に移出し數量は年と共に増加の傾向が見える。故に聲價を發揚して芳醇なる清酒の需要に應ずる爲め、各醸造場共一割乃至五割の優良酒醸造を目的に精選した原料を用ひて入念に仕込んでゐるが、又半面地方的嗜好及び販路關係を考慮して、低廉な原料により經濟的健全酒を造つて需要に應じてゐる。従つて縣當局としても銘酒と經濟的的良好酒醸造の根本的に異なる二つの目標に向つて斯業者を指導中である。

佐賀縣を風土氣候方面から觀測すると、清酒の醸造には稍適當であるが之は技術の進歩に依り征服し得べく、主原料たる米は生産豊富にして品質亦概ね醸造に適するを以て、薪炭勞銀の比較的低廉なる佐賀縣下各地に於て醸造したる清酒を移出することは、他縣のそれに優越せる點をなしてゐる譯であり、この事は他面に玄米の儘移出するよりも縣の富を齎らす所以でもある。清酒醸造の隆盛を圖るには、縣内需要を満足するを以て足れりとせず、進んで縣外への移出を増加せねばならぬことは勿論で、縣下醸造業界の趨勢は幸に此の傾向を辿りつつあるを以て、當業者の販路視察に對して極力便宜を與へ、或は新販路を開拓して相當量を移出せるものに對して運賃の一部を補給

する等の販路開拓の奨励方法を講ずれば、一段の進展を期待することが出来る云へよう。

昭和八年度に於ける清酒の移出入状況は左の通り。

移出三九、七四〇石(四割六分)、熊本二、三七四石、福岡二一、五三四石、大分一二九石、長崎二二、四九一石、鹿児島一七六石、宮崎五四四石、沖繩一三石、東京七七四石、京都九石、愛知六四五石、静岡二二三石、広島七四石、山口五七六石、樺太二石、關東州六三三石、滿洲二四石、中華民國七〇石、亞米利加一九石

移入五、九九八石(六分五厘)、熊本一一石、福岡四、九〇七石、長崎五二四石、大阪七石、兵庫二石、廣島一四七石、(差引三四、一四二石移出超過)

品評會入賞成績

全國品評會	出品者	優等	一等	二等	三等	合計	入賞歩合
大正八年	八七	—	—	四	一五	一九	〇・二一八
同十年	七一	—	—	七	一五	二三	〇・三二四
同十三年	七五	—	—	三	一六	二五	〇・五八四
昭和元年	五九	—	—	一〇	一六	二六	〇・七八〇
同三年	一二八	—	—	一五	二九	四四	〇・七〇三
同五年	一二九	—	—	一一	三九	五〇	〇・六三六
同七年	一一八	—	—	二四	三〇	五四	〇・六六一
同九年	一三六	—	—	六	二四	三〇	〇・七五〇

尚ほ酒造原料として縣外米の移入状況は左の如し。(酒造米)

福岡縣 二、四〇七石 大分縣 七、七七七石 朝鮮 一、二五五石

熊本縣 三、六九九石 宮崎縣 五、五七石 鹿児島 五、九一石 長崎縣 八、二石 岡山縣 一、八四二石 山口縣 一、五二石

醤油 佐賀縣は古來自家用醤油の醸造盛にして、中流以上の生活者は醤油を購入することを以て一種の恥辱と心得た程で、その風習は今も尙存してゐる。現在に於ても現住戸數百に對して五十四は自家用醤油を使用し、購入使用する者は中産以下又は仕込設備を持たない者である。従つて、縣内消費量の六割は自家用醤油にして、營業用は四割に過ぎぬ、之を醸造業者數より検討するに大正元年に於ける免許人員五百一名であつたものが、同十年には二百一名となり、更に大正十四年の醤油稅撤廢後は著しく減じて昭和元年には七十七名となり、昭和九年には八十二名となつた。昭和五年以降の醸造状況は左の通りである。

年次	營業用(石)	同金額(圓)	自家用(石)	同金額(圓)
昭和五年	二七、六九一	七七七、八六三	三五、七二八	九八九、四三三
同六年	三〇、八三一	七一六、三八一	三五、三八七	九〇六、六七六
同七年	三二、一五七	七二三、四九一	三五、三〇一	八三三、一九六
同八年	三〇、八九七	六九一、〇二七	三五、八六三	八七九、〇三五
同九年	二九、九七四	六七五、六四二	三五、二八二	八四五、三〇〇

前表の示す如く、自家用醤油の醸造は大差なきに營業用は幾分の減少を示しつゝあるは全國的の趨勢にして、その原因は味の素の特許期間満了に伴ひ各方面に於てアミノサンの製造が旺盛となり、醤油代用として使用される結果で、逐年増加の傾向にある。故に數年前迄副業的に幼稚なる方法を以つて醸造してゐた醤油屋は殆んど廢業し、現在斯業を繼續してゐるものは工業的の設備と進歩せる技術とを以て優良品を廉賣するもののみであつて、多年の慣

習たる自家用醬油醸造の風潮も稍下火になりつゝある。

然しながら現今の販賣状況を大觀するに品質優良なるものよりも、低廉なるものが歡迎される爲めに、業者は品質の改善よりも價格の引下げに力を注ぎ、其の結果は、品質下落して、佐賀醬油の聲價を落す危険がないとは云へない。

而して一度失はれたる信用の恢復は頗る困難にして、其の影響も亦大なるを以て、特に縣外輸出に際しては品質を吟味して信用の保持に努力すべきであらう。

焼酎及び味淋 清酒醸造の副業として焼酎、味淋の製造は、有利なる事業

であるが、之等の製品は佐賀縣に於ては需要が少く發展の可能性に乏しい。即ち長崎、福岡、熊本等に於ては焼酎の原料たる甘藷を得易く、且つ労働者多くして販賣に便なるも、佐賀縣は以上の點に於て不利な位置に置かれて

減少が主因をなしてゐると云へよう。

年次	製造戸數	總價格(圓)	ラムネ(圓)	サイダー(圓)
昭和五年	三一	一三七、六三四	九一、一九六	二一、五四五
同六年	三一	一二七、六八一	九一、五二六	一八、三六三
同七年	二九	二一五、一二二	一〇三、六七三	九〇、四七五
同八年	三〇	一一七、一九二	六七、〇九〇	三三、三九一
同九年	二九	一一九、九六三	六九、五六一	三八、九九七

第四節 製氷業

佐賀縣の製氷會社は、佐賀市の佐賀製氷、日本食料會社佐賀工場、小城の陣内製氷工場、伊萬里の日本食料會社伊萬里工場、唐津市の木下製氷、川俣製氷、唐津製氷、呼子の漁業組合製氷所、鹿島町の鹿島製氷の九工場にして一日の生産能力は約百噸であるが、長崎縣玉の浦港に根據を有する阿波出漁

移入五九八石(六分五厘)、熊本二石、福岡四、九〇七石、長崎五二四石、大阪七石、兵庫二石、廣島一四七石、(差引三四、一四二石移出超過)

品評會入賞成績

全國品評會	出品者	優等	一等	二等	三等	合計	入賞歩合
大正八年	八七	—	—	四	一五	一九	〇・二一八
同十年	七一	—	—	七	一五	二三	〇・三二四
同十三年	七五	—	—	一六	二五	四四	〇・五八四
昭和元年	五九	—	—	一〇	一九	四六	〇・七八〇
同三年	一二八	—	—	一五	二九	四一	〇・七〇三
同五年	一二九	—	—	一二	三九	二〇	〇・六三六
同七年	一一八	—	—	二四	三〇	—	〇・六六一
同九年	一三六	—	—	二四	七二	—	〇・七五〇

尙ほ酒造原料として縣外米の移入状況は左の如し。(酒造米)

福岡縣	二、四〇七石	大分縣	七、八七石	朝鮮	一、二五五石
-----	--------	-----	-------	----	--------

習たる自家用醬油醸造の風潮も稍下火になりつゝある。

然しながら現今の販賣状況を大觀するに品質優良なるものよりも、低廉なるものが歓迎される爲めに、業者は品質の改善よりも價格の引下げに力を注ぎ、其の結果は、品質下落して、佐賀醬油の聲價を落す危険がないとは云へない。

而して一度失はれたる信用の恢復は頗る困難にして、其の影響も亦大なるを以て、特に縣外輸出に際しては品質を吟味して信用の保持に努力すべきであらう。

焼酎及び味淋 清酒醸造の副業として焼酎、味淋の製造は、有利なる事業であるが、之等の製品は佐賀縣に於ては需要が少く發展の可能性に乏しい。即ち長崎、福岡、熊本等に於ては焼酎の原料たる甘藷を得易く、且つ労働者多くして販賣に便なるも、佐賀縣は以上の點に於て不利な位置に置かれてゐるので、清酒醸造の副産物として少量の生産あるに過ぎない。

昭和四年以後の焼酎産額は次の通り。

昭和四年	五〇一石	同五年	五七二石	同六年	三九八石	同七年	四四一石
同八年	五六〇石						

味淋は佐賀縣に於ては需要少く、従つて仕込む者も殆どなく、食酢の製造は清酒醸造の廢棄物を利用し得るから有利な副業であるが、佐賀縣地方は米を原料とする所謂米酢が使用されてゐるから、漸次に改良の氣運に導くことが肝腎であらう。

清涼飲料水 昭和九年に於ける清涼飲料水の産額は、十一萬九千餘圓にして、十年前の大正十四年に比較すると實に五割の減少で、之はラムネ製造の

は七十七名となり、昭和九年には八十二名となつた。

昭和五年以降の醸造状況は左の通りである。

年次	營業用(石)	同金額(圓)	自家用(石)	同金額(圓)
昭和五年	二七、六九一	七七七、八六三	三五、七二八	九八九、四三三
同六年	三〇、八三一	七一六、三八一	三五、三八七	九〇六、六七六
同七年	三二、一五七	七二三、四九一	三五、三〇一	八三三、一九六
同八年	三〇、八九七	六九一、〇二七	三五、八六三	八七九、〇三五
同九年	二九、九七四	六七五、六四二	三五、二八二	八四五、三〇〇

前表の示す如く、自家用醬油の醸造は大差なきに營業用は幾分の減少を示しつゝあるは全國的の趨勢にして、その原因は味の素の特許期間満了に伴ひ各方面に於てアミノサンの製造が旺盛となり、醬油代用として使用される結果で、逐年増加の傾向にある。故に數年前迄副業的に幼稚なる方法を以つて醸造してゐた醬油屋は殆んど廢業し、現在斯業を繼續してゐるものは工業的の設備と進歩せる技術とを以て優良品を廉賣するものゝみであつて、多年の慣

減少が主因をなしてゐると云へよう。

年次	製造戸數	總價格(圓)	ラムネ(圓)	サイダー(圓)
昭和五年	三一	一三七、六三四	九一、一九六	二一、五四五
同六年	三一	一二七、六八一	九一、五二六	一八、三六三
同七年	二九	一二五、一二二	一〇三、六七三	九〇、四七五
同八年	三〇	一一七、一九二	六七、〇九〇	三三、三九一
同九年	二九	一一九、九六三	六九、五六一	三八、九九七

第四節 製氷業

佐賀縣の製氷會社は、佐賀市の佐賀製氷、日本食料會社佐賀工場、小城の陣内製氷工場、伊萬里の日本食料會社伊萬里工場、唐津市の木下製氷、川俣製氷、唐津製氷、呼子の漁業組合製氷所、鹿島町の鹿島製氷の九工場にして一日の生産能力は約百噸であるが、長崎縣玉の浦港に根據を有する阿波出漁團を佐賀縣伊萬里漁港に誘致する爲めに、同港の陸上設備の一部として製氷工場創設の準備が進められてゐる。而して前記の九工場中、鹿島製氷、木下製氷は目下休業し、唐津製氷は休業の代償として福岡縣より供給をうけて區域内に販賣中であるが、佐賀縣は久留米、福岡、八幡等の製氷地を近くに控へ、大資本製氷業者の進出に壓倒され勝ちであつたので、縣當局の勸奨に依り縣下の製氷業者を一丸とする佐賀縣製氷工業組合を組織し、販賣價格及び區域を協定して無謀なる競争を戒め、協力して縣外水の移入防遏に努めてゐる。昭和九年の生産高は一萬五千餘噸、價格約十三萬圓にして、前年に比べると二倍の増加なるも、單價安く、その經營は稍困難の状態にある。

第六章 食料品工業

最近の製氷状況は左の通り。

年次	噸數	總價格(圓)	年次	噸數	總價格(圓)
昭和四年	九、八二六	一一七、六五三	七年	一〇、一一九	七五、五四五
同五年	一一、六二二	一三三、六八四	同八年	七、四四〇	六八、九四一
同六年	一〇、六一五	八〇、〇一九	同九年	一五、二五六	一二九、八一四

第五節 罐詰製造業

佐賀縣の罐詰産額は近年急激に増加し、昭和九年には一躍四十四萬六千餘圓に上り、之を昭和元年に比較すると四倍、前年たる昭和八年に比べても約二倍に近い増産で、製造工場は六戸あるも、その九割以上は藤津郡濱町の濱罐詰商會の生産である。

佐賀縣で生産される罐詰類は、他府縣の如く牛肉、獸鳥肉、魚類等の加工品とは趣を異にし、有明海の特産たる蟹、海茸、貝柱、牡蠣並に海月、玄海方面の鯨、雲丹及び縣下各地に生産される、蔬菜類の加工品たる東松浦郡呼子町の松浦漬、雲丹罐詰、藤津郡濱町の各種貝類、罐詰、海月粕漬、佐賀郡大井堂の蟹漬、海茸貝柱粕漬、佐賀市の牡蠣粕漬、牡蠣エキス、牡蠣鹽漬、小城郡北山村の山葵漬等特産品に屬するものが大部分を占めてゐる。

近年の生産状況は左の通り。

年次	製造場	生産量	總價格
昭和五年	六	五二、一六五	一〇五、五七五
同六年	七	八二、三〇四	一〇九、六二〇
同七年	七	六八、二六九	一三三、五六五

同八年	六	一三五、四六四	二五三、五七二
同九年	六	一八六、一七九	四四六、七八三

第六節 藁工品

佐賀縣物産の大宗米の副産物たる藁の生産高は、八千萬貫に上り、その質は強靱優美である。之を利用し、且つ加工することは佐賀縣の如く主穀單一農村にとつては最も捷徑なる副業にして、農家經濟は勿論、縣經濟に及ぼす影響は甚大なるものがある。縣當局は、各級農會、産業組合と連絡して藁工品の増産販賣を奨励した結果、年々確實なる基礎を築き、年額百萬圓を突破したことも一再ではなく、縣の特産品の一として數へられ、其の生産地域は縣下全市町村に亘り、製品の大部分は縣外特に北九州方面の需要地に於て覇を唱へ、遠く阪神或は滿洲方面に進出するに至つたが、他面各府縣に於ても農村更生の一助として材料が最も得易く技術亦簡單にして、多額の資金を要せざる藁工品を副業として奨励するに至つた結果、何れの消費地に於ても激烈なる競争が起り、佐賀縣産品は近年他縣産品の壓迫を蒙り價格の低落を示し延いては取引の圓滑を缺ぎ、生産の減少を示すに至つた。此の傾向は昭和七年の通常縣會の議題となり、藁工品の検査施行を要求され、同八年の縣會に於て之に要する豫算案を滿場一致を以て議決され同九年の十月一日より愈々検査を實施した。

年次	總産額(圓)	産額(圓)	繩類産額(圓)	吠及俵(圓)
昭和元年	一、二七四、六〇七	三二、七四六	三六、七七六	四〇、八八三

大連	朝鮮	其他	縣内	合計
一三〇、四三〇	一	一〇九、〇四〇	二五七、五八〇	五、八六一、七六〇
一五六、九一〇	二五、一五〇	一	四、二〇四、九八〇	三、一六一、四六二
一、六一九、〇六五	八〇、六六四	三〇、三六一	九、〇三二	

尙ほ昭和十年四月一日より同十年三月三十一日迄に検査を實施した藁工品は

吠六、二〇七、四一三枚(七四一、八〇一圓)、藁三、九八四、二五三枚(價格一九一、三六一圓)、繩類三、二八五、〇七二貫(價格三一六、三九七圓)、

圓に上り、之を昭和元年に比較すると四倍、前年たる昭和八年に比べても約二倍に近い増産で、製造工場は六戸あるも、その九割以上は藤津郡濱町の濱罐詰商會の生産である。

佐賀縣で生産される罐詰類は、他府縣の如く牛肉、獸鳥肉、魚類等の加工品とは趣を異にし、有明海の特産たる蟹、海茸、貝柱、牡蠣並に海月、玄海方面の鯨、雲丹及び縣下各地に生産される、蔬菜類の加工品たる東松浦郡呼子町の松浦漬、雲丹罐詰、藤津郡濱町の各種貝類、罐詰、海月粕漬、佐賀郡大井堂の蟹漬、海茸貝柱粕漬、佐賀市の牡蠣粕漬、牡蠣エキス、牡蠣鹽漬、小城郡北山村の山葵漬等特産品に屬するものが大部分を占めてゐる。

近年の生産状況は左の通り。

年次	製造場	生産量	總價格
昭和五年	六	五二、一六五	一〇五、五七五
同 六年	七	八二、三〇四	一〇九、六二〇
同 七年	七	六八、二六九	一三三、五六五

響は甚大なるものがある。縣當局は、各級農會、産業組合と連絡して薬工品の増産販賣を奨励した結果、年々確實なる基礎を築き、年額百萬圓を突破したことも一再ではなく、縣の特産品の一として數へられ、其の生産地域は縣下全市町村に亘り、製品の大部分は縣外特に北九州方面の需要地に於て覇を唱へ、遠く阪神或は滿洲方面に進出するに至つたが、他面各府縣に於ても農村更生の一助として材料が最も得易く技術亦簡單にして、多額の資金を要せざる薬工品を副業として奨励するに至つた結果、何れの消費地に於ても激烈なる競争が起り、佐賀縣産品は近年他縣産品の壓迫を蒙り價格の低落を示し延いては取引の圓滑を缺ぎ、生産の減少を示すに至つた。此の傾向は昭和七年の通常縣會の議題となり、薬工品の検査施行を要求され、同八年の縣會に於て之に要する豫算案を滿場一致を以て議決され同九年の十月一日より愈々検査を實施した。

年次	總産額(圓)	産額(圓)	繩類産額(圓)	吠及俵(圓)
昭和元年	一、三三四、六七	三二、七四六	三六、七七六	四〇、八八三

同 二年	一、三四八、三六	三三七、七七	三三八、一九六	四〇、五五九
同 三年	一、三三九、四四	三三三、七三	三六三、一〇四	四六、八三三
同 四年	一、二六八、二三	三三〇、五七	三六、九四九	四四、〇五
同 五年	九三〇、三三	三四五、八〇	三四七、二七	三九五、〇四七
同 六年	一、二一〇、四五	一八五、六四	一九、一四九	六三、四五
同 七年	七四五、〇七	一七、六三	一八、九七	三四、五二
同 八年	八二四、四四	一八、八八	三六、七九	三四、八四六
同 九年	八五、六九	一七、八三	三四、六二	三七、五二

尙ほ昭和十年四月一日より同十年三月三十一日迄に検査を實施した薬工品

は

吠六、二〇七、四一三枚(七四一、八〇一圓)、苳三、九八四、二五三枚(價格一九一、三六一圓)、繩類三、二八五、〇七二貫(價格三一六、三九七圓)、總計百二十四萬九千五百六十圓にして、主要移出先は次の如し、

仕向地	吠(枚)	苳(枚)	繩(貫)
福岡縣	二、六一七、三二〇	二、二九五、六一〇	八〇〇、五〇〇
長崎縣	四〇六、二四〇	一、〇〇二、六八〇	二七六、二九六
山口縣	七三一、四六〇	三〇、二三〇	二三七、八八〇
熊本縣	一、三四〇、一〇〇	二五、〇五〇	八四、五四四
大分縣	二六、一〇〇	六、六二〇	二、五四八
大阪府	八六、二〇〇	五五八、五八〇	一九、八七二
兵庫縣	四、一八〇	一〇四、一五〇	五八八
東京市	一五三、一二〇	一	一一二

佐賀縣産業の巻

大連	朝鮮	其他	計
一三〇、四三〇	一	一〇九、〇四〇	五、八六一、七六〇
一五六、九一〇	二五、一五〇	一	四、二〇四、九八〇
一、六一九、〇六五	八〇、六六四	三〇、三六一	三、一六一、四六二
九、〇三二			

第七章 電力及瓦斯

第一節 電力供給業

佐賀縣の北部、福岡縣との縣境は、九千部山、脊振山、金山、雷山、羽金山等標高一千米内外の山々が相連り、その南部即ち縣の中央部に天山々嶽があり、西南部は國見岳、不動山、經ヶ岳、多良岳等亦一千米内外の峻峰を以て長崎縣と境するを以て縣下の各河川は之等の山脈を分水嶺として南は有明海北は玄海に注いでゐる。従つて東部縣境をなす筑後川を除いては大河と稱す可きもの無しと雖、各河川共落差大きく、水量豊富なるを以て水力發電に適する場所頗る多く、各地に發電所が建設され發電力は二萬六千五百キロワットに達し縣内消費は勿論、福岡、長崎兩縣にも送電してゐる。その中九十九パーセントは東邦電力株式會社佐賀支店に屬する發電所より供給され、他に八ヶ所の發電所あるもその出力は合計三百二十二キロワットにして、送電區域に於ても出力に於ても到底東邦との比ではない。送電線路の互長は三三・八軒で、其の中三三・一軒は東邦電力の送電線である。

昭和九年に於ける各會社の出力は左の通り

東邦佐賀支店 出力二六、二一キロワット（内譯川上川第一發電所八、四〇〇、同第二發電所二、二〇〇、同第三發電所一、四五〇、同第四發電所一、一〇〇、同第五發電所二、四〇〇、川上川發電所九〇〇、廣瀧發電

所一、五〇〇、同第二發電所一、〇〇〇、嚴木發電所五、二三〇、玉島發電所二、〇〇〇、平原發電所三一）
東邦以外の發電所（東脊振信購販組合三六、東脊振小川内二、服卷水電利用組合一二、五、北山發電所三六、有浦電氣株式會社六〇、有浦木下發電所〇・五、肥前電氣岩屋川發電所一七〇、能古見村平谷發電所五）
次に最近に於ける發電力の趨勢を統計的に見れば、東邦電力の事業擴張に依り昭和九年には大正十四年の二倍に増加してゐる。

年次	出力（キロ）	年次	出力（キロ）
大正十四年	一一、三四八・〇	同五年	二五、五四二・五
昭和元年	一一、三九七・〇	同六年	二六、五三三・〇
同二年	一六、〇五〇・五	同七年	二六、五三三・〇
同三年	一八、三〇六・五	同八年	二六、五三三・〇
同四年	一八、三〇六・〇	同九年	二六、五三三・〇

以上は電力供給の現状であるが、縣下には發電に適する箇所を多分に有するを以て電力の需要が増加すれば、特殊の地方的事情が存せざる限り増設し得るも目下のところでは新設の様様は見えぬ。

第二節 瓦斯供給事業

佐賀縣に於て瓦斯供給事業を營んでゐるのは佐賀市の瓦斯利用組合のみで唐津市は目下準備工作中である。佐賀市に始めて瓦斯事業が起つたのは大正元年の事で、資本金七十五萬圓の株式組織で熱用を主とし、燈火用を従とし

第八章 交通事業

第一節 概観

て營業を始めた。然し瓦斯事業の資本の大部分は地下工事に投ぜられ、輸送鐵管の腐朽費を相當に考慮する必要があるのに、株主配當は僅かに五分程度で將來地下設備に故障を生ずるが如きことあれば大なる損害を蒙り、延いては佐賀市に愛郷的事業の起ることを妨害する原因にならずやと憂慮されるに至つた、偶々歐洲大戰が勃發し鐵管は暴騰し、鐵管の如きは購入當時の四倍の高値に昇騰した。恰も此の時鹿兒島市に於ては水道敷設の計畫が進行してゐることを探知した當業者は、直ちに鐵管の身賣りに交渉を始め、一瀉千里に解決して、大正七年鐵管全部を掘出して鹿兒島市に賣却した。現在鹿兒島市民に飲料水を配給してゐる水道管は其の前身は佐賀市の瓦斯管であることを知る者は少いであらう。それはともかくとして、このために瓦斯供給事業は一

鐵道は省線長崎線が鹿兒島線と鳥栖驛に於て分岐し、東北より西南に斜貫し、之に配するに佐世保、唐津、伊萬里、佐賀の各線がある。その延長二百

十四軒、他に私設の北九州鐵道及び川上電車がある。道路は國道四線百二十一軒、縣道百三十五線、一千六十六軒、合計百三十九線、一千八百八十七軒である。近時自動車の發達著しく國縣道にして自動車の通せざるなしの状態にあつて、自動車一千餘臺、定期路線數百餘に達して居り、近く藤津郡嬉野町を中心として早岐、嬉野、濱及び武雄、嬉野、彼杵を繋ぐ二線の省營バスも運轉されんとしてゐる。従つて道路の改修を要する箇所が増加したので、經

十三萬五千立方米にして、一千三戸の組合員に供給中であるが、利用組合の

あり、西南部は國見岳、不動山、經ヶ岳、多良岳等亦一千米内外の峻峰を以て長崎縣と境するを以て縣下の各河川は之等の山脈を分水嶺として南は有明海北は玄海に注いでゐる。従つて東部縣境をなす筑後川を除いては大河と稱す可きもの無しと雖、各河川共落差大きく、水量豊富なるを以て水力發電に適する場所頗る多く、各地に發電所が建設され電力は二萬六千五百キロワットに達し縣内消費は勿論、福岡、長崎兩縣にも送電してゐる。その中九十パーセントは東邦電力株式會社佐賀支店に屬する發電所より供給され、他に八ヶ所の發電所あるもその出力は合計三百二十二キロワットにして、送電區域に於ても出力に於ても到底東邦との比ではない。送電線路の亘長は三三一・八軒で、其の中三三一軒は東邦電力の送電線である。

昭和九年に於ける各會社の出力は左の通り

東邦佐賀支店 出力二六、二一一キロワット（内譯川上川第一發電所八、四〇〇、同第二發電所二、二〇〇、同第三發電所一、四五〇、同第四發電所二、二〇〇、同第五發電所二、四〇〇、川上川發電所九〇〇、廣瀨發電

大正十四年	一二、三四八・〇	同五年	二五、五四二・五
昭和元年	一二、三九七・〇	同六年	二六、五三三・〇
同二年	一六、〇五〇・五	同七年	二六、五三三・〇
同三年	一八、三〇六・五	同八年	二六、五三三・〇
同四年	一八、三〇六・〇	同九年	二六、五三三・〇

以上は電力供給の現状であるが、縣下には發電に適する箇所を多分に有するを以つて電力の需要が増加すれば、特殊の地方的事情が存せざる限り増設し得るも目下のところでは新設の様子は見えぬ。

第二節 瓦斯供給事業

佐賀縣に於て瓦斯供給事業を營んでゐるのは佐賀市の瓦斯利用組合のみで唐津市は目下準備工作中である。佐賀市に始めて瓦斯事業が起つたのは大正元年の事で、資本金七十五萬圓の株式組織で熱用を主とし、燈火用を従とし

第八章 交通事業

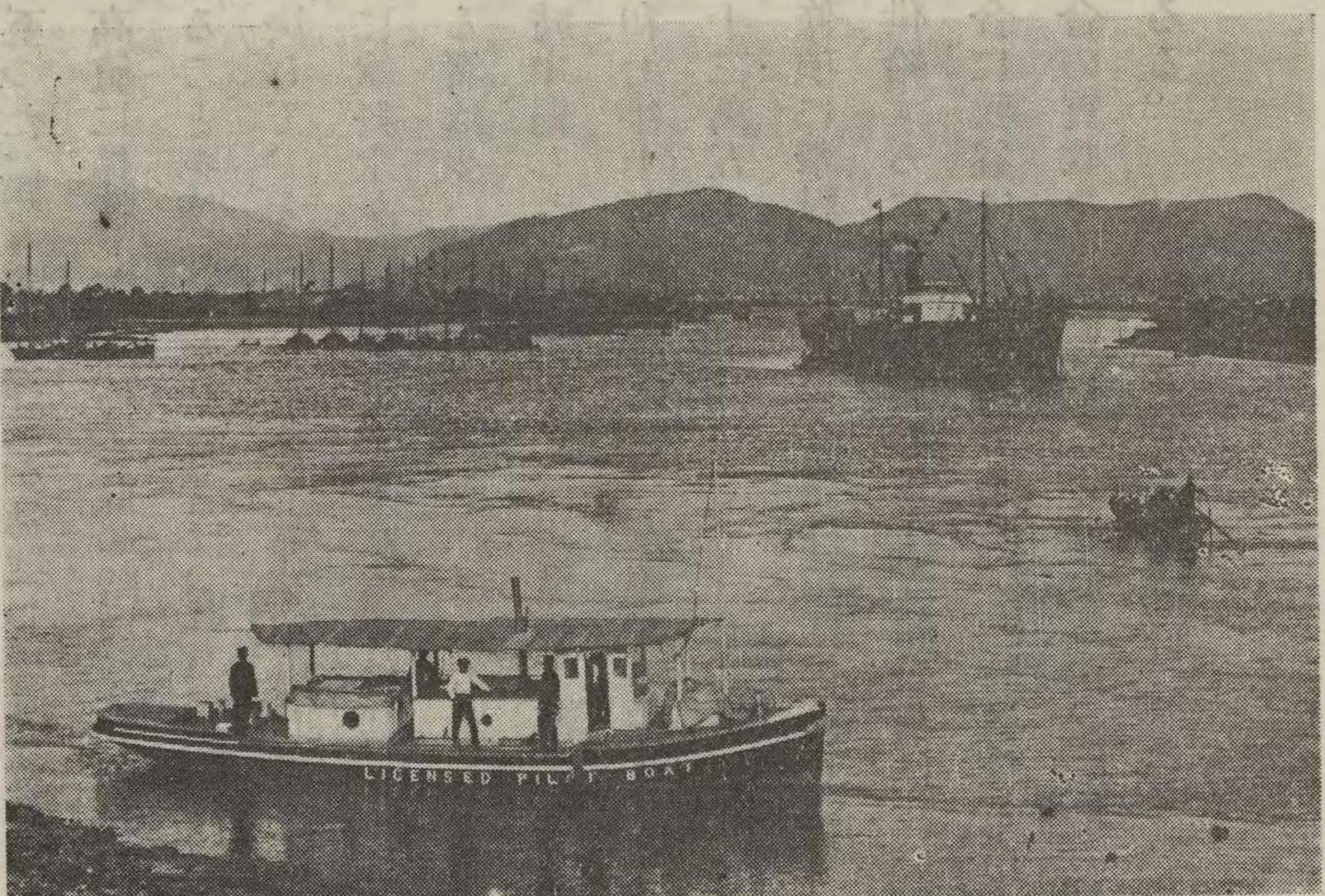
第一節 概観

て營業を始めた。然し瓦斯事業の資本の大部分は地下工事に投ぜられ、輸送鐵管の腐朽費を相當に考慮する必要があるのに、株主配當は僅かに五分程度で將來地下設備に故障を生ずるが如きことあれば大なる損害を蒙り、延いては佐賀市に愛郷的事業の起ることを妨害する原因にならずやと憂慮されるに至つた、偶々歐洲大戰が勃發し鐵價は暴騰し、鐵管の如きは購入當時の四倍の高値に昂騰した。恰も此の時鹿兒島市に於ては水道敷設の計畫が進行してゐることを探知した當業者は、直ちに鐵管の身賣りに交渉を始め、一瀉千里に解決して、大正七年鐵管全部を掘出して鹿兒島市に賣却した。現在鹿兒島市民に飲料水を配給してゐる水道管は其の前身は佐賀市の瓦斯管であることを知る者は少いであらう。それはともかくとして、このために瓦斯供給事業は一時中絶したのであるが、炭價の下落に依りて再び斯業復活の議が擡頭し、昭和七年十月認可されたのが現在の佐賀瓦斯利用組合である。瓦斯生産高は三十三萬五千立方メートルにして、一千三戸の組合員に供給中であるが、利用組合の條項に掣肘されて組合員外には供給せぬ爲めに、佐賀市全戸數の八分の一に供給するに過ぎない状態で、組合員は少い割合に廣地域に分散し、工費の割合に収益は少い模様である。一時は佐賀市當局としても市營事業として同組合の買収を交渉したこともあるが、價格の點で折合はず、そのままとなつてゐる。

鐵道は省線長崎線が鹿兒島線と鳥栖驛に於て分岐し、東北より西南に斜貫し、之に配するに佐世保、唐津、伊萬里、佐賀の各線がある。その延長二十四軒、他に私設の北九州鐵道及び川上電車がある。道路は國道四線百二十軒、縣道百三十五軒、一千六十六軒、合計百三十九軒、一千八百八十七軒である。近時自動車の發達著しく國縣道にして自動車の通ぜざるなしの状態にあつて、自動車一千餘臺、定期路線數百餘に達して居り、近く藤津郡嬉野町を中心として早岐、嬉野、濱及び武雄、嬉野、彼杵を繋ぐ二線の省營バスも運轉されんとしてゐる。従つて道路の改修を要する箇所が増加したので、經費一千二百六十萬圓を以て昭和四年より十ヶ年の繼續事業として、重要道路の改修中であつたが、縣財政の都合によつて之を中止し、道路調査會の答申を基礎として、昭和十年度より六ヶ年の繼續事業として、二百六十餘萬圓を以て主要幹線の改修をなすことに變更し、目下實施中である。

河川中河川法を施行又は準用するものは九十四川、その延長六百三十軒に及び、筑後川、牛津川、六角川等下流に於て舟行の便あるものも少くないが概して屈曲多く、兩岸の土地低きに過ぎて洪水の慘害を蒙ることが多い。

港灣には重要港灣として伊萬里港、貿易港として唐津、住ノ江の二港、指定港に諸富、呼子の二港がある。



伊萬里港は港内水深く、且つ濶くして四時風波の憂なき良港にして、漁港としての設備が完備し、目下陸上設備を急ぎつゝあり、唐津港は朝鮮との連絡上、地の利を占め、外國航路線の要路に近く、石炭の輸出港として知られ、何れも商港漁港として有望な港灣であるが、人工的の施設に不備の點を認め、唐津港に對しては昭和七年より四ヶ年の繼續事業として五十五萬八千圓を投じて築港工事をなし、十年度を以て略完成した。

第九章 金融界

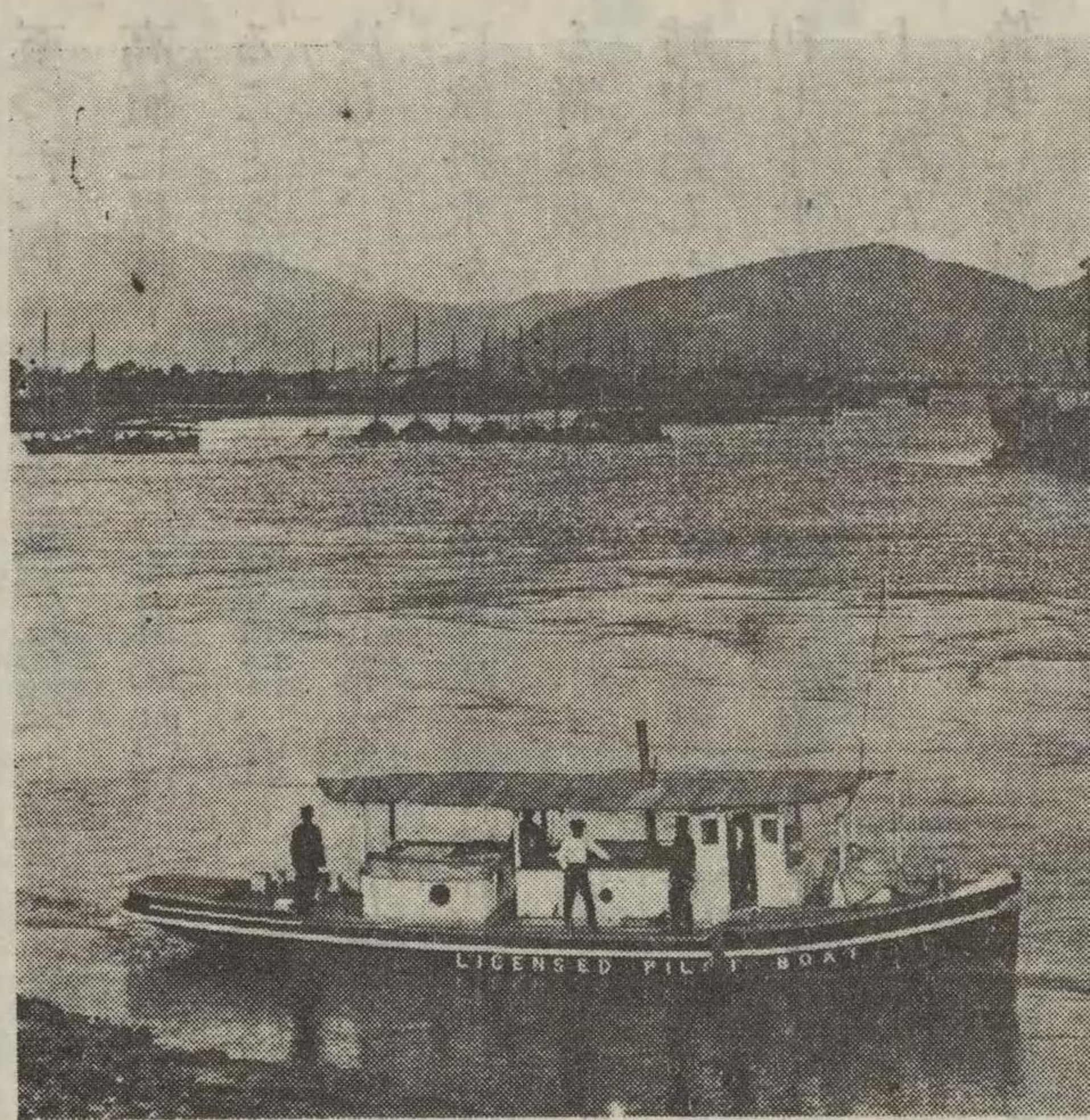
第一節 銀行業

特殊銀行として日本勸業銀行支店があり、普通銀行には縣内に本店を有するもの十五、縣外銀行の支店六、貯蓄銀行は縣内に本店を有するもの一、縣外貯蓄銀行の支店が一つある。

佐賀縣は一時小銀行分立し、三十九行を數へたこともあるが、漸次合併整理せられて現在に至つた。之等の銀行の實績を見ると近年預金は漸増し、貸付金は減少して行く傾向がある。

最近十ヶ年間の預金及び貸付金の年末現在高を示せば左の通り。

右表の如く、大正十四年末と昭和九年末現在高とを比較すれば、預金、貸付金共に著しき減少を示してゐるが、これは歐洲戦後の經濟界反動の爲めに古賀銀行、神埼實業銀行、杵島銀行等が相次いで破産し、縣民に大衝動を與へ、銀行の信用を失墜して預金は郵便貯金有價證券等に逃避し、且つ信用組合の急激なる普及に預金を奪はれ、一方銀行としては、貸付を嚴重警戒し、一方縣民は利用借出の便利な點で信用組合等に注目集中した結果、著しい貸付の減少を招來した一時的の現象である。然し財界が安定するにつれて、銀行の信用を恢復し、預金は再び銀行に還元せられ、昭和七年末を底として年々増加の傾向を辿るに至つたが、一方貸付に於ては銀行業者は依然として貸付手控へをなしてゐるために、昭和九年末に於ては八百五十萬圓の預金超過を示すに至つた。此の莫大なる預金が有價證券に變り、或は縣外に流失し、又は遊資として金庫内に保管せられる状態で、銀行業者としては確實なる放資先を得る爲めに苦心してゐることは誠に奇妙な對照であると云はねばならぬ。



江 港

の利を占め、外國航路線の要路に近く、石炭の輸出港として知られ、何れも商港漁港として有望な港灣であるが、人工的の施設に不備の點を認め、唐津港に對しては昭和七年より四ヶ年の繼續事業として五十五萬八千圓を投じて築港工事をなし、十年度を以て略完成し

第九章 金融界

第一節 銀行業

特殊銀行として日本勸業銀行支店があり、普通銀行には縣内に本店を有するもの十五、縣外銀行の支店六、貯蓄銀行は縣内に本店を有するもの一、縣外貯蓄銀行の支店が一つある。

佐賀縣は一時小銀行分立し、三十九行を數へたこともあるが、漸次合併整理せられて現在に至つた。之等の銀行の實績を見ると近年預金は漸増し、貸付金は減少して行く傾向がある。

最近十ヶ年間の預金及び貸付金の年末現在高を示せば左の通り。

年次	預金總額(圓)	貸付金總額(圓)
大正十四年	六五、五三一、四一二	七三、八四七、八四九
昭和元年	六三、五三〇、七六三	七三、〇二六、五七八
同二年	五九、九八五、七七二	七〇、七八七、五五九
同三年	五〇、二五八、九四五	六二、三三九、二二六
同四年	四八、四三八、九五九	六一、四三七、一五三
同五年	四八、三一三、二二一	六二、六九三、七八三
同六年	四六、八六三、四三八	六二、九三二、二八二
同七年	四三、二四二、六一〇	五九、五七三、四五〇
同八年	四五、八二四、五一九	四三、八九三、九六二
同九年	四八、六二三、四八五	四〇、一六三、三五四

佐賀縣産業の巻

右表の如く、大正十四年末と昭和九年末現在高とを比較すれば、預金、貸付金共に著しき減少を示してゐるが、これは歐州戦後の經濟界反動の爲めに古賀銀行、神埼實業銀行、杵島銀行等が相次いで破産し、縣民に大衝動を與へ、銀行の信用を失墜して預金は郵便貯金有價證券等に逃避し、且つ信用組合の急激なる普及に預金を奪はれ、一方銀行としては、貸付を嚴重警戒し、一方縣民は利用借出の便利な點で信用組合等に注目集中した結果、著しい貸付の減少を招來した一時的の現象である。然し財界が安定するにつれて、銀行の信用を恢復し、預金は再び銀行に還元せられ、昭和七年末を底として年々増加の傾向を辿るに至つたが、一方貸付に於ては銀行業者は依然として貸付手控へをなしてゐるために、昭和九年末に於ては八百五十萬圓の預金超過を示すに至つた。此の莫大なる預金が有價證券に變り、或は縣外に流失し、又は遊資として金庫内に保管せられる状態で、銀行業者としては確實なる放資先を得る爲めに苦心してゐることは誠に奇妙な對照であると云はねばならぬ。商工業者は、銀行の貸付警戒に遭ひ、資金難に陥り頗る振はない現状にあるを以て、縣當局は此の兩者の苦惱解消方策を研究中である。

縣内に本店を有する銀行の公稱資本金は一千六百二十八萬圓、拂込金七百六十三萬圓にして、昭和十年度に於ける各銀行の業績は次の通り。

銀行名	公稱資本金	拂込資本金	積立金	配當率
伊萬里銀行	1,000,000	550,000	400,000	八分
伊萬里實業銀行	500,000	100,000	100,000	一分
濱銀	500,000	140,000	100,000	五分
小城銀行	500,000	350,000	90,000	三分
鹿島銀行	1,000,000	600,000	300,000	六分

七二五

呼子銀行	五,000,000	三,七〇〇,〇〇〇	三三,〇〇〇	五
多久銀行	五,000,000	一,五〇〇,〇〇〇	一三,〇〇〇	一
武雄銀行	五,000,000	三,〇〇〇,〇〇〇	四一,〇〇〇	一
嬉野銀行	五,000,000	三,〇〇〇,〇〇〇	二七,〇〇〇	五
洪益銀行	五,000,000	三,三〇〇,〇〇〇	一四,〇〇〇	七
有田銀行	一,二五〇,〇〇〇	七五〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	八
佐賀百六銀行	一,〇〇〇,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇	九,〇〇〇	五
佐賀中央銀行	四,五〇〇,〇〇〇	二,三〇〇,〇〇〇	三七,〇〇〇	二
鹽田銀行	五〇〇,〇〇〇	四〇〇,〇〇〇	四七,〇〇〇	一
蓬萊銀行	一,〇〇〇,〇〇〇	二五〇,〇〇〇	一七,〇〇〇	五
肥前合同貯蓄銀行	一,〇〇〇,〇〇〇	三三〇,〇〇〇	五九,〇〇〇	三

第二節 無盡業

營業無盡は、未だ振はずの感がある。其の數も僅か四社に過ぎない。昭和九年下期末現在に於ける契約組數は合計百六十八組、口數八千二百二十二、その給付契約高五百六十三萬五千圓、内給付濟高二百五十八萬九千圓、掛金契約高五百九十八萬三千圓、内受入濟高二百六十三萬六千圓、貸付金約二十五萬八千圓である。

左に四社の内容を概略を記しておく。

産業無盡株式會社 營業所は唐津大字唐津一七三九にあり、出張所二を有し、公稱資本金十萬圓拂込資本金二萬五千圓で大正二年九月四日の設立、營業區域は佐賀縣一圓、經營無盡は大坂式である。昭和十年年度の當社の組數は八七組口數四、〇三六口、給付濟高一、二五二、九一六圓當期新契約高四五三、八〇〇圓、當期滿期高三四〇、八〇〇圓、當期の利益金は七、一二二圓、配當

金は年一割であつた。役員は社長菊池龍太郎、專務古賀義一郎、鳥巢八郎、遠藤竹之助、小山金之助、志野善次郎、監查役原孝徳、川添國増、高田松太郎の諸氏である。

佐賀無盡株式會社 當社の營業所は佐賀市水ヶ江町二五二、公稱資本金は十萬圓拂込資本金二萬五千圓、大正十四年八月八日の設立で、營業區域は佐賀市、佐賀郡、小城市、杵島郡、藤津郡、神埼郡、三養基郡に亘り、大坂式折衷式の經營無盡で、昭和十年年度の組數一四組、口數六九五口、給付濟高一八四、七〇〇圓、當期新契約高六〇、〇〇〇圓、當期滿期高一二三、〇〇〇圓、當期利益金一九、五九三圓、配當年一割八分、役員は社長勝田龍吉郎、家永鶴一、中野五郎、監查役豊増龍次郎の諸氏である。

信用無盡株式會社 營業所は西松浦郡有田町二三六一、公稱及拂込資本金は三萬圓、營業區域は佐賀縣一圓で大坂式の經營無盡である。大正元年十二月十六日の設立で昭和十年年度の契約は組數三四組、口數一、五八四口、當期新契約高六〇、〇〇〇圓、當期滿期高一八九、五〇〇圓、當期利益金四、五〇五圓、配當年一割、當社現役員は社長深川榮左衛門、專務池内仁三郎、山口佐雄、監查役竹重忠次の諸氏である。

無盡公益株式會社 營業所は西松浦郡伊萬里町甲四四一で支店一を有し、大正二年一月十八日の設立、公稱拂込資本金三萬圓、營業區域は佐賀市、西松浦郡、東松浦郡、藤津郡、杵島郡、小城市で折衷式經營無盡を採用してゐる。昭和十年年度の組數は三十三組、口數一、九〇八口、當期新契約高二七〇、〇〇〇圓、當期滿期高無く、利益金處分内容は不明である。現役員は大石富一、中島市三郎、原口政太郎、川原新六、井樋喜市、近藤正之の諸氏で

ある。

講會 頼母子講は、昭和九年の調査に依れば、其の數二千七十七組、一市町村平均十六組にして、總口數は八萬八千三百三十五、全戸數に對する割合は七二・五パーセントに當つてゐる。又所謂千人講も、その數二百六十二に及び、講員總數二十四萬九千餘人、總口數二十九萬三千口、一回の掛金三十萬七千餘圓、一ヶ年の總掛金は實に三百六十八萬五千餘圓に達し、縣下金融界の一大勢力である。

郵便貯金 大正十四年古賀銀行が破産して以來銀行の信用失墜するや、郵便貯金は急激に増加し、昭和九年には千六百五十九萬一千圓に達した。

年次	貯金高(圓)	年次	貯金高(圓)
大正十四年	五,五八八,九〇三	昭和五年	一四,〇八四,〇九七
昭和元年	八,二三八,九二七	同六年	一五,二八八,一一一
同二年	九,九九八,〇八九	同七年	一四,三九五,一五三

第四節 倉庫業

年次	收入金(圓)	支出金(圓)	純益(圓)	一日出來高(石)
大正十四年	一一二,八八三	五四,三一六	五八,五六七	九,六二四
昭和元年	六一,六五三	四一,六五八	一九,九五五	五,五四五
同二年	四五,五七〇	三六,〇五九	九,五一一	四,九〇〇
同三年	三九,九三四	三一,八五三	八,〇八一	四,四〇〇
同四年	三二,七一八	三〇,一一八	二,六〇一	三,四七八
同五年	四二,四七七	七〇,六八八	二八,二一一	五,四七五
同六年	三二,九四〇	四六,八四二	一三,九〇二	五,六〇〇
同七年	三九,六五五	二四,三九八	一五,二五七	五,二九二
同八年	二六,六五六	二八,九二一	二,二六五	二,九〇〇
同九年	一八,八五四	二一,七七八	二,九二四	二,一〇〇

佐賀縣に於ける倉庫業は、佐賀市の佐賀倉庫株式會社と神埼郡神埼町の神埼倉庫株式會社の二者である。佐賀倉庫株式會社は、資本金一萬圓全額拂込として玄米三千表の收容力を有し、神埼倉庫株式會社は資本金三萬五千圓、

第二節 無盡業

營業無盡は、未だ振はずの感がある。其の數も僅か四社に過ぎない。昭和九下期末現在に於ける契約組數は合計百六十八組、口數八千二百二十二、その給付契約高五百六十三萬五千圓、内給付濟高二百五十八萬九千圓、掛金契約高五百九十八萬三千圓、内受入濟高二百六十三萬六千圓、貸付金約二十五萬八千圓である。

左に四社の内容の概略を記しておかう。

産業無盡株式會社

營業所は唐津大字唐津一七三九にあり、出張所二を有し、公稱資本金十萬圓拂込資本金二萬五千圓で大正二年九月四日の設立、營業區域は佐賀縣一圓、經營無盡は大阪式である。昭和十年年度の當社の組數は八七組口數四、〇三六口、給付濟高一、二五二、九一六圓當期新契約高四五三、八〇〇圓、當期滿期高三四〇、八〇〇圓、當期の利益金は七、一二一圓、配當

當期利益金一九、五九三圓、配當年一割八分、役員は社長勝田龍吉郎、家永鶴一、中野五郎、監査役豊増龍次郎の諸氏である。

信用無盡株式會社

營業所は西松浦郡有田町二三六一、公稱及拂込資本金は三萬圓、營業區域は佐賀縣一圓で大阪式の經營無盡である。大正元年十二月十六日の設立で昭和十年年度の契約は組數三四組、口數一、五八四口、當期新契約高六〇、〇〇〇圓、當期滿期高一八九、五〇〇圓、當期利益金四、五〇五圓、配當年一割、當社現役員は社長深川榮左衛門、専務池内仁三郎、山口佐雄、監査役竹重忠次の諸氏である。

無盡公益株式會社

營業所は西松浦郡伊萬里町甲四四一で支店一を有し、大正二年一月十八日の設立、公稱拂込資本金三萬圓、營業區域は佐賀市、西松浦郡、東松浦郡、藤津郡、杵島郡、小城郡で折衷式經營無盡を採用してゐる。昭和十年年度の組數は三十三組、口數一、九〇八口、當期新契約高二七〇、〇〇〇圓、當期滿期高無く、利益金處分内容は不明である。現役員は大石富一、中島市三郎、原口政太郎、川原新六、井樋喜市、近藤正之の諸氏で

ある。

講會

頼母子講は、昭和九年の調査に依れば、其の數二千七十七組、一市町村平均十六組にして、總口數は八萬八千三百三十五、全戸數に對する割合は七二・五パーセントに當つてゐる。又所謂千人講も、その數二百六十二に及び、講員總數二十四萬九千餘人、總口數二十九萬三千口、一回の掛金三十萬七千餘圓、一ケ年の總掛金は實に三百六十八萬五千餘圓に達し、縣下金融界の一大勢力である。

郵便貯金

大正十四年古賀銀行が破産して以來銀行の信用失墜するや、郵便貯金は急激に増加し、昭和九年には千六百五十九萬一千圓に達した。

年次	貯金高(圓)	年次	貯金高(圓)
大正十四年	五、五八八、九〇三	昭和五年	一四、〇八四、〇九七
昭和元年	八、二三八、九二七	同六年	一五、二八八、一一一
同二年	九、九九八、〇八九	同七年	一四、三九五、一五三
同三年	一〇、六六八、八六九	同八年	一五、五一五、四四〇
同四年	一二、四二五、七六〇	同九年	一六、五九一、〇〇〇

第三節 佐賀米穀取引所

佐賀米穀取引所は資本金三十萬圓の株式組織にして、好況時代には賣買出來高年三百萬石、一日平均一萬石に上り頗る隆盛を極めたが、昭和元年以來漸次衰微し殊に米穀統制法施行後は著しく衰へ收支償はず、取引員も減少して損失を續け、一時は同取引所の解散意見が株主の間より起り、數次の株主總會が開かれた程で、僅かに餘命を繋いでゐる有様である。

第四節 倉庫業

佐賀縣に於ける倉庫業は、佐賀市の佐賀倉庫株式會社と神埼郡神埼町の神埼倉庫株式會社の二者である。佐賀倉庫株式會社は、資本金一萬圓全額拂込にして玄米三千俵の收容力を有し、神埼倉庫株式會社は資本金三萬五千圓、拂込八千七百五十圓にして玄米二千五百俵の收容力を持つてゐる。

然し入庫品は殆んど米穀に限定せられ、時に小麥、蠶豆、肥料等の入庫を見るが其の量極めて少く、一般商品の取扱ひは現在の處では殆んど皆無の狀態である。縣當局としては、中小商業の振興策として、倉庫業者に一般商品の取扱ひを勸奨すると共に、質入證券、倉荷證券を發行せしめて倉庫利用の増進を計り、且つ將來商品倉庫の設立に際しては、相當の助成金を交付すべく研究を進めてゐる。之に反して農業倉庫は、大正六年農業倉庫獎勵規定を發布以來著しく増加し、昭和九年末には百六十四棟、その建坪一萬四千六百坪となり、玄米八十三萬七千俵の收容力を有するに至つた。

年次	收入金(圓)	支出金(圓)	純益(圓)	一日出來高(石)
大正十四年	一一二、八八三	五四、三一六	五八、五六七	九、六二四
昭和元年	六一、六五三	四一、六五八	一九、九九五	五、五四五
同二年	四五、五七〇	三六、〇五九	九、五一一	四、九〇〇
同三年	三九、九三四	三一、八五三	八、〇八一	四、四〇〇
同四年	三二、七一八	三〇、一一八	二、六〇一	三、四七八
同五年	四二、四七七	七〇、六八八	二八、二一一	五、四七五
同六年	三二、九四〇	四六、八四二	一三、九〇二	五、六〇〇
同七年	三九、六五五	二四、三九八	一五、二五七	五、二九二
同八年	二六、六五六	二八、九二一	二、二六五	二、九〇〇
同九年	一八、八五四	二一、七七八	二、九二四	二、一〇〇

第十章 商業一般

第二節 概況

昭和九年末現在の佐賀縣の商業戸數は、二萬二千五百四十二戸にして、現住戸數十二萬二千五百十三戸に對比すれば、一割八分強に當り、その大部分は中小商業の部に屬し、特に小賣商は商業總戸數の六割八分以上を占めてゐる。之等商業者の實情を概観すれば、農村疲弊より來る購買力の減退と産業組合事業の擴大強化、生産團體の共同販賣の増加が原因となつて甚大なる打撃を受け、經營頗る困難の現狀にある。

即ち産業組合の販賣事業は逐年隆盛を加へ、昭和八年末には販賣組合百三十四、購買組合百四十九に増加し、取扱高も四百八十四萬圓といふ數に上り五ヶ年前に比較すれば二倍への膨脹である。又農會、出荷組合等の生産團體直接の販賣高も相當多額の數字を示し、之等の影響を受けて肥料商の如きは失業状態に陥るもの續出し、昭和五年末の斯業者五百十戸は九年末には三百五十戸となり、辛うじて繼續せるものと雖半數以上は事實上失業に等しい状態にある。

かくて肥料の需要は年々増加するに拘らず、肥料商人の取扱高は激減して數年前の七割程度となつた。又米穀商人に於ても従前は消費地の問屋を経由し、或は直接に大工場、消費組合に相當多量供給して來たのに産業組合、農會等の直接取引が擴大するにつれて漸次壓倒され、業務不振の爲めに廢業する者が將に續出せんとする傾向にある。之を佐賀市に於ける商業者中、商

工會議所有權者方面より觀察すると、昭和五年の有權者數七百二十七、同六年には五百七十七、同七年には四百四十八に減少し、爾後軍需景氣が幾分影響して稍増加の傾向を見せ、同八年には四百九十二、九年には五百八となつたが、昭和五年と比較すれば尙三割の減少である。

斯の如き商業の不振は當業者の組織經營上の缺陷、斯業者の無統制、無謀なる競争より業務の安定を失ひ、信用を失して、金融の圓滑を缺いたことも一原因であるから縣當局としては産業振興計畫の一部として中小商業者と産業組合及び生産團體との關係を調節すると同時に、商業組合の設立を奨励し共同施設資金融通の方法を研究してゐる。現在設立を認可されてゐる商業組合は、業種別に依るもの八、地區別に依るもの一にして、今後更に増加することは確實である。

年次	總戸數(戸)	仲買及卸賣(戸)	小賣業(戸)	金融保險(戸)
昭和元年	二四、〇六四	一、四三四	一六、二九八	五二四
同二年	二三、四九〇	一、四九四	一六、一九〇	五〇四
同三年	二二、六八二	一、六五五	一五、〇二五	五一一
同四年	二二、七五〇	一、六三七	一四、九二一	四八二
同五年	二二、五二二	一、五八四	一五、二八七	四七九
同六年	二二、三三五	一、五七六	一六、〇六七	四七三
同七年	二二、二〇八	一、六六二	一五、四五七	五〇一
同八年	二二、六二六	一、六三〇	一五、六六二	五七五
同九年	二二、五四二	一、五九九	一五、三八一	五三〇

又佐賀縣に於てデパートと稱せらるるものは佐賀市の玉屋、唐津市の大手ビル、鳥栖町の共榮デパートであるが他府縣のものに比ぶれば餘りに規模小さく、次に見る佐賀玉屋がデパートの形を整へてゐるのみである。

第十一章 農業

第一節 概況

佐賀縣耕地の總面積は七萬三千町歩にして、縣總面積の三割八分を占め、田の割合の多いことは全國にも稀である。而して地味肥沃氣候溫暖で農耕に適し、海波靜かなる有明海を干拓して屢々耕地の大擴張をなし、現在工事中のものゝみでも一千七百六十一町歩、干拓見込地三千町歩に達し、縣營として一千七百七十五町歩の干拓事業を實施してゐる。

縣營干拓事業は昭和七年度より八ヶ年の繼續事業として、工費四百萬圓を以て事業を開始し、昭和十年度に第一期工事を完成した。然るに、同年夏の

第二節 農作物別狀況

* 米作は佐賀縣産業の大宗にして、縣内の需要を充たして更に五十萬石以上の移出能力を有するを以て、その豊凶、並に價格の上下は直ちに農家及び縣の經濟に重大影響を及ぼすを以て、縣當局としても收量の増加と品質向上、販賣方法の改善に就ては全力を傾注して農家を指導督勵中である。近年の狀況を示せば左表の如く、天候の關係虫害等に依りて時に増減あり、價格の上下によりて農家の收入に差異あるとは云へ、之を概観すれば急速なる進歩發展の途上にあることが看取される。縣當局は更に一步を進めて年産高百六十萬石反當二石九斗收穫を目標として産米增收五ヶ年計畫を樹立して昭和十年以來その實現に邁進してゐる。

年次	作付反別(町)	總收穫高(石)	反當收穫	移出高(石)
大正七年	五、五五・六	一、二四〇・五	二、二六	三七〇・六